

異物は方舟の騎士達を観察している

神薙改式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分が異物だと認識している男の日記。

ロクな事にならない自身の体質を隠して今日も男は箱舟の行く末を見守る。

目次

悪戯してた二人はしっかりと皇帝に叱られてた	1
まだまだ俺の黒歴史は終わってないと見た	6
モウマヂムリコワスギル	11
(喧騒の掟だコレエ!?)	16
「俺の前に立っていたのが悪い」	21
大分シユールな光景になるんだよなあ：	25
幕間その1 笑顔は本来威嚇だった	30
幕間その2 暗闇に声掛けてたかも知れないの？	34
幕間その3 なんとというかご愁傷様様だった。	38
オペレーター：フィツシャー	43
「あんのクソペンギンめエツ!!」	51
いざ夜の龍門市街へ!!	56
俺「本当に、申し訳ありませんでした」	61
「すっごいリアリティあるけれど流石にやり過ぎじゃない？」	65
「汗臭いおじちゃんありがとう」	70
その実態は『野蛮な臆病者』	75
なんかもう疲れた	80
それで寝不足になるとか幼稚園か!?	85
『人だった源石塊』	90
『嵌められた便利屋』	95
ゲンドウポーズやってる監督	100
「モフモフ！モフモフ!!」	105
if√魔法（物理） その一 『チエエエンジ・オリジイン!!』	

if√魔法（物理）	その二	『マキシマムスピード!!』	115
if√魔法（物理）	その三	『マキシマムストレンジス!!』	120
if√魔法（物理）	その四	『マキシマムドライブ!!』	125
オペレーター：オリジン			131
『子供達の思い出の為』			137
頼られるのは嫌いじゃないし寧ろ好きだよ?			141
悪ノリに決まってるじゃない			146
拒否権なんて有りませんよ?			150
何その二つ名怖っ!?			154
怒りの猛進（普通に遅い）			158
幸運Eなのかと思ったね			162
幕間 『裏の人間としての粛清』			166
if√キメラ その一（・ω・）（シャキーン!!）			170
if√キメラ その二（・ω・）（ナンカツカマエルノナレテナイ?）			175
if√キメラ その三（・ω・）（ソモソモボクモソレニシヨゾクシテルヨ?）			180
if√キメラ その四 「空が…消えていく」			185
オペレーター?：ヌル			189
俺またなんかやっちゃいましたかあ!?(ヤケクソ)			195
ファンが引いたりしない?			199
掲示板回			204
つまりいまからしゅーしーん			212
ウソダンドコードン（owo）			216
アーツで身体補強してから撃ってるし大丈夫? そう…。			221

お前なんで欲しがったし? | 225
アイアンクローで吊り下げ×2 | 230
オペレーター:ブレードランナー | 234
オペレーター:デユナメス | 240
オペレーター:アスラ | 246
オペレーター:アマツキ | 253
ありがたいけどなんか複雑…。 | 260
『重要人物って誰やねん?』 | 265
(意識を落としてはないよ) | 269
コイツ俺等の同類かよ!?! | 273
Endless Battle: (白目) | 278
長いものに巻かれない日本人の性か…。 | 283
「そういう話は公の場でやるんじゃない!?!」 | 287
理解出来たか? : オツケー。 | 291
オペレーター:ヤガ | 295
狙撃かな? | 302
エゴサしなくちや (使命感) | 306
マジで俺なんかした!?! | 311
お代わりもいいぞ!! | 316
なんで近衛局こんな阿呆晒しとるん? | 320
幕間:他所から見た『異物』の姿 | 324
後そいつらは俺の抹殺対象だぞ? | 328
やはり暴力!!? 暴力は全てを解決する!!? | 332
滅茶苦茶納得したわ | 336

悪戯してた二人はしつかりと皇帝に叱られてた

一日目 天気：晴れ

現世にいつの間にか転移してからそれなりの時間が経ち、漸く落ち着くことが出来たので日記を書いてみようと思う。まあ、前世で良く見てた『日記形式型』の二次作なんかを真似てみただけと言うが。

取り敢えずそんな訳で此処、前世では『アークナイツ』というゲームの舞台になっていた『テラ』の『龍門』から、名無しの権兵衛基よろずやごんべえ『万屋権兵衛』の店主こと、この世界らしく付けたコードネーム『フィッシャー』さんのロドス及び世界情勢の観察日記をつけていこうと思う。

：まあ、どうにも原作以前の時期だったみたいでロドスにドクターは居る上に、ウルサスの移動都市であるチエルノボーグも元気に稼働してるしな。

あそこは正直前世のイメージが強過ぎてほんと不吉な印象しか無いんだよなあ：実際原作でもロクでもない事になっちゃった訳だし。でもなんかおかしな事に結構前から色んな所と交流があるみたいだし、何処となくサ○エさん時空的な雰囲気を感じられる不思議。

二日目 天気：曇り

暑くも無く寒くも無い絶好の探索日和、『万屋権兵衛』としては元気に失せ物探しに精を出していた。

前世の人類がそうなのか現世に迷い込んだ俺だけが特殊なのか、多分後者だろうが失せ物探しなんかではそれなりに役に立つ体質故に今日も元気にドブ漁り。

こういった汚泥の中には時折源石関連のトンデモない厄ネタが潜んでいたりする為、こういう場所での失せ物探しは結構良い儲けになったりする。

：するのだが、なあんて俺はアークナイツでもレギュラー枠に入る『ペンギン急便』の落とした荷物を探す羽目になったんですかねえ？

まあ、理由は分かっている。いつもの様にドンパチやってたペンギン

急便のメンバーだったのだが、今回はちよつとしくじって荷物を積んでた車を爆破された挙句、重要度の高い荷物が運悪く源石によって汚染されているドブ川にボチャンしてしまったのだ。

ドブ川は入れば鉍石病に確実に罹るとまでは言わないが感染しやすい環境である為、非感染者ばかりのペンギン急便のメンバーでは手を出す事も出来ず、その為に皇帝が汚染地帯に対応している便利屋である俺に依頼を出した結果の出動だったのだ。

そんな訳で感染防護スーツを着込み探索道具一式を装備した俺は、生温かいドブ川の中を橋の上から眺めてるペンギン急便のメンバー達のまるでスイカ割りの指示出しレベルにいい加減な指示の元、時折見つかるゲームやってた時に見た様な資材なんかも回収しつつ、無事に目当ての荷物を回収して無事依頼を達成する事が出来た。

：いやホント位置指定する時に適当ぶっこくのはマジでやめて欲しかった。テキサスとソラはまだまともな指示出すからまだ良いんだよ、テキサスは「そこを右にススツと行ってくれ」みたいな擬音で表現したり、ソラは落とした時の現場を見てなかったせいで、テキサスの言ってる事翻訳しようとして逆に滅茶苦茶な事言ってるだけで悪気は無いんだもん。

でもエクシアとクロワツサンはふざけんなど言いたい。なんで途中からマジのスイカ割りみたいな指示を出すエクシア、なんで俺の探索能力に目を付けて関係無い場所を探させようとするクロワツサン、売ってやらんしふざけんな。

結局本来なら昼頃位で終わる筈だった探索は大幅に遅れに遅れ五時まで伸び、アホみたいに時間を掛けた結果俺は皇帝から正当な手段で大量にふんだくり、悪戯してた二人はしっかりと皇帝に叱られた、ザマアミロ（笑）

それにしても疲れたから今日はもう防護スーツだけ洗浄して寝るとしよう：明日は今日探索した事によって感染してないかのチェックに行かないといけないし：龍門当局ってカタツ苦しくて苦手なんだけどなあ…。

三日目 天気：曇り

今日は午前中は昨日日記に書いた通り龍門当局へ出向し、感染チェックとついでに昨日の依頼で纏まった金が入ったので市民税等の支払いを行ってきた。

特に顔見知りも居ないのでアツサリ終わったのだが、入国前に行った徹底的な検査である種異常な数値を叩き出した俺の血液中原石密度については、相も変わらず調査結果が出ていないらしいとの報告を貰った。

あの時は適当に何かと血液中原石密度やアーツ適正に不可思議な事が多いキャラが多数居たエーギルの出だからなんじやないか？と流した訳だが、勿論法螺吹ただけである。

前世の俺は日本出身で現世の出はシラクザーの草原であり、気が付いたら草原でポツチとか意味不明も良いところだったわ。

帰りに当局の人混みの中にチラリとホシグマの特徴的な長身が見えたが、残念な事に酒関連は前世からお断りな俺に彼女との関わりは全く無い。

以前居酒屋に行った時偶々行き先がブッキングした事もあったが、その時の俺は晩飯を外食で済まそうと思っただけだったので飯だけ食べ、普段からそうなのだが酒も飲まずにいた所、チエンと一緒に梯子してきたのを偶々見かけただけである。

ホシグマと一緒に酒呑んでたチエンが酷く泥酔してグデングデンに管巻いているところを『美人さんだけど婚期が不安になるなあ…』とか不用意に想像したせいでチエンに睨まれかけたのは笑ってはいけない笑い話だ。

それにしてもあの酒呑んで陽気に騒いでたホシグマを知ってる身だとああやってクツソ真面目に職務に就いてる姿は違和感半端無いなあ…。

そんな事考えてたらホシグマが俺の視線に気付いたのか此方を見てきたので、適当に軽い敬礼とお辞儀をしながら足を進めるとあちらもペこりと一礼してくれた。気分は有名人に手を振って貰えた一般人である…まあ、ホシグマって結構目立つから強ち有名人と言っても

過言じゃないんだけどね？

見辛くなったので一度区切って次のページに移る。

そんな訳で龍門当局から帰ってきた後は時間も丁度良かったので昼飯にしてから昨日のドブ川攫いでゲットした副産物達の除染作業である。

昨日の内に水に浸けておき、今朝と昼飯前にも水を替えておいたから殆ど汚泥がこびり付いていない為綺麗にするのも大分楽だった、一手間ってホント大事。

その後は今迄ある程度溜め込んだ副産物達の品質チェックと販売先を決める為の交渉をした。まあ、早い話が午前中に当局に行った際、近日ロドス・アイランドが龍門に来るらしい事が分かったので、そこに居るクロージャに売り捌く為の許可申請である。

龍門側は午前中に済ませてしまっているので後はロドス側の許可だけだったのだが、これもいつも通りアツサリと現在CEOを張っているみんな大好きアーミヤ代表から許可が出た。

まあ、多分だけど一つの組織を運用している側からすれば、毎回量に差はあれどほぼ相場の最安値で貴重な資材を大量に投げ売りしている奴が居たら買う側としては多少怪しく思えても断る事なんか出来んわなあ…。

俺は搬入作業の途中にロドス側がする源石反応のチェック中にロドスの内部をぶらついて色々なオペレーターや患者達と世間話が出るし、ロドス側も毎回それなりの量の資材を格安で入手出来るからWin&Winの関係である。

…まあ、今思い返せば最初の頃はなんで一介の弱小何でも屋がこんなに資材を用意出来るのかとか、利益なんて全然出ない事を嬉々としてやるなんて怪しいだとか、オペレーターや患者達に話し掛けてきてはスパイなのでは？とか滅茶苦茶怪しまれましたが、そこら辺はもう回数稼いで信用と信頼を勝ち取った俺の勝利である（誰に対してだよ）

恐らくケルシーからの差金であろうレッドに見張られてたり（来る

度に対応してたら来なくなつた)ロドスと対立してる企業からのスパイの依頼も来たり(断つたら刺客が来たので返り討ちにしてロドスに引き渡した)感染とか気にせずとも良い為に特別性防護スーツ着て行ったら偏見持たれてると勘違いされたり(レッドがご満悦してたらその内他にも来る様になつた)∴ホント俺よく折れなかつたな…。

さて、明日は朝早くからロドスが来るらしいからここまですておいて、早めに寝るとしよう。

まだまだ俺の黒歴史は終わってないと見た

四日目 天気：晴れ

強い日差しじゃないだけマシだが折角の心地良い曇りが無くなった一日となった。

幸い朝早くから載せられるだけ資材を載せた俺個人で所有する中型の引越し業者が扱う様なトラックは龍門の港でロドスの到着を待つており、俺自身も自宅兼職場に異常は無いか家の各所に備え付けであるカメラの映像をスマホで遠隔操作しながら確認する程度には暇を持て余していた。

…こうして文字に書き出してみると改めて思うが、個人所有する中型トラックってなんだよ…。

カメラなんかはそれなりにテレビとかで見たりはしたが、トラックなんて一般市民が持てるのはせいぜい軽トラ位しかイメージなかっただろうに前世の俺…まあ、今回みたいなさそこそこキャパが必要な物運ぶ事が増えたから必要に迫られた結果なんだけどな。

取り敢えず暫く待っていたら丁度予定時刻に差し掛かろうとする中、現世ではすっかり見慣れたきつと未来に希望を齎すであろう騎士達を乗せて、大地を走る方舟が龍門に近づいてきて、港へと接岸した。

…ふむ、中々詩的な厨二具合、まだまだ俺の黒歴史は終わってないと見た(震)

そんな下らない事を考えつつ、いつもの様に他の業者達に紛れながらロドスにトラックを乗船させて駐車場へ。

お馴染みとなった本人確認等の照合を終わらせて序でに業者の確認を最後に回してもらい、入艦許可証を発行してもらい特製防護スーツを着込み首に許可証を下げロドスの中へと入って行った。

最近来る度レッドがお迎えしてくれるので挨拶した後定位置の背中に回り込んできたので即おんぶ。

こだわり抜いて作り上げた特製防護スーツのモフモフが気に入っている模様、いつの間にか寝ちやう事すらある驚きの心地良さ!! …
ただし涎は勘弁な？

暫く通路を進むと共有スペースに出て目敏く俺を見つけた他の子供達が勢い良く走ってくる。

正直この時は転んで怪我しないか何時もハラハラドキドキしっぱなしである、元気なのは良い事だけどそれで痛い目は見て欲しく無いでござる。

因みにこの特製防護スーツ、参考にしたのは原作に出てくる『ボブおじ』呼びで親しまれた『Big Bob (大柄なボブ)』さんであり、あの防爆スーツに温度調節機構とワードスーツの機能を取り付けてモフモフコーティングで触れ合う子供達に怪我させない様仕上げた至極の一品である。

様々な防護機能も取り入れてあるので、もしも災害が起ころうともそのまま被災地に突っ込んで人命救助に回れるのである。色々追加したせいでト○ロみみたいな見た目になったが子供達からも喜ばれているので僕、満足ツ!!

…幾ら誰からも聞かれないからって日記に書くのはどうなんだよ俺：最早十数年以上前に聴いた懐かしいゾ○印のCMが今なら凄く理解出来るぜ。

悲しみを乗り越える為に次の頁へ。

そんな訳でちよつとした子供山状態になった俺、原作でも登場していたキャラも少しは居たりするがそれ以上に多いのが鉱石病患者としてロドスに入院している子供達…そう、戦う為の力を持たない普通の子供達である。

ところでなんだかんだオペレーターとして原作に出て来た彼等彼女等だが、その立場もあつてロドスの職員としての給料なんかも出ている。

まあ、普通に考えて基地の施設を部外者に触らせる訳ないのを考えれば当然身内Ⅱ職員として雇っている訳であり、数々の戦地へ足を運ぶオペレーター達はその分危険手当なんかもあつて高給取りだったりするわな。

…正直以前レッドが来てた時に好奇心で給料どれくらい貰って

るのかなんて聞くんじゃないかと反省したレベルだったし、月給十歩合制とはいえ耳を疑うレベルだったぞ…。

その分個人の戦闘や基地での作業は大変であり、装備の手入れなんかも自己負担だったりするが、それでも自分の保証から衣食住の完全保証に充実した危険手当等といった保証の数々はヤバかった、ロドスはそれだけ人材の管理と保証を徹底しているのである。

さて、ならば一般的な患者はどの様な対応をしているのか、これについては龍門や恐らく他の移動都市の最新鋭の設備が充実している病院と同じ様な対応ではあるのだろう。

実際龍門に来るまでにそこそこ傭兵としてぶらついてた間に世話になった移動都市では、体質上管理が厳しい所に行けなかった為に民間の診療所に行ってたのだが、それらに比べればロドスの質は月とスポンものだったしな。

：因みにライン生命だけには絶対近寄らない様になっている。

あそこは最新鋭の技術は有るのだろうが、特製防護スーツを造る際に俺自身の技術が足りなかったから寄った際、普通の病院なんかで感じるアルコール消毒なんかの匂いにかき消される様に、こう：なんで書けば良いんだ？ 取り敢えずヤバイ全身の毛穴が開いて冷や汗が噴き出る様な『闇』みたいなのを視た気がしたからな。

：書いてる途中なんか感じた気がしたがどれの気配だ？

レユニオンではないな：ライン生命の『ナニカ』か？ それともアビサル関連で視た気がする『海』のなんかか？

：気にし過ぎとは考えたくねえなあ…。

話が脱線したので仕切り直し!!

いや、ほんとにいかんいかん：気付いたら書いてる内容が脱線した、やっぱり闇が深過ぎるんだよこの世界…。

まあ、そんな訳でロドスのオペレーター達は高給取りなのだ、色んな組織のトップが複数来ている時点で安月給なんてはなから無理なのである。

ただしそれ以外はどうかといえはあまり宜しくない印象が見

て取れる気がする。

流石に最先端技術を扱う場所で働いている職員が安月給とは思わないが、誰も彼もに共通しているのは草臥れた制服と飾り気の無い最低限の身嗜み等といった無個性極まりない服装である。

医療の現場でド派手な格好を出来る奴は少しばかり感性疑うが、それでも多少は個性が見られる筈なのにそれも無く、挙げ句の果てには目の下の隈を隠す化粧や、ヒツソリと子供達の目の着きにくい場所に置かれている多種多様な用途に分かれたエナドリばかり売られている大型自販機とその横にエナドリの『空き瓶』が大量にケースに入れている山。

龍門や他の移動都市では缶で売られているエナドリだがなんとロドスでは消費が激し過ぎて自社で生産しているのである。

その為エナドリ専用の製造ライン迄あり、ロドスに於ける飲料の消費率はエナドリだけで三割強とただの水すらブツギリで差を開けて一位に輝いているという、うっかりロドスの闇を垣間見る羽目になったのは忘れてたくとも忘れられない記憶にこびり付いている悪夢である。

そんな訳で酷使無相な一般職員達は何故こんなブラックな状態になっているのか？

ここに来て最初の一般患者である子供達と給料の話が来るのである。

はつきり言つて患者の子供達に自由に出来る金なんて無い、働けないから当然とは言え金銭感覚もロクに育つてないので渡せる訳が無い。

しかし前衛オペレーターであるムースや補助オペレーターであるアンジェリーナの経歴を見れば分かるが、ロドスというのは鉱石病の治療の為に健常者である親元から離れてロドスに仮住まいをする事になり、そんな親元を離れて治療に来ている子供達が寂しさを紛らわそうにも手持ちには何も無く、親恋しきによく触れ合う事になる一般職員達へ愛情を求めて手を伸ばすのだ。

長年鉱石病という不治の病をなんとか治そうと心折れずに四苦八

苦し続ける一般職員達は正義感が強かったり苦しむ人達を見捨てられない様な善人が大半である。

限りある時間をなんとか捻出して子供達へと愛を注ぐのだが、その代償として己を削っていくのである。

勿論オペレーター達も暇を見ては子供の相手をしている者も多くあり（その辺考えるとライン生命からの出張組大半ヤベエな）少しは負担を減らしているのだが、それも雀の涙。

俺がこれまでやってきた特製防護スーツ越しでの触れ合いはロドスの様子をみるのとそんな一般職員と患者である子供達への偽善的な慈善事業のつもりだったりもするのだ、『やらない善よりやる偽善』だ。

傍観者なんてクソみたいな立場に立っているのならせめてコレくらいはやらないと俺の良心が持たなかったのである。

…なんか矢鱈と湿気った作文みたいになってしまったが、やっぱり日記を書くのは向いていなかったのだろうか？

気持ちも落ち込んでしまったので取り敢えず今日はここまでとする事にしよう。

モウマヂムリコワスギル

気分転換出来たので続きをかくことにする。

そんな訳で甘えても良い存在として俺がロドスに訪れたら子供達は寄って来るので多少なりとも職員達の負担が減る事になる、即ち目的の無事達成という事だな。

実際余裕が出来たのか途中で壁に凭れ掛かりながらエナドリ瓶片手にゆっくり(?)している目元の隈隠しのメイクが前より薄くなっている一般職員が見えたので大丈夫だろう、うん。

因みにオペレーター達が少ないのは単純に一般病棟と原作にあったオペレーター用の休憩室が別物だからだ、流星にあそこら辺は企業機密関連も多いので俺みたいな一般枠は入る事は許されない。

まあ、前にオペレーターも居るって書いたがオペレーター側はどちらにも自由に行き来することが出来る。

因みに俺が来たらよく姿を見せるオペレーターはレッドにマンティコアやイフリータとその保護者であるサイレンス(最も彼女はこちらを見てるだけで話したことは殆ど無いが)他にも元からロドスに身を寄せている面子はそこそこの頻度で遊びに来たり、又は遊びに来た面子の保護者として同伴したりしている。

触れ合いで気を付けなければならぬのが相手の鉱石病の進行度であり、下手に纏めて相手をする则ち他の子の進行度を上げかねないのがネックである。

流星のト○ロボディも俺という核となる人間が居るキグルミ程度の大きさだといった数人で他の子と重なりかねない密な状態になるので、相手に気取られない様位置調整したりなるべく早く満足して交代して貰える様な遊び方を考えなければならぬのが難しい所である、気分は保育士といったところか。

最近はおつと大きな、それこそ象クラスのモフモフマシンでも造って子供達の自由に戯れさせようかとチャレンジしているが、重量の問題や使用後の洗浄マシンなんかの製作に手を取られがちとなっているのが悩みどころと言えるだろう。

機械を造る事は自由業の利点で材料さえあれば時間の捻出も楽なのだが、重量の問題が面倒だった。

重力操作という厨二心を擦られるアーツを使うアンジェリーナに協力してもらい、機械による限定的に誰でも可能な重力操作のアーツを模倣する事は出来たが、動力として電力では無く源石を使用する関係でアーツ適正が絶無な俺は扱う事が出来ず、アーツを使うという事は鉱石病が進行するという事なので他の人にはあまり勧められない残念な代物が出来てしまったのだ。

取り敢えずその技術はロドスに格安で売り払っておいたのでなんとか改良してくれる事を祈っておいたのだが…設計内容に目を剥かれてメツチャ技術班からスカウトされる羽目になったのは本当に参った。

俺だから無茶な試作が出来たのであってその理由を探られるのは本意ではないのだ、と色々ボカしながらもなんとか説得した事で時折外部委託の様な形でロドスから依頼を受けるという形で落ち着いたが、ほんとそこまで持つてくのが辛かった…。

後、このロドスからの外部委託を受けてから空き巣に入られる数が激増したのは本当に鬱陶しい事この上なかった。

幸い俺の保有する実験所に重要な物は纏めてあるので被害はそこ迄ある訳ではないのだが、実験所は俺以外の殆どの人間にとってはデスゾーンなので空き巣に入られる度毎度セーフティの確認をしないといけないのが面倒くさい。

後、ロドスへ搬入する為の素材に手を出した奴等は絶対見つけ出して倍返しにする、格安とは言え商売の品に手を出されて黙っている訳ないよなあ？

またしても閑話休題だな、次の頁だ。

そんな訳でオペレーター達とはそれなりに顔見知り(?)なのだが、正直アビサル関係者やバトルジャンキー、後はマッドな方達はホント勘弁してくれないでしょうか？

後アーミヤとケルシーとクロージャも少しばかり…。

具体的に書けばバトルジャンキー達はなんか俺が傭兵時代だった頃の匂いでも嗅ぎ取っているのか殺気向けてきたりするし、マッドな方達は前述の特殊なアーツを限定的とはいえ再現した事で知的好奇心を満たそうと子供達が居ても気付かず突っ込んでくる時がある。

因みにアーミヤとクロージャは時々搬入する素材について備蓄が厳しい時があるのか圧が来る時があるし。

でもアビサル関係者とケルシーはホントなんでだ？

アビサルは以前エーギルに寄った時に致命的なのは避けたとはいえ見事にミスりまくったのか（正直あの時の事はちとろ覚え）少しばかり『視え』かけたから分からなくもないが：あ、そういうえはケルシーってなんか『海』とも関係ありそうな事匂わしてたんだっけか？
いやほんとそんなんだから黒幕呼びわりされr：また視線？
：
これ以上はこの事書くのは辞めとこ、またハードラックとダンスつちまいそうだ…。

そんな訳で彼等の対応についてはバトルジャンキー共は流石に子供達との空気を読んでくれるから一度無視すれば引いてくれるし、マッド共は定期的に俺に対する外部委託を兼ねた相談会で話に乗ってやればそれで済む。

素材関連はちよくちよく路地裏を彷徨ってるから細かいのは数揃えられるしなんならロドスが着く数日前に向こうから先に素材の上位素材への精錬なんかも委託されるから着くまでに実験所で済ませられる。

ただなあ：アビサル関係者というかスペクターが時折暗闇から見つめてくる事があるのだけは未だに慣れないんだよなあ：深淵なんか覗きたくネエデス。

なんでこんな事書いてるかだつて？

今回もスペクターが覗いてきてたからだよ：イフリータ達相手にモッフモッフとスクワット染みた伸縮運動してた時、ふと廊下に視線を向けたらまだ昼前で明るい筈の廊下はまるで水底の様な薄暗闇に包まれてそんな廊下の先、奥の曲がり角からこちらをそつと覗き込む様なスペクターのアカい瞳の揺らめきがががが…。

思わず動きを止めてしまつて子供達に不審がられて正氣に戻ったけど、その時には既に居なくなつてたんだよね：モウマチムリコワスギル。

そんな恐怖体験しながらも一応無事に特製防護スーツでの慰安コーナーこと『ジョン・スミスくんとの触れ合いコーナー』を終え、素材の換金も終えて無事帰路に着いたのだった、書いてるのは既に今日だが安魂夜もあるし日記を書いてて湿っぽい空気になつたので早めに寝たのだった。

四日目 天気：晴れ

頁は跨いで入るがまだ昼間の内に書き始めることにする。

今日は安魂夜なので一日中店は閉めておいてゴソゴソしながら適当にやっていた事をゆつくりと日記にでも記しておこうと思つたのだ。

取り敢えず午前中は某天空の城の目玉焼きトースト擬きのお好みトッピングをした物とインスタントのオニオンスープでサツサと済まして昨日の日記の続きを書いておき、気分転換がてら路地裏を彷徨きコツソリ親しくなっている感染者達と廃ビルの屋上に持ち込んだ機材なんかでちよつとしたチーズフォンデュと洒落込んだ。

その後、廃材置き場を適当に漁つて使えそうな素材がないかと探していたら、まさかの薄汚れてはいたが人工ゲルが幾つか出てきて心底ビビる羽目に…。

この素材ってコンピュータや人工関節なんかにも使える結構珍しい品だった筈なのだが：あの時の汚れ具合からしてまさかの不法投棄品だったのだろうか？

思わぬ儲けにホクホクしながらも帰路に着き昼飯の準備に入った。昨日の昼に炊いて余っていた残りの米を使い簡単な焼き飯を作りかき込んだのだが量が多かつたのか腹が重たい：面倒くさがつて纏めて食わなけりやよかつた：取り敢えず昼寝することにする。

：気付けば夕方、飯食つてここまで寝るとか脂肪フラグだったのかねえ？

取り敢えず少しでも動いて夜すっかり寝れるようにちよつとばかり愛車のバイクでドライブにでも行つてこようかね？

：日を跨いで書く羽目になったが取り敢えずこれだけは書いて寝ることにしよう：クソペンギンもシチリアン共も巫山戯んじやねえそゴラアツ!!

(喧騒の掟だコレエ!?)

目が覚めて落ち着いたので昨日何があったのか書こうと思う…:これ昨日も似た様な事してたじゃねえか、日記はなるべくその日の内に書き切つてしまいたいのおのれシチリアン&クソペンギンめえ…:

:また憤りそうだったが気を落ち着かせて経緯を書いていこうと思う。まず始まりは昨夜の四代目の愛車ー前世で読んだ某漫画の真似して買った750ccのバイク(魔改造済み)ーで気分良く龍門の環状道路飛ばしていたのに前方の車が何故か作られていたバリケードに阻まれ、なんだと思つたらいきなりドカンと爆発、此方が驚いていると追加で更にドカン、そして周りに展開されていく黒尽くめの集団、何故か巻き込まれた俺は取り敢えず警戒していると敵の狙撃手が恐らくゴム弾か何かを叩き込まれて気絶、そいつの持ってた無線から聞こえる声に反応して登場したエクシアを見て確信したねー(喧騒の掟だコレエ!?)ーって…:

喧騒の掟ー原作であつたイベントストーリーの一つであり、いつも通り騒動に巻き込まれてたペンギン急便が龍門のトランスポーター最大手のフェンツ運輸と臨時提携を結ぶ安魂夜の日。

今回の前半における相手であるシラクーザの負け犬シチリアン共がペンギン急便相手にドンパチ起こしたところ、シチリアン共があまりにも派手に路地裏の一般市民さえも巻き込んで騒ぎを起こしたもだから、今回のイベントにおけるラスボス枠である龍門裏界隈の頂点である『鼠王』の逆鱗に触れた。

ついでにいつもやり過ぎるペンギン急便に対しても堪忍袋の尾が切れた事で纏めて粛清される所を乗り越える、それが大体大まかなストーリーだった筈である。

:まあ、実の所は裏で龍門の表トップである『ウェイ長官』、フェンツ運輸の社長である『ピーターズ』、龍門裏界隈の頂点である鼠王こと『灰色のリン』、そしてペンギン急便の通称皇帝『エンペラー』がグルになつて龍門の癌になりそうなシチリアン共を龍門から叩き出す為に仕込んでいた事がEXステージ攻略したら分かるのだが…:

閑話休題。

そんな訳でその序章に盛大に巻き込まれた俺は取り敢えず現状から離脱する為にペンギン急便のエクシアとクロワツサン、後フェンツ運輸のバイソン君と共に此方を包囲していたシチリアン共を蹴散らして逃走を開始。

途中合流したテキサスとエンペラーも一緒になって追ってきていた奴等を撃退し、ペンギン急便の隠し拠点の一つへと避難したのだが、取り敢えずこのままでは鼠王とのドンパチにも巻き込まれかねない為俺はペンギン急便達から離れる事を決意した。

部屋をざっと『視渡すと』大量に炸薬が仕込まれているアソート缶爆弾を発見、クソツタレめがと毒を吐きつつ窓際に居たエクシアに急いで窓を開けさせて爆弾を蹴り飛ばして外の河へと叩き込み『室内での』爆発による被害を回避する事に成功した。

うん、被害を水で軽減するつもりで河に叩き込んで実際周辺の建物には被害は無かったんだ、ただ爆ぜた水が周辺の建物を濡らしただけであり、窓を開けてたのが俺達が居たペンギン急便の隠し拠点だけでなく、外の様子が見えてた身長のある俺達は窓際から退避してたけど、ペンギンであるエンペラーとその後ろにあったエンペラーお気に入りの音楽ラックが盛大に水を引つ被ってエンペラーは濡れ鼠ならぬ濡れペンギン、音楽ラックは盛大に水を引つ被ってボンツ!! という音と共に煙を吹き出しお釈迦に…つまりエンペラーがキレた。

気まずい空気の中恐る恐るまだ常識人だったバイソン君が無言でもう動かない音楽ラックをポチポチしているエンペラーに声を掛けると、エンペラーは「奴等を音楽ラックの副葬品にしてやるぞ」と気炎を上げて出て行き、ペンギン急便のメンツやバイソン君も慌ててエンペラーを追って出て行ってしまい、途端に俺だけ残されてしまったので取り敢えず愛車の遠隔操作システムを使いここまで持つて来てトングズする事にした。

流石に鍵を開けっ放しで帰るのもアレだったので、無造作に置かれていた拠点の鍵でしっかりロックしておき、扉に『鍵は本社のポスト

に入れておきます』と書き置きを貼ってそのままペンギン急便本社へ。

本社の方も誰も居なかったので予定通りポストに鍵を入れてそのまま移動、夕飯のおかずとして魚団子の屋台でも探す事にしたのだが：流石に十年以上前にやったゲームのイベントが起きた場所なんて臆にしか覚えて無いつつうの。

愚痴りつつも閑話休題 mark. II

美味しい魚団子があるっていう噂の龍門中央公園へ向かうと先程幾らかぶっ飛ばしたシチリアン共を見つけてしまい、慌てて茂みに愛車を入れてステルスモードで潜ませた。

俺自身は今迄着ていた黒いヘルメットとライダージャケットを脱いで白のフード付きのパーカーに着替えて別人になりすまし、そのまま魚団子屋へと堂々と向かった事で運良く閉店間際の店から魚団子を購入。

そのまま次の予定に向かおうかというところで先程別れたばかりのバイソン君とモステイマを発見してしまい、面倒事はお断りだと回り道をして帰ろうとしたのだが、どうやら今日の俺は午前中の人工ゲルの発見で今日の分の運勢を使い切ってしまった様だった。

回り道してはシチリアンを見かけ、それを避ける為に更に遠回りすれば鼠王のやつてる駄菓子の屋台に到着した。

今回起きている騒動における黒幕の一人だと知ってはいたものの、その根底には龍門の平和を願っていた筈である為俺自身は余りこの人を憎めなかつたりする。

：アレ？ 今思い返してみればあのペンギン急便の隠し拠点にあったアソート缶爆弾って此処に置いてあった缶と同じ物がなかったか？ あれ？ あの爆弾って鼠王が仕込んでたんだっけ？ ；思いつい出せねえからもう良いか。

少しばかり遠い目しながらボサツと考えていると何やら少年と少女が欲しいお菓子について口論している様だったので、折角の安魂夜だと適当に理由を作ってそれぞれの欲しがっていた飴とマシユマロ

を買って渡してやると「おじちゃんありがとう!!」と眩しい笑顔でお札を言つて去つて行つた…。

二十代前半でおじちゃんかあ…とか眩していたら鼠王とモステイマから笑われてバイソン君からは二十代前半だったの!? と言わんばかりの視線を向けられ、離れて二人をつけていたシチリアン達数人からは嘲笑の視線を向けられていた…あの時はなんか更に老け込んだ気がしたなあ…。

そして鼠王にフィツシャーだとバラされ驚いてるバイソン君とモステイマによつてシチリアン側に俺の事が発覚したのか、付けていたシチリアン達が殺気立った、如何やら最初の脱出時に何人かの腕や脚を押し折つてやった事に大層御立腹だったらしい。

安魂夜なのに静かに死者を追悼する事は出来ないものなのかねえ？ とボヤけばバイソン君から「そんなだからおじちゃん呼ばわりされるんじゃないか？」と非常に胸を抉る一言を貰う羽目に、orz 状態で凹む俺に対してモステイマと鼠王はなんとも珍しく大爆笑である、勿論シチリアン共も。

流石にここ迄笑われてたらキレる、つてか個人的に安魂夜は静かに暮らすと決めてたのに奴等が騒動を起こし過ぎてて色々巻き込んでるから流石にキレた。

絶対にあの俺を噛つたシチリアン共をぶつ飛ばすと心に決めてこの後ペンギン急便とシチリアン共がドンパチする事が分かりきっているのでバイソン君達のぶらり龍門散歩に付き添う事を提案、小さくモステイマにシチリアン共の事を教えるとすんなりと同行を許可してくれた。

あの時の心情はもう「シチリアン共覚悟しろよ」だけだったのだが、あの時普通に別れてたら少なくとも鼠王からのお仕置きに巻き込まれずに済んだんじゃないかと悔やむばかりである。

そんな後の事を考えてなかった俺は取り敢えず二人と移動を開始し、暫くして橋に辿り着いたところで向こうからもシチリアン共が来た事で市民を巻き添えにしたくない俺達は二手に分かれる事にした。

モステイマがシチリアン共に遅延を喰らわせている間に恐らく鼠

王の用意したのであろうキャンデイを積んだ船にバイソン君を抱えて脱出、そのまま脚にする事でシチリアン共の追手から逃走する事に成功した。

流石に書き過ぎて手が疲れて来たから一度筆を置く事にする。

「俺の前に立っていたのが悪い」

船頭のオッサンに怒られながら船を降りるとテキサスガチ勢ことソラと偶然会ったので持ち前の『先輩リーダー』で他のペンギン急便の面子の所へ案内してもらえば、丁度原作でもかなり印象深かった汚い花火の場面に出くわしエクシアとクロワツサンから「何処に行ってたんだ？」と質問されたのでただ単に置いて行かれただけだと答えてやれば、「あれ〜？ そうだったっけ？」と白を切られた、寧ろ勢いに釣られて一緒に行ったバイソン君の方が既にペンギン急便のノリに馴染んでいたとかそんな感じだったのだろうか？

そんな事話してたら今度はモステイマの話になり、メランコリックモードになったエクシアによって花火に点火、慌てるシチリアンに対して「取り敢えずお前に恨みは無いがお前の同僚にムカついているから汚い花火になつてろ《龍門スラング》シチリアン」とジェスチャー混じりで死刑宣告してやった途端にシチリアンの汚い悲鳴と共に花火が上昇、括り付けられていたのもあって歪な形のまさに汚い花火が空に上がったのだった、たくまやく。

なんかストレス溜まりまくってたのか野次馬の声援で調子乗ってたのか、その後大勢で来たシチリアン共を両腕の武器で引っ掛けては投げ飛ばし、武器を逸らしては叩き付ける、偶に懐に入られたのなら蹴り飛ばしてやるなど思いつきりヒヤッハーしてた訳だが如何やらそれは俺だけだったらしい。

ペンギン急便の面子は既に原作でもやらかしてたバイソン君を省いた二手に別れた脱出劇に移っており、正直暴れ足りなかったのだがバイソン君をボッチにしておくのも忍びなかつたので自動操縦でバイクを呼び出し、バイソン君とニケツで散々シチリアン共を引っ掻き回して『大地の果て』へと向かう為に走り出した。

カッコいい事書いといて頁切り替えて酷い落差を醸し出す真面目系屑!!

まあ、詳しい場所は知らないから中継ポイント迄しか行けなかった

んだけどな？

龍門共同墓地、原作ではバイソンがモステイマに『大地の果て』へと連れて行ってもらう為に通過した場所で魚団子作りの名人である董と鼠王が語り合っていた場所。

その駐輪場にバイクを停めて近くに隠れていたモステイマにバイソン君の案内を頼んで先に行ってもらい、俺はついでのような感じにはなったが一人で墓参りに向かった。

ドライブに出る前に先に訪れて墓石と周りをを掃除してやり、買っておいた花を添えて現世には無かったから自作した棒線香これまた自作の線香立てに立てて手を合わせ、黙禱と周りの邪魔にならない様に近況報告。ホントはドライブの後にこうして墓参りしてからそのまま帰路に着いてゆっくり寝るつもりだったんだけどなあ…。

現世に来てから世話になっていた龍門出の傭兵の爺さんが、もう自分に幾ばくもない事を悟ったらしい時に要望された前世で俺が行っていた弔い方。

実際頼まれた数日後に爺さんが死んでからは龍門に腰を下ろし、何かの節目や安魂夜に行なっている一連の流れなのだが、周りの龍門市民も最初の頃は墓から離れた後に苦言を呈して来たこともあるのだが、いつの間にかそんな俺の姿が見慣れた光景になったのか、墓を前に黙禱が基本だった安魂夜で俺を真似するかの様に小さく昔を懐かしむ様に何か語りかけている人が居たのが印象深かった。

湿っぽいので次の頁へ。

一連の事を終えた後、バイソン君に持たせた発信機を辿りペンギン急便と合流する為路地を愛車で進んでいると、何故が通路を阻むバリケードとシチリアン共が居たので容赦無くライダーブレイク（ブースト掛けて轢き逃げアタック）で突破してやり、片っ端からシチリアン共を引っ掛けてぶん回してやった。

どうにも俺を嗤った奴等が見当たらないので派手に暴れて気を引いているつもりだったのだが、もしかしてアイツらは今ここに居るケモ成分多い奴の配下じゃなかったのか？

確かコイツらトップと次席が仲違いして途中で分裂するんだっ
よな？ だとしたら変装してまで追い掛けて来る様なのは龍門にそ
れだけ慣れてるって訳だし、後から来た奴等はずい最近来たとかで
シラクーザの気質が抜け切ってないのでは？

…と考え周りを視渡せば服飾には疎い俺でも龍門ではあまり見な
いような形の黒服を着ている奴等ばかりと俺の予測を裏付けられそ
うな奴等ばかりだった。

マジかよテンション下がるわあ…と気落ちした隙を突かれたのか
奴等はスモークグレネードを炸裂させて俺の視界を塞ぎ一目散に逃
げていき、後には一波乱終えて一息ついてるペンギン急便と、そもそ
もメインターゲットが居なかった事で気落ちしている俺を残すだけ
となった。

取り敢えず中の様子はどうなっているのか確認する為に『大地の果
て』を覗いてみると、丁度バイソン君に対してのシチリアン講座が終
わるころだったのだが、正直シラクーザは現世での始まりの地であ
るだけに余り良い思い出無いんだよなあ…。

正直、ダメな方向での初めてが多過ぎた記憶ばかりだし、少しは
あった良い思い出も嫌な出来事も巻き込まれて思い出すから辛いし
…あ、駄目だ書いてて更にやな事思い出しそう…。

閑話休題だ閑話休題!!

原作でのチェアだけ無事だったみたいなのはなっておらすとも
ボロボロになってしまった『大地の果て』で、エンペラーのシチリア
ン共殲滅作戦開始の号令を見てから声を掛けた。

もう既に表面化しているっぽいシチリアン共に内部分裂の兆候が
出ている気配がある事を伝えておき、これ以上安魂夜の邪魔をされな
くないからとペンギン急便に協力する旨を持ち掛ければかるくOK
Kが出たんだが、こんな軽いノリばかりだからほんとペンギン急便
の経営どうなってるのか謎でしかないよな。

…最早龍門七百七十七不思議の何割かペンギン急便だけで掻っ
攫ってるんじゃないのだろうか？

エンペラーからも許可が出たので俺はエクシアと共にシチリアン共のルート探しへ向かったのだが、バイソン君とクロワツサンがシチリアンに見つかり逃走を開始したとの連絡が来たが、その途中からペンギン急便の無線にハッキングがされ、シチリアンのボス二人の元へと案内する連絡が入ったのでエクシアが同僚からの連絡なんだからとその場のノリで向かう事を決めてしまい向かう事になった。

…今思い出したけどそういうえはなんかよく分からん電子戦特化じみた性別不明の奴がペンギン急便に居るんだっけ？

そんなこんなで実質対シチリアン戦のラストは今迄の開けた場所とは違い狭い路地での戦闘となった。

これ幸いと俺を倒そうとする奴等の多い事多い事…まあ、直ぐにそんな幻想ありやしなかったのだと鉤分銅による細密打撃と釣り投げで分らせてやった訳なのだが、途中で俺を嗤ってた尾行組を見つけたのでハイパーハンマーごっこにして二度と俺を笑えないレベルで顔をボッコボコのオタフク顔にしてやった。アレはスツキリ気分爽快だったね。

そして一頻りー大体六割程だったか？ー雑魚共をシバき回った後にそろそろ本丸叩き潰すかと振り返ってみると、俺の戦闘スタイルにドン引きした様な表情をまるで隠しもしないペンギン急便とシチリアンのボス二人。

ってか実際ケモ成分多い方が「お前ウチのファミリーを飛んでくるアーツの盾にするどころか積極的にぶつけにいくとか正気かよ…」って言ってたけど、そんなもんあの時も同じ内容で言い返してやったが、はつきり言えば「俺の前に立っていたのが悪い」としか言えないよなあ（ガードベント）まあ、実際は鉤分銅で離れてた奴を引き寄せて盾にした訳なんだが…。

なんかもう敵味方関係無しに恐怖ばら撒いてしまっていると、何やら周囲の空気が起きたので確認してみると先程までの晴天が打って変わり、唐突な砂嵐が発生したー怒れる龍門の閻が動き出したのだ。

大分シユールな光景になるんだよなあ…

鼠王『灰色のリン』

彼の扱うアーツは簡単に記せば『砂を操作する』という十文字も使わずとも表せられるとても単純なものではあるが、異能バトル物の小説等に良く見られる強者であれば話は変わるし、鼠王はそんな強者の立場に立つ人物である為その強者の法則が適用される。

即ち『能力は単純明快なモノ程強い』という法則である。

幾らでも用途の前例は見つかるし、当人の発想力次第では如何様にも形を変えて用いることが出来、才能さえ有れば更に応用力は増してゆく。

鼠王本人が全く本気を出しておらずとも砂嵐を巻き起こす事が出来るという最早小さな天災とでも言えるレベルである。

で、そんな人型天災発生器の様な鼠王が起こした砂嵐だったが、俺にとつては僅かな痛痒すら齎さなかつた。

恐らくこの世界で上から数えた方が遥かに早いであろう鼠王の扱うこの世界の力は違う世界からの漂流者である俺にはその法則が適応されない、いや寧ろ鼠王のアーツが近づくだけで間違えているのは貴様の方なのだと言わんばかりに打ち消しているのである。

俺自身どうしてこんな事になっているのか理解出来ない意味不明な体質。

生身で触れようとするだけで源石の影響を打ち消すこの力はどうやら血に強く含まれている様なのだが、衣服や武器を身に纏つていてもアーツ程度ならば簡単に弾くことが出来るかなり強力な異能である。

しかし、そもそもアーツがまともに俺の視界に映らない問題があり、下手にこの世界の戦場で動きまわろうとするものならアーツの飛び交う戦場を馬鹿正直に突つ走るのに無傷なのを大多数に見られ、ライン生命を筆頭としたヤベー研究所で一生モルモットにされかねないというロクでもない未来しか待つていないのが簡単に目に浮かぶ様だつた。

自分語りをしてしまった、閑話休題。

そんな訳で鼠王のアーツは俺に対して一切効果を発揮しておらず、装備もガチ戦闘用のロングコートにゴーグル、口元から鼻まで覆うガスマスクを装備する事でペンギン急便の面子には砂を直ぐ落としたとでも言つて誤魔化せるのだが、流石にアーツの使用者である鼠王本人には遠目で此方を訝しんでいたのを見るに自分の操作しているアーツの異常を通して俺の体質が幾らかバレただろう事は確定したので、俺は鼠王を殺るべきかどうかかなり焦る事となった。

龍門の裏の守護者である鼠王にとつて俺の体質はバレれば確実にドデカい騒動を起こす厄災の種でしかないだろう。

俺の存在を見逃すなんて事はないだろうし、アーツが効かないのならば実弾を扱うスナイパーによる狙撃など幾らでも始末をつける手段をあの龍門の裏の守護者は老獪なる知恵で仕掛けて来るに違いない、それに最悪の場合は今回は失敗しているが、龍門以外の組織を招き入れて物量で押しつけてきかねない。

ならば龍門から離れるのは口惜しいけれどもやられる前に此方が仕掛け、鼠王を仕留めて龍門を去るしかない…と、この時の俺は本気で思っていたが今となつては立派な黒歴史です…。

取り敢えず一度体制を立て直す為に近くに居たバイソン君とモステイマに合流、その後モステイマを追っかけて来たエクシアとも合流した後、モステイマとは分かれてペンギン急便の残り三人との合流しようとしたのだが、その矢先に鼠王の指示を受けたのであろう裏路地暮らしの市民達が此方を囲み襲ってきた。

まあ、路地裏暮らしである程度喧嘩慣れしているといつても相手は一般人、此方も焦つてはいてもそれなりに場数を踏んでいる身の上であり、相手には知り合いなんかもそこそこ見掛ける状況ではシチリアン相手にやったような容赦の無いやり方は取りたくなかったので屋根上へと移動して戦場を離脱した。

その後で二人も釣り上げた後、有無を言わさず大量に荷物を持っているバイソン君を左脇に抱えてエクシアを左腕に持ってた鉤分銅を

背負い紐代わりに使い簡単に固定、そのままビルとビルの間を飛び回り、時には右の鉤分銅を使ったワイヤーアクションで飛び移りながら道のりを大幅にショートカットして残りの三人に合流した。

…まあ、降りた後移動の勢いに酔ったのかバイソン君がフラフラしていたのは若干申し訳ない気持ちになった…まあ、エクシアがまた今度やってとせがんできたらそれに乗るようになんかに降り立つのを見ていたクロワッサンとソラまでもがせがんできたのは予想外ではあったが…。

未来の事は未来の俺に任せて閑話休題。

また今度そっちが俺に依頼するかなんかして機会があったらしてやると言って取り敢えずその場を凌いでエンペラーの指定した場所へと移動する事になった。

俺も鼠王に会いに行くため着いていく事にしたのだが、路地裏に戻ればあの後鼠王がシチリアン共追い出す為に直接出てきてたんだっけ？

イベントで覚えていたのがこの後エンペラーが鼠王によって何回目かの無事死亡を迎えてペンギン急便とのバトルになるのは覚えていたけど戻った方が良かったか？

…いや、流石にほぼ壊滅してたとはいえシチリアンの残りの全勢力とやりあうとなったら鼠王相手にするのは難しかっただろうし、一応大団円…まあ、あの結果として色々被害を抑えた俺に対する恩を仇で返してくれたクソペンギンは許さんがちゃんと騒動は収まったんだからよしとしよう。

指定された安魂祭の会場に着くとワイフとジェイの二人組とバツタリ遭遇したのだが、原作でも学生位だと知ってはいたが身長なんかからホントに学生位なんだなと思った俺は、ペンギン急便の面子に絡み始めたワイフに「学生っぽいがこんな時間まで夜遊びしてて勉強の方は大丈夫なのか？」と質問した。

するとワイフは現状を思い出したのか顔を蒼褪めて走って家路へと走り出した…そっぴい今思い出したけどテストの息抜きしてる

最中にこつちに首突っ込んできたんだっけか？ 夕方から日を跨ぐまで関わるとか流石にどうなんだ？

そんなワイフーに呆れているとエンペラーが派手に登場して幾つか話したと思えば鼠王によって即死亡…呆気なく退場した後鼠王がエンペラーの使っていたマイクを使い不穏な宣言をすると、マジで無関係な一般市民に混じって鼠王の手下となった元シチリアンや裏路地の連中が俺達を二重三重に取り囲み、鼠王の方にはモステイマが現れ互いにアーツの応酬が始まった…：そーういやあの時互いに手加減してるとかなんとかで強者感出してたんだっけ？

…それにしてもいつもの事ながらアーツ合戦って、普通じゃ俺見れないせいで地面や何か他の場所に着弾しなくちや互いに発振器振り回してポーズ決めたり、何も無いのに派手に回避したりいきなり派手にダメージ受けたりと大分シユールな光景になるんだよなあ…。

まあ、俺にしか分からん悩みは閑話休題。

どちらもドンチャンやつてる中、俺は街灯を使いワイヤーアクシヨンで一足先に鼠王の元へ、なるべくアーツに当たって怪しまれないように避けながら降り立つと二人ともドンパチするのをやめて此方に注目しました。

如何やら俺が何をしに来たのか見定めようとしているのだろうか。当たりをつけ、俺はモステイマには悟られないよう鼠王に俺の異能についての確認をとると、鼠王は軽くはぐらかして煙に巻こうとしてきた。

この時色々と余裕が消えてた俺氏、奥の手で龍門に地獄を見せることになる。鼠王に対してガチ脅し、これには龍門に居を構えているペンギン急便に所属しているモステイマも黙ってられないと声を上げたが、即座に俺の血を練り込んである術者殺しのナイフを喉元に向ける事で牽制した。

そんな味方の筈であるモステイマに向けた俺の対応に本気を悟った鼠王が元々俺を育てた養父から何年も前に体質の事は聞いていたと明かされて俺呆然、寧ろ守られてた立場だと知り思わず頭を抱える

羽目に…。

流石にそんな相手にこれ以上手をあげる事は出来ないと言闘を離脱する旨をモステイマと合流したペンギン急便の面子に告げ、代わりに何かしらの問題があったら今度無料で引き受けようと伝え、鼠王にもペンギン急便の面子は油断していると痛い目見るかもだし大事なコートは脱いでいた方が良くぞと告げて戦場から離れようとする、その鼠王からコートを預かっといってくれと言われてまさかの留まる羽目に…。

その後はほぼ原作通りにペンギン急便が一撃入れて鼠王を動かさバイソン君の執事が鼠王を狙撃、執事が鼠王の遺体（実際は死んで無い）を引き取るというのでコートを遺品として渡して俺も退場、暫くの後には空からキャンディーが降ってきたのを見て無事に喧騒の掟が終わった事を悟るとバイクに乗って家路に就いた。

…郵便ポストにエンペラーからペンギン急便の面子に言っていた問題解決権を使う形で今回の騒動の補填を俺に回すよう当局に伝えたとかいう手紙が入ってたのを見た時はガチギレしたがな!!

幕間その1 笑顔は本来威嚇だった

sideバイソン

僕が万屋権兵衛のフィツシャーさんと出会ったのはペンギン急便との提携で僕がペンギン急便へと向かっている最中、バリケードで停められ爆破された車からなんとか脱出した時だった。

すぐ後ろを走っていたみたいでフルフェイスのヘルメットを被っているにも関わらずとても困惑したような雰囲気伝わってきたのだが、その直後にペンギン急便のエクシアが登場した瞬間何というかこう：「やらかした」というか「またコイツらか」とでも言いたげな疲労感満載の雰囲気変わったのを見て、ペンギン急便が巻き込まれた事件に対して自分も巻き込まれてしまった事に落ち込んでいるのだと初対面なのにも関わらず察せてしまい、思わず同情してしまった。

その後僕達を囲んだ黒服のマフィア達(後でシチリアンというシラクーザからの流れ者だと聞いた)がエクシアとフィツシャーさんに僕の身柄を引き渡すよう言ってきたのだが、エクシアは兎も角フィツシャーさんは完全に巻き込まれただけの無関係な人だったのだがエクシアの即座に返した否定のせいで周りのマフィア達も臨戦態勢、更にクロワツサンまでもが乱入してきたせいで戦闘から離脱するタイミングを見失ったフィツシャーさんも強制参戦、此処から僕達とフィツシャーさんによる安魂夜での着かず離れずといった感じの奇妙な関係が始まったんだった。

奇妙な関係と書いたがそもそも彼の噂自体が中々に奇妙なものだ、常に目元を隠す様な姿をしていて素顔を知る人物が皆無であるとか、龍門に来てからは主に源石関連の何時感染してもおかしくないような仕事ばかり受けるのに一切感染した事のないまるで超人の様な話を耳にする。他にも龍門の路地裏に住み着く感染者達にも平然と触れ合うとか彼の事務所と実家を兼ねている家は三階が窓の一切無い不思議な見た目をしているが、本人曰く作業室を兼ねた実験室だから周囲に危害が及ばないように窓を封鎖しているとの事だが、仮に侵入

しようものなら二度と生きては帰れない魔の部屋になっているなどという不気味な話もある。

話が逸れちゃった：撤退戦でのフィツシャーさんの活躍は凄まじいものがあった。両腕に装備したワイヤーの先に三つのフックが付いたメイスの頭みたいな分銅をまるで腕の延長の様に扱う事でマフィア達の腕や脚に当て、屈強に鍛え上げられている筈の四肢をまるで小枝の様にへし折って次々と行動不能に追いやる事で押し寄せようとするマフィアの邪魔と僕達が押し除けやすいように調整していたのだ。

：ところでフィツシャーさんが戦闘しながら途中で何かフックに引っ掛けてみたいんだけど、何やってたんだろうか？ 確か見た感じ何かマフィアに分銅当てた後のフックに物がひっかかってたみたいだけど：アレ？ もしかして戦闘中にマフィア相手にひったくりしてた？ えっ、そんな事やってマフィア達怒ってこない？ いや、そういうえば後の戦闘で普通にマフィア達から狙われてたっけか：意外と手癖悪い人だったのかな？

また話が逸れた：あの人まともな感じなのに何処かペンギン急便にも繋がりそうな所あるなあ：そんな訳でその場を離脱してエクシアとクロワツサンに先導されながら着いて行くと、路地の行き止まりの様な場所でペンギン急便のトップであるエンペラーと切り込み隊長のテキサスさんが待っていて合流した僕達による反撃でその場でのマフィア達は撃退することが出来た。

次に一度情報を整理する為にペンギン急便の隠し拠点へと到着したけれど、エンペラーがソファアーに腰掛ける前にフィツシャーさんが何か焦った様に毒突いてからエクシアに窓を開ける様に言いつつ走り出し、エンペラーが座ろうとしていたソファアーに隠されていたお菓子のアソート缶を掴むと流れる様な動きで蹴り飛ばし、エクシアが開けた窓を抜けて外の川へ落ちただけだけど、次の瞬間川が爆ぜてかなりの量の水が室内に入ってきた。

僕達は外の様子が見えていたりそもそも問題無い位置に居たけれど、エンペラーとエンペラーの後ろにあった音楽ラックが川の水でビ

シヤビシヤに：そのせいで音楽ラックは壊れてエンペラーがキレて唐突なカーチエイスに発展、そういえばこの時から暫くフィツシャーさんの姿を見てなかったし、この時ペンギン急便の隠し拠点に置き去りにしてしまっただろうか？

次に出会ったのはモステイマさんが案内してくれた鼠王がやって来た駄菓子屋の前だったけれど、今にして思い返せば公園で隠れながら移動してた時にすれ違ってたのかな？ 確か似たような服装の人が居た気がしなくてもないけれど：まあ、よく思い出せない事は置いてそこではフィツシャーさんについて少し驚きの事実が発覚した、彼はなんとまだ二十代前半だったらしい：なんとというか雰囲気が大入っぽいからてつきり四十代か三十代後半だと思っていただけにビックリだった、その後もやけに老成したようなことを言っていたから一言入れるとあまりにもショックだったのか膝を着いてうなだれてしまっただけ…。

落ち込んでしまったフィツシャーさんをどう励ますか考えていると、急にフィツシャーさんが立ち上がって僕達に着いてきても良いかと質問してきた、なんでも今日の運勢にケチがつき始めたのはシチリアン達が絡んできてからだと言ってそれなら現在進行形で狙われている僕達と一緒に居ればあつちからサンドバッグになつてきてくれるだろうと怒気を隠さない口調で理由を教えてくれた：口元だけしか見えなかったけど笑顔は本来威嚇だったっていうのは本当の事だったんだとあの時は察したなあ…。

そのままフィツシャーさんも一緒に他のペンギン急便の方達と合流する為に歩いていると、人通りのある橋の上でマフィア達に前後を囲まれている事をモステイマさんに教えられ、モステイマさんがフィツシャーさんに「フィツシャーさん、良いかな？」と短く声を掛けると、当のフィツシャーさんは「了解」と一言だけ答えて僕の背中とリュックの隙間に腕を入れる形で抱え込み、急に橋の下へと飛び降りたかと思いきや、右腕の装備を橋の手摺りに引っ掛けて下にあった船へと着地、そのまま船に乗っていく事となった。その時なんでモステイマさんを置いていったのか問いかけたら頼まれたからとあつさ

りした雰囲気です。そう返してきた：「なんというかアレは映画のワンシーンみたいでカッコよかったなあ…」。

船頭さんに怒られながらも棧橋に辿り着いた僕達は偶然ペンギン急便のソラさんをフィッシュヤーさんが見つ付けてくれた事で彼女の第六感？ の様な感覚でテキサスさんが居る場所へと案内してもらった事になった：実はソラさんって結構危ない人だったのかな？

案内されて着いた公園では一人一人空に打ち上げられそうな花火にマフィアの一人を縛り付けたペンギン急便の三人が居ただけで、幾らか話し合っている最中にモステイマさんの話になると火を持って来たエクシアが少し憂鬱そうな顔をして花火を点火、飛んでいくマフィアの声に他のマフィア達が気が付いて寄ってきた為またしても乱闘が始まった：それにしても飛んでいく前にマフィアに対して話してたフィッシュヤーさん凄くドスの効いた声だったなあ。

今度の戦闘ではフィッシュヤーさんは相変わらず相手の妨害をメインにした様な戦い方だったが、今回はなるべく多くの相手を邪魔する為なのかフックに相手を引っ掛けてそのままの大人一人を軽々しくぶん回して他の集団でいる相手に向かって叩きつける戦法で相手を翻弄、そのリーチから襲ってくるマフィアの三割程を一人で相手取る暴れっぷりだった：やっぱりかなり怒っていたんだろね。

それでも僕達の方が先に限界が来そうだった為一度引く事になり、テキサスさんとソラさん、エクシアとクロワツサンがマフィアの乗ってたバイクを奪って『大地の果て』で落ち合うと言って離脱、残された僕達二人はまだまだ余裕の有りそうなフィッシュヤーさんが呆れ顔で四人の去って行った方を見ながら何か腰の機械を弄ると（この間も敵の方を見ずに引っ掛けては投げ飛ばしていた）何処かから突然無人のバイクが現れ、それに二人で乗ってその場を離れる事になった、如何やら自分で改造したバイクとの事：凄く多芸な人だ。

幕間その2 暗闇に声掛けてたかも知れないの？

フィツシャーさんの運転する超高速バイクに乗って暫く行くと共同墓地へと辿り着いた、どうやらフィツシャーさんは『大地の果て』に通じる道を知らずマフィア達を撒くことを優先したらしい、連絡でも入れて迎えを呼ぶのかな？

なんて思っていたらフィツシャーさんが不意にモステイマさんと呼んで、それに応える様にビルの陰から大分離れた場所で別れた筈のモステイマさんが姿を現した時は本当にビックリしたなあ…。

その後は三人で『大地の果て』に向かうのかと思っていたら、急にフィツシャーさんが僕に小さな発信機を渡して「俺はちよつと用事があるからそれ持って先に行っておいてくれ」と言っただけでバイクに積んであった荷物からアタッシュケースと墓前に供える花を取り出して離れて行ってしまった。

如何やら誰かの御墓参りに行ったみたいでモステイマさんは仕方なさそうに肩を竦めると僕の案内を始めてくれた…んだけど、よくよく見てみると息づかいがちよつと荒かったり、顔が紅潮してる様な気がして思わずどうかしたのか聞いてみると「いやあ、流石にあんな魔改造バイクを追うのは疲れるからね」と軽い口調で答えてくれた。

…それってあのスピードで走ってたバイクを追いかけたって事ですよね？

あれ？　　そういえば今になって気付いたけど、もしかしてモステイマさん追い付いてなかったらフィツシャーさん誰もいないのになん自信満々にモステイマさんが居る事を決め付けて暗闇に声掛けてたかも知れないの？

いやいや、流石にあそこ迄カッコ付けた事やってたんだから気付いてたよね？

…なんか今になって気になってきたなあ…。

そんなどうでも良い事や色々考えさせられる様な事をモステイマさんと話しながら暫く歩いていると、目的地だった『大地の果て』へ辿り着いた。

中では何故か本来主役な筈の僕が居ない状態で僕の歓迎パーティーが始められていたのだけれども、暫くするとどうやって追ってきたのかまたしてもマファイア達の襲来によって店内が即座にボロボロに…。

暫く店内で応戦していると外からけたたましいブレーキ音とマファイア達の悲鳴が聞こえ、更に外のマファイアによって人垣が出来ているのにその向こうから四肢の何処かがおかしな事になっているマファイアが何かに当たって吹き飛んでいる様な姿がチラホラ見え始めた事でマファイアのボスが動揺し、慌てて撤退する為にスモークグレネードで周囲を煙に巻いて逃走してしまった。

煙が晴れるのを待ちながらテキサスさんからマファイア達リーシチリアンと呼ぶのだとこの時教えてもらえたリーの事を聞きながら外の様子を見てみると、何やら気落ちしたフィッシャーさんが無気力そうな感じで此方に合流する為に歩いていった。

若干凹んでいたフィッシャーさんは僕達に合流するとマファイア達の服装や喋り方からしてどうにも奴等には二つの派閥があるみたいで、それらが対立し始めているかもしれないという予測を出してくれた。

どうにもそこそこ龍門に居た事でやり方が龍門寄りになった先遣隊と、最近になって龍門に来たばかりの奴等で方針に違いが出ているせいで別々の動きをしている様に見えたとの事。

「困みにさつき『大地の果て』に襲撃して来た荒々しい奴等が後から来た奴等の事だからな？」とはフィッシャーさんの言、よくそんな細かい所まで気付けたなと思っていたら色付きゴーグルに隠されていない口元が苦々しげに歪んでいた…何かシチリアン関係で良くない思い出でもあったんだろうか？

兎に角何度も襲来してくるマファイア達に遂に痺れを切らしたエンペラーが殲滅する事を決定、テキサスさんを指令塔にして僕とクロワツサン、エクシアとフィッシャーさん、エンペラーとソラさんに分かれてそれぞれマファイア達について探索に入った。

暫く探索していると、僕達はマファイアがフィッシャーさんの予測通

り仲違いしている証拠になりそうな話をしている時にミスしてしまい見つかり、慌てて壁を粉碎しながら逃走開始。

無理矢理進んでいるとまさかのマフィアのボス同士がやり合おうとしている現場に直面、更にエンペラー以外の他のペンギン急便のメンバーにフィッシュャーさんも合流してシラクーザから来たマフィア達との最後の戦闘が始まった。

：ただしここであまり広くない路地裏という立地と合流した時それぞれが屋根の上から来たせいで立ち位置の関係上、『マフィアのボス二人とそれぞれの側近』対『僕&クロワツサン、テキサスさん、ソラ姉&エク姉』という対戦と『フィッシュャーさん単独』対『残りのマフィアと増援で来るマフィア』という一目で見てもバランスの悪い対戦カードが出来ていたのに、僕達は途中までその事に全く気付く事が出来なかった。

いがみ合うマフィアのボス二人とその側近達がやり合いながらも此方に忘れずに牽制が飛んでくる中、まず最初にそれに気が付いたのはマフィアの側近達とフィッシュャーさんを挟んでいた僕とペンギン急便のメンバーだった。

『いきなり空からマフィアが降って来た』

言葉にすればこれだけの簡単な事、僕のシールドバツシュでも弾き飛ばせたりクロワツサンのハンマーでカチ上げればマフィア程度なら吹っ飛ぶだろう、でもそうじゃなくてそのマフィアは『空』から：つまり『真上』から落ちて来たのだ。

慌てて少し後ろに下がりつつ何が起きているのか見てみると、フィッシュャーさんが公園でやっていた様な分銅による殴打に加えてフックを使つての一本釣りともいう様な投げ飛ばしで邪魔な奴を空に投げ飛ばしたり。

挙げ句の果てにはなんか「ミイイイツウケタアアアアッ!!」と叫んだかと思えばマフィアの一人をフックに引っ掛けそのまま振り回し、他のフックにも違うマフィアを引っ掛け、あつという間に六本あるフック全部にマフィアを引っ掛けたと思えばそのままフックを取り外そうともがくマフィアをフレイルの様に振り回して他のマフィ

ア達を高笑いしながら殴打殴打殴打…。

途中で引っ掛けてるマフィアが死にそうならば器用に死にそんなマフィアだけを外して他のマフィアをまた引っ掛け、途中でアーツが飛んでくれば引っ掛けてるマフィアをアーツの盾にしたりとアレはもう人がやっていい戦い方じゃなかったね。

そんな猟奇的な事やってたら誰だって異変に気付く訳で、マフィアのボス二人も戦闘をやめてフィツシャーさんをドン引きしながら警戒し始め、フィツシャーさんはマフィアがある程度片付いたのを見て適当にまだ残ってるマフィア達に引っ掛けていたマフィアを投げ捨てる様にフックから外して此方を見たのだが、マフィアのボスが言っていた「お前人間じゃねえ」は本当に申し訳なかったけれどその通りだと思いました。

：フィツシャーさん、「俺の前に立っていたのが悪い」じゃないです、貴方どんな戦場を渡り歩いて来たんですか…。

そんなフィツシャーさんに皆がドン引きしていると、急に砂嵐が起きてそれぞれが分断されてしまい、僕はいつの間にか現れたモステイマさんとフィツシャーさん、後から追って来たエクシアと一緒に砂嵐から退避して、別の場所に居るテキサスさん達と合流する事になった。

その時は正直に言っつてフィツシャーさんに対して恐怖を感じていたんだけど、当のフィツシャーさんは砂嵐があった時から色付きゴーグルに防塵用なのか口元を覆うタイプのガスマスクまで着けているのに此方の様子に気付く事も無く何かしら焦っている様な気配を滲ませていたけども、一体何があったんだろうか？

幕間その3　なんとというかご愁傷様様だった。

テキサスさん達と合流しようとしたらモステイマさんがまたしても唐突に別行動をしようとってきた。

何というかもうこの頃には少しばかり慣れみたいなのがあった気がする：いや、単純にフィッツシャーさんに気を取られててモステイマさんの事を流してたのかな？

エクシアとモステイマさんが話し合ってた後で話し合う約束を取り付けてからモステイマさんと別れてテキサスさん達と合流しようとしたのだけれど、ここで何故か龍門市民にしか見えない人達にいきなり囲まれてしまい襲い掛かられる羽目になった。

：いやうん、確かに昨日の僕達は龍門で散々騒ぐ羽目になったけれども、一般の人達には危害は出していなかった筈だよな？

そんな冤罪とは少しばかり言いづらい状況で動き出したのは顔隠してるのに苛立った雰囲気は凄く伝わってくるフィッツシャーさん。

右のフックを伸ばして近くの建物の屋上へ飛び移ると即座に僕とエクシアを両腕のフックを使って一本釣り、そのまま流れる様なロープ捌きで左腕のロープでエクシアを巻き込む様に背中に背負ってフックで固定、いつの間にか僕も抱え込まれて一言「舌噛むから喋らない方が良いぞ」とだけ言って一気に駆け出した。

ビルからビルへとまるで映画の様に一切速度を落とす事なく飛び移って駆け回り、時には他のビルの手摺りなんかには右腕のフックを伸ばして引つ掛ける事でアクション映画もビックリなワイヤーアクションを披露しながらショートカットしつつ、ドンドン目的地へと近づいて行ったのだった。

：ただ一つ難点を挙げるとすれば、あまりにも急な出来事だったせいで心の準備が全く出来ていなかった事だろうか？

恐らく側から見れば大迫力の度肝を抜くアクションだったのだろう、実際エクシアは舌を噛むと言われていたのに大はしやぎしていたし、時折街道の方からカメラのフラッシュが見えたので色々噂になっている筈だ。

：実際その噂を聞いたのか、後になって父さんから『いつの間にかクション映画のスタントマンになったんだい?』と揶揄う様に写真付きのメールが送られてきた。

しかし普通に考えてビルとビルの間を飛び回る様に移動するのは怖いしワイヤーアクションは更に怖い：お陰でテキサスさん達と合流した頃には僕は吐き気と戦う羽目になっていた：今度やるならもう少し加減をお願いします。

いきなり空から僕達が来た事に驚いていた三人は、興奮が冷めないエクシアの説明でテキサスさん以外の二人がフィツシャーさんのワイヤーアクションに興味津々らしく、今が騒動の最中だというのに自分も自分もと子供みたいにフィツシャーさんに詰め寄っていた。

そんな詰め寄られているフィツシャーさんは未だに何処か焦った様子で大雑把に三人（ソラさんとクロワツサン以外にエクシアがまたやってと言っていた為）を宥めてテキサスさんに何処に行けば良いのかを聞いていた。

エンペラーに指示されたという場所に向かうと様々な屋台が立ち並ぶお祭り会場に辿り着いたのだが、そこではぱっと見僕達を呼んだエンペラーの姿は無く、それどころか人混みが凄かった為ペンギンであるエンペラーが雑踏に潰されていないか心配しそうな騒がしさだった。

そこまでマフィア達や先程襲ってきた市民達みたいな相手を騙す為それぞれ簡単な仮装をしていた僕達だけど、元の姿に戻った途端人混みの向こうから二人の人物と鉢合わせる事になった。

その二人の内ワイファーさんというリー探偵事務所に所属する子が散々騒ぎを起こしている（実際は巻き込まれているだけなんだけど）ペンギン急便に物申すと言った態度で肩を怒らせながら話し始めようとした時、いかにも面倒そうだという雰囲気をしたフィツシャーさんが「学生がこんな夜中に散歩してて学業はどうなんだ?」と質問すると、ワイファーさんは顔を青くして慌てて家路へと走って行ってしまい、その場にはなんとも締まらないグダグダした空気になってしまった。

取り敢えず仕切り直す為に皆に声を掛けようとする、お祭りの放送関係をジャックしたらしいエンペラーが会場の一際高いお立ち台で演説をしようとした所、その背後から突如現れた鼠王によって背中に大穴開ける様な一撃を入れてエンペラーを殺害し（騒動の後普通に出てきたけど）彼の使っていたマイクを強奪、そして僕達へ不穏な仕掛けを施した事を語りかけると、気付けば僕達は彼の手下達に何重にも囲まれていて、彼等は雪崩れ込む様に此方へと襲ってきた。

そんな状況で襲いかかって来る相手と無関係な一般市民を間違えない様戦っていると、いつの間にかモステイマさんと鼠王がアーツでやり合っているのを見かけ、モステイマさんへの援護と今回の騒動へのケリをつける為に鼠王の所を目指しながらなんとか僕達は移動しようとして動き始めた。

そんな僕達を尻目に敵を近づけない様にしていたフィツシャーさんが痺れを切らしたのか、まさかのワイヤーアクションで囲いを飛び越え一足先に鼠王の元へと大跳躍。

周りを囲んでいた敵が動揺している間に少しでも進みながら彼等の方を見てみると、内容は聞こえなかったけれどもどうやら鼠王に対してフィツシャーさんが何かを質問しているようだったけど、不敵な笑みを浮かべる鼠王の反応からして如何やら煙に巻かれているようだった。

そんな鼠王の態度に苛立っているフィツシャーさんが何か肩を怒らせながら何か話し掛けると、今度はモステイマさんが眉を顰めながらフィツシャーさんに詰め寄ろうとしたのだが、瞬きの瞬間にフィツシャーさんが何処からか取り出した赤黒い刃を持った肉厚のナイフを鼠王の方を向いたままモステイマさんの喉に触れるか触れないかといったギリギリの所で止めてモステイマさんの動きを牽制していた。

あまりの早業にモステイマさんは動くことが出来ず、鼠王もそんな血迷ったかのようなフィツシャーさんに何かを感じたのか不敵な笑みをやめて何かを語り出した。

そこから辺で漸く僕達を襲ってきた集団から抜け出して合流すると、

既に話は終わっていたのか先程までの剣呑な雰囲気とは打って変わって愉快そうな鼠王と困惑しているモステイマさん、そして何故か頭を抱えて蹲み込んでいるフィツシャーさんという、一体何が起きたのかさっぱりな状況になっていた。

モステイマさんから話を聞くに如何やら鼠王はフィツシャーさんにとつてある種の後見人の様な人であり、フィツシャーさんの抱える秘密を他所にバレないよう隠蔽の手伝いをコツソリしていたのだが、そんな事をフィツシャーさんは知らずに思いつきバラされないよう警戒して脅しまでやっていて、そんな現状に自分の間抜けさから頭を抱えてしまっていたらしい：なんとというかご愁傷様様だった。

蹲み込んでいたフィツシャーさんはそうと分かれば知らなかったとはいえこれ以上恩人に手を出すのは不義理だと言つて今回の戦闘から手を引くと明言、でも「例えペンギン急便達は勝てなくとも確実にアンタに対して善戦したり一矢報いるだろうから、お気に入りっぽいそのコートは脱いどいた方が良くないか？」と、鼠王に揶揄うような助言をしてその場を立ち去ろうとしたのだが、それを聞いた鼠王がならばコートを預かっておいてくれと言われてなんとも言えない顔で渋々逗留する事に。

その後フィツシャーさんの言う通り僕達は鼠王の猛攻を凌ぎつつ一矢報いると、次の手を打とうとしていた鼠王がまさかの僕の執事の狙撃によって倒れてしまい、遺体を引き取りに来た執事はフィツシャーさんからコートを遺品として受け取るとその場を去って行った。

鼠王が狙撃に倒れる衝撃的な展開があつたものの時間は止まらず、鼠王の置き土産を無力化しに向かった僕とモステイマさんは、初めて鼠王と出会った場所に向かうとそこにはいかにもレトロな時限爆弾が置かれていた。

それを僕は何とか解除する事にしたのだが、モステイマさんが変な事を言うせいで間違えた配線を切ったらしく数字はあつという間にゼロに。

慌ててモステイマさんを庇うため盾を構えて身構えると、何故か衝

撃はくれども炎熱は無く、吹き飛ばされて何度か転がりながらも確認すれば、空からはキャンディーの雨が。

如何やらこれは鼠王が龍門を騒がせたお詫びか何かとして用意していた物らしい、いつの間にかフィツシャーさんも消えていたが長い安魂夜がこれで漸く終わったんだと僕は悟った…。

追伸：後でまた『大地の果て』で僕の歓迎パーティーを開いている時に、エンペラーがフィツシャーさんの事務所のポストに騒動の補填するようにといい嘘メツセージを入れておいたと笑っていたが、そんな事してフィツシャーさんキレないのだろうか？

オペレーター：フィッシャー

特殊オペレーター『フィッシャー』について彼との契約で許可されている範囲で纏めた情報です。

注意：機密情報保持の為外部への持ち出し厳禁。

基礎情報

【コードネーム】 フィッシャー

【性別】 男

【戦闘経験】 七年

【出身地】 シラクーザ

【誕生日】 八月三日

【種族】 不明

【身長】 172cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、非感染者に認定。

能力測定

【物理強度】 卓越

【戦場機動】 卓越

【生理的耐性】 標準

【戦術立案】 標準

【戦闘技術】 卓越

【アーツ適正】 欠落

個人経歴

元傭兵上がりで現万屋（呼び方を変えただけでトランスポーターとの事）をしており、看板にも掲げている『万』の文字通りかなり多芸であり、迷子の探索から故障した機械の修理、コードネームの通り釣りをしたりスタントアクションさえも熟す万能ぶり：ただし能力測定欄にもある通りアーツ適正が無いのでアーツ関連だけは出来る限

りの代替案で解決してきた模様。

傭兵時代にテラの各地を回った事もあるらしく様々な文化に理解を示す見識を有するが、浅く広く時々深くとその理解度に関しては大分疎らな所があり、本人曰く『旅して迂闊に色々な深い所を見ようとすれば誰だつてこうなるわ：勿論生きて帰れるならな？』との事：余計な好奇心は身の破滅を齎すという事なのだろうか？

三年前に龍門に定着してからはトランスポーターの資格を取り『万屋権兵衛』を開業。仕事を選びはするものの断るものは大体怪しげなものだつたりロクでもない所から来るものばかりで、真つ当な内容ならば誠実に熟し些細なものなら無料で行う等人情で動く事もままあるという。

健康診断

造影検査の結果、臓器の輪郭は明瞭で異常陰影も認められない。循環器系源石顆粒検査においても、同じく鉍石病の兆候は認められない。

以上の結果から、現時点では鉍石病未感染と判定。

【源石融合率】 0%

鉍石病の兆候は見られない。

【血液中源石密度】 0.0000u/L

ドクターケルシー、このふざけた検査結果はなんですか？ こんな誰でも分かる様な書類の偽装をして貴女は何がしたいんですか!?

——医療オペレーターJ. A.

ふざけていないし五回も採血して調べても少したりとも変動の無かった大真面目な結果さ、私だって彼との契約が無ければ何度でも調べ直したい位だよ：尤も、検査が終わった後に契約に基づいて本人が見ている目の前で採血した血液は破棄したがね。

——ケルシー医師

第一資料

オペレーターフィツシャーは以前から良く素材の納品等を格安で

してくれる案外ロドスに友好的な人物だ。

他のオペレーター達だけでなく一般スタッフや患者達にも友好的だが、逆に彼等からの態度は困惑している者が多い。

これについては顔も知らないし普段から顔を隠している様な相手に友好的な態度で声を掛けられても、声を掛けられた方は困惑や警戒してしまうのが普通であろう。

しかし如何やらオペレーターフィッシャーにも何やら心当たりがある様で、話を聞こうとしても苦笑するだけではぐらかすばかりと不自然な所が目立つが他には特に何もしなかつたりする。

第二資料

特筆すべき点としてオペレーターフィッシャーはその特異な戦闘力や技術力、体質にも目が行くが、他にはとてつもなく目敏い人物であるという事だろうか？

戦場では時折様々な素材を見つける事があるが、オペレーターフィッシャーのその目敏さは他のオペレーターと比べて数倍程の差があるだろう。ロドスの経理課であるクロージャやアーミヤCEOが諸手を挙げてオペレーターフィッシャーの参加を歓迎した事を最初は不思議に思ったが、今となれば心底納得の理由であった。

流星に見つけ難い物は余り増えたりはしないが、その発掘精度は並大抵のものではなく、戦場の傍ら同行した彼が暗躍しているのは最早暗黙の了解である。

俺いつの間に過労死同盟に参加してたんだろうな…？

ーオペレーターフィッシャー

第三資料

オペレーターフィッシャーがロドスに参加した理由は「呑気に傍観者を気取っていられる時間が終わったから」との事。

時間というのが何を示すのかは不明だがオペレーターフィッシャーは今迄ロドスに対してある種中立の様な立場を取っていたのだが、何かその立場を脅かす出来事が起きたのであろう。

参加に関して彼は幾つかの不可思議な契約を交わしており、中には『オペレーターフィツシャーの旅路を探ったとしても深入りしてはいけない』や『オペレーターフィツシャーが戦場で負傷しても他のオペレーターの手当てを優先する』等でしょう？ どうにもオペレーターフィツシャーの血にも何かしらの不可思議な点がある様ですが、それについては現在ケルシー医師に調べてもらっているとの事です。

第四資料

オペレーターフィツシャーの語るテラについての『異能』は二つ。

一つは何時からあったのかは不明との事だがこのテラ及び源石社会に対する『反源石体質』とでも呼ぶべき完全なアーツ及び感染耐性であり、これによって彼は例え天災の真つ只中であろうと生存可能であり、この異能の核らしき血液を天災の核に投げればたちまち天災を治める事も可能だろうとの事。

ただしこの異能はオペレーターフィツシャーがアーツの恩恵を受ける事が出来ないという事の裏返しであり、標準的な生理的耐性である彼は物理的な攻撃と非常に相性が悪い。

それに例え天災の中で無事にいれても、二次災害でビルの倒壊等に巻き込まれればひとたまりも無いだろうとの事。

もう一つの異能は習得時期は言えないとの事だがオペレーターフィツシャーが『サードアイ』と呼んでいる特殊な視点であり、通常の一人称視点以外にもまるで空から巨大な自分が今居る自分を見下ろしている様な俯瞰視点を発現させる事が出来るとのことです。

その視点には自身の見たいモノを選んで視る事が出来るらしく、実験として宿舎の中を扉を挟んだ状態で中に居るオペレーター達が誰なのかを当ててもらいましたが、見事に全員当てた上に偶然訪れていたドクターとその護衛に就いていたオペレーター、更にはドクターを見つけて隠密状態で着いてきていたらしいオペレーターマンティコアまでをも見つけ出したのです。

他にもオペレーターフィツシャーがワイヤーを用いた武器である鉤分銅を操作する時、ワイヤー部分を持つ事で何故かサードアイの巨

人が分銅部分を操作出来るらしく、それによってあの物理法則ガン無視な挙動が出来ているとの事です。

しかし彼はこの異能については顔を顰めるばかりで、理由を聞いても『便利なのは便利だけど、使う度に原因思い出すからあまり使いたくないんだよなあ…』と愚痴を零すだけでした。

昇進記録

我等がロドスが龍門に訪れる度やってきていたロドス七不思議の一つにして正体不明のマスコットである『ジョン・スミス君』ですが、ここ最近になって龍門から離れても何処からともなく現れる様になった事はロドスにおける周知の事実。

しかし今回その正体に迫る事が出来てしまったのです!!

以前は一般病棟の共有スペースに現れていましたが今では基地施設である宿舎にも出没する様になり、様々なオペレーター達はその正体を暴こうとしても華麗に躲けて癒され逃げられていたのですが、遂に私は彼が何処にも逃げ場の無い小部屋へと入っていくのを見たのです!!

今こうやって記録しながら小部屋を覗く所なのですが、是非とも彼の正体を見極めロドスに広めん為に…いざっ!!

…あれ?　なんで私休憩室のソファに座ってるの?

ー子供達の夢を壊しちゃ駄目だろう? by J・S

《ゲーム的な資料》

星六　特殊オペレーター

募集タゲ

近距離／強制移動／火力

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：1600

攻撃：970（+30）

防御：150

術耐性：無効

再配置：極めて遅い(300s)

コスト：18/20/22

ブロック：3

攻撃速度：やや遅い(1.3s)

特性

敵味方の影響を受けない

強制移動スキルを所持

遠距離マスにも配置可能

?????????? 攻撃範囲(初期↓昇進I↓昇進II)
 ↓
 ??????????
 ?????↓????
 ??????????
 ?????? ??????

潜在能力

二段階：コスト—1

三段階：素質1強化

四段階：攻撃力+30

五段階：素質2強化

六段階：コスト—1

昇進I

龍門弊30000

初級特殊SOC×5

初級異鉄×8

初級装置×5

昇進II

龍門弊180000

上級特殊SOC×4

D32鋼×4

上級燧合金×8

素質1 サードアイ(昇進I)

物資調達以外での作戦における素材のドロップ確率上昇(昇進IIで

+1、存在能力で+2強化)

素質で確率が確定ドロップを超えた場合追加素材を入手

攻撃範囲内の敵のステルス効果を無効化する

素質2 ワーカーホリック(昇進II)

物資調達以外の作戦時、一度も戦場に出なかった場合素材の抽選数

を+3(存在能力で+2強化)

基地スキル1 万屋権兵衛(昇進I)

対象施設：加工所／製造所

加工所配置時：素材加工時に消費する龍門弊及び体力を半分にす
る。

製造所配置時：製造効率+30%

基地スキル2 ジョン・スミス君(昇進II)

対象施設：宿舎

休養時、自身の体力回復速度が1時間毎に1.15

配置宿舎内、全員の体力回復速度が1時間毎に+0.2

スキル(全特化3状態)

スキル1：シューティングコメント(攻撃回復、自動発動、必要SP5)

次の攻撃で相手一体に『距離に応じて』最大攻撃力の500%のダメージを与え『かなりの力で』吹き飛ばす(100/200/300/500)

攻撃された相手は五秒間移動速度25%減少。

スキル2：釣り落とし(時間回復、手動発動、必要SP10)

自身の攻撃範囲内に居る敵最大6体をかなりの力で引き寄せ、攻撃力の350%の防御力、術耐性無視ダメージを与えかなりの力で吹き飛ばす。

吹き飛ばされた敵が他の敵に当たった場合はその敵も一緒に吹き飛ばし攻撃力の200%のダメージを投げた敵と当たった敵に与える。

スキル3：反源石弾（使用限度6）

自身の攻撃範囲内に居る敵一体を対象に100%の攻撃を行う。

ダメージが通った場合のみ攻撃力の10000%の防御力、術耐性無視ダメージを与える。

ダメージを受けた敵は30秒間行動不能となり、更にスキルが無効化され攻撃出来なくなる。

同じ敵に使用する事は出来ない。

「あんのクソペンギンめエツ!!」

五日目 天気：曇り

今日は少しばかりビツクリな出来事が起きた。

まずは午前の内にくソペンギンがガチで俺に龍門の被害補填を丸投げしたのかどうかを確認する為に朝早くから当局に確認しに行く事にした。

一気に稼ぐ事が出来なくはない仕事とはいえ俺のやつてる事は何処まで行っても個人経営であり、昨日の騒ぎで出た被害総額払おうモノなら一気に資金が枯渴しかねるのである。

最悪今まで幾つか作ってきたパワードスーツ(ジョン・スミス君等)をバラす必要があるだろうだが、個人的にロドスでの活動は楽しいから辞めたくないんだよなあ…。

そんなネガティブな事を考えながらも着いてしまった当局で発覚する『エンペラーによるただの嘘』という事実：周りに人がいるにも関わらず思わず「あんのクソペンギンめエツ!!」と叫んだ俺は何も悪くない。

実際対応していた職員が生暖かい目で見てきたり他の話聞きに来た職員も何とも言えない顔してたから悪いのは全部あのクソペンギンである、QED証明完了。

とはいえ騒がしたのは事実でクソペンギンがやったのはただのイタズラだったと分かった為大人しく帰る事にする。

訴えたりとか実害があったりあまりにも鬱陶しい時位しかないし、そもそもこの世界はそんな一々訴えるよりも物理で殴った方が遥かに手っ取り早いのだ。

態々小さい問題で訴えるのはそれこそ大企業なんかが邪魔な他企業を潰す取っ掛かりを得る為にする位である、一般市民にとって法廷事件の被害者か金持ちが継る(使う)ものって認識だしな。

そんな訳で特に背負うものが無いと発覚した事で晴々とした気分俺は家路に着いた、そしてポストに入ってたクソペンギンの煽りが書かれた手紙にキレた。

何がクソネズミのコート守って俺の服台無しにしやがった罰だコ
ンチクショウ!? ムカついたから偶然持ってた安魂夜であるクソペ
ンギンが台無しにされた服と同じ服を詫びとして送りつけてやった。
勿論俺が買ったやつだからサイズも俺に合わせている為、あのクソ
ペンギンには着ようとも首元が以前のよりもデカいから足元まで
すっぱ抜けるか腹に引っかかるのは確定である、奴の悔しがる様が目
に浮かぶ様だ。

悔しがるクソペンギンの声が聞こえた気がした、閑話休題。

そんなガキの喧嘩みたいな理由で今にしてみればアホみたいな仕
返しをした後、依頼が来ていないかどうかの確認の為メールボックス
を覗いてみると珍しい場所から依頼が入っていた、なんと映画のスタ
ントマンとしての依頼が大手撮影所から来たのである。

詳しく内容を見てみると昨夜の喧騒でマフィアがベテランの役者
に大怪我を負わせたらしく撮影中の映画が急遽ストップし、彼が回復
して復帰するまでの代わりを探していたところ、昨夜のワイヤーアク
ションを見てなんか『キタ』らしい監督達（NTかな？）が依頼する
事を現場の俳優達との協議の元決定。

写真からペンギン急便とフェンツ運輸に聞いてみたところ俺が万
屋だと聞いて依頼のメールを出した、もし良くても駄目でも一度連絡
をして欲しいので早目に頼むとの事だった。

この現世はアーツという前世には無かった魔法の様な力がある為
大怪我しても直ぐ復帰出来るのが良いのだが、ある程度そこらの心配
が少ない為こういった映画の撮影なんかは期限が短くなったりする
のである、アーツの便利さも一長一短という事なのだろうか？

他に依頼は無かったので店の方に『現在依頼中』の看板を出してお
き早速撮影所に電話を掛けると、向こうも俺からの連絡を待っていた
様で直ぐに出てくれたので依頼を受ける旨を伝えると、向こうから感
謝の言葉とスタジオに来てもらうよう言われたので愛車に乗って即
座に向かう事にした。

スタジオに到着した俺を待っていたのはあまり映画を見ないよう

な俺ですら知ってる名前が幾つか出てくる中々に豪勢な場所だったが、一番の驚きはまさかのエフイーターが居た事だな：まだロドスにお世話になってなかったんすねアンタさん。

そして主演女優として有名なエフイーターが居るといふ事はこの作品はカンフー映画だと連想するのは容易い訳で、まさかのアクション映画はアクション映画でもカンフーアクション映画という、安魂夜でのワイヤーアクションで誘われた身としてはてつきりアメモミチックな怪人役でも任せられるのかと思ってたから不安しかないんだよなあ…。

とはいえまあ何事も『広く浅く時々深く』がモットーの俺、炎国に居た時に健康に良いとかそんな誘い文句で一通りの武術を嚙った後、国土無双を再現出来るかどうか遊んでいた為そこそこ着いていく事が出来た上、基地スキルに『拳術記録指導』なんてのがあるエフイーターは言っちゃあ何だがその軽めな性格に反して技術指導はガチ勢なので、どれだけ動けるか調べる審査の後、たった数時間の演技指導で俺のカンフー技術をまともに魅せられる程度のものへと鍛え直してくれたのだ、プロつてのはやっぱ教えるのもあれだけ出来なきや駄目なのかねえ？

話が脱線しつつも準備が出来たので閑話休題。

そして監督から詳しく演じる役について聞くことになったのだが：何故かカンフー映画なのに『和洋中全部混ぜ込んだような暗殺者ムーブの悪役で、主人公の所属する組織のトップでありシリーズ全てを通しての黒幕に昔全てを奪われた復讐者兼ラスボス後に入る主人公が戦いの世界から抜け出す為のケジメ役を担う最終決戦枠』とかいうとんでもない濃ゆい役所をする羽目になってしまった…。

審査で色々やらされてたから不思議だったけど、これガチでベテランに任せた方がいい案件じゃないのか？

流星におかしく思っただけ話を聞くに答えは単純、『これだけ手広く演れる人材が居ないから』というものであり、怪我をしたベテランというのが本当に大ベテランであり、今回の映画はある種彼の集大成とも

言えるような作品だったのだ。

他の役者が遠慮したりやろうとする奴が自信だけは一丁前な半端者だったりで代わりが見つからず、まだ期限に余裕があるとはいえ出番も多い役でもある為少しでも撮影を進めておきたい現場は大急ぎで代役を探していると、あそこ迄のアクションを可能とする俺を見つけて依頼したとの事…自分の技量褒められるのは嬉しいが圧がヤベエ…。

まあ、流石にそこまで思いが強いのなら断るのも忍びないので改めて受ける事を伝えて色々と話を決める事にしたのだが、台本や服装、立ち回り等の話を聞いて今日はここまでという事で解散する事に。

俺の方は少しでも役者さんが復帰した時のために急遽その役者さんが出演した映画を買い込んで年代別に癖をみていき、後ついでに思いついた道具を作成したり等あつという間の一日を過ごす事となった。

六日目 天気：晴れ

作成した小道具を装備して現場入り、周りの役者や現場スタッフが驚きに目を丸くしている中堂々と監督と話し合ってるエフィーター（出演以外にも技術指南役との事）へと声を掛けると、二人して跳ねるように此方へと振り返り驚愕に目を見開いてくれた、作戦大成功である。

俺のやったイタズラは簡単に言えば大怪我したベテラン役者への変装だが、マスクに声帯変換器に骨格整形等出来る限り本人に似せる様にしたかなり手の込んだ物だったりする。

そして変装したまま撮影に移ろうかとふざけると、流石は技術指南役を名乗っているだけあってエフィーターに俺がイタズラしているのがバレた。

騒ぎになる前に声帯変換器を止めマスクを取る事で正体を表すと、たったの一日でここまで模倣した事に逆にドン引かれた…ちと解せぬ。

取り敢えずカラクリを監督達に説明すると監督達は一転して大喜

び、最初は暗闇なんかの身体のシルエットがボヤける場所ばかり先に撮る予定を急遽変更して最初から撮っていく事に、まさかのベテラン役者が復帰するまで通して代役をする事になってしまったのである。

　P.S. 噂程度に聞いていた賄い弁当クツソ美味かった。

いざ夜の龍門市街へ!!

七日目 天気：晴れ

今日も今日とて撮影日和だった：まあ、やるっていつても屋内撮影がメインなだけどね？ もしも映画の内容が日記の盗み見(される訳無いだろうけど)される事でバレても嫌なのでどんな事をしたかは詳しくは書かないが、途中で起きた出来事なんかは書いていこうと思う。

：つてかそうでもしないと暫く撮影に付きつきりになるから日記書けなくなっちゃうんだよなあ…。

取り敢えず今日は昨日に続いて序盤の撮影をしていたけれど、やっぱり素人は素人、幾ら声真似や動きの癖を真似れても演技に難有りという事で台詞のあるシーンだけ何度も撮り直す羽目になった…。

ゲームのTAS動画で何度も魅せプレイをやってるけども、あれも録画中は小さなミスをした結果何度もそのシーンでリセットして追記してみたいだし、アレと同じ感じなのだろうか？

昼休みの最中台本を読み込んで予習と復習をしていると監督から連絡が来て俺宛に電話が来たとの事ででたのだが、特に心当たりが無かった為訝しんでいるとまさかの現在進行形で入院中のベテラン役者さんだった…。

俺宛って事でボイスチェンジャー切っておいてあの時は本当に良かったと思っただね、下手すれば向こうを混乱させかねなかったからな。

思わずやらかさなかった事を心の中で安堵しながらどうして電話してきたのか聞いてみると、代役としての出演について感謝と作品について一つ考えている事があるけれど監督からの許可を取る為に一つ今回の依頼に追加する形で個人的な依頼を頼みたいと言われた。

どういう事なのか取り敢えず内容を聞いてみると、夕方〜なるべく動画が見れる程度に暗いのが好ましい〜に龍門市内を俺が依頼される原因になった動画みたい好きな様に走り回って欲しいとの事、但し撮る位置は好きにしても少し離れた位置から俯瞰する様に

走ってる俺を追尾するドローンで録画して、撮った動画を監督に渡して欲しいとの事。

別段問題も無く撮影が終わった後の片手間に出来る様な内容だったので依頼を受ける事を即決すると何故かあちらさん大喜び。

詳しく聞いてみるとどうやらこの作品、監督が隠密の東西ごちゃ混ぜにした様なキャラを作ったは良いがその想定していたフルスペックを出せる様な技量を持った役者が居らず、撮らずにボツになったシーンもかなりあったらしくベテラン役者として監督の期待に応えられない事をとて悔しがってた役者さんがベテランとしてのプライド捨てても作品を完成させたかったとの事。

こんな事聞かされちゃあ応えない訳にはいかないだろJKと俺奮起、いつもより高いテンションで撮影後即座に帰宅して黒のロングコートとサードアイ視点で追尾する脳波コントロール仕様の高性能ステルスドローン、それとコントロール用のサングラスに鉤分銅のプロトタイプである鉤爪ロープを装備していざ夜の龍門市街へ!!

：結論、テンションに任せてはつちやけ過ぎてはいけない…まあ、正直言えば黒歴史だけどいい画が撮れたと思っておこう。

八日目 天気：晴れ

昨夜の撮った動画をベテラン役者さんからの依頼内容をちゃんと伝えてから渡すと目の色変えて見に行こうとしていたので慌てて止める羽目になった…。

なんとか説得しようとしているとその騒ぎを聞いて他のスタッフや役者達も集まってきて撮影の筈が満場一致で俺のパルクール及び新たな黒歴史の視聴会に…ドウシテコウナツタ？

解説役とし強制的に視聴する羽目になった俺は恐らく瞳のハイライトが消えている状態で特設プロジェクトで映される自分自身の解説をしていた。

最初は簡単に何処を回っていくかの品定め、スタート地点から録画を始め愛車に跨がり龍門を一周、スタート地点に戻った後は自動操縦で愛車を車庫に戻して…この時点で愛車についての質問があっ

たけど自作と説明して終了ー龍門一周パークールの旅をスタート。
十連三角跳びでビルの屋上に登ってからは屋上から屋上へ、時折ステルスドローンを先行させてドローンに鉤爪ロープを引っ掛け道路を挟んだビルの屋上へ、観客の役者やスタッフ達の悲鳴や歓声が楽しいです。
時に地上に降りたり降りるふりして鉤爪ロープでスウィングしたり：：：：そういやこれ全部無断でやってたけど捕まったりしないのかな？：：：ヤバい、書いてて不安になってきたから今度当局に問い合わせないと：：。

不安だけでも閑話休題。

そろそろ映像が終わりに近づいてきた所で異常発見、こつからパークールによるスピーディーなアクションではなく、ある種黒歴史なステルスバトルミッションである。

観客やつてる皆も「流れ変わったな？」とか言ってた、実際変わってたけど。

路地裏に妙な感じに人が倒れていたのを見かけた俺が急行、どうやら襲われていたところをなんとか逃げ出したらしい全身ボロボロの男が倒れており、目が霞んでいるらしい男は俺の接近を感じ取ると俺の事を追手だと勘違いして逃走しようとするもボロボロの身体では直ぐにフラついてしまい転倒、慌てて介抱してやり誤解を解こうとした所で俺は男が安魂夜で鼠王の部下として見た顔だと気が付いた。

因みに高性能で頑丈な作りをしてあるステルスドローンは事務所か愛車に積んである機材に戻さない限り操作の切り替えや電源のオンオフが出来ない仕様となっている為、流石に鼠王の名前を録画したままなのに出す訳にもいかない。

その為『あの方』とか色々と比較表現で男に質問してみると、男は仲間だと勘違いしたのか周りの耳を気にしながら俺と同じように直接鼠王の名前は出さずに起きた事を話し始めた。

何やらシラクーザから来た一団以外にも何処からかは不明ながらも怪しい団体が来ていたらしく、そいつらは以前のシチリアンとは違

い鼠王を殺害する事で混乱した龍門の裏社会を乗っ取ろうと画策しているらしい。

盗み聞いた話によると既に十年以上前からそいつらは裏の住人に気取られない様準備をしているらしかった。

以前の安魂夜での出来事から何かしら鼠王を害する確信を得られた様で実行の準備をしていた所を偶然この男が目撃、話を聞いていたところ他の奴に見つかり慌てて逃走したが救援要請も逃走経路も悉くを潰され、ボロボロになりつつもなんとかここまで辿り着いたのだという。

話を聞き終わる頃に辺りに怪しい気配を纏った奴等が数人現れ、俺とボロボロの男を囲む様に展開すると、その内の一人が変装したままの俺をベテラン役者さんだと勘違いして声を上げた。

ここでようやく目の霞みが取れてきたボロボロの男は勘違いをしていた事に気がつくが、俺が『あの方』には恩義ある故助太刀する』というと一先ずこの場での疑念は収めて他の仲間伝える為に逃走するのを援護してくれないかと提案してきたので怪しい奴等へと先制の一撃をかます事で返答した。

役者さんの変装をしてた為まともな武器を持ってきていなかった俺は取り敢えず変装元の役者さんが得意だというカンフーを崩した様なスタイルで相手を鎮圧。

途中相手が逃げない様に足に震脚かまして潰したり関節狙って逆に曲げたりとダーティプレイしてたらウツカリグロ注意の勧告忘れてたせいで映像見ていた何人かが短い悲鳴上げてた：ホントウニモウシワケナイ…。

てつきりアクション映画とかで慣れてると思ってた&あの程度で怯むとは思ってなかったせいでグダグダしている内に映像は次の段階に：俺の事をベテラン役者さんだと勘違いした奴が他の仲間を置いて慌てて逃走、勿論逃がす気の無い俺だったが、ふと奴等の正体を掴んでやろうと態と途中で追跡を失敗したかの様に偽装し、奴等の拠点へと案内させた。

…そのせいで思いつき厄ネタが引っ掛かるとかホント予測の範

困外だったけどな。

俺「本当に、申し訳ありませんでした」

事件起きれば長くなる、閑話休題だ。

どうやら一人逃げた奴は下っ端というかこういった裏関係の人間ではあるものの裏の世界に入ってからまだ日の浅いアマチュアだったようで、俺が姿を晦ますと簡単に騙されてくれた：俺が屋根の上に居るからって路地しか確認しないのは不用意過ぎとしか思えなかつたし、ガチでこつちに配属されたばかりの素人だった可能性があるな。

そんな自分がアジトへの案内人になっている事も知らず進んで行く小物を追いながら屋根伝いを渡っていくと、ボロボロの男が鼠王へ報告出来たらしく裏路地の闇が瞬みしろいだ様な錯覚を覚えて少し足を止めてニヤリとほくそ笑む。

：ステルスドロロンが男と俺を繋ぐ様に撮影していた為にこのシーンがまるで狙ったかの様に映されて観客にドン引きされてしまったがな!! 理由説明したら流石元傭兵と変に感心されたのにはなんか納得いかねえ…。

下っ端を追いつつ周囲を見渡してみれば予想通り陰に潜む鼠王の配下を見つけ、鉤爪を使った光の反射で此方に注意を引いてからハンドサインで追跡中の旨を伝えると、何かしら納得した鼠王の配下が懐から細かい何かを取り出して此方へ投合してきた。

受け取ってみれば市販されている周囲を薄っすらと照らせる様なペンライトであり、彼方ももう一本取り出してモールス信号の様にライトを明滅させてきたので、奴等のアジトに着いたのならコレを着けて知らせろという事なのだろう。

ダークヒーローみたいだと賑わう観客達を尻目に場面は進んでいく、漸く目的地に着いたらしい下っ端が周りを見渡して一つの大きな工場に入っていく、それを見た俺はペンライトを着けて鼠王の配下へと通達した。

周囲の建物に潜んでいた鼠王の配下達が音も無く現れるのだが、サイドアイで透視出来る俺からすれば何処から出てくるのかは丸分

かりであり、俺が自分達の事を既に認識している事に向こうが驚いているという何というか気の抜ける展開になった…。

まあ、その後の鼠王の配下の一人が「既に我々に気づいていたのか？」という質問をしてきたのに対して当然と答えてやると観客達は強者感でも感じたのか感心していたけどな。

そして音も立てずに工場に近寄り外壁に手を当てて中の様子を探る様に見せ掛けつつサードアイで中を透視すると、どうやら普通の工場に偽装した手前側と奥側の生活空間とで工場は分かれており、先程の下っ端が今回の首謀者の側近らしき奴等にボコボコにされている所だった…。

ってか計画バレだろうに逃げもせず襲撃準備もしてないってのは他の奴等も馬鹿ばかりなのかと思つたな…まあ、実際とんでもない馬鹿共だった訳なんだが…。

ってか工場の内壁に大量のスポンジ貼り付けてその上から壁貼り付ける形で偽装した防音対策とか他にも色々随分とDIY風味を感じるけど、こんな馬鹿みたいな積み重ねをひたすら続けて鼠王の目を欺いていたっていうのはある意味虚仮の一念ってヤツなのかね？

敵褒めてどうすんだよ、閑話休題。

取り敢えず後で防音されてた事とかバレた時に怪しまれない様外からは分からなかったと伝えて屋根側の換気用の窓から侵入し誰も居ない事を再度確認した上で外に居る鼠王の配下達を招き入れると、今度は居住区側へ侵入する為に通気ダクトへと入る事で居住区に居る奴等の数を確認、人数分ライトを明滅させるといよいよ突入フェイズに。

勢い良くダクトをブチ破り奇襲を仕掛けて近くに居た下っ端に暴行を加えていた男を撃破、いきなり登場した俺に他の奴等が驚いている間に外からも鼠王の配下が雪崩れ込み次々と制圧していき、あつという間に残るはリーダーらしき男のみに。

俺に対して何だ貴様はと喚く男に対して既にスニーキングやらでテンションの上がつてた俺氏、FGOの『燕青』を真似て「闇の侠客

ここに参上!!」と決め台詞からの連打で決着、観客達は湧いていた。

：まあ、やった技は『十面埋伏・無影の如く』じゃなくて『殺撃舞荒拳（テイルズ・オブ・エターニアのフアラ参照）』なんだけどね？

流石にあの瞬間移動染みた歩法やシャイニング・フィンガーは真似出来んわ：アーツ使えたらワンチャン習得目指しても良かったかもしれんね。

そんな訳で敵のリーダーも打ち破り鼠王の配下が最初に奴等の目論みが発覚する原因となった怪しげなブツの搬入場所も無事制圧出来たらしく、こうして奴らの目論見は果たされようとする寸前で阻止される事となった。

そして俺はこれ以上面倒事を背負い込まないように現場から離脱、これ以上口クでもない映像記録を撮ったらヤバいのでさっさと家路に着き、途中に呼んでおいた愛車へと跨り発進させる所で映像は終了、観客達は気に入ってくれたのか拍手喝采である。

ここまでは良かったんだけどなあ：閑話休題。

映像を見終えた直後監督に連絡が入り、電話に出た監督は困惑した表情で俺へとスマホをパス、監督の表情と俺の諦観した雰囲気に困惑する他の面々：受け取った俺は何も言わずに正座してスマホに耳を当て電話を変わった事を伝えると聞こえてくるのは昨日も聞いたベテラン役者さんのこれまた困惑した声。

ベテラン役者さん「なんか当局が話を聞きたがってるんだけど昨日何かした？」

俺「本当に、申し訳ありませんでした」↑DO☆GE☆ZA!!

そりゃあ俺ずっとベテラン役者さんに変装したままだったし鼠王と長官って裏で繋がってるから当然話行くよね？ って事である。

但しベテラン役者さんは重症で治療の為に病室で動かず大人しく療養中の身、病室から一步も出てないしそもそも今動いたら傷が開きかねない危険な状態の為本人に動く意味は無い。

病院も当局もベテラン役者さん本人さえも訳が分からず困惑している中でベテラン役者さん閃いた、そういえば代理で出演してる人自

分ソツクリに変装してるんだっけ!?

そうと分かれば連絡である、俺も例え変装していても自分の方に来る可能性はあったけれども、かなりの確率で役者さんの方に行くかなと考えていた為にかなり申し訳がなかった、ほんと黒歴史である。

自分だけが被害喰らうのは良いけど他人巻き込む黒歴史は辛い：閑話休題だ。

色々自白した後取り敢えず当局から迎えを寄越すのでそれに乗って記録した映像を持ってこいと言われたのでその事を監督に伝えると、冷静になつてやらかしてる事を理解したらしい監督が苦笑しながらも理解の色を示してくれてた。

その後俺は無事迎えに来た当局の車に乗って当局の取り調べ室へ：現世で初めてパトカーに乗った訳だけど、やった事が灰色過ぎてどうなるのか全く予想が付かないのが怖かった…。

当局に着いたら先ずは身元確認：するのにスワイヤーが居るのは分かる、近衛局の上級警司だもんな。チエンが居るのもまあ分かる、近衛局の特別督察隊の隊長だもんな。

ホシグマが居るのも：まあ、まあ分かる、チエンとスワイヤー仲悪いから仲裁役が必要だもんな：だけどなんでウエイ長官まで居るんだよコレガワカラナイ…。

諸々の疑問はあるが取り敢えずちゃんと変装を解けと言われたのでマスクを脱ぎ変声機を切つて骨格戻して免許の提示：撮影の為にずっと骨格変えたままだったから違和感が凄かった。

：ついでにいきなりガキゴキ骨が鳴る音が響き渡つたせいでウエイ長官達を注目していた周囲の局員達からめっちゃドン引いた目で見られる羽目になった：ってかウエイ長官以外も地味に引いてたけど、ビビるくらいなら個室で着替えさせろよ。

そしてその後は午前もやった試験会を当局の視聴覚室でやって無罪放免：なんか無駄に疲れたぞ、オイ…。

「すっごいリアリティあるけれど流石にやり過ぎじゃない?」

九日目 天気：晴れ

今日も撮影の続き：なんだが、なにやら昨日見た捕り物で監督大ハッスルしたみたいで出番がめっちゃ増えた。

詳しく書かない程度に具体的に書くと、どうやら鬼ごっこみたいなサバイバルホラゲーの鬼役みたいな感じだな、しかも闇に隠れて一人ずつ拐って惨殺していく陰気な奴。

派手なアクションカンフーの合間に一切慢心が無い必殺仕事人による不意打ちで仲間が確殺されていくつてのは、取り敢えずベテラン役者さん模倣する為に見た今までのアクション一筋なシリーズと違ってちよいとばかし賛否が分かれそうでもあるけどなあ…。

疑問に思って聞いてみればなんと初代からガッツリこれについての伏線は仕込まれていたとの事、粗方その伏線シーン教えてもらって今し方日記書く前にその部分だけ見てたけど伏線上手過ぎへん？

今迄のシリーズ通しての主人公陣営に対する印象が完全にちやぶ台返しされたんやけど…そりゃあこんな闇落ち復讐者生まれますわ、完全に師範とその側近達の自業自得過ぎる…ってかこれ完全に主人公世代何も知らんのに巻き込まれ損じやねえか。

十日目 天気：曇り

今日も今日とて縦横無尽に大立ち回り、俺の動きが必要な場面を先撮りする事になったのだが、とうの俺が台本上仕方がないのだが滅茶苦茶跳ね回るせいで撮影係が映像ブレないように映すのが大変らしい。

一昨日見せてくれた映像は何処のメーカーの物なのか聞かれたのだが、残念な事にライン生命で教わった技術を使ってはいるものの自作である事を伝えたら何故か撮影用のカメラ一台造る様依頼されてしまった…。

この手の依頼は利権関係が厄介な事になるから基本断る事にしてるし、そういう前提条件を書いてあるからちやんと断れるんだけどね？　ほんとそこら辺設定しといて助かるわ。

そんな訳で俺に依頼してきたカメラマンには断ったのだが、それならこちらが指示して俺が撮った映像を買い取らせてくれと言われてしまった：いや確かにそれなら規定には書かれてないから出来るけどさあ：なんて言いたい気持ちで一杯だったな：ってかそう言うたったわ。

取り敢えず足掻く為に監督から許可が出たらやろうと伝えればいつの間にか俺の背後に立ってた監督が即座に許可出した。

サードアイ使ってなかったから気付かなかったけどカメラマンまでジビってるのはどういう事なんだよ：って思い聞いてみれば、まるで監督がいきなり現れた様に見えたとの事：。

ティンダロスの猟犬だったかな？　たしかそんな名前の鋭角から出てくる時間旅行者を執拗に追ってくるバケモノがクトゥルフ神話に居た気がするけど、原作知識は未来を見てきた事には該当しないよな？

：考えるのは辞めよう、正気が削られかねん。

十一日目　天気：雨

生憎の重たい雲を伴った雨だけど寧ろ作品的には好都合、俺の撮影シーンの演出に丁度良い小雨とも大雨とも言い難い絶妙な降水量だったので雨天決行となった。

そして俺の出番があるという事はシリーズのスタメン張ってるエンジニアのキャラが惨劇に哭く事になるのだが、流石は一流の女優、今まで見たことの無かった本来の性格とは真つ反対の見事な慟哭シーンにこれが一流なのかと内心脱帽しか無かったな。

対して此方が演じるは復讐が目的の狂気入り混じる情緒不安定なヤベー奴、ハッキリ言って狂った様に哄笑した後一転して真顔で呪詛唱えるみたいに呟くのはクツソ楽しかったです（小並感）

：まあ、そのせいで演技なのにも関わらず結構なスタッフ達からド

ン引きされる羽目になったけどね？ エフイーターからも「すつごいリアリティあるけれどさ：アレは流石にやり過ぎじゃない？」って引かれたのは結構クルものがあったなあ：まあ、監督にメツチャ受けたから良かったんだろうけど。

十二日目 天気：曇り

今日は外出が可能となったベテラン役者さんが映画の進捗を見に来た、やっぱりアーツという前世に無い魔法の様な技術があるつてのは便利なんだと改めて分かる一幕だったな…。

ホントにアーツを使えたり恩恵を受けたり出来るこの世界の住人は羨ましい限りである：もしも使えるのなら俺だって色々試してみたかったなあ…。

因みにベテラン役者さんの臨時専属医を監督がロドスに依頼していたらしくシャイニングが派遣されており、彼女がベテラン役者さんの側に付き添っていたのは何というか『使徒』のトップに近いシャイニングを派遣させられる監督のコネが凄いのか、サルカズという世間では評判の悪い種族であるシャイニングを顔色一つ変えず受け入れれるベテラン役者さんが凄いのか、はたまた大分ロドスの中でも大物であるシャイニングをこうやって派遣させようと決めたロドスが凄いのかもうどう言えば良いのか分からなくなる光景だった。

実際サルカズであるシャイニングを見て顔を顰める奴も居る中、監督はそんな奴等に忠告を飛ばし、ベテラン役者さんも不満気なスタッフに対して不服そうな顔をしていたので二人はしっかりと種族に囚われず接しているのだろう。

：でもなんでロドスがシャイニングを派遣する気になったのかをシャイニング自身に聞いた時の「ベテラン役者さんに早く復帰してもらって映画の新作完成が滞りなく進んで欲しい」という要望が大量に出た為、感染者でなく尚且つ強力な治療アーツの担い手であるシャイニングを派遣しようかと決断が下ったからだという話はなんだかどつと気が抜けたな…ってか特に推し進めていたのがクロージャッつていうところが特にね？ なんだかなあ…。

そんな訳でベテラン役者さんに見られながらの撮影をしていたのだけれども、やつぱ演じている本人に観てもらうっていうのは色々修正がし易くて良いね。

他の人に言われても何処となくズレた感じで中々役を演じきるのが難しいけれど、本来役を演じる本人であればしつかりとその役の台本を読み込んだ上でのアドバイスになるから、此方もたったの数回で理解する事が出来るのは本当に助かった。

まあ、教えて貰えるのは演じ方であってアクションは俺が基準になってるんだけどなあ：それにしても現世は前世と違ってパルクルでの『魅せる』動きの研究とかあまり無いんだろうか？

まあ、前世のインターネットみたいな世界を繋ぐ情報網なんか無くて、あつてもせいぜいが移動都市内での通信網程度なんだよなあ…。

まあ、衛星通信とか天災が何時どんな形で起きるか分からんような環境だったらそんな事しても下手すりや金の無駄遣いにしかならない可能性が高い訳だし、普通やりたがらないわなあ：寧ろそんな状況で俺がやり遂げれば結構な利権になったりするのだろうか？

欲張つてもどうしようも無いから閑話休題。

走つて跳んで潜んで拐う、拐つた相手をサクツと暗殺してメツセージの紙を貼り付けた様に見える人形に変え、主人公達が戸惑っているど真ん中にいく様に通路の梁から吊るして主人公勢の氣勢を削ぐ…。

こんな感じの流れがあつたのだが、なんかどつかで見たことある内容だとは思つてたんだ：うん、日記書いてる今思い出した、これアメモミのバットマンがゲームで敵にステルスキル決める時の一連の流れだわ。

この一連の流れは先にどんな動きをするのか知ってるスタッフや役者さん達はなんか納得するかの様に頷いているけれど、生で初めて見たベテラン役者さんはなんか凄く驚いていたし、何もかもが初見なシャイニングは何かもう一言も話さないで見開いた目をパチクリさせていた、カワイイ。

その後は恙無く今日の撮影を終えてベテラン役者さんと今後の流れについて話し合う事になったのだが、どうやらシャイニングが来てくれたおかげでもう一日二日で完治するらしいとの事、やっぱ星六オペレーターは格が違うんやなって…。

後何かパルクールについて教本みたいなのは無いのかと聞かれたけど、前世のようつべにあった動画みたいなのが作った方が良いのかね？

「汗臭いおじちゃんありがとう」

十三日目 天気：晴れ

金曜日じゃない、ヨシ!! (色々違う)

悪ふざけは置いて今日も今日とて撮影日和だった、あっちこっちを跳ね回って走り回る暗殺者ムーブだ。

：俺暗殺者つてもつとこう、切嗣みたいな高層ホテルに立て籠もるターゲットをたつた一人殺す為に下準備してから警報鳴らして一般人退避させた上で発破解体したり、影牢の一見無造作に見えるトラップを仕掛けて置いて侵入者に連鎖で喰らわせて尊厳ズタボロにした、もっと簡単な奴で言えば芋砂とかそんな待ち構えるタイプのイメージだったんだけどなあ：あ、いやアサクリはそこそこ派手に動いたなそういや。

いきなり脱線してしまった、閑話休題。

取り敢えずまあ、ベテラン役者さんの予想通り骨折が完治したので今日この日の撮影をもって俺のスタントマン依頼は終わる事になった。

ようつべ風のパルクール講習動画の作成を正式に監督から依頼されているからまだ映画関係の依頼は続いているとも言えるが、それについては見易い動画に編集する為にも日の高い内に撮るつもりだから、納品するのは早く出来ても明後日にはなってしまうだろう。

実に七日の間映画関係に費やしていた訳だが、前世と違ってアーツがある上に科学も前世より進歩している部分がある現世は本当に色々出来る事の幅が増える為、モノが出来上がる速度が比べ物にならないくらい早い。

だってアーツを使える奴が居ればCGで魔法再現する必要なんか無いし、前世でワイヤー必須なアクションもアーツで強化出来る奴が居れば、ただでさえ種族によつては素でとんでもない馬鹿力や跳躍力を持った奴が居るのに、そいつらがマジでスーパーマンさながらの事だつて出来てしまう。

さながら限界まで防御バフを施したクオーラが幾らHPが半分切った強化スカルシユレッダーに殴られようともミリ単位しか削られず即座に回復されていくという、見てる此方が遠い目したくなる様な事だつて普通に起きる。

「そーいや前にTVで龍門の消防隊に所属している隊員の特集でそんな頭の悪いアーツ構築で火事の中突っ切つて子供助けた奴が取り上げられてたっけ？」

アレは確か事前に大量の水分取り込んでおく事で発汗による湿り気で火傷を防止するアーツと甲殻類の殻みたいな熱気遮断用の防護壁を作り出す自前のアーツで火事場への耐性を着けて、他の隊員から掛けて貰った新陳代謝を爆上げするアーツを利用したビルドアップとリジエネ効果で瓦礫撤去時の自身に対する損傷を度外視した特攻染みたやつだったな。

「…あれ確かその後強化してた時間が長過ぎて、入る前は多少ふくよかだったその隊員が出る頃にはクツソマツシブボディになっていて、ビルドアップアーツ使いと一緒に消防隊じゃなくてジムトレーナーに転向しろとかネットで騒がれてたなあ…。」

まあ、本人達は両方ともアーツの副作用で汗臭くなるから救出した時も子供に「汗臭いおじちゃんありがとう」とか言われてクツソ落ち込んだ結果やりたくないらしいけど。

めっちゃ話がズレた、閑話休題。

そんな訳で今日は俺がやる必要があるシーンを全部撮る事になり、撮影終了後には監督に連れられて監督行き付けの居酒屋に慰労会として誘われる事になった。

俺と監督以外に行ったのは主役をやってるエフィーターと俺がスタントマンする事になったベテラン役者さん、後はベテラン役者さんが病み上がり食い過ぎたりしないよう見張るのとベテラン役者さんを診てくれた札という事でシャイニングも来ている。

因みに俺がもう変装する必要が無いからと変装解いて集合地点に向かうと食いに行くメンバー全員が俺の事気付かなくて草枯れた…。

代わりに盛大に飲み食いしてやったのだが、俺は酒飲まない事に気が付いたエフイーターからの絡み酒がクツソ面倒だった。

常日頃から気を配っているのだからかなり美人さんがカンフー納めているからかメリハリの効いた健康的な四肢で絡み付いてくるのである、酒臭さと厄介なアルハラさえ無ければクラツときていたのだろうが、生憎とその手の相手にはメツチャ萎える方である俺は怒りを引っ込めて悪酔いしているエフイーターを酔いつぶす事にした。

一方で他の三人が何をしていたかといえば早くエフイーターの異変を察知したシャイニングがベテラン役者さんと共に少し離れ、そこに監督がベテラン役者さんと今後の撮影についての軽い打ち合わせをしようとして行つた為に見事に回避。

エフイーターの豹変に最初はシャイニング以外の二人は驚いていたが、触らぬ神に祟り無しという事で俺を人柱として三人でゆっくりとこちらの惨状を着に呑むのを再開していた…。

今迄こんな事が無かった為に安全策を取らせてもらつたとの事だがその結果酒を飲んでなかった俺がエフイーターを自宅であるマンションまで送る事に…まあ、送り狼になんかならんかったがな。

十四日目 天気：晴れ

ベテラン役者さんのスタントマンという事で連日撮影に出ているので今日は依頼を受けずにゆっくりパルクールの練習用に使える動画の撮影をした後、軽く三つ程段階分けした編集をして一日が終了。結局仕事をしている様なものだったがそこまで期日とか決められた内容ではないので気楽なものだった、楽出来てるなら実際休日だな。

十五日目 天気：晴れ

今日はまずパルクールの動画データを持って撮影所の監督の元へ、動画内で解説は入れているから今回の鑑賞会は無しだぞと念を押して帰ろうとすると、顔真っ赤に染めたエフイーターがすっ飛んできて

謝ってきた。

どうやら一昨日の事を完全に覚えていたらしく、話を聞くにあそこ迄派手な演技の映画を今まで撮れた事が無かったのでその話をしてたらついつい気分が良くなり飲み過ぎたとの事。

：まあ、エフイーターらしいといえはらしい訳だしさつさと許し、撮影所の皆に映画の完成を楽しみにしている旨を伝えて帰宅する事にした。

事務所に着いて手紙受けやメールボックスを調べてみると幾つかの期間を指定しない依頼と共にクソペンギンからの罵倒が書かれたメールも入っていた、愉悦ウ!!

取り敢えずクソペンギンからのメールは間違つて消さない様にロックしておき他のメールを確認してみたのだが、何故か龍門当局からの出頭要請が：俺この前の出頭で問題点全部解決した筈だよな？

なんでまた出頭する羽目になるんだ？

そんな疑問を抱えて龍門当局に出頭してみると、通された部屋には何故か厳しい顔したウェイ長官とチェンの二人の姿が…。

話を聞くにどうやら発端は以前パルクール撮影のついでにぶつ潰した馬鹿共らしく、尋問した結果自死を選んだ奴もそこそこ居たらしいが、どうにも奴等はウルサス帝国のスパイだったらしく、龍門を崩す為に龍門の半分ー即ち裏を支配している鼠王を狙つて崩れた所を攻めて支配しようとしていたらしい…。

なんでこんな奴等が長年龍門に潜んでいたんだと頭を抱えると、どうにも奴等当時天災の被害で龍門が慌てていた間に上がったこの計画の中では下つ端中の下つ端だったらしく、他にも居た部隊がちゃんとした裏の住人過ぎて逆に鼠王にバレて潰されていく中、あまりにも氣質が一般人過ぎて国からも碌に支援されない等半ば見捨てられていたらしい。

そんな状況でアイツ等はふざけるなど逆に奮起していたらしく、その姿が裏の住人や鼠王からもただの天災で家を無くしたが新天地で励む被災者だとしか見えなかった為、今の今まで完全に気付かれなかったという頭の痛い展開になつていたらしい：何処のアンジャツ

シユだよ。

尚、そんな奴等がなんであの時バレたのかといえば、鼠王を倒す秘策が出来たらしい本国が部隊を送る際に完全に馴染み切っていた部隊の諸々を乗っ取ったせいで管理が雑になり、結果あの時ボロボロになっていた鼠王の部下に見つかる羽目になったとの事…やるせねえなあ。

何とも言えない閑話休題。

そして何故俺が呼ばれたのか、如何やら彼方さん『アーツ使いを殺す新兵器』を開発したらしく、まだ龍門にそれらが持つて来られる前に壊滅させてしまった為にどの様なものなのか分からない為、対策を練ろうにも練れないのでちよつくら侵入して調べてきて、出来れば盗むか最悪破棄してくれないかとの事…いや俺龍門の兵士じゃないんすけど…。

その実態は『野蛮な臆病者』

十六日目 天気：晴れ

絶賛トラックで移動中なう、国家権力には逆らえなかったよ…。

まあ、どんな原理で術師を害しているのかわからない以上考えたくはないが、最悪俺の血を入手して解析した結果生まれた物かもしれないのだ、実態を調べておいて損はないだろうという事で受ける事にした。

その為にまたしても長期依頼で出る事になる上、今度は暫く外出である為しつかりと施錠しておいて出る事に…：長期間出ると大体帰ってきた後に実験室前に源石病でくたばってる奴が転がってたりするから憂鬱なんだよなあ…：つてかなんで態々『源石研究を主とした実験室につき立入厳禁』って書いてあるのに突っ込んでくるんだか…。

防護服着てたところで超高濃度の源石から発せられる放射線の前にはそもそも体質レベルで源石が効かない様な奴じゃないと無意味だし、こつちだつて龍門から源石研究の許可貰つてるとはいえ管理が杜撰とか言われたくないから秘密裏に処理するの大変だというのに…。

：移動ばかりだったから書く事が無くてグダグダと愚痴ってしまつた…：でも暫く何も無い移動ばかりの旅だし、ページを空白ばかりで無駄に使うのも勿体無いから愚痴でも書き綴るとしようかね？

十七日目 天気：曇り

今日も一日中運転に次ぐ運転、正直一人で長期間移動に出るのは暇で暇で仕方がない、今度自動操縦システムでも組んで寝ながら移動出来る様に改造しようかね？

それにしてもそもそも何時からこんな長距離の移動をしなくなつたんだつたつて？ …：ああそういうえば、三年前に師匠が倒れて最期は龍門に帰つて故郷に骨を埋めたいつって送つてやった時だったか。

龍門に着いて師匠の終活をまともに動けなくなった師匠の代わり

にしてやったら子供も何もない師匠が如何やってか何時の間にか俺に土地や財産その他諸々の引き継ぎ作業済ませてたから龍門に落ち着く事を決めただっけか。

こうして振り返ってみると、この時から俺って鼠王の庇護下に入れられてたんだな…うっ、安魂夜での黒歴史がっ!?

十八日目 天気：大雨

移動都市というものが普及する様になってからは、現世ではあまり国家間を走る道路という物に必要性を見出せなくなったのか、碌に整備されなくなってきた。

そりゃあ首都が一々場所を変えているのだ、そんな場所に繋がる道路をいく先々で整備していたら予算が幾らあっても足りやしない、その為真面に道が走っているのは村同士を繋ぐ物位しか在りはしない。そして移動都市は無限軌道、つまりキャタピラで走っている為めっちゃや大地が踏み締められ、自然に道なんて出来るので予算の積み立てが無駄に終わるのが常であり、俺はそんな踏み締められて凹んだ道が大雨でどうなるのか。

そして俺はそれをそこそこ長い龍門暮らしでウツカリ忘れて突っ込んでしまっていた…そう、大量の水によって周りの土が流れ込み泥沼となった所へ飛び込んでしまい、トラックがかなり沈んでしまったのである。

入り込んでから完全にやらかしてしまった俺は、荒野の様な周りに何も無い現状ではどうしようも無いと即座に判断し、大人しく今回の目的地でもあり現状最も近くのチエルノボークへと救難信号を送ると約二時間程で救助隊が来てくれた事で無事に助かった。

救助隊が来るまでの間車内でただひたすらボケ〜つと降り続ける雨を眺めていたのだが、暇をつぶせる様な物なんて一つも持ち合わせでなんかいない為、つい長時間の運転の疲れで寝てしまっていた俺はトラックの窓を叩く音で目が覚め、チエルノボークから来た災害救援部隊と合流してなんとかトラックを泥沼から救出する事に成功した。

作業している間に少し話していたのだが、毎年俺みたいな移動都市

の通過跡に出来る泥沼に落ちてしまう者が何人も居るらしく、下手すれば天災に巻き込まれてそのままお陀仏なんてパターンもあるらしい：反重力装置とか使ったホバー車の開発をマジで進めるべきかと悩むんだよなあ。

泥沼から引き上げたトラックは予想通りというか何というか、完全に泥によつてエンジンがイカれてしまい、災害救援部隊の牽引車に引っ張ってもらいチエルノボークへ、本来の形と異なりはしたが少なくとも怪しまれない様な理由で堂々と正面から入る事と滞在出来る理由が出来たのだから良しとしよう。

救援待っている間一眠りしたが今日はもう遅かった為ここいらで寝る事にする。

十九日目 天気：雨

昨日に引き続き雨脚は弱まったがまだ降り続ける一日だった、取り敢えずウエイ長官からの依頼をこなす為、レインコートを着込んで怪しい場所なんかを探す為にもサードアイを駆使しながら都市を練り歩いていたのだが、街の路地裏に目をやれば見辛い場所には矢張り龍門のソレよりも酷い感染者達の現状がそこらかしこに広がっていた。

以前立ち寄った時にも見てはいたのだが、未だに前世の感覚が残っている俺としては胸糞悪くなる様なものばかりであり、こんな事してればそりゃあ原作みたいにレユニオンからの一番に肅清対象に選ばれるのも然もありなんというものである。

確かに鉱石病は俺以外の人間にとつては恐ろしい死の病でしかないのだろうがそれでも此処、チエルノボークでの感染者に対する扱いはそれこそ病的なレベルで過激なものであり、側からみればどちらが病人なのか理解出来ない程に感染者に対する扱いは苛烈である。

下手に迫害する事で殺してしまい、結果的に自分が感染するリスクを引き上げているような事をする奴まで居る始末であり、無駄に恐れて知ろうともせず迫害する。

こんなのを見ていたら『勇敢なウルサス人』なんて幻想でしかなく、その実態は『野蛮な臆病者』の様にもみれてしまう。

実際はちゃんと話に聞く通りのウルサス人だつて居る事は知つて
いるし、俺が初めて会つたウルサス人の傭兵だつてちゃんと勇敢な奴
だったし、寧ろ俺の知つてるウルサス人にはそんな奴も多いのだが、
帝国に関わっている奴等が大抵どうしようもない連中が多かつたり
するのだ。

幼少からの親が行う過激な迫害を見続けければ子供達も過激な迫害
へと走るのである、蛙の子は蛙というやつだな、本当にクソみたいな
流れである。

今日の都市を練り歩いた結果は不快にしかならないモノばかり、
ハッキリ言つて気分は悪いがもう何も考えずに寝る事にする。

二十日目 天気：晴れ

昨日までの雨は何だつたんだと言いたくなる様な快晴ではあつた
が、生憎と昨日の影響や今日も昨日と変わらない事をする為に朝から
気分は駄々下がりだつた、なんなら泊まつているホテルの従業員から
心配されるレベルだつたからな。

取り敢えず都市へと繰り出して昨日と同じく練り歩いていたのだ
が、表通りの明るさとは反対に路地裏は相変わらずのゴミ具合、とい
うか途中から表通りで感情抑えながら歩くのが面倒になつて路地裏
を進んでいく事にした。

監視カメラがある訳でもなく暴力で全てが決まる場所だからか個
人的に凄くやり易い、ムカつく奴がいればブン殴り腹立つ事があれば
蹴り飛ばせばいいのである、思う存分やらせてもらう事にした：こう
書くと俺の脳内思いつきり世紀末だな。

それにしても路地裏を歩くというのは思いの外当たりな選択だつ
た様に思える。

出入りさえ気を付ければ様々な場所にショートカット出来るし、表
通りの様に取り繕わずとも済むから邪魔な奴は叩き潰せるし、そこか
ら聞きたい事を聞く事だつて出来る。

弱肉強食の世界とはいえ相手はゴロツキ、時々何かしらの武術か何
かをかじつた奴が居ても軽くあしらえる程度なので気分は『自分をの

はらひろしだと思っている一般人』のアレである。

それにしても運が良いのかどうなのか、助けた感染者が言っていたが『最近酷い死に方をしている感染者が多くなっている』ねえ？

なんかもう疲れた

二十一日目 天気：曇り

今日も今日とて路地裏探索、むかつく奴は殴り倒して情報源としてここ最近の不審死について聞いて回ってみればとあるビルを中心にその一帯で不審死が続いているのだとか。

：つてかどんな死に様なのかを聞いてみれば一発で俺とは関係無いことが分かった：ただ単に鉱石病が急激に悪化した事で末期症状で死ぬという単純なモノであり、そこまで分かれば凶器が何か分かってしまった。

薬剤として液状加工を施した源石を用いてそれを注入出来る様に麻酔銃なんかで使われているダートで打ち込める様にした源石弾だ。

：つてか源石を直接打ち込める兵器は非人道的だつて事で国際条約で禁止されてるつてのに何考えてるんだよウルサスエ…。

二十二日目 天気：雷雨

雨天決行、社会のルールを守れないクソ共をコロコロしつつ、奴等のデータ全部引っこ抜いてから何もかも抹消してやった。

誰も外出していない中いつも通り路地裏へ赴くと突然悲鳴が響き渡り、何事かと思いい急行すればそこには一昨日感染者に対する迫害から俺が助けてやった男が末期の鉱石病によって間もなく命が尽きようとしているところだった。

慌てて話を聞いてみれば雨宿りしている最中に銃を持った先日感染者の男を襲っていた奴が「お前の様な薄汚い感染者がのさばり続けるから鉱石病は無くならないんだ」とまともな教育さえ受けていれば意味不明としか言い様のない事をほざきながら撃つてきて、その直後に症状が急激に悪化したとの事。

その後すぐに感染者の男は鉱石病による激痛とクソツタレな世界への怨み、そしてどうしようもなかった自分の人生に対する嘆きを顔に浮かべながらも、偶然最期を看取ることになった俺に対して歪み切ってはいたが笑顔を浮かべて「最後に他人の暖かさを教えてくれて

ありがとう」と告げて息絶えた。

前世でやっていた原作の中で鉋石病で死ぬ事は知っていたし、現世でニュースなんかから鉋石病で死んだ奴が居た事も聞いた事はある。傭兵やってたら誰かがへまやって殺された事や、自分と対峙した奴を殺した事だつてそれなりにはあつた。

知らない他人を看取った事も師匠を看取った事もあつた：それでもこんなふざけた奴に理不尽に苦しめられた奴を看取ったことは無かつた。

正直最悪の気分である、苦しかつただろうにただ偶々最期を看取ることになった俺に対して笑いながら死んでいった男があまりにも辛くて、何も出来なかつた自分に吐き気さえしてくる程だつた。

俺が無力感に打ちのめされていると突然背中になんかが刺さつた様な痛みが走り、慌てて振り返ると先日今日の前で息を引き取つた男を迫害していた奴が目を見せ口元から泡を吹き出しながら狂喜していた。

どうやら健常者として『悪』である感染者を裁いていた『正義』である自分の行いを邪魔した俺を『悪』である感染者にして殺す為に大枚はたいて今噂の源石弾を手に入れ、処刑し損ねた感染者の男を再処刑して餌にして俺を釣り出したとの事。

一頻り狂つた様に笑いながら話す男に対して俺は久し振りにガチでキレていた。

何も言えず蹲っている俺に対して鉋石病の痛みを耐えているのだとクソ野郎は思ったのか、男を俺を蹴り飛ばそうとしてきたが生憎俺は源石拒絶体質、そんな俺にとって源石弾は欠片たりとも効力を発揮しておらず、俺は蹴ろうとしている男の足首を掴んでやりそのまま握り潰してやった。

クソ野郎は一瞬自分がどうなつたのか理解できていない様な阿呆面を晒していたが、俺が握り潰した右脚を押し除ける様に転けてやると漸く痛みを覚えたのか路地裏にクソ野郎の汚い悲鳴が響き渡つた。

喧しいクソ野郎の所業による胸糞悪さに苛立っていた俺はクソ

野郎の息の根を止めるべく近づくと、クソ野郎は懐から源石弾を取り出してもう一発俺に撃ち込もうとしてきたので即座に近付き右腕へ手刀を一閃、へし折ってやった右手から銃を奪い取りそのまま痛みに喚くクソ野郎へ撃ち込んでやった。

クソ野郎の拒絶とも絶望とも取れる様な悲鳴を無言で見下していると、そんな俺の視線に気付いたクソ野郎は何を見たのか悲鳴を上げる事もできなくなり、恐怖に顔を歪めて息絶えた。

ザマアみると一つ呟いてから俺は先程クソ野郎が懐から源石弾を取り出していたのを思い出して探ってみると、中には二本未使用の源石弾が残っており、それを回収した後一度ホテルへと戻り暗殺用装備を着込むと元凶の元へ一気に路地裏を駆けていった。

後はもう大幅に割愛だ、扉を斬り裂いて中に押し入り、目に付く輩を片っ端から小太刀で斬り裂き貫き踏み潰す。

返り血で真っ赤になりはしたがこいつらのせいであの感染者の男はあんな酷い死に方をする事になったのだという意識が強かったので、ハッキリ言えばそんな奴等の血を浴びて気持ち悪い以外に思う事など欠片もありはしなかった。

その後は研究記録なんかを全部抜き出し、あのクソ野郎みたいに源石弾を買った奴が居ないかどうかを調べてみれば何やらキナ臭い名前がチラホラと出てきて思わず頬が引きつる事になった…まあ、顧客データも全部引き抜いたし、後でコッソリウェイ長官に渡しておけば良いだろう。

後はいつも通り路地裏を通ってホテルへと戻り、データと証拠の源石弾を旅行鞆の隠し蓋の中にしまい龍門に帰るだけである…なんかもう疲れた。

二十三日目 天気：曇り

まだトラックは直っていない、空模様もよろしくないし気分も乗らないから部屋に引き籠る事にする。

二十四日目

今日も氣力が湧かない、寝る。

二十五日目

チエルノボーグへ来て七日経った、未だに気分が晴れない。

二十六日目 天気：晴れ

どうにもあの感染者の男の死に様が頭から離れない、今まで見てきた他人の死はなんだかんだ受け入れる事が出来る因果だったのだが、あんなふざけた理由で死んだ奴を見た事が無かったのが大きな要因なのだろう、正直今でもあの死に様を思い出すだけで胸が苦しくなる…。

気分は優れないがこのまま腐っている訳にもいかない為外を出歩く事にした、少しでも気分転換したかったのだ。

外に出歩いてみれば数日前の大雨が嘘の様に晴れ渡る快晴が広がっていた、如何やらあの雨雲は完全に通り過ぎたらしく通りにも人が溢れて活気に満ち溢れていた。

しかしこの活気の裏ではゴミの様に苦しんでいる感染者達が居るのがありありと分かる為如何しようも無く気が滅入るし、そんな俺を周りの住民達は避ける様にして歩いていた：戦闘中だとそうでもないが、日常だと俺そんなに分かり易いのかね？

兎も角このままでは周りに迷惑だと判断し、偶然近くを通り掛かった公園へと入りベンチで一休みする事にした。

特に何をするでもなくただボケッツと沈んだ気持ちで足元を見てみると、急に此方を心配する様な声が聞こえ、其方に目を向けると原作でもお世話になった星四重装オペレーターの回復盾ことグムが心配そうな顔をして此方を見ていた。

如何やら友人達との待ち合わせ中に酷く落ち込んでいた俺を見つけてしまい気に掛かり、思わず声を掛けてしまったとの事。

こんな子供に迄気を遣わせてしまうのは情けなかったが、気が滅入っていた俺は思わずグムに対して細かい事をボカした上で盛大に愚痴を溢してしまったのだが、そんな俺に対してグムはちゃんと誠心

誠意愚痴を受け止めて励ましてくれたのだった。

その後俺が愚痴り終わると物陰から星五先鋒であるズイマーや星五補助のイースチナを筆頭に学生らしい少女が現れ、幾らか今のウルサスでの感染者に対する学生達の意見を聞くことが出来た。

彼女達も俺の愚痴を聞いて色々思うところがあつたのか質問したり意見を言ってくれたりと気分を変えるのには中々に有り難い時間だった。

…まあ、気分転換の礼として彼女達に偶々公園に来ていたクレープ屋台の好きなクレープを奢ると言ったら、メツチャトツピング選びまくって下手なジャンボパフェなんか目じゃないレベルの代物を大量に購入する羽目になったがな…両替してた分の財布の中身が底つくかと思つたわ。

それで寝不足になるとか幼稚園か!?

二十七日目 天気：晴れ

心機一転、昨日のグムちゃん達との語り合いで気分も持ち直したので、取り敢えず泥に埋まっていたトラックの整備に顔を出す事にした。

やはりというかなんというか、エンジン類に泥が入り込んで使い物にならなくなっていたので新しいやつに変えなければならぬと言われたのだが、正直その程度なら特に問題はないので機材と工場の一角を貸してもらい、自分で洗浄その他諸々（確保した源石弾及び専用銃を隠す為のスペースの設置）を済ませて修理した。

最初からそうしろよと工場主にツツコマれたが、こつちだつて仕事を優先したかったのである：とは流石にスパイヤつてる身としては言えないので観光したかったから任せていたと言っておいた（建前）正直ウルサス帝国って自国民じゃなければ駐車場の賃金高くて使いたくないんだよね：（本音）

まあ、そんな事出来るんだつたら手伝えよとキレながら嘆く工場主にちよつとばかり罪悪感を感じたので、今日の午後は口ハで工場を手伝う事にした：『口ハ』つてただでとかそういう意味だったよな？

二十八日目 天気：晴れ

今日は龍門への帰路に着いた：こうやって日記で『龍門に帰る』と書いて初めて自分は龍門を故郷だと思えている事に気が付いた。

根無草の傭兵から始まった現世での生活の中で自分はずつと異物なのだと思っていたが、ちゃんと帰りたいと思える場所が出来るのかなと書けば良いのだろうか？ 陳腐な事を言えば『生きています』とも言うべきか？

：いやいや、流石にそんな風に書いたらそれこそ俺をまともに生きていけるよう育ててくれた師匠に失礼過ぎるか：いやホントなんて書くべきだ？

なんか前世で聞いた気がする『人は三度生まれる』だかそんな感じ

か？ 現世で目覚め、師匠に育てられ、故郷を思う…うん、なんかそれっぽいな。

何というか望郷の念が強くなってきた気がする…今日はもう寝よう。

二十九日目 天気：晴れ

昨日の日記と午前中の俺のテンションが高過ぎて黒歴史寸前な件について…この世界に生きてる実感出来て普通に嬉しいのは今でも分かるけれど、それで寝不足になるとか幼稚園か!? そんなもってあまり寝れてないせいで爆走とか深夜テンションかっ!?

途中で限界来て昼飯食った後に思わず昼寝してしまったけど、それでちゃんと冷静に戻れたのは良かったな、あのまま行ったら変な事しかしでかさない自信しかなかったぜ…もしそうなら確実に現世でトップクラスの黒歴史だ、間違いない。

まあ、一気に飛ばしたからかなり距離稼げただろうし、この調子なら明日には龍門に着く事が出来るだろう、時間帯によつてはそのままウエイ長官の所に直行かねえ？

三十日目 天気：曇り

予想通り龍門に辿り着けたが時刻は深夜だった、関門の深夜警備さんお疲れ様でした。

丁度良い感じに曇りで月明かりも無かったので夜の龍門、街頭やビルの明かりで『不夜の街』とも言われているが、その分明かりがないビルの上なんかに出ると以前のようにロープアクションでもしない限り滅多に見つからなくなる程濃くなる暗闇の中、事前に調べておいたウエイ長官の住む龍門トップクラスの超高層ビル、その最上階付近の長官宅のベランダへとお邪魔…しようとした所で危うくドンパチする羽目になり掛けた。

そうだよね、ウエイ長官居るなら奥方のフミツキさん居るだろうし、そうなれば護衛であるシラユキちゃんだつて当然控えてるよね!!

原作では大変お世話になりました!!

詳しく書くと一度ビルの屋上に登ってからサードアイでベランダを確認したらベランダに控えてたんだよね、シラユキちゃん…。

マジで向こうは俺に気付いていないみたいだからどうしようってなっちゃったが、あの時の俺は何をトチ狂ったのか自分の要件を書いた紙を折り紙の手裏剣にして、シラユキとその主人であるフミツキさん越しにウェイ長官にアポをとるなんていうどう考えても頭のおかしい手段に出てしまっていた。

対する折り紙手裏剣を飛ばされたシラユキちゃんは突然自分の故郷の遊びで作られた手裏剣とその内容に絶句、飛ばした俺自身も投げたからなんでこんなふざけた手段に出たんだと頭を抱える事に…。

その後シラユキちゃんが確認の為に恐る恐るベランダから頭を出して此方を見てきたので此方も顔見せてペコペコ頭を下げればシラユキちゃんまさかの絶句してしまうという…。

そんな姿をフミツキさんに見られたようでシラユキちゃんは慌てて俺からの手紙を報告したらしく、それによってウェイ長官とフミツキさんは共に珍しく目を見開いて驚くと、ウェイ長官は大笑いしてフミツキさんは呆れ返っていた…サードアイで中の様子は見ていたものの声は聞こえないので取り敢えずお二人が楽しそうで何よりですといった感じではあった。

その後ウェイ長官は何を思ったのかフミツキさんとシラユキちゃんを連れて上機嫌な様子で、まさかの屋上に居る俺の元へと直接足を運び依頼の報告を聞く事に…如何やらあのふざけた様にしか見えないう折り紙手裏剣がツボに入ったのか、とても愉快そうな感じだったのが普段の泰然自若といった感じのウェイ長官しか知らない身としては目新しく映った。

喧騒の掟で集まった面子とはあんな感じだったのかね？ 閑話
休憩。

愉快な様子ウェイ長官だったが軽口もそこそこに依頼についての報告に入ると、そこに居るのはいつも通り底の見えない龍門の長としての立ち居振る舞いへ。

普通なら油断ならないその雰囲気警戒したりするのだが、つい先刻見た愉快なウエイ長官よりは見慣れた雰囲気だったので、寧ろ安心出来たのが今となればなんとも言えない気分である。

だがまあ俺だって仕事ならば意識の切り替えはしつかりと出来るので、真面目くさった雰囲気で大まかな出来事と源石弾とその専用銃にこれらの設計図、そして奴等の『顧客』らしきリストの記録端末を入れたアタツシユケースを手渡すと、ウエイ長官はフミヅキさんとシラユキちゃんと共に俺に呆れながらも苦々しい表情でそのアタツシユケースを睨みつけていた。

まあ、普通国際条約で禁止されてる兵器を手渡されたらそうもなるわな：喰らえば即座に源石病にして対象を殺す上に、これを使えば対象でなくても周囲の奴を狙えば環境毎纏めて葬る事が出来る人道皆無な悪魔の兵器。

確かにこれなら鼠王だってやれるだろうさ、ダメになった物が排出ではなく停滞する路地裏で使えば最悪龍門そのものが源石に沈むのだ、例えそうはならなくても鼠王は対処する為に出なければならぬ為タダでは済まないだろう、本当に阻止出来て良かったと思う。

そんな訳で無事依頼もこなして帰る事になったのだが、降りるのはウエイ長官の厚意で中を堂々と通らせてもらえる事になった。時折すれ違う従業員の（あんな人来たっけか？）といった感じの表情がクツソ面白かった件。

三十一日目 天気：薄曇り

長期依頼を終えた為今日はゆっくりと休む事にした、今回の報酬金から装備の維持費を抜いた分（それでも普段以上の大金）で路地裏の住人である感染者の子供達と焼肉パーティーである。

正直チエルノボグで殺された感染者の事を引き摺っていると言われれば否定は出来ないが、少しでも重荷を投げ捨ててちゃんと前を向きたかったのもあったので盛大に盛り上がらせてもらっていた。

途中からどうにも鼠王の配下と思わしき住人も見掛けたが気にせず巻き込んで騒がせてもらった、最後の方では呆れながらも子供達に

焼いた肉を取って渡したりしていたので大分助かった。

：つてか隅っこの方で平然と鼠王が混じってたのを見つけた時は
思わず二度見したわ、つてか良くあんなに大量の肉食えたな爺さん!?

『人だった源石塊』

三十二日目 天気：晴れ

なんか久しぶりに感じる短期依頼だった。ってかなんで長期依頼があんなに間を置かずに来てたかの方が謎なんだよな…。

依頼内容は猫探し、飼ってた猫が帰ってこないから探すのを手伝って欲しいと言われて特徴聞いて探索開始。

サードアイで猫だけ見えるようにして透視を試してみれば早速床下にそれらしき猫の死体を発見してしまった…。

取り出して確認してみた感じ老衰による死亡だったので、恐らく猫が死に際に静かな場所で体力取り戻そうとしているらしい行いで残念ながらそのまま死んでしまったのだろうと俺が憶測を立てると、依頼主は猫の亡骸を抱いて静かに泣き始めて労わるようにその亡骸を撫で始めた。

：そしてそんな空気になると動けなくなるのが現場に居合わせた俺っていうね…：シリアスブレイカーは何処ですか!? ってなったわコンチクショウ。

兎に角しんみりした空気を壊さないように気配を殺して出来るだけ気付かれないよう書き置きを残して依頼主の家から出たのだが、本当にああいうシリアスな空気は勘弁して欲しい限りだな、どう相手に声を掛ければ良いのか分かったもんじゃないんだよ、報酬金の話なんか無粋過ぎて出来るわけないだろ。

取り敢えず後程連絡が届くのを待つ事にして時間に余裕が有りまくりな俺は次の依頼をどうするか確認する為に事務所兼自宅へ：メールの内容からして長引くと思っただけ午前中に回してた依頼だったけど、時折今回みたいにあツサリ終わるんだもん…スケジュール管理が本当に面倒くさいと思ったらありやしない。

気力が萎えていたので適当にコンビニに寄ってアンパン（こし餡）とフルーツオレを買い、運転しながら軽い昼食を済ませて事務所兼自宅に辿り着くと、何時もの違和感を感じたので溜息を吐きつつ実験室へと足を運ぶ。

感染対策の為に施してある嚴重な三重防護扉が全部開かれている事に頭痛を覚え、中に倒れている『人だった源石塊』を見てため息を吐く。

昨日帰ってきた時点で入られた形跡が無かった為に喜んでいたのだが、今回は如何やらその隙を突かれてしまったのだろう、これで午後と下手すれば明日一日が丸々除染の為に潰れかねない事になってしまった。

証拠を隠蔽する為にまずは身元を確認を出来ないかしつかりと持ち物を調査する、この時点で龍門近衛局なんか頼れば即座にお縄となりかねない為絶対に自分一人でやるしかない、つてかもう既にお縄に成りかねない奴が片手じゃ足りない位来た事があるから、この身元確認も慣れたものなんだよなあ…泣けるぜ。

そして結果はまたしてもロクでもない奴だった…以前鼠王を暗殺しようとしていたウルサスマフィアの残党が人型源石の正体だったのである。

まあ、龍門に住む上流階級のボンボンとかじゃなくて外国の、しかも後ろ指を差されるような輩なので処理に関しては俺の裁量でやってしまえる分一番手間が少なくて済むのが救いか…。

ゴミみたいなヤツだけど不法投棄は犯罪だ、閑話休題。

その後は源石の処理を明日に回す事を決めて俺は家中の除染作業へと入る事に、実験室のある自宅兼三階の壁には俺の血を混ぜた事で汚染を防ぐ様にしてある塗料が塗ってあるので直接外部へと源石の放射線が漏れ出る心配は無いのだが、二階の事務所は下手すれば客が自ら足を運んで来た際塗料を塗った壁に触れば大惨事となる為塗っておらず、その為一度大掃除レベルで除染しなくてはならないのである。

自分の血を混ぜてある水を撒く為に田んぼなんかで除草剤を撒く為のポンプなのかスプレーなのかよく分からないアレ（長年使ったから商品名剥げてたから尚分からん）で二階から一階全部に撒いていき源石による放射線を除染し、その後カビが生えない様にキチンと乾

いたタオルで拭き取っていく。

元々源石は放射線なんか発せず、触れば感染する可能性があるというものなのだが、一度濃縮する事で俺の体質でもアーツを使えるようになる機械なんかは作れないのだろうか、極限まで精錬する事で不純物を取り除き、その上で残った源石を更に加圧や濃縮した結果出来上がった濃縮源石。

俺の願いを込めて『賢者の石』と名付けたソレは、封鎖していなければ範囲はこの家に収まる程度とはいえ源石のソレと同じく触れた者を感染させる放射線を放っており、その威力はなんとウルサスのクズ野郎が使っていた源石弾を遥かに凌ぐ致死量を誇っている。

…まあ、作り出した俺本人が放射線に気付いていなかったって時点でお察しの結果なんだけどな…。

防護服越しに触れたら何時も源石に触れた時みたいに計器が示してた源石反応が消えたし、なんなら賢者の石の欠片に俺の血を希釈した水掛けただけで消えたし、頑張つて造り上げたアーツユニットに装着して持つてみてもいつも通りアーツの発動が阻害されてアーツユニットが高価なガラクタになったしな…。

あの時初めて膝から崩れ落ちる程の絶望を味わったなあ…あ、思い出しただけで泣けてきそう、今日はもう寝る。

三十三日目 天気：曇り

朝起きて朝食を食べた後、取り敢えず源石になったウルサスマフィアを賢者の石に投げ込んで吸収させた。

俺の造り上げた賢者の石は通常の源石と違って放射線を放っているのだが、それ以外にも特異な点として他の源石を吸収し、不純物が混ざっていれば塵に変えて排出するよく分からない特異性がある。

これを用いれば今回みたいな死体処理がとてつもなく楽なのだが、なんか源石とはいえ元人間だったモノを吸収してほんの少しずつ増加するのを見るとハガレンの『賢者の石』を思い出してこれヤバイんじゃないかと思えてくるんだよなあ…。

でも色は原作に出てきた『純正源石』を更に磨き上げたかのような透

き通る金だし…まさか『いしのようなもの』とかじゃねえだろうなこれ？ マジで潰しとくべきか？

でもこれに掛けた金とか一応俺にとつての技術の結晶みたいなモノだしなあ…保留で良いか、いざとなりやあ『海』のヤツらにでもぶつけたろ。源石弾みたいにやったらヤツら吸収してそのまま素材に出来るかね？

面倒ごとは未来の俺へとキラーパス!! 閑話休題。

ゴミも有効活用出来たので今日一日実験室の防災体制をどう改良するか考えていたのだが、そんな時に鼠王からの使いが来た。

如何やら一度本格的に話し合わないかとの事で、此方としても気になつてはいたので特に考えずに承諾、実験室には簡易的な防犯装置（扉のグリップに俺の血を混ぜて作った蜜蜂の針を模した抜けない画鋏）を取り付けておいてから出かける事に。

使いの男に案内されて向かった先は案の定路地裏の一角、入り組んでいて普通に向かおうとしてもまぎれ迷ったりする上に屋根も入り組んでいるので上空からも見る事が出来そうにない迷路の様な場所だった、さながら石兵八陣みたいな場所なんだろうか？

案内されるまま歩を進めると開けた場所に出て、その広場の中央には鼠王が一人椅子に座り恐らく茶でも入っているのである。水筒を傾けて飲んでいた。

近づく俺に気付いた鼠王は隣に座るよう促してきて俺が座ると、鼠王は師匠のこれまでの事をぽつぽつと話し始めた…。

昔は一緒に馬鹿やっていた事や成り上がる為に無茶もやった事、そのせいで盛大なしっぺ返しを喰らい嫁さんと子供を亡くして師匠一人が復讐に走った事、そして成し遂げた結果失意の果てに龍門を出て傭兵として旅に出た事。

…そして長い年月を経て帰ってきた時には旅の道連れが出来ていて幸せそうに笑っていた事。

俺自身はあまり師匠が過去を話したからなかった為何故旅をしていたのかは知らなかったし話したくないなら聞かなかったのだが、如何

やら師匠にとつては俺の存在は何かしらの救いに成れていたらしい、その事が少しだけ嬉しかった。

一頻り話終えた鼠王はこれから如何するのか俺に聞いてきたが、そんなに先が決まっているわけではないので取り敢えず師匠から貰った物を維持をしながら龍門で過ごしていく事を伝え、少しばかり湿っぽくなっていった空気を入れ替える為に態と戯けてウチの店の事を宣伝して家路に着いた。

…まあ、その後帰り道に迷いまくって路地裏から出れた時には先回りでもしたのか出口に立っていた鼠王に笑われてしまい思わず肩を落としてしまったが…この爺さん悪戯好き過ぎるだろう…。

『嵌められた便利屋』

三十四日目 天気：晴れ

朝食食ってる時に映画監督から映画が完成したので試写会に来ないか？ と電話が来たので思わず「行きますねえ!! 行く行く!!」となんかどことなくホモ臭い返事をしてしまったが、こっちの世界には淫夢ネタが無いからただ単に完成した映画見るのが楽しみな奴だと捉えられるだけなので何も問題は無い。

：淫夢ネタが無い代わりに他の何がホモネタになってるのか分かったもんじゃないという地雷があるから怖いんだけどな。

まあ、とあるエロゲでオツケーサインとしての握り拳を親指だけ上に向けて立てるアレが「S○Xしようぜ!!」になってないだけマシなのかもな：あれホント何をどう見なせばそういう捉えられ方をしたのやら？

いきなり下ネタで閑話休題かよ!?

そんな訳で指定された映画館へ向かうと伝えると、何故かあの時使ってたベテラン役者さん変装セットを持って指定した場所に来るよう言われたので素直にバッグに詰めて持参。

指定された場所に向かうと何故か待ち合わせしていた監督によって映画館のスタッフ専用通路へ：まあ、変装セット持ってこいつて言われた時点で察するべきだったよな、でも観客へのサプライズに観客予定だった奴を使うのは如何なんだろうか？ 俺ただ依頼で雇われただけのスタントマンよ？

まあ、そんな事考えながら楽屋に入ると作品紹介についての打ち合わせが始まった。

最初にベテラン役者さんの代わりに俺が監督やエフェクターを始めとした役者さん達と共にステージへと上がり、途中で俺の扮するベテラン役者さんへと質問を投げ掛けた後に自分がスタントマンである事を明かし、証拠としての変装を（観客のSAN値を護る為）マスクだけ取って種明かし。

その後本来俺が座る予定だった客席（最前列ど真ん中）に座っていたベテラン役者さん（帽子グラサンマスクの簡易変装版）がステージへと上がり、今回の映画でスタントマン（つまり俺）を頼った事を暴露するのだという。

まあ、自身の集大成となる作品撮ろうとしてたのに撮影のしょっぱなから頓挫し掛け、やむなく代打を頼む事になったのだから申し訳ない気持ちにもなるわな。

そんな訳で一通り打ち合わせをした後にいぎ鎌倉とかステージへ、席についている観客達はみんな見事に俺の事をベテラン役者さんだと思い込んでいるのか黄色い声援が飛んでくる為、思わず苦笑いにならない様表情を偽るのが中々大変だった。

そして打ち合わせ通り作品について司会が監督から話を聞き始め、助監督からエフェクター、そして俺の番に回ってネタばらし。

一言謝ってから変声機を切りマスクを脱ぎ去り素顔（即座にサンダラスを掛けた）を晒してネタばらしすると、観客席はまるで宇宙猫みたいな絶対零度の無音状態へ。

ベテラン役者さんがステージへと上がって俺とガツシリ握手しあった所で漸く理解が追い付いたのか、まるで映画館を震わせんばかりの大絶叫、音響兵器か何かの様だったぞでありや。

そして始まる制作秘話、作品のストーリー構築でアレやこれや言い合い乱闘騒ぎになったことがあっただ、折角決まったストーリーが役者に求めるスペックがヤバ過ぎて結局ボツになって書き直した等、なにやってんだよと言いたくなる様な話が幾つか出てきて思わず呆れてしまったのもあった。

そして喧騒の掟もとい安魂夜での事件について詳しい話は聞いていなかったのだが、ベテラン役者さんが路地裏近くを日課の速度差を付けたジョギングで走っていたところ、全力で走っている際にシチリアン共に見つかって路地裏の住人と誤認、ターゲットだと間違われたベテラン役者さんは袋叩きにされて大怪我を負ってしまったとの事。

これ何が酷いかって誤認された事もそうだけど、顔見ればベテラン役者さんだと一発で分かるのにシチリアン共が映画とか見てなかつ

たのか気付かれず、更にはまるでシチリアン共から逃げる様なタイミングで全力ダッシュしてた事だよな…。

なんでこんなに悪いタイミングが重なるのやら？　なんか客席側も同情するかドン引きするかに分かれてたな…いや、そういや一部だけ苦笑いしていたような…もしかしてしよつちゅうああいった目に遭ってるのか？

…ネットで調べてみたらマジだった、あの人ベテランだけど予想外の問題でNGシーン連発してたんだな…なんだよ『NGシーンの見本市』って。

他にも色々な渾名があるけれど『不幸の避雷針』やら『異能悪運体』やら色々あるけど、面白くもヤバいと感じたのは『原石も避ける不運体質』と『底辺菩薩』だな。

前者は色々事故に巻き込まれても未だに鉱石病に罹っていない事（勿論彼は先民である為下手すりや感染する筈）を示しており、後者はそれによって散々な目に遭っても…寧ろ遭ったからこそ…他者に、そして龍門では珍しい感染者に対しても慈悲深い面を見せている事を示している。

あの人本当に凄いわ、閑話休題。

そんな聖人扱いされてもおかしくないベテラン役者さんの話を聞き終えると、何故か事前の打ち合わせに無かった俺のへのインタビューというキラーパス。

あの時のやり取りで客席から笑いが出ていたけれどもまさかの監督からの俺に対するサプライズとかマジで話す事何も考えてなかったからネタ塗れな事ばかり口からこぼれ落ちてしまったぞ…。

ってか帰ってきてから調べた龍門のSNSでのトレンドトップ10を映画関係が殆ど埋めてたのに、その中に入ってた『嵌められた便利屋』ってなんだよチクショウ…。

そんなしどろもどろな素人の感想で会場を笑いに叩き落とした後漸く映画を見たのだが、一つだけ言える事は「凄かった」だけである。

アレかね？　某厨二ゲーで言ってた『究極に近くなるほど、形容す

る言葉は陳腐になるもの』だったっけか？ アレを凄く体現した作品だったな、今後俺あれ以上の映画出来る気がしないから映画観なくてもいいや。

：まあ、その究極の中に俺が出ているのが分かっているから何処となく暇疵が出来ちゃってるような残念感が何とも言えないんだよなあ…。

それまでのシリーズ全部観てたから伏線大回収祭だったので観客席からの悲鳴や歓声が凄かった。

なにせ考察勢なんて出来てる作品だったがそんなの関係無しに観ている人も多かったのだ、普通に師範の人氣も高かったのだが、前作のラストで師範代達と食卓囲んで「我等の齎した平穩に乾杯!!」なんてやってたら普通に怪しまれて当然というかね？

まあ、それでも今迄の派手にぶつ倒してきた悪役組織の大元だったとか誰が想像しろという話ではあるのだが。

そして廃屋を進むシーンで俺が演じてた復讐者のエントリー。

カメラのアングルクツソ上手くて師範代の一人が悲鳴の後に一瞬だけ画面上部にブレた影が映るけど、主人公達が上見るのに合わせて上を撮っても誰も居ない。

慌てて辺りを警戒し出すファイターを筆頭とした主人公勢、そしてそんな彼女達が緊急事態として師範達に報告しようとして一瞬目を離し走り出そうとした直後、前方に憎悪を滲ませたメッセージを貼り付けられ逆さまに吊り下げられた師範代の一人。

：客席から悲鳴上がってたけど、これホラー扱いされてもおかしくないのでは？

師範達に話を通して警戒し出す主人公勢、過去打ち倒した悪の組織の残党達が一つに纏まり復讐する為に襲ってくる中またしても復讐者の魔の手が伸びてくる。

雨の降る中再び登場する俺演じる復讐者、雨の中強襲してきた敵の連合をなんとか犠牲無しで追い返す事に成功した主人公達だったが、その気の緩みを突かれて師範代の一人が狙撃によって皆の目の前で射殺される事に。

戦闘中気付かれないよう一切手を出さず機会を待ち続けた復讐者による最大のタイムリングを狙った一撃だった。

雨の中響き渡る狂ったような哄笑、目を向けた先に居るのは全身黒尽くめで右手に先程の狙撃を行ったと思わしきライフルを持ち、決して途切れないと思わせる囁い声を響かせる男の姿。

そのあまりの恐ろしさに誰もが声も出せず固まっただけだと不意に男は黙ってボソリと小さくも何故か雨に打ち消されない声で告げた「俺はキサマ等を許さない…」と。

…成る程これは側から見たらやり過ぎだな、観客全員凍ってるわ。

ゲンドウポーズやってる監督

まだまだ続く復讐者のターン、具体的には主人公陣営のトップ陣（師範と師範代達）の壊滅と敵連合の壊滅まで暗躍し続けるんだっけ？

ってかそもそも師範一人と師範代七人居る内の五人は復讐者が暗殺してまわってたんだっけ？ ヤバ過ぎだろこのバケモン。

今度は先に主人公陣営が話し合っている中カメラがズームアウトしていき、その先には丁度ビルとビルの隙間から主人公達を見つめる復讐者の姿が映し出され、ニヤリと口元を歪めるシーンがドアップで映され客席から悲鳴が聞こえた：俺のスマイルそんなに怖いのか？

駆け出す復讐者は主人公達の警戒を嘲笑うかのように潜り抜け、街角の影に、屋根伝いに、はたまた人混みの中へと潜り込みどんどん主人公達へと近付いていく。

その度に観客席からは悲鳴が漏れ聞こえるのだが、ここまで来ると逆に悲鳴が愉しくなってきた。

そして刹那、話をしていた主人公達の中で丁度話し終えていた師範代の一人を攫い路地裏へ、周りに歩いていた一般人はそのあまりの手の際の良さに一瞬棒立ちとなり他の通行人にぶつかって正気に戻る。

それらの物音に主人公がふと振り向けばつい先程まで居た筈の師範代は跡形もなく消えており、彼女らは何があったのだとにわかには騒ぎだしたのだが、その騒ぎはもっと大きな騒動によって書き換えられる。

突如何かそこそこ大きな物体が迫り思わず迎撃しかける主人公だったが、それはまさかの先程消えた師範代その人。

思わず手を止めて受け止めるがその受け止めた手は真っ赤に染まり、元を辿れば師範代の首元からソレは流れ出ていた。

一目で判る致命傷に客席に悲鳴が上がり、映画の中では人の溢れる通りがにわかには騒がしくなる。

師範代の死体は通路の梁に吊るされる形でぶら下がっており、元は何処かと見上げると建物の上に立つ復讐者「これで三人：」そう呟い

て身を翻し消える復讐者を主人公達はただただ呆然と見つめるしかなかった。

：実はこれ俺以外ほぼ全員エキストラさえも素の反応だったって言ったらどんな反響が来るのかね？

実際人混み歩いていてもエキストラ役俺に気付いていなかったらしくて拐った時もマジで反応出来なかったから立ち止まっちゃったし、エフイーター達も死体じゃなくて精巧に作り上げた人形だっけ先に教えられていたのにマジでビビってあんなに呆然としちゃってたらしいからな…。

まあ、ただの練習だった筈なのにあまりにもリアリティ高かったから監督が一発OKを出し、こうやってそのまま少しの編集加えて放映された訳だけど。

これもある意味NGシーン？ 閑話休題だ。

てな訳でこつから先はベテラン役者さんにパスして俺は引いたから知らない訳だが：いや凄かったね流石はベテラン。

復讐者の存在にビビって逃げた師範代を上手く誘導して崖から突き落とすシーンや、自室に引き籠もってしまった師範代を主人公達の前に態々姿見せつつ切嗣式爆殺術で拠点毎ぶっ飛ばす時は思わず吹き出したけどな。

敵の連合と主人公達が戦っている間に師範の下へと忍び込み、師範達が滅ぼそうとした拳術の最後の伝承者として師範を打ち倒し復讐を果たすシーンと、敵の連合を倒し終えて駆け付けた主人公とのラストバトルで敢えて主人公に倒される事によって全ての業を背負いながらも微笑んで逝くシーンは素晴らしいものを感じさせてくれた。

映画を見終わり関係者達によるNGシーンや撮影風景を観ながらの感想タイムになったのだが、まさかの初っ端映されたのがベテラン役者さんの怪我による影武者選定会というね？ ゲンドウポーズやっける監督が丸メガネ逆光させてるものだから似合い過ぎて思わず吹き出しかけたわ。

それ以外では賄い弁当食ってるシーンとかあつたけど反響が良

かったのは初めて俺が変装して現場に来た時の事と別の方向から撮った俺が忍び寄っている時の別撮りシーンだったかな？

変装してた時ののはアングルが他の役者さんに混ざっていた時だったので何処となく大物登場みたいな見た目になっていたし、忍び寄っている時の別撮りシーンはあっちこっち通行人の死角に滑り込むような動きで観客が湧いていた。

そして一通り見終えた後で一言コメントが其々求められたのだが：そんなもん直前の感想タイムの時に言い切ったから何もネタなんかありやしない為、コメントに困って思わずダイマしてしまった…。

お陰で今それなりに強化した筈の事務所のメールボックスにあまりにも無駄なメールが大量に送られたせいでまさかの鯖落ち、これ仕事どうすりや良いんだよ？ ってかSNSの方もフォロワーの桁が二つ程増えているのはなんなの？ 馬鹿なの？ 暇なの？

取り敢えず暫くの間は手紙で来た依頼を重点的にこなしながら落ちたサーバーの復旧と強化をする為に資材を注ぎ込む事にしよう、なんつうか無駄に疲れた…。

三十五日目 天気：晴れ

太陽が呼んでいるような晴天の中まさかの屋内作業オンリーだった一日。

依頼者はまさかのアーミヤからであり、内容の方も驚きの『ジョン・スミス君の活躍を子供達に見せて欲しい』というもの。

不思議に思って昨夜連絡を取ってみれば、ロドスに入院している子供達がジョン・スミス君と沢山遊びたいと言ってきて手伝いも励んでいるらしく、折角頑張っているのだからねぎらってやって欲しいとの事。

そんな訳で朝早くから遊び道具なんかも積み込んでロドスへと向かい、いつもの業者用のタイミングよりも早く乗船して遊び道具以外の素材なんかをクロージャに渡しておき、俺はアーミヤと何処に入っではいけないのかを決める話し合いをした後、ジョン・スミス君へと着替えていつもの共有スペース：ではなく一般用の運動スパー

スーというか体育館へへと向かい、一般患者の子供達と一緒にラジ体操をする事に。

別に鉱石病だからといって末期でもなければ身体能力は落ちたりせずに寧ろ上昇するのだが、かといってそれにかまけて身体を動かさないのは逆に悪いので一般病棟では毎朝ラジ体操をしているらしく俺もそれに参加する事に。

朝早くの体育館に子供達が眠そうな目を擦りながら入ってくるが、その誰もがジョン・スミス君の姿を見て一瞬立ち止まるとすぐに満面の笑顔で突っ込んでくる、高い身体能力で勢い良く来るがその全てを優しく受け止めてあやしてあげれば子供達は皆嬉しそうに笑って喜んでくれる。

暫くして子供達が全員集まるとアーミヤが今日一日ジョン・スミス君がロドスに居る事の説明をしてからラジ体操を始める。

短い手足（中々可動域は凄い）をワチャワチャしながら一緒にラジ体操をするジョン・スミス君に子供達は楽しそうに見ながらも終われば即突撃、そのまま朝食の時間まで遊べばそのまま子供達と一緒に朝食である：なんか気分が付けた口の開閉機能だったけど、意外な活躍してビックリだな。

朝食が終われば子供達の遊び時間、体育館へと足を運べば即座に群がられるジョン・スミス君。

なんか何時もより子供の数が多いと思って聞いてみれば、アーミヤが今日一日は皆有給にしてくれたんだと言われてガチ困惑、詳しく聞いてみれば如何やらロドスの手伝いのような形で小遣い程度とはいえ給料を出しているらしく、お祭りの日なんかは働かなくともお小遣いを貰えているらしい。

そういや午後の逸話でそんな感じの事話してたっけか？　と思いついていたら何やってるのか知りたいの？　と聞かれ思わず素でうん答えてしまった俺、そのまま作業室へ。

作業室では小さな子供向けの折り紙細工造りを筆頭に難しい物では廃品の解体等一通りの仕事を体験させてもらい、作業のコツを教えながら進めていき子供達から称賛を浴びる程度に無双してきた。精

密マニピユレーターは伊達じゃない!! でも折り紙細工の『ノリ』だ
けは勘弁な!! ベタつき取るのめんどくせえ!!

「モフモフ！モフモフ!!」

作業が一段落したので昼飯へ、子供達と一緒に食べて食べる都合テーブルが低い場所に着くけれど、ジョン・スミス君かなりデカいからその場にしゃがむだけで丁度良い高さになるというね。

因みに午後の逸話でも語られていたがロドスの食事情はかなり幅広い、流石にオリジムシステムを使った料理は無いのだが、何故かスターゲイジーパイや鰻の煮こごりなんかの前世ではゲテモノとしか呼べないトンデモ料理の名前はチラホラ散見された：写真が無いから真相は分らないがヴィクトリア発祥の料理っていうだけで期待出来ない確信しかない：あそこの料理はホント食べたもんじやないんだよなあ…。

そんな訳で昼飯をとっていたのだが、ジョン・スミス君ってあまり汚れとか付けたくない都合で汗物とか全然飲めないんだよなあ：正直飲み物全部ストローで飲むのは熱いものとかだと火傷しかねないから辛いっす…。

昼飯が終わったら今度は勉強の時間になった、普段教師役やってる職員が「普段からこんな意欲的なら良いのに…」ってボヤいていたのが印象的だったな、お疲れ様です。

それにしても何故か教師役も任されたのだが、正直俺が教える事が出来るのって四則演算と旅の中で培った見聞位だぞ…ってかいつの間にかイフリータやクオーラなんかも混ぜてたし。

取り敢えずなにか教えられる物が無いか探してみれば、何故か埃を被っていた算盤を発見したので簡単に扱い方を教えてからデモンストレーションをしてみると、如何やら見慣れない物に対して興味が湧いたのか僕も私もと算盤に手を伸ばす子供達…まあ、暗算得意になるらしいし別に良いかなあ？　なんて考えながら教えてると意外とスラスラ覚えていく子供達、やっぱ子供は頭柔らかいんだって良く言われるだけはあるな…。

現世に来たばかりの時の俺って子供状態だったのに物覚え悪くて必死こいてたけど、やっぱ中身の記憶容量が前世の影響で埋まってた

のかね？

い、いやだとしても幼少の頃から鍛える事に集中出来た分俺だって人より有利だった筈!! …いや現世じゃあ普通に強くなる事ってある種の義務だったから普通に幼少期から鍛えてる奴もかなり居るわ…。

スペックの違いに泣けてる…閑話休題だ。

そういや子供に教える事に関してはどうつかで『頭ごなしに否定しない』とか『飴と鞭の割合は9：1』みたいななるべく褒める様にして本当に間違えた時だけ叱る様にした方が相手もやる気を出しやすくなるとか聞いた事があるから実践してみたけど、皆楽しく授業を受けてくれた様で何よりだったな…うん、良い事だった筈なんで教師役の職員さんは哀しげな視線を向けないでほしかった…罪悪感ヤバイよアレ…。

まあ、そんな哀しみ籠もった視線から逃れつつ子供達へのプレゼントを兼ねた遊びの時間になったので、子供達に甲板へと先に向かつてもらい俺は朝の内に倉庫へと運び込んでおいた道具を担いで(というか掲げて?)甲板へ。

何故か保護者枠のオペレーター達が何人か見物に来ている事にあるえ? とかなりながらも甲板の中央に持つてきた遊具を広げると、見ていた全員から何なのかよく分らず疑問符の付いた声が聞こえてきた。

まあ、ただ広げただけだったら真っ白いジョン・スミス君と同じモフモフした素材が小山みたいにこんもりしてて頭頂近くにジョン・スミス君と同じAA顔で(・ω・)が描かれているだけなのである、そりゃあ困惑するわな…あ、いや、レッドだけは普通に飛び込みたそうにウズウズしてたっけか?

取り敢えず道具を一度広げてからまた倉庫に戻って高出力の送風機を取り出してまた甲板に戻ると、既にレッドを始めとした子供達がモフモフを満喫していた…思わず違う、そうじゃないと呟いた俺は間違っていない筈だ。

絶賛リラックス中だったレッド達には悪いが広げてある遊具から退いてもらい、背中側にあたる吸気口へと送風機をセットしてエンジンの起動、源石技術が進んでいる現世では姿形も無いガソリンエンジンの起動音に皆驚いて注目していたが、それもすぐさま目の前で起きている大きな変化の方に目を奪われていった…まあ、実際のところは目の前でどんどん膨らんでいくバルーンハウスによって物理的に視界を塞がれたから当然なただけだな。

目の前でドンドン膨らむジョン・スミス君に子供達は歓声を上げ大人達はポカン口、つてか港の龍門側からもなんだなんだと驚愕の声が聞こえてきたが別に何か問題があるわけでも無いのでスルーした。

そんな事よりもちゃんとバルーン・スミス君で遊ぶ事が出来るかどうかの方が重要なのである、ぶつつけ本番だからちやんと膨らんでくれるかどうか心配だったんだよな…。

そんな俺の不安もんなそのに膨らみきったバルーン・スミス君、顔のAAも（・ω・）から（・ω・）として膨らみきった事を教えてくれたので、子供達に靴を脱いで入る様に言ってからあまりはしやぎ過ぎて他の子とぶつからない様にする事など注意事項を告げて中へと入る様誘導したのだが、どうやら初めてバルーンハウスを見たらしく子供達は尻込みしていると、まさかのレッドが思いつきりダイブする形で突っ込んでいってそのままうつ伏せでモフモフバヨンバヨンしだしてご満悦の様子。

なんとというかあまりにもイメージと違う行動に「ええ…？」とオペレーター達の誰かと一緒に呟いてしまったが、取り敢えずどんな感じか聞いてみても「モフモフ！モフモフ!!」とモフモフとしか話さなくなってしまうって更に困惑…如何やらレッドにとって楽園だった様です。

まあ、そんなレッドを見ていたら何人かの子供達が我慢出来なくなつて突撃、みんなしてレッドと一緒にモフモフバヨンバヨンと楽しみだしたので結果オーライなのだろう。

途中保護者枠として来ていたオーキッドが鉱石病の子の中には体表から源石が露出している子もいるのにボロボロになつたりしない

のだろうか？ と質問されたが、バルーン・スミス君はジョン・スミス君と同じ素材を使っているので耐刃耐火耐爆耐水等一通りの耐性は備え付けてあるので安心安全です!! と力説したら「そ、そう…」と引かれてしまった、周りのオペレーター達と一緒に泣けるぜ。

取り敢えず一通り遊んでたら三時になったのでお土産として持つて来たオヤツを食堂で用意し、甲板に居た子供達と職員、オペレーター達等片っ端から声を掛けると子供達は速攻で食堂へと走っていき、大人達はそんな子供達に苦笑しながら歩いていたのだが、俺が何が好かれるか分からないから取り敢えず（鼠王がやってた）駄菓子屋屋台の菓子を八割買い占めてそれ以外にも適当に有名と聞いた店の菓子（試写会の後監督から大量に贈られた）を持って来た事を伝えれば、店の名前を聞いた女性陣と一部男性陣が目の色変えて走っていった：今調べてみたら幾つか数ヶ月待ちの超が付くレベルの老舗の銘菓が含まれてたけど、なんてもん気楽に渡してるんだ監督…。

遅れて食堂に辿り着くとそこは戦場になっておりました：まあ、流石に争う相手は大人と子供で分かれていたが、その内容も老舗銘菓が好物かで違うのがなんとも言えない状態だったが…。

一足お先にオヤツタイムを切り上げてバルーン・スミス君の様子を見に戻してみると、展開したままのバルーン・スミス君に誰か先客が居る事に気付いてコッソリ覗き見てみたのだが、まさかのアーミヤが楽しげにポヨンポヨン寝転がっていて思わずホッコリした…。

暫くして通路から子供達の声が聞こえてきた事でハツとなったアーミヤが俺に気付いて顔真っ赤にしながら口止めしてきたが、子供達に盛大にバラして一緒に遊ばせてやった、子供なんだから楽しんでるのが一番である。

夕方になってお別れとなったのだが、子供達がぐずったのでまさかの体育館で雑魚寝：何かに使えるかと思って持って来たジョン・スミスの素材（ロール）を敷いて掛け布団持参させる事で好きな様に寝させる事になった。

まさかのジョン・スミス君の中でこの日記を書く事になっているのだが、俺ももう眠たいので寝る事にしようと思う：それにしてもレッツ

ドが俺の上に乗っかって寝てるのどうしよう？

if√魔法（物理） その一 『チエエエンジン・オリジン!!』

『…時多発テロに関する速報です。』

現在も各地で多発しているレユニオンムーブメントによる凶行ですが、憲兵団の迅速な行動により事態は終息へと向かっています。

北部エリアはほぼ鎮圧され、順次避難民の受け入れが始まっています。

現在ウルサス憲兵隊はワスク大道の集団を包囲しており、この無謀な暴動も直、終焉を迎えることでしょう。

市民の皆様は屋内避難に努め、憲兵隊の鎮圧が完了するのをお待ちください。

繰り返します、政府は現在屋内待機命令を発令中です…』
『適当な事抜かしやがってゴミ共が…』

戯言を吐いてばかりの放送を無視して住み慣れたチエルノボーグの街を駆け抜ける、いつもならばまだ人で溢れている通りは最早騒音の響くがらんどうである。

クソツタレがと毒づきながら目指すのは実家も兼ねているライン生命ラボのチエルノボーグ支部、こんな状況に陥って遂に恐るべき事態が始まったのだと悟った俺は、家族の安否を確かめる為に授業中だったにも関わらず自前の源石駆動型単車を走らせていた。

簡単に言えば俺は恐らく異世界転移をしてしまったのだろう、それも中々にクソツタレな世界観で有名な『アークナイツ』の世界に。

アークナイツは源^{オリジニウム}石と呼ばれる高エネルギーを秘めた鉱石によって繁栄している《テラ》と呼ばれる世界を舞台にしているのだが、その肝心のオリジニウムによって源石病^{オリバシ}と呼ばれる不治の病に感染する危険性がある上、このオリジニウムを用いた道具を使えば使う程《天災》と呼ばれるトンでもないレベルの災害を引き起こす原因なのではないかといわれている。

前世での石油による被害を増やした上でそれらを遥かに上回る速

度で引き起こすロクでもない物にズブズブに頼り切っているポストアポカリプス一步手前な世界観だ。

そんな世界に気付けば居た俺はここが何処なのか一切分からず彷徨っていた際に、現在世話になっている母さんに拾われて養子として育てられていたのだが、拾われて連れて行かれた先がチエルノボーグだったり母さんの勤め先の名前がライン生命だったり幼馴染みが『ラーダ』という名前の女の子だったりした時点でここが『アークナイツ』の舞台になった世界なのだと悟った。

それからは取り敢えず必死こいて強くなる事を決意した。なんせ俺は行く宛なんか何処にも無い六歳程度の餓鬼だし、俺を拾ってくれた母さんはライン生命チエルノボーグ支部の所長で転勤予定は無いし、幼馴染みのラーダは六歳だからもし原作と同じ時期に物語が始まるのならば親元を離れる年齢になる前にレユニオンの連中が攻めてくるのが分かっている為それはもう頑張った。

俺の特異性を所長である母さんに研究してもらおう傍らトレーニング案を出してもらい鍛え続けていたのだが、頑張り過ぎたせいで周りから浮いていたらしく不良連中に絡まれる事もあったがそいつらを片っ端から伸した事もあった。

：まあ、そしたら他の奴も連れてきて絡んできてそいつらも全員伸してやって更に増えてを繰り返す事になってしまい、いつの間にか中坊の俺が学生自治団の創始者兼総元締めになってた：因みにソニアがサブリーダーでアンナが原作と同じく参謀、何故か付いてきたラーダには兵站へいたんを任せてある。

正直最初の内はこんな事になるなんて予想もしてなかったから頭を抱えたが、レユニオンの一斉蜂起の時に少しでも戦える戦力が居る事に困る事は無いだろうとライン生命の防衛隊に尋ねたり、ウルサスのネットを調べながら鍛え上げることにした。

学校には部活動だと説得（というか恫喝）して部活という名の集会を黙認させてから授業について行ける程度に指導しながらも堂々と鍛練を積ませていき、無駄な事（他生徒への手出しや感染者へのリンチ）なんかは無駄な時間を使う暇があるなら少しでも鍛練してると強

化トレーニングと集中授業によって肉体・精神共に叩きのめし、時折やってくる他校の不良共を伸して吸収合併、正直下手な軍隊より軍隊してたと思う。

何回かお偉さんっぽい人が覗き込んでると思ったなら「ウルサス軍入らない？（超要約）」って言われた事もあったし…（比較的）丁重にお断りしたら舌打ちしながら帰っていったのはほんとウルサス軍腐ってんなって思ったな。

「イ、イヤアアアッ!？」

「っ!?! 喰らえクソ野郎共、ライダークラッシュ!!」

『ギヤアアアアアッ!?!』

閑話休題、向かう先から聞こえてくる爆発音に不吉な予感を抱きつつも走り続けると、今にもレユニオンの雑兵によって襲われそうになつてる母さんを始めとした研究所の職員等を見つけ、思わず全力疾走からバイクを無理矢理横向きで浮かせてレユニオンの雑兵の一人にぶちかましてやると運良く他の奴等も巻き込んで側から見ても重傷程度のダメージを与えることが出来た、これでもやりきれないんだからホント感染者って頑丈である。

「おい母さん、皆っ!! 無事だったかっ!？」

「ア、アインツ!? 貴方学校行つてたんじゃないの?」

「んなもんこんな爆発音がそこらに響き渡つてんのに呑気に授業なんかやってる訳ないに決まってるじゃん!?! それよりも纏めて動きたいから一度学校まで向かうけど良いかっ!?!」

レユニオンの連中を一掃出来た内に母さん達を避難させるべく一同学校へと向かうと、其処では既にレユニオンの雑兵達が生徒の避難場所である体育館の正面玄関から中へ押し入ろうとしている最中であつた。

ただしあらゆる窓は既に封鎖されている上に唯一出入り出来るような出入り口には教師陣と学生自治団の重装部隊や射撃、術師部隊がキツチリと足止め…というかアレ押し返してない?」

「うわあ…」

「な、なんだアレは? 学生服を着た軍隊か?」

「セルゲイさん、気持ちは分かるツスけどアレが前話してた学生自治団ツスよ…」

「アレが君が鍛えていたという学生自治団か…なんだか下手な軍隊より軍隊してないか？」

「人が思っても口に出さなかつた事なのに…」

「す、すまない…ついな」

ライン生命チエルノボーグ支部の防衛隊長であるセルゲイさん（見た目はウルサス var になった某ロシアの荒熊さん）とそんな事を話していると、状況の不利を悟つたらしいレユニオンの雑兵共に出動きがあった。レユニオンの雑兵の一人が何やら他の奴に指示を出して増援を呼ぶ為なのか何処かに行かせようとしていたのだ。

「させつかよ、ヴァカめ」

「なっ!? ガツアアッ!? グツ、ボツ!? グゴオツ!？」

奴等の狙いを即座に見抜いて即座に動いた奴へと襲い掛かり、丁度前に出していた右脚を逆関節へと変えてやりつつ顎に掌底をかましてカチ上げ、即座にボディブロー二連打からの顔面ストレートでダウンさせると此方を見ていた学生自治団は沸き立ち、教師陣と荒ごちに慣れていない一般生徒はドン引き、それを見て此方に気付いたレユニオンの雑兵は振り向いた瞬間俺が思いっきりハイキックをかましてやって吹き飛んだ。

「なっ、なんだ貴様はアツ!？」

「鎧將軍だ！俺等の大将のお出ましだあ!!」

「勝利確定」

「早速エゲツない事してて草生える」

「デメエらくつちやべってないで真面目にやらんかド阿呆共がアツ!!」

『『ヒヤッハアアアッ!! サーイエツサアッ!!』』

歓声を上げて一転攻勢に出る学生自治団、トチ狂ったような言動をしているがしっかりと教え通りに三人一組スリーマンセルで常に多人数戦を強いてタコ殴りにしていき、少しでも分が悪くなれば他の部隊を割り込ませて補給や治療を徹底させる。

何時も通りの働きをしつかり熟しているのを確認した後、俺も戦いに出る為に：何よりもまだ雑兵しか居ない今の内に素早く行動する為に前線へと移動する。

「それじゃあセルゲイさん、母さん達を連れて右手側から体育館に残っている他の学生連合と合流して下さい」

「あ、ああ：分かった、其方も体質の事は知ってはいるが気を付けろよ？」

「アイン：」

「大丈夫だつて母さん、まだ今の内ならアイツ等は雑兵だけみたいだからササつと終わらせられるさ」

母さんにそう言うつてから俺は右脚に下げているバックルを取り出し、左右前面に付いているレバーを握つて腹部へと当ててから両側へと展開する。

『バックル・オープン』

機械音と共にバックルに内蔵されてあるベルトが腰に移植してあるコネクタへと接続され全身に巡らされている回路が励起される。

『コネクト・オールグリーン』

機械音を聞いてから左胸のポケットに忍ばせてあるオリジニウム・カートリッジを取り出してバックルへと一度添え、押し込むように一気に装填する。

『カートリッジ・セット』

心配そうな母さん達を背中らに庇うように展開してあるレバーをしつかりと握りながら敵を見据える。

「そんじや、一丁やりますか：変身ツ!!」

『チエエエンジ・オリジイン!!』

掛け声と共に一気にレバーを引くと周囲にオリジニウムの光が溢れ、次の瞬間には俺の姿は黒をベースに紅の鎧を着込んだような格好へと変化していた。

「さあ、覚悟は出来てるか？ 時間は待っちゃあくれないぜ？」

if√魔法（物理） その二 『マキシマムスピード
!!』

紅の光と共に瞬時に変わった俺の姿に動揺するレユニオンの雑兵達。

「な、なんだコイツ!？」

「さっきと姿が全然違うぞ!？」

「鎧を装備するアーツか何かかつ!？」

「ひ、怯むなっ! どうせこんなの虚仮威sゴベバアツ!？」

「誰の何が…虚仮威しだつて?？」

失礼な事吐かすレユニオンの雑兵に対して分かりやすいよう技術も何も無いただの喧嘩キックを喰らわしてやると、喰らった雑兵は地面と水平に吹き飛びそのまま駐車場を越えて生垣へと突っ込んだ。

全く目の追い付いていなかった他の雑兵共は教師や一般生徒と一緒に呆然とし、学生自治団の面々は俺の一撃に沸き立ったり苦笑いしたりと色々違いがある…まあ、この状態の俺と手合わせしてみても痛い目みた奴も何人か居るから苦笑いも浮かぶわな…あの時は加減の練習に付き合わせて本当に申し訳ない。

「さて、此方としてはさっきと次の行動に移りたいんでね…速攻で決めさせてもらうぞ」

『マキシマムスピード!!』

宣言してから左のレバーを手前に引けば下半身の装甲が真紅に輝き出し鋭角な物へと変化すると同時に一気に力が湧き、そのまま敵中へと駆け出しすれ違い様に手当たり次第強化された脚で蹴り飛ばしていく。

鋭角になった分少しは威力が上がっている為ベキバキ骨が折れる感触が伝わってくるのが正直気持ち悪いが取り敢えず殺さない程度に行動不能にしていこう。

「よおし、大将が決めてんだからアタシ等もやるぞオツ!!」

『『オオオオオオツ!!』』

俺が反対側から攻めはじめたのを見てソニアを筆頭に学生自治団の面子がヒートアップして一気に殲滅速度が上がっていく、なんか雑兵とはいえレユニオンの連中が哀れに思えてくるレベルの殲滅速度である。

――時間にして約五分程、たったそれだけで五十人近く居たレユニオン達は全員床ペロした上で縄で雁字搦めにされたのを確認し、俺はバックルのレバーを戻して変身を解除した。

俺の体質上問題は無いのだろうがロクでもないモノであるのは分かり切っているのだし、少しならば対処出来るとはいえなるべく他人に害を出したい訳では無いのだ、ただし敵は除く。

「さて、雑兵共も大人しく出来たしさっさとチェルノボーグ脱出する算段つけるか…」

「はっ!? いやちよつと待てよ、この程度の相手なら別に楽々返り討ちに出来るだろうっ!」

俺の突然の撤退発言に驚いたように食ってかかってきたソニアだったが、アンナ含む参謀組は何処かホツとしたような顔で肩の力を抜いていた。

「ソニア、確かに今回の相手は雑魚でしたが次もそうとは限りません。それに奴等は適当に散策していた結果私達を見つけて襲ってきたという感じでした、ならば奴等の本隊は軽くそれ以上の数が居るという事です」

「そののついでに付け加えれば、母さん達を迎えにいく途中に一度チェルノボーグを出来る範囲で見渡せる様に市街地のマンションの上から見渡してきたんだけどよ、何が見えたと思うよ?」

「はあ? いや、ここに引き籠もってたアタシ等に分かる訳ないだろうだったよ。憲兵隊なんか軽く上回る数の感染者の集団にたかられたんだ、どう見たってあれは『敗走』としか言い様がなかったな」

俺の言葉にどよめきが走る、そりゃまあ自分たちを守る憲兵隊がやられたなんて聞けばビビるわな。

「そんな訳で出来るだけ早くチェルノボーグから脱出するぞ。アレ

ク、こんな状況で頼むのは悪いと思うが、他校の奴等になるべく早くチエルノボーグから脱出するように無線で伝えてくれ、雑魚ならばいつも通りにやれば倒せるだろうが念の為探知系アーツの使い手に頼って接敵するのは避ける様に言っといてくれ」

「わ、分かった…けど話を聞かなかつたらどうすれば良い？」

「俺達にだって余裕なんか無い…だが少しでも助ける為の努力位はしてやるさ。ほらさっさと連絡やってくれ、幸いと言えたもんじゃないが俺等の学校は一番戦地に近い、つまり逃げる最中に少しだけ様子見る程度の事はやれなくもない筈だ、もしも逃げてないなら喝入れてやるまでさ」

そう言っただけで通信担当以外の部隊長達にも指示を出していきこうとすると、何処となくビビりながら校長が俺に向かって質問してきた。

「な、なあアイン君？ 正直子供の君等に頼るのは大人として情けなくは思うが、君達学生自治団が憲兵隊と手を組めばなんとかなったりはしないのかね？ 確か以前本国の軍に勧誘される程の練度だったんだらう？」

そんな校長の言葉に他の教師達は継るような目で此方を見てきたが、もう鬱陶しいので手っ取り早く心を折って動く様促す事にした。

「校長、今回のテロリストって…『レユニオン・ムーブメント』っていうんですけど、どんな奴等か知ってますか？」

「い、いや…落伍者である感染者共の集まりなんか知らんよ…」

「レユニオン・ムーブメント… 他者や国家に蔑まれてきた「感染者」達が結成した組織。組織の出身はウルサス帝国の者が大半なもの、特定の種族や出身には囚われていない。結成当初は特に大きな騒動を起こすこともなく、名前だけが知られている目的のない感染者組織だった。しかし新たな指導者である「タルラ」の登場により過激な思想が蔓延る様になり今日ここ、チエルノボーグを標的としてテロ行為を開始。まあ、そりや最も自分達を苦しめてきた連中ですからね、俺等って…で、此処からが本題…このタルラっていう奴の実力ってどれぐらいだと思いますか？ まあ、さっきの答えから知らないのは分かっているんで答えるんですが『俺も知らない』が正解です」

質問してきたのにその答えを質問した本人が分からないという、そんなふざけた様な態度に校長は不快感を露わにするが、次の俺の言葉に表情を固まらせた。

「正確には炎熱系のアーツを使うらしいんですが、分からないのは単純に『情報が残らない程強いから』ですな」

「は…？」

「今までタルラが指導者になってから幾つかの組織がレユニオンと対立した事があるらしいんですが、そのどれもがもうテラの何処を探しても見つかりません。彼等の拠点があつた場所は皆天災に襲われてしまつて無くなつているとの事ですが、その天災の跡を調べれば共通して焼け溶けた跡を見掛けるのでタルラが手を下したのではないかと言われていますが…それはそうと『あまりにも強力なアーツは天災を誘発させる』なんていう話を聞くんですよ…」

「ま、まさかそれでは…」

「本当かどうかは分かりませんが、タルラが手を下したと思わしき場所では共通して天災が発生しています。そしてそんなタルラが指導者として加わっているレユニオンは今現在チエルノボーグを侵略中です。こんな大きな相手に挑もうとしているので必ずレユニオンは総出で攻めてきているでしょう、勿論その中には指導者であるタルラも…俺は天災をどうにか出来るなんて自惚れちやいけませんよ」

そう言う校長は顔を蒼ざめさせて他の教師達に撤退の手伝いをする様指示を出し始めた。その様子を呆れながら見ていると話終わったのを察したらしいラーダが俺の元へとやってきた。

「大丈夫なの、アイン君？」

「大丈夫かどうかで言えばさっきの校長への説明で時間食つたからあまり宜しくない。ただのマンションの上に立っただけで分かるくらい近くで戦闘があつたんだ、避難する時に家族を連れて行くとしても放送を盲信するだろうから、取り敢えず気絶させて引張つていく事になるだろうし時間が足りなさ過ぎる」

「何その物騒な考え…いやいやアイン君って案外荒事関係だと信頼されてるから着いてきてくれるんじゃないかな？」

「それならどれだけ楽な事だろうな…所でラーダの方は準備出来てるのか？」

「もちろん!! 何時でも得意なウルサス料理、振舞えちやうよ!!」

「はっ!! なら無事脱出出来たらそんな時は頼もうかね? …よし、全員準備出来たな? ならすぐさま主発だ、探知系の指示に従って港を目指せ!! 俺は遊撃として安全確保に動いて回る。各員、生きてまた会うぞ…行動開始!!」

if√魔法(物理) その三 『マキシマムストレングス!!』

「なっ、なんだおま eギヤツ!?!」

「は、はやグブツ!?!」

「なん dカツ!?!」

「…これで何人目だ? 既に六十超えてないか?」

現在変身してそこかしこでうろついているレユニオンの雑兵を始末中、やってる事が鋭い爪や手刀、それに腕のエッジを使ってすれ違い様に辻斬りしていくので何というかアマゾンズみみである。

…あれ? 世界観もダークな感じで合ってるし、ライン生命っていうヤバい研究所もあるから割と間違っていない?

いや寧ろこれから起こるのはヒト(ロドス)とケダモノ(レユニオン)の戦いだからファイズの方が合ってるのか? …うわっ、確かに俺オリパシー遅延って形だけど延命出来るからもしもレユニオン側に居たらアークオルフェノクムーブやってたのか? あんな一部除いてヤベー奴等ばかりの場所? いやあ、考えたくねえなあ…。

「つと、考えてる暇なんか無いんだった、浄化ついでに補充しとかねえと…やっぱあんまり気が乗らねえなあ…」

死亡した感染者はそのままオリパシーを拡散させる感染源となる、ただし俺の異能を使えばその限りではない…ってかこれさえ使えばある意味使われた相手のオリパシーは治るのだろうか、それでも症状の軽い患者でなければ使っちゃならない異能である。

まずそもそもオリパシーの症状っていうのがどういうものなのか? 俺はカルテの中に血液中源石密度なんて項目があるが、ある意味あれが全てを物語っているのだと思ってる。

レム・ビリトンで採掘現場からオリジニウムの粉塵を吸い込みオリパシーに感染したなんてニュースをしょっちゅう見るが、それによって肺から酸素を取り込もうとした赤血球が極小のオリジニウムへと変質、血管の中を通る内に他の赤血球や血小板、白血球等も変質させ

どんどん全身をオリジニウムへと変質させていくのだろう。

詰まる所オリパシーというのは身体からオリジニウムが生えてくるのではなく『身体がオリジニウムに変わっていく』のであり、身体からオリジニウムが生えてきている様に見えるのは水が凍れば体積が増える様に、身体がオリジニウムに変質していくにつれてどんどん体表から見えるオリジニウムが大きくなっていくのである。

因みにそれだと体内から身体を突き破る様に出てくるのではないのか？ という疑問が出てくるが、多分これはオリジニウムに変質する為にはそれなりに長く触れている必要があり、恐らく動脈なんかでは血の流れが速くて変化が遅く、毛細血管なんかの細い血管がある場所に詰まる事で浮き出たり、死んだ後（つまり心臓が止まり血流が滞った時）から一気にオリジニウム化が広がるのだと推測している…。

ってか正直オリパシーによる死因って大抵話を聞くに血液中原石密度の上昇によって血管が塞がれた事でくも膜下出血とか血栓の代わりに血液中原石が引っ掛かって血栓になるスピードが上昇してお陀仏とかそういうったやつが結構散見されるんだよね…生活習慣病の危険度を加速させるのがオリパシーの恐ろしさとも見ても良いのでは？

なんか盛大に話が逸れた、閑話休題。

俺の異能は端的に言ってオリジニウムの操作なのだが、オリジニウムを操作出来るだけであって他に適正があるのは自分限定の強化や治癒だけ、この異能でアーツの補助具であるバックルからオリジニウムを脊髄に直接注入し、自分の身体と皮膚を巻き込みながら面倒な配分（こちら辺はバックルや接続部に記録してある）で態と末期のオリパシーどころかオリジニウムそのものな鎧に変換、外装であり消費しても問題の無い鎧のオリジニウムを消費する事で仮面ライダーみたいな身体能力を実現させている。

そして変身する為に用いている『オリジニウム・カートリッジ』だが、これは俺の異能以液状化させて収集したオリジニウムを詰め込ん

ただだけの簡単な物であり、普段は左右の内側にある胸ポケットに三本ずつ仕舞い込んでおり、これをバックルに装填して腰部のソケットへと流し込み、無理矢理感染と外装を構築する為の呼び水にしているのである。

そして今までのオリジニウムの補充は研究所に頼んで持つてきてもらったオリジニウムを研究の対価として受け取っていたのだが、そんな余裕は勿論無いので今までは人道的な理由で試していなかった方法での収集をする事になっている。

「収集完了…いつ見ても穴だらけの死体は見慣れないな…」

俺の前にはさつき倒した雑兵の死体が横たわっているのだが、その身体は様々な場所に穴が開いており、首元の裂傷が無ければこれが死因だと言われても信じてしまえそうな位である。

俺の異能は効果範囲が非常に狭く干渉出来るのは俺が触れた物だけであり、変身した時の外装は俺自身に含まれるが武器を経由しては効果は無く、他人に使用おうとしても直接触れており、しかもある程度時間を掛けなくては抵抗力の関係で干渉出来ない。

回復系のアーツを他人に使えない為オリパシー重度のオリジニウムが身体から生えてきている人には使ってもこの死体の様に全身穴だらけになり、ならば回復しながらやれば良いと考え試してみても掛けた回復系のアーツが片っ端から俺に吸収されてしまうので、本気でやるなら一箇所ずつ抽出する度に回復していくといくともんでもない手間を掛ける羽目になるのである…まあ、それでも治りたい奴にとつては俺を監禁してでも治そうとするだろうがな…。

因みに抽出された所に神経や筋肉があつた場合、オリジニウムだけをまるっと抽出する為当然の様にそこから先は不能となる…寧ろなんでオリジニウムの間は血管も神経も正常に肩代わりしているのか不思議な位である。

『……………ッ!!』

「うん？ 向こうの広場から爆音？ …まさかつ!? HQ此方アイロン、進路上の広場で何やら騒ぎが起きている模様、至急観測されたし、オーバー」

《此方HQ了解、至急観測班を騒動の探査に当たらせる…なに？

リーダー気を付けろ、リーダーの言ってた広場で今迄観測した事の無いような高アーツ反応と超高温反応が出たらしい、此方は冬將軍や参謀達が広場を迂回していく事を提案しているが、リーダーはどうする!? オーバー!!》

通信担当のアレクから聞いた話に俺は自分の予想が当たっていた事を確信した、あの広場でロドスとタルラがかち合っているのだと…。

「…HQ、恐らくあそこにはレユニオンの幹部ないしそれよりも上の奴が居るだろうから迂回するのは正解だろうな、ソニアにそう伝えてやってくれ…俺はちよつとばかし物陰から奴等の面を拝んでくる、念の為無線の電源は切っておくぞ、オーバー」

《ちよ、リーダー毎回そう言つて首突つ込んでるじゃん》

無線の電源を切る、こつから先は恐らく俺ならばあの悲劇も食い止められるかもしれないし止められないかもしれない、だが出来る力があるのにそれをやらないのは悪だ、故に行く…偽善上等だ。

「取り敢えず…間に合えば良いんだがな…」

『マキシマムスピード!!』

そう呟いて俺は一気に戦火のチエルノボーグを駆け抜けた。

辺り一面火の海とでも形容したくなるような惨劇の中、ドクターを助けてチエルノボーグを脱出する筈だったロドスは急遽レユニオンによるテロに巻き込まれ、更にはその指導者であるタルラと対面していた、彼女の放つ獄炎をなんとかギリギリ凌いだアーミヤだったが、対するタルラは涼しい顔でまたしても先程と同じ獄炎を放とうとしており、ロドスの面々には絶望感が漂い始めていた。

『マキシマムストレンジス!!』

「オオツラアツ!!」

『!?!』

「なっ、チイツ!!」

突如何か機械音が聞こえたと思えば咆哮と共にビルの上からタル

ラ目掛けて巨大な貯水タンクが飛んできて、タルラはそれを迎撃する為には獄炎で迎撃、なみなみと入っていたらしい水がタルラの獄炎によつて一気に蒸発、辺りを一瞬で水蒸気が覆い尽くした。

「ちよこぎいな…」

タルラがそう呟いたかと思えば広場を突き抜けるような爆風が発生し水蒸気が吹き飛ばされた、撤退するチャンスがも思ったがこれではまだ逃げる事が出来ない、そんな事を考えていたからかさつき迄無かった筈の違いをタルラが口にするまで気付くのに一瞬遅れてしまった。

「キサマ…何者だ?」

「えっ…?」

目の前にはまるで全身をスニーキングスーツで覆ったような独特の装備を身に纏った一人の人物が、まるで私達を背中に庇う様にしてレユニオンと相対していた。

その人物は一つ息を付くと何かを自身の胸元から取り出し、それを腰へと持つていき入れ替えるような動作をした後、両腕を腰の前へと構えた。

「ただの日常だったなら何者かって聞かれてもチエルノボーグの一般市民つて答えるれるけどさ、お前らみたいな自分に酔った上に現実逃避して人様に迷惑掛けてるような奴等にやこう言つてやるのがあつてるんだらうなあ…」

『オリジニウム・リ・チャージ!!』

そう言つて腰に着いていたらしいレバーを引くと機械音と共に辺りを紅の光が満たし、次の瞬間には全身に紅の鎧を身に纏った姿で『彼』は立っていた。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えとけ!!」

if√魔法（物理） その四 『マキシマムドライブ
!!』

殴る、蹴る、極める、投げる、アーツによって底上げした身体能力をもつて常に多数で攻めてくる相手の動きを妨害しながら、掻き分けるようにしてまだ戦えるロドスのオペレーター達に振り分けるように立ち回る。

「感染者といっても正面から獣同然に襲い掛かるだけの烏合の衆か：これならウチでやってる無制限組手の方がよっぽど難易度が高い：ぞっ!!」

「ほいよつと、戦闘が本職な俺達の動きに合わせられる組手ってなんだよ…?」

「あく…大乱闘スマッシュユンキーズ?」

「いつからチエルノボーグの学校は世紀末に…って学生!? 嘘だろオイ!?!」

「ホントいつの間にあそこまで修羅の世界になってたんだろう…:なっ!! と」

思い返せば最初はタイマンでやってた筈の組手なのに、日が経つにつれて一対二から三になって五になって十から五十、最終的に時間制限三十分間延々と連携してくる上に手の内バレてるアイツらの猛攻を「変身は流石に卑怯だろ」っていう縛りのままやってたからな…いや今思い返せばなんであんなアホみたいな数相手にして『訓練』だなんて考えてたんだよ俺?

「うん? おつと危ない」

「ぐっ、ギヤアツ!?!」

「うわっ、アイツ近くに居たレユニオン捕まえてアーツの盾にしてやる」

「近くに居たコイツが悪い…:というかもう面倒だしちよつと氣勢でも削ぐとするか? (ボソツ)」

「うん? なんか言ったか坊主?」

「あく…オツチャン、ちよつと危ないだろうから下がつといてくれな
いか？」

なんだか作業染みてきた戦闘だったが物陰に潜んで移動していた
敵の術師が不意打ちしようとしてきたので、殴るのを辞めて
近くの敵を掴んで盾に、そのまま持ち上げ敵に見易いよう掲げながら
そいつのオリパシーに干渉し、症状を一気に、分かり易いよう進めて
やる。

「ひ…ぎいつ!? な、なんで…なんで俺の身体からこんなにオリジニ
ウムがあ!？」

「そりゃあお前、見て分からないのか? こんな全身オリジニウムで
出来てる外装で直に触ってるんだぞ? そりゃあお前のオリパシー
の症状一気に悪化させるに決まってるだろ」

実際はそれ以外にも異能使って加速させてる訳だけど、それに関し
ては流石にボカさせてもらう…いやだって今の外装の説明だけでレ
ユニオンの連中だけでなく、ロドスのオペレーター達だってビビっ
ちやつてるんだもん、これから更に外道戦術かます気満々なのにこれ
以上引かれるのは拙いだろ。

まあ、実際の所はそろそろ疲れも溜まっているし、なんだかんだ文
句はあれど住んでいるチエルノボグをここまでボロボロにされた
怒りもあるしな。

「い、いやだ…死にたくない、こんなところでなんか死にたくなんか
いっ!!」

「お前それ今日のチエルノボグで死んだ住民の台詞だったの」

「お、お前らが俺達を迫害したんだから俺らにだってやり返す権利は
あるだろうがあ!!」

「それは健常者だった頃に感染者を迫害しなかった奴しか言えない台
詞だわなあ…因みに俺は感染者の迫害なんていう事はこの十数年間
一度たりともした事なんか無いぞ? そんな時間を無駄にする位な
ら自分鍛えていた方が億倍有意義だからな」

「白々しい嘘を吐くなあ!! そんな事言っただうせ路地裏のスラムで
俺達感染者をその力で黽つていたんだらうが!! がああああっ、痛い

痛いいたいタイタイイイイイッ!」

どんどん進行していくオリパシーの痛みに喚きながらも怨嗟を叫ぶ雑兵とそれを盾に掲げながら適当に淡々と話してやる俺、この異様な光景に戦場は最早動くに動けず固まってしまっている…これだけ時間稼げたならもう避難は出来たかね?

確認する為雑兵の顎を無理矢理閉じて話せなくした後、辺りに注意を向けながらも懐から無線を取り出し連絡を入れる。

「HQQ、聞こえるか? 聞こえたなら報告されたし、オーバー」

『こ、此方HQQ!! 現在集合地点なれど搭乗作業の為通信班班長アレクシオに代わりデイスアです!! よ、要件の程をどうぞ!!』

「此方あー…仮コードネーム『オリジン』、避難状況の進捗を報告されたし、オーバー」

『ふえっ?! え、えつと仮コードネームの場合は…りよ、了解です!』

現在全チーム集合完了し残るは攪乱部隊のみであります!!』

「報告ご苦労、此方は自前のアシを用いて後々合流する為先に出發されるよう各リーダーに報告されたし、オーバー」

『か、かしこまりました!! 通信班アレクシオ筆頭に各班への伝達、させていただきます!!』

「さて、そんな訳で此方の目論見も達成させてもらった訳だし、そろそろお暇させてもらおうかね」

「貴様…我等の同志をその様に辱めておいてのうのと流れると思っ
ているのか?」

「うん? あつ…」

どうやら目標が達成出来たので煽りつつ締めめの準備をしようとしてたらタルラがガチギレして此方を睨んでいた。

なんでだと疑問に思っていたのも一瞬、左手に持っていた男の喚き声がいつの間にか聞こえなくなっていた事に気が付き目を向けると、最早其処には人間大のオリジニウムの塊が一つ…周囲の敵の動きと無線に集中していたせいでいつの間にか死んでいた事に気付いていなかったらしい。

「なんだ、途中から静かになったと思えばくたばってたのか…まあ、ど

うせこんな無意味なテロ活動でアホみたいにアーツ使って暴れまわってたんだから、遅かれ早かれ殲滅されるかこうなってただろうがな…」

「無意味？ 我等の行いが無意味だと？」

「無意味だよ。どうせこんな事した所で落とせる都市は良くて後一つか二つ、其処まですれば感染者に対して半狂乱になった各国が感染者という感染者を処理していくだろうし、お前らは危険だとチエルノボーグの憲兵隊なんかとは比べるまでも無い大規模アーツの使い手なんかを駆り出して潰しに来るだろうさ…ホント、哀れな奴等だよお前らは…」

俺の話によって再び怒りだすレユニオン、敵である俺から同情された事に腹を立てているのか、それとも薄らと気付いていた事実から目を背けていたのに指摘された事への逆上か…どちらにしても下らないし最早用は無い。

「正直、実際にこの目で見るまで他人事だった訳だが…俺はもつと早くロドスへ被験体として出向くのが一番良い選択だったんだろうな」
「何を言っている？」

「こういう事だよ」

『Warning!!? Warning!!? シフト・デザスター
!!!』

俺の呟きを拾ったのか眉根を寄せて睨んでくるタルラに対し、俺は短く答えると左手のオリジニウムを操作して吸収してみせた。

元人間だったオリジニウムがまるで掃除機に吸い込まれる布の様に俺へと吸い込まれ、身体を覆う外装が二回りほど巨大化し、その一連の流れに周りからどよめきや悲鳴が上がる。

「なんだ…貴様は一体何なんだ…」

「通りすがりの仮面ライダーだ、つて言いたいんだけどなあ…どつからどう見てもやってる事が悪役ライダーのそれな訳だし…ま、世界を動かす鍵になるかもしれない奴さ。へい、ロドスのCEO!!」

「っ、な、何でしょうか？」

「今から一発デカいのぶち込むからその間に撤収しときな」

「なっ、ふざけるな!!」

元々狙っていた獲物を目の前で堂々と逃す宣言をされ、タルラは先程も使っていた獄炎のアーツを展開する。

それを見てレユニオンは活気付きロドスは悲鳴を上げる、それ程までに危険な業であるのは俺だって分かる…だが言わせてみればそれだけだ、タルラの業は『単発』でしかないのなら、俺にとって危険であつても対処出来ない訳ではない。

バックルのレバーを両方掴み、変身する時よりも更に外側へと力強く引く。

『マキシマムバアアアストオツ!!』

紅の外装が精錬されて金へと変わり、まるでタルラの獄炎に呼応するかの様に輝き出し、俺はそのまま両方レバーを手前に引いた。

『マキシマムドライブ!!』

その機械音と共に駆け出す。タルラもそんな俺に対して獄炎を放つ、普通なら人が蒸発してもおかしくない程の熱量を俺は――蹴り落とす。

「セイ、ヤアアアアツ!!」

空中前転かかと落とし、それによってタルラの獄炎を蹴り裂き前方のビル諸共レユニオン共を巻き込んでチエルノボーグの地面を砕き割る。

地割れと共に捲りあがる地面にさしものタルラも地につけて生きる者だからこそ逃れられず吹き飛ばされるが、一緒に吹き飛ばした瓦礫の隙間から見えた瞳には此方に対する強い怒りの炎が見えた気がした…矢張り戦いはまだ始まったばかりなのだろう。

「し、退かれた…のか?」

「多分…な」

「お、おいお前…大丈夫なのか?」

波乱が過ぎて恐る恐るといった感じのオペレーターが俺に声を掛けてきたが、此方は正直それどころではない。

「オリジニウムを…使い過ぎた…悪いが…ちよつとばかり…寝させてくれ…」

「えっ、ちょ!? マジで学生!? オイ、起きろ!! オイ、オイ!!」

今日だけで何度も繰り返し返したオリジニウムの過剰摂取と過剰消費、ただでさえ身体機能への負担が激しい二つを今日一日で何度も使った為、変身が解けた俺は崩れる様に意識を失っていった。

オペレーター：オリジン

基礎情報

【コードネーム】 オリジン

【性別】 男

【戦闘経験】 五年（学生同士の抗争を戦闘と言うなら）

【出身地】 ウルサス

【誕生日】 八月三日

【種族】 不明

【身長】 162cm

【鉱石病感染状況】

本人からの宣告通りに感染度は自在：本当にふざけた力だ。

ーケルシー医師

能力測定

【物理強度】 卓越

【戦場機動】 卓越

【生理的耐性】 卓越

【戦術立案】 優秀

【戦闘技術】 標準

【アーツ適正】 標準

個人経歴

オリジンはチエルノボーグ事変以前は城内の高校に通いつつも引き取られていたライン生命のチエルノボーグ支部へと協力していた。得意分野は近接格闘術ではあるが、ライン生命に所属していることもあつて機械関係にもある程度精通しており、サンクタ人でないのにロドスに来てからはサブウェポンとして銃を手に取り使いだしたりそこそこ器用な立ち回りをしている。

寧ろお手軽に威力が出るのになんで皆使おうとしないんだ？

ーオリジン

健康診断

造影検査の結果、臓器の輪郭は明瞭で異常陰影も認められない。
循環器系源石顆粒検査においても、同じく鉍石病の兆候は認められない。

以上の結果から、現時点では鉍石病未感染と判定。

【源石融合率】 0%

鉍石病の兆候は見られない。

【血液中源石密度】 0.000u/L

そもそも鉍石病を自在に操れる彼にこの項目は必要なのだろうか？

第一資料

オペレーターオリジンはチェルノボーク事変の際に、レユニオンの指導者であるタルラによるドクター救出班達の危機をその特異な力でもって助けた後に彼の言う『異能』の過剰使用による疲労で倒れた際に回収した後、撤収する為の輸送車によってロドス本艦へと乗艦させた後目が覚めた。

自分の異能の事やライン生命について理解している為、今まで異能について隠しながら研究していたチェルノボークが無くなってしまったので、このままでは母親であるリコリス技師が所属するライン生命の本拠地に行く事になり、そうなればまともな生活は送れなくなると認識している本人の強い希望によりロドスへと加入した。

第二資料

チェルノボーク事変より前からロドスに居たオペレーター達に、オペレーターオリジンが加入した事による一番大きな出来事は何かと聞かれれば、全員口を揃えて『ウルサス学生自治団の大半が加入した事』と答えるでしょう…戦闘職はほぼ完成されきっていてそれ以外も多少の癖さえ矯正すれば即座に一線級、本当に学生なのか疑う声も多かったですが学生証等といった証拠の数々を前にそれらは軒並み黙

らせられました。

若さから来る揉め事等も時には起きますが、そういつた際はすぐさまオペレーターオリジンが彼等のリーダーとして仲裁に入り、ちゃんと話し合つて互いになるべく公平になるよう収めるので殆ど問題になつた事は有りません：まあ、大ごとになつたらなつたで訓練室で『オハナシ』して頭に上つた血を収め、それから改めて話し合つているのを度々見るに、彼は学生自治団を導くトップではあつても、精神的には同列である戦友の様な間柄なのでしよう。

第三資料

彼はあまり私物を持つ性格ではないようで、彼の私室は元々あつても軽い筋トレに使える程度のダンベルや私服、後は緊急時の装備一式に唯一何時でも持ち歩く事が出来る趣味と言つてもいい音楽プレイヤーだけで他に部屋に置いているのは支給品のパソコン等であり、それ以外はそれぞれの整備室に仕舞う等しておりかなり質素でしたが、学生自治団のリーダー格で集まる「k l a c c」（共通語でいうと「クラス」と呼ばれる集まりの結果、段々混沌としたものになってきています。

尚、この集会によつて変に危惧されても面倒だと判断したらしい当人によつて毎度集会の内容は記録されており、録画データは全て情報管理部へと受け渡されています：正直あれ見ると彼等の賑やかな姿に灰色の学生生活送つた自分が惨めになつてくるので誰か役回り変わつてくれませんかね？

今迄失つてきたモノが多い俺達には眩しく映るのは当然か：彼は護りたいモノを殆ど護れている、思わず嫉妬してしまいそうだ。

l l A c e

第四資料

彼の歌う歌は彼のオリジナルばかりなのですが、何故か彼はその事について苦い顔をするだけです。彼と幼馴染みだという重装オペレーターグムに尋ねてみると、彼は自分の歌う歌は『忘れない為

歌っている』のであり、彼の称する『仮面ライダー』というのもその『忘れない為』に入っているとの事です。

注：オペレーターオリジンを本人の意向を聞かずにシエスタのライブに出してはいけません、本人は流されて出演した結果それなりに盛り上がっていましたが、学生自治団にまた締められても知りませんからね、クロージャ!!

折角一儲け出来るチャンスだったのになあ…今度は先にスタジオオ押さえといてCDの制作手伝ってもらおうかなってぐ、 Gumちゃん？ その手に持つてるフライパンは何なのかな？ …はい、すいません、ちゃんと本人に許可とってからさせてもらいます。

ークロージャ

《ゲーム的な資料》

星五 前衛オペレーター

募集タグ

近距離／爆発力／火力

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：4800

攻撃：870（+30）

防御：560

術耐性：30

再配置：遅い（90s）

コスト：10／12／12

ブロック：1

攻撃速度：非常に速い（0.50s）

特性

敵に術追加ダメージを与える

攻撃範囲（初期↓昇進Ⅰ↓昇進Ⅱ）
????↓
????↓
????

潜在能力

二段階：コスト—1

三段階：素質1強化

四段階：攻撃力+30

五段階：素質2強化

六段階：コスト—1

昇進Ⅰ

龍門弊20000

初級前衛SOC×4

初級異鉄×4

初級装置×2

昇進Ⅱ

龍門弊120000

上級前衛SOC×3

上級エステル×7

中級アケトン×16

素質1 鎧將軍

相手に攻撃した際攻撃力の20%（+10%）分追加で術ダメージを与える。

編成時、味方【ウルサス学生自治団】ユニットのHP、攻撃、防御をそれぞれ15%（+10%）

基地スキル1 除染

対象施設：宿舎

配置宿舎内、全員の体力回復速度が1時間ごと+0.20

（+0.10）

『子供達の思い出の為』

三十六日目 天気：晴れ

なんか学生仮面ライダーになってチェルノボーグ事変を学生自治団全員生還√走ってた夢を見たんだけど何アレ？ 並行世界の夢でも見たつてののか？ それにしては俺の現世に来たタイムリングが明らかにズレてたし、異能だつてサードアイは仕方ないにせよ源石の拒絶じゃなかったし…つてかアーツ使えろとかクツソ羨ましいんだが…。

…いやいや愚痴つてても仕方ないな、ちゃんと今日あつた事書かないと…。

なんかモヤモヤするけど閑話休題。

子供達より早く起きて朝四時半、レッドが腹の上で寝ている＋左右は子供達に囲まれているという状況だったので一切寝返りなんかうてなかつたので全身バツキバキに固まつた俺の身体だったけど、動き出そうにも気付けば寝る前よりも酷い状態になっていた…全身至る所に子供達が寄り掛かって眠っていたのだ…まるで訳が分からないってばよ…。

寝返りうたない様に両腕を広げて寝ていたのもあつて、両方とも腕枕に使われていたので目が覚めても子供達を起こす訳にはいかず、身体を動かしたくても動かせない地獄の様な一時間半だった…。

そして子供達が起きる時間になったので職員の一人在りこしに来たのだが、俺の惨状を見て盛大に嘔き出して即撤退、俺の嘆きの声も聞かれず暫くして戻つて来た職員の手にはカメラを持っており、他にもここに来るまでの道中ですれ違つたらしい他の職員さん達も呼んできたのか唐突な撮影会が始まった…因みに俺の怨嗟の声は『子供達の思い出の為』という願いの元黙殺された。

五分程続いた撮影会は騒がしくなつた事で目が覚めてきた子供達によつて中断され、俺も漸く動ける様になつた筈なのだが、あまりにも動けなかつた為にまさかの身体が硬直化して動く事が出来なくなるという事態に…。

これはヤバいと大人職員（＋レッド）によつてなんとか起こしても
らえたのだが、ジョン・スミス君を着けていても周囲に広がるバキバキ
と鳴る身体中の音に子供達ギャン泣き、なんとか泣き止ませてから身
体を解す為一緒にラジオ体操をしたのだが、時折響く『パキツ：パキ
キツ：』という音と共に思わず「イテツ!？」やら「アタツ!？」と声が
漏れてしまいその度に子供達が不安そうな顔を見せるのが罪悪感を
誘った。

：まあ、そんな暗い雰囲気も念の為ラジオ体操の後に追加でやつて
た柔軟の時にグニヤングニヤン動く度盛り上がって無くなつていつ
たんだけどな。

そんな訳で大分オーバーしたが朝食前にお暇させてもらった俺は
アーミヤに謝られながらも業者に混じつて龍門の自宅へと帰り、その
まま備蓄しておいたカップ麺を腹に納めて残りの午前はマッサージ
師の元へと訪れて身体を解してもらおう事にした：流石に自力では全
部は治った気がしなかったのだ。

しかしまさかの事態発生、たった一晚だけの事だったにも関わらず
俺の身体はまるで鉄板でも仕込んでいるのかと思われる程凝つてい
たらしく、マッサージ師の師匠を紹介して貰い受けに行く事に。

：正直ここで『按摩の達人』っていうキーワードに気付ければあんな
事にはならなかったんだろうとは思うんだが、正直身体中の痛みを
早くどうにかしたかったから特に何も考えていなかったんだよなあ
…。

そして話を聞いて訪れた俺を迎えてくれたオールバックにした白
髪に丸いグラサンと紅い中華風の服が特徴といえば特徴という、俺に
負けず劣らず第一印象の薄そうな初老の男性を目の前にして、俺はこ
の時漸く気付いた：これ李書文（アサシン）だ!?! と…。

正直彼の本物との違いといえば、ウルサス人特有の熊耳位しか違い
がない程に李書文だった。FGO正月イベントでの死ぬる程痛い
それに見合うレベルで効果抜群の按摩を思い出し一瞬怯みもしたが、
流石に態々紹介してもらったのに受けないのも失礼だからと意を決
して彼から按摩を受けたのだが：気付いたら夜になっていた…。

いや、正確に書けば覚えてないわけではないのだが：辞めよう、多分あの痛みはこの日記見返す度に思い返すだろうから書くだけ無駄だ：確かに身体は軽くなったがあまりにも疲れたのもう寝てしまう事にする。

p. s. そういえばあの李書文（仮）は例え受ける側が気絶したとしても一通りやるって言ってたから寧ろ早々に気絶しといた方が楽だった？

三十七日目 天気：曇り

異常な程身体が楽に動く一日だった：やつぱ達人って言われるだけあるわあの李書文（仮）：まあ身体の方は良いんだが実際あまり関係の無い一日だった、エフイーターが鉋石病に感染してしまっていたらしい。

『いたらしい』というのは今まで潜伏期間だったのかそれらしい素振りを一切見せてこなかったので気付かなかったとの事だが、どうにも原因は彼女の本国である炎国での撮影中に、撮影する前は無かった筈の源石を踏んで足を怪我した事らしい。

気付いたのはあの映画を撮影し終えた後であり、いきなり泊まっていたホテルの部屋から出て来なくなり食事も部屋で取る様になったエフイーターをマネージャーが心配し、話してみようとした所追い詰められた様な声で拒絶されたのだとか。

何かヤバいと感じたマネージャーがフロントからマスターキー（斧じゃないぞ）を借りてエフイーターの部屋に突入、中で見たのは半狂乱になったエフイーターが自身の右脚に生えた源石を無くそうと血塗れになりながら源石を削っている場面だったとの事。

正直朝から聞く様な話じゃないとしか言えない内容だった、朝事務所を開けようと玄関に向かえば玄関の曇りガラスに映る謎の人影：朝五時でまだ少し薄暗い中でそんな事されたらビビるわ!!

ただでさえこっちは『海』関係でヤバい存在呼び寄せるんじゃないかと不安なのに：いや、この話を書くのは辞めよう、噂をすれば影とかしたくない…。

まあ、ビビりながらもサードアイで確認すれば何処かで見ただ覚えのある人物だったので迎え入れたのだが、マネージャーの第一声が「エフイーターを助けて下さい」だからこつちも思わずポカンとしてしまった。

取り敢えず事務所に上がる様促すと、マネージャーは外に止めていた車から待たせていたらしいエフイーターを連れてきたのだが、エフイーターだと分かるには分かったのだが正直俺は自分の目を疑った位だった。

力強い光のあつた眼は淀んで虚、一切手入れを怠らなかつた筈の髪はボサボサ、艶々の肌も追い詰められていたのか艶を失くしていた上に自分でしたのか掻き傷だらけ、食事もまともに取れてなかつたのかフラフラしており今にも倒れそうになっていた。

兎に角ヤバ気な雰囲気だったので直ぐに事務所に上げてエフイーターを寝かし、マネージャーから話を聞いてみると上記の出来事を話された：正直明るいイメージしか無かつたから一瞬誰なのか分からなかつた位である。

：でもまあそうなんだよな、鉱石病に罹るって事はつまりこのご時世では社会的なドロップアウトと同じ事、映画一筋だったエフイーターがこうなつてもおかしくなんかなかつた訳だし、寧ろこれは自然な流れだったのかもしれない。

ってか原作でエフイーターの鉱石病についての記述って確か独特の表記がされてたんだっただか？ 確か跡はあれども源石が無いとかそんな感じの：待って？ もしかして原作の方でもこんな風になつてた可能性があんの？ 俺このタイミングで関わっちゃつても大丈夫なん？

そんな事考えているとマネージャーから依頼を出されたのだが、その内容が龍門の近衛局に捕まる前にエフイーターを逃してやれないかとの事：まあね？ 鉱石病に関して先民は忌避感ばかりだから何も知らない人ばかりだつてのは知ってるけどさ：今思いつきり専門機関龍門に来てるんだぜ？ と伝えるとマネージャーが固まつた、口ドスエ：。

頼られるのは嫌いじゃないし寧ろ好きだよ？

取り敢えずマネージャーにロドスの事を教えたら案の定初耳だったという反応を返された：これについてはロドスの広告課よりも世間の鉱石病に対する嫌悪感の方が原因だから何も言えない気分である。

そんな事話してたらだんだんエフィーターの様子がおかしくなってきたので「どうかしたのか？」と声を掛けるといきなりしがみ付いてきて「見捨てないで」のエンドレスリピートである、思わず背筋が凍った。

マネージャーと二人して固まってしまっていたがなんとか復帰し、エフィーターが落ち着くように頭を撫でながら声を掛け続けるといつの間にか寝てしまっていたのだが、如何やら不眠症になっていたらしく熟睡である。

取り敢えず今は休息を取らせるべきだと判断して俺の方からロドスへと連絡は付けておく事を伝えてマネージャーには『臨時休業』の看板を掛けてもらいつつ帰ってもらった、エフィーターが俺にガツチリしがみ付いたまま眠ってしまったので離れてくれない為申し訳なかったが、マネージャーの方が寧ろ俺に複雑そうな顔を向けながら進んでやってくれた…。

如何やら長年マネージャーやって同性である自分ではなく、異変に気付いて声を掛けた異性である俺に飛び付いたのは複雑だが、結晶が出てきてエフィーターが精神的に不安定になるまで気づけなかった事に罪悪感を感じて身を引いたようだ。

その後マネージャーが色々各業界に連絡を入れる為に帰り俺が話通りロドスに連絡を入れたのだが、精神が不安定なエフィーターの為に俺も数日付き添う事となり、そうなると俺もロドスに泊まる事になり健常者の受け入れには準備に時間が掛かる為また後日連絡を入れろと言われ、仕方なく事務所にエフィーターを泊める事にした。

そしてエフィーターはというと座ったままの体勢では寝辛いだろうと何とか脚を持ち上げつつソファに寝かしてやったのだが、時

折不安そうにするのでその度に頭や背中を撫でたりしてやるとふにや、っと安心した様な雰囲気になるのでとても庇護欲を擽られる…。

尚、俺とエファイターの身長差は十センチそこらでエファイターがしがみ付いている場所は俺の胸元であり頭撫でるには丁度いい位置に居るのだが、体勢を変えるなら兎も角俺が立ってもエファイターの脚が床に付いてしまう為迂闊に移動出来なくなってしまう…。

その事に気が付いたのは朝食食おうと立ち上がるうとした時だったのでそつから連想でトイレに行けない事に気が付き、毎朝起きてから一番にトイレに行く事になっている自分の習慣に本気で安堵もした。

暫く…というかそのまま昼まで何も食えず、適当にパット型の端末で龍門ネットを彷徨っているとかエファイターがモゾモゾしだして漸く目を覚ましたのだが、何処か様子がおかしいと思って少しばかり話し合ってみればヤバい事になっていた…エファイターが微妙に幼児退行起こして俺に依存しかけていたのである。

如何やら眠っている間にも俺に凭れかかっている体勢であった為眠りが浅く、その為か悪夢に魘されていた時に慰めてもらっていたのを理解しており、ひたすら俺にくつついて回るようになってしまった。

…いや正直こうやって頼られるのは嫌いじゃないし寧ろ好きだよ？ メツチャ甘やかしてやりたいくらいには好きだし？ だけど相手が依存しちやっってるんだったら自立する事を手助けしてあげないと最終的には相手にとっても宜しくないからどうか立ち直らせないとダメなんだよね。

まあ、その時は取り敢えず朝食食いそびれて空腹が先立ってたから飯食う事にしたんだけどね？ エファイターが離れたくないって言うから抱っこの状態からバイトで使うおんぶ紐使っておんぶした状態で…側から見たら成人女性おんぶしてるメツチャカオスな状態だったろうな。

まあ、そのまま昼食作りに入ってエファイターに米かパンかパスタか何食いたいか聞くとパスタと言ってきたのでカルボナーラを作る

事に。

途中ソースを作ってたら二人して空腹だった為に同時に腹の虫が鳴るといふね：俺が吹き出して笑っているとエファイターも一緒になつて笑つてたのを見て立ち直らせるのはそこまで難しくないのではないかと思えた。

幾ら幼児退行しているとはいへ俺がエファイターに食べさせるなんて事はなかったが、それでも俺の真横に座ってずっと左手で俺の服の袖を掴まれたままだった：鉤分銅を両手で扱う為に両手共利き手に矯正してたから食い難いとかそんな事は一切無かった。

昼になって取り敢えず右脚に出てきている源石が精神を不安定にさせる原因だろうと当たりを付け、俺のオリジナル手段で見えなくしてやるかどうかを聞くとエファイターは凄い勢いで食いついてきた：やっぱり自分の身体から石が生えてるとか怖いのかね？

他言無用という事で俺がした事は水に希釈した俺の血を消毒するみたいに綿に染み込ませてた後、身体に付かないように患部が下になるようにしてもらってから生えている源石に血を希釈した水を付けていく、クツソ大雑把な手段である。

別に俺の血は希釈した所で薄め過ぎない限り効果は完全に出るのだが、流石に血そのものを見せてエファイターを怯えさせる必要も無かったので希釈しただけであり、エファイターも何かしらの新薬か何かだと都合の良い勘違いをしてくれた。

施術についてはある程度問題無く行う事が出来たのだが、最後の五ミリ程残してエファイターに直接触れないようにして終わらせたのだが、当のエファイター本人がある程度消えた源石に喜んでいたり束の間、ほんの少しだけ見える源石に怯え、最後まで無くしてくれと錯乱しかけながらも訴えてきたので渋々やる事になった。

身体から生えている源石までならば触れても源石が無くなる程度で済むのだが、身体に触ればそこから激痛が走り酷い炎症みたいになるぞと最後に脅しても身体から源石が生えているのに較べれば死にそうな痛みの方がマシというところでもない返事を返され、諦めて続きをする事に…。

暴れたりして更に酷い事にならない様身体の至る所を固定し、舌を噛んだりしない様にマウスピース（ちゃんと未使用の新品）を噛ませておき、手にも握り締め過ぎて自分の手を怪我させないように巻いて厚くしたタオルを持たせるなどしていざ施術。

一気に無くして即座に血を混ぜていない水で洗い流したのだが、それでも数秒は掛かった施術の間エフイーターの声にならない悲鳴が部屋中に響く事になった…。

終わった後に落ち着く様宥めていたのだが、まさかの痛みのあまり拘束を引き千切ったりマウスピースを噛み砕いたりと大騒ぎ、拳句痛みに発狂したエフイーターにぶん殴られたり首を絞められるというヤバい事態に。

殴られる方は防げたのだが、拳法で鍛えてる相手に絞められるとか思わず死ぬると思ったわ…。

まあ、実際の所は俺の素肌に触った事でエフイーターのアーツ操作能力が封印され、その追加効果でエフイーターは脱力してしまったので即座に首の拘束を解いて真正面から抱え込む様に抱きしめて、暴れようとする動きを阻害しつつ落ち着かせてやったのだが、暫くして落ち着いたエフイーターが謝りながら礼を言ったと思えばそのまま寝落ちしてしまった…。

そして朝と同じくしがみ付かれているまま眠ってしまったているので、面倒になったからおんぶ紐使って抱っこそのまま固定し風呂の準備や夜に向けての準備を整えていき、全部終わった後でエフイーターを揺すって起こしてやると自身の体勢に寝ぼけ眼で疑問を口にしながらもそのまま二度寝の体勢に入った…流石にそれは許さんと頬を思いつき引き伸ばして目を覚まさせてやったが。

…その後はまだまだ距離は近いものの追いつめていた分かり易い元凶である源石が無くなった事でエフイーターは多少復調し、それぞれ風呂等を済ませて寝る事にした。

エフイーターの着替えはホテルからマネージャーが持ってきてくれたのだが、持ってきた時に矢鱈とボロボロな俺と多少とはいえ復調しているエフイーターと跡しか残っていないエフイーターの右脚に

目を白黒させていたのが印象的だった。

：つてか今日一日中柔らかいモンに触れてたせいで賢者になりそうだったのが一番大変だったな、うん。

悪ノりに決まってるじゃない

三十八日目 天気：晴れ

朝起きたらベッドで寝てる筈のエフイーターが俺の布団に潜り込んでいた：な、何を言ってるか分から（以下略）

ってか寝ぼけ眼で矢鱈と柔らかい抱き枕だと思ってたから思いつきり抱きついてしまった朝の現象でヤバイヤバイ：まあ、エフイーターもしつかり寝てたから流石に気付かれてはなかった筈。

取り敢えず寝ているエフイーターを起こしちゃ悪いからそつと抜け出して朝食作っていたんだが、途中で寝ぼけ眼のエフイーターがフラフラと食卓に入ってきて「お母さくん、今日のご飯何く？」なんてクツソベタな事聞いてくるもんだからエフイーターに似せた裏声で「今朝はご飯と焼き魚とお味噌汁よ」と答えたらガチで気付かれずそのままエフイーターは着席、それを見た俺は悪ふざけを続行してお茶を飲むか聞いたりしてたが寝ぼけているエフイーターこれを全スルー、思わず笑うとこだったわ。

最後の最後に悪ふざけでボサボサ鳥の巢ヘアーのカツラを被ってピンクの花柄エプロンを着用という、昭和のオバハンスタイルでエフイーターの前の席に座ったら漸く気付いたエフイーターが湯呑みで飲んでたお茶を吹き出して湯呑みで反射したお茶を自分の顔へとスプラッシュ、俺氏遂に我慢出来ず大爆笑である。

激しく咽せながら何やってるんだと聞いてくるエフイーターに裏声続行で「悪ノりに決まってるじゃない」とオカンムーブしてたら今度はエフイーターが大爆笑、なんとも頭の悪い光景だったなアレは。

取り敢えず鬱傾向ではなさそうだったので下手な地雷を踏まないよう世間話へシフトしたのだが逆にミスった：エフイーターのこれまでの人生は映画ありきの人生だったのだ、そんな彼女に世間の話を振っても俺の話はあまり通じないものが多いし、エフイーターの話は否応なしに映画関係が多くなりエフイーターも以前までの事を思い出してどんだん食卓の空気が沈んでいく。

これはヤバイと思いい何かエフイーターに関して原作での情報を覚

えていないかと思いを巡らせていると、ふとエファイターが正義感が強かったからロドスに入ったのではなかったのかと思いついて何故映画の道に入ったのかを聞いてみた所、エファイターはなにやら思い悩むように考え始めたのを見て俺は直感した、これ上手い具合にいったんじゃね？ と…。

結果は的中、何か弾かれたように顔を上げたエファイターは自分が映画の道へと入った理由…己の正義感を示す為…を語り、別に映画でなくてもやれる事はあるんだ!! と以前の様な明るさを取り戻してくれた、やつぱちちゃんと飯食って寝て笑いながら話し合えば人って素早く復帰出来るもんなんだな。

これにて一件落着…とか考えていたら電話が掛かり、出てみるとロドスから受け入れ準備が出来たとの事…丁度のタイミングだったとはいえエファイターが復帰してほぼほぼ無駄になってしまった事を伝えると、どつちにしても検査の為に入院する必要があると言われて連れて行く事に。

エファイターから何のことなのか聞かれてロドスについて一通り説明するとエファイターは目を輝かせて「私、ロドスに行くよ!!」と、とても元気な意思表示をした…これならもう大丈夫かな？

取り敢えず移動中に何かあっても困るのでロドスからの迎えを待っているとお出迎えに来たのはなんとも渋い某アツキーオな蛇を彷彿させるイカしたオツサン…エリートオペレーターのアce…だった…原作では序盤も序盤に脱落したから最初本気で誰か分からなかったぞオイ…。

兎に角エファイターと共にAce率いるエリートオペレーター達が乗ってきた装甲車に乗ってロドスへと移動、途中エファイターと一緒に来ていた狙撃オペレーターのScoutや前衛オペレーター、医療オペレーターに話しかけてロドスのオペレーター達の事を聞き回っていたのだが…ヤベエ、エファイターが聞く側ずつとやってたせいで前衛と医療のオペレーター達の名前がサツパリ分からん…原作でも名称不明だったのにこれはアカンやろ…。

結局名前を聞く事も出来ずロドスへ合流、そのままエファイターは

検査へと向かい俺は部屋に荷物を持って行く：すれちがう見知った子供達が俺に怯えながらお辞儀したり早足で通って行くのが泣けてくる…。

せめてグムちゃん達みたいにオジさん呼びでも良いから親しくなりたいもんである：こう書くともまるでロリコンだな、いやまあ元日本人らしく流石に守備範囲は広め（酷い風評）な自覚はあるけど、ただ単に友好的になりたいだけであって、ってなにに対して弁明してるんだよ俺…。

性癖は人それぞれだよな、閑話休題!!

部屋に荷物を運び込み適当にぶらつく事にしたのだが：何故か近くをぶらついていたらマトイマルに呼び出されて訓練場へ：まるで意味が分からんぞ!?

話を聞いてみると偶々強そうな奴が居たので一つ手合わせしてもらおうと呼んでみたら来てくれたので、ならば早速手合わせだ!! との事：だからまるで意味が分からんぞ!?

そんな驚いている俺をほつといて模擬戦開始、武器を持ってなかった俺はマトイマルから選べと言われた中で取り敢えずそれなりに使えそうな大剣（サルカズケントウリオが持つてる様なアレ）を選んで迎撃する事に。

師匠が俺の見つけた特大剣に合わせて俺に教えるのも併せて特大剣を使っていたので形見の剣を振るう鍛錬を今もしていた為扱う事は出来るのだが、今回使っていた大剣はそれに比べて余りにも軽く逆に使い辛いという残念な有様だった…。

しかしまあ流石に一般的に見て大剣片手で振り回しながら体術も駆使して立ち回る俺のスタイルは異様だったのか、周りに見物客が出来る始めて少し面倒臭い事が起きそうな予感を感じていたのだが、ドールマンがやって来て即座に的中した事を悟った。

この後滅茶苦茶怒られた：いやまあ滅茶苦茶といっても俺は一般の人間なのにオペレーターに言われてホイホイ行って行った事と普通に模擬戦やってたからなんですけどね？

まあでも正直隣で俺と同じ様に正座させられていたマトイマルの方がメツチャ叱られてた訳だし…。

ってか思いつきり私服なのに何をどう間違えたら新入オペレーターになるんだと聞いてみると、明らかに感染者じゃないのに感染者相手にも平然というより寧ろ気安く話掛けており、どうにも戦闘巧者特有の気配が読み難い奴だったから新しく入ったオペレーターだと思っただの事…。

健常者に対する認識の酷さよ、他の野次馬オペレーターも納得してたしドーベルマンも頭痛そうにしてたぞ？

そんな事してたら検査を終えたらしいエフィーターが何故かAc eと一緒に訓練場に入ってきて何故か訓練場に居る俺にビックリしていた。

如何やらエフィーターの加入に関する試験をする為に来たらしく、エフィーターも原作でお馴染みのあの浪漫溢れる機械腕を装備して準備運動を兼ねて訓練場に来たのだという。

その事を聞いた後俺がなんで居るんだ？ と聞かれて先程の流れを解説するとエフィーターも今更感染者である自分にあれだけ平然と接していたのは何故なのかと質問された…いや正直今更過ぎない？

馬鹿正直に感染しないからとは答えず対外的な答えとしていつも言っている「誰だつて何時か必ず死ぬのにただそれが早まる程度の事になんてそこまで怯える必要があるんだ？」と答えたらドン引きされた…今までこれで全部通してきたけど何故皆ドン引きするのか…コレガワカラナイ…。

そんな訳で特に用事も無くなったので部屋に戻り色々したくをしているとエフィーターも戻ってきて「無事に合格した！」「おう、おめでとさん」と軽く話して一夜を過ごした。

一先ず問題が解決してめでたしめでたし…：そういや既に『喧騒の掟』イベントが起きた訳だけど『青く燃ゆる心』イベントって大丈夫なのか？ 確かもうすぐオブシディアンフェスタだったよな？ …ヤバい、不安になってきた…。

拒否権なんて有りませんよ？

三十九日目 天気：晴れ

ちよつとアクシデントがあつて日記書くのを一日放置してしまつた：これは実質四十日目に書いてあるが、今後はなるべくこんな事にならない様にしたい：いや、やっぱりああいふ不測の事態があつた場合は無理かな？

朝起きたら隣にエフイーター：これ昨日も見たな、何？ もしかしてまだ依存治つてない感じ？ 大丈夫？ 俺今日の午前中に色々処理して帰るんだけど？ 取り敢えず独り立ち（？）させる為にもこのまま置いて行つた方が良いかと判断した。

ベッドから出てラジオ体操（音楽無し）をしてから食堂へ向かい朝食を取る事に：朝から選べるメニューを映したモニターの中に『シェフのイチオシ!!』と記されたステーキの文字が：本当に医療機関なのかここ？ そんな疑問を偶々近くに居たオペレーターに聞いてみると、調達班が持つてくる物で作つてある為である物で作れる物しか出せず（メニューがモニターなのも書き換えのし易さからそうだったとの事）その為出来る物は定食を除き料理番のお任せメニューのみであり統一性が無いのはその為との事、一応定食用にある程度決まつた内容の物は調達しているが、今回のステーキみたいな贅沢品は滅多に出ない早い者勝ちとの事：そう言つて彼は迷わずステーキを注文した、朝からよう食えるわ…。

因みに似た様な話は購買部にもあり、以前のジョン・スミス君が持つてきてくれた超高価な菓子なんかは滅多に入荷せず、例えば入荷する様な事があつても他の菓子諸共誰かが速攻で買い漁つて殆ど残らないらしい：菓子買い漁る誰かつて…。

犯人に対する心当たりから渴いた笑みが浮かんでオペレーターに訝しまれたがスルーしてもらい、再び朝食を選ぼうとメニューモニターを流し見るとそこには隅っこにヒツソリと表示される『オリジムの甘辛ソテー』の文字が、思わず吹き出しそうになつたがなんとか堪えてもう一度しっかりと確認したが、どう見ても書いてある『オリ

ジムシの甘辛ソテー』の文字…ネタとして美味し過ぎるので頼まざるをえなかった。

どよめく食堂、マジかと目を向く注文受け付け係、なんか厨房から聞こえる歓喜の声…ロドスの食堂は朝っぱらから混沌としていた。

好奇の目を向けられながらも待ち続けて五分程、持つてこられたアレを如何言えば良いのだろうか？ 凸凹しているが元は半球状だったであろうスライスされたオレンジ色の肉塊にケチャップを使ったのか赤いソースが掛けられている…大きく作ったカマボコといった所だろうか？ 周りから聞こえるザワつきが煩い。

そんな感じで一通り観察した後いざ実食してみると…なんと云えば良いのか、例えるなら一番近いのはエビチリか？ オリジムシを使っている分デカくて食い難いが中々の歯応えで食っていて楽しいな、オリジムシ自体にも元から味が付いているのかシチューの様な味わいで甘辛ソースとも合っているのが料理人の腕が確かな事を教えてくれる。

…ただ一つ難点があるとすれば矢張り大きさだな、原作でもデフォルトメキヤラとはいえ膝丈位まであるのだが、等身大のこいつらは鶏以上の大きさがあるのだ、殻を取って加熱して料理する事で一回り小さくなるとはいえ、それでも鶏一羽分位あるのではないだろうか？ 言ってしまうえば北京ダック丸々一つ食うようなものである…北京ダックの実物見た事無いけど。

途中からその量の多さに辟易したが無事完食すると周囲から湧き立つどよめきに一瞬ビビり、先程まで皿に向けていた視線を上げると周りの視線を集めていた事にビビり、少し上体を逸らすと誰かにぶつかり視線を上げると目の前にギラギラした目つきのシャイニング（星六医療オペレーターに有らず）並のオリジナル笑顔をした見知らぬ誰か…後で聞いたところオリジムシ料理のシェフだった…が覗き込んでいて、思わず訳分からん悲鳴を上げながら弾かれる様に裏拳をかましてしまった…。

仰反った不安定な姿勢で、強引に繰り出したせいで過剰威力な、相手がこちらを覗き込んでいるせいでメツチャ当て易い状態で、裏拳を

放ってしまったのである……めっちゃ吹っ飛んだ、俺より遙かにデカイ男性フォルテのシエフが真上に思いつきり吹っ飛んだ、その結果シエフが顔面から天井に埋まってぶら下がる事になってしまったらしい……ギャグかな？

因みに俺は思わず反撃して吹き飛ばしてからの記憶は発狂してたせいで殆ど無く、その後は全力で走って龍門の自宅まで逃げ帰っていたらしい……あの手のマジキチスマイルは狂信者連中思い出すからマジで無理なんだよなあ……。

四十日目 天気：晴れ

気付いたら自宅のシエルターでぶっ倒れていた四十日目の昼、此処で何があつたか思い返して漸くやらかしに気が付いた俺氏、恐らく顔面蒼白に……完全にやらかしちゃったよなあ……そんな事を考えながら恐る恐る電話を見てみると、一時間毎にロドスから入ってる留守電に思わず目逸らし……ほんとすいませんでした。

こちらから連絡すると向こうからメツチャ安堵の声がして何事かと焦っていると、まさかの……というかやつぱりエフイーターが挨拶せずにかも俺がヤバげな感じで発狂していたと聞いて不安がついているらしく、荷物引き取るついでにちゃんと話しつけてこいと言われた。

急いで昼食摂ってロドスへと向かったのだが、着いた途端クロー ज्याに捕まって昨日の遁走の時に壊れた壁やら天井、それに窓なんか諸々の修理代金を請求される羽目になった……どうやら一切力のセーブしてない脳のリミッターが外れた状態で逃げ回っていたらしく、ただ単に走らず壁や天井蹴飛ばして跳ねる様に逃げたみたいで食堂から出入り口迄そこかしこに俺の足形がついており、場所によっては凹んだ壁によって壁に内蔵されていたケーブルが断線した場所迄ありかなりの被害が出ているとの事……本当に申し訳ありませんでした。

脳内計算で預金ポイントがガリガリ削れる音を立てながら減っていくのを見て見ぬふりをしながら先日の部屋へと入ると、俺の事を視認したエフイーターに口ケツト頭突きを急所（鳩尾）にかまされた……

ま、まあ？ 日々鍛えていたからダメージは抑えましたけど？ 尚、向こうも鍛えているのでダメージはそれなりな模様…。

なんとかダメージを顔に出さずエフイーターのこれからの生活に激励を入れて不安を解消させていると、エフイーターからアーミヤが俺がわざとでは無いとはいえそこそこロドスに出した被害を払わせる為に業務提携させて資材集めさせようかと話していた事を教えられた…これ俺が悪いのかアーミヤが黒いのかどっちなんだろうか？

アーミヤブラック説は取り敢えず横に置いて当初の目的通りエフイーターを励ます事に成功したので、昨日置き去りにしていた荷物を取りロドスを後にしようとする時とアーミヤが待ち構えており、エフイーターの言っていた通り提携の話を持ち出されたのだが…なんか何時もより笑顔が黒かった気がするのはおれの被害妄想なんすかねえ？ 業務提携すれば支払い金額を本来の六割で良いとか流石に胡散臭いつすよ。

…まあ、流石に俺が原因だというのにそんな業務提携するからといって大幅な値引きしてもらうのは悪いので素直にそう伝えると「あれ？ 説明の仕方が悪かったですかね？」と首を傾げられた、一体どういう事なのかと此方も首を傾げながら言う「色々迷惑掛けられたのですから拒否権なんて有りませんよ？」と青筋立てながらスツゲエ威圧感のある笑顔で言われてしまった、これ黒いんじゃないかとただ単にキレただけっすわ…。

何その二つ名怖っ!?

四十一日目 天気：曇り

エンドレス修理、以上疲れた、寝る。

四十二日目 天気：雨

エンドレス修理セカンドインパクト、昨日は配線ばかり弄っていたせいで夢にまで配線のゴチャゴチャした模様が出てきて最悪な目覚めだった…。

昨日は精神削るような作業ばかりでアレだったが配線系は昨日で全て終わらせたので、残っているのは蹴り入れてベッコベコに凹ました壁の修理だけだったので、昨日の内に整形で作っておいた壁の運搬と嵌め込み及び固定だけだったのでまだ楽な作業だった…出来上がった壁を現場に持って行って嵌めてる時に必ずと言って良いほどすれ違う相手が目を剥いていたけどな…改めて振り返るとなんで俺は厚さ二十センチの金属板を「特大剣二本より軽いな」とかアホみたいな事考えて作業してたんだよ…きつと昨日の作業の疲れが取れなかったんだな、うん。

午前中に復旧作業を終わらせて「出来たあ!!」とか喜んでいたら見に来ていたアーミヤから「そもそもフィツシャーさんが壊さなければこんな事する必要無かったんですよ?」とマジレス返されて無事撃沈、ですよねーと軽く返して後ろを振り向くとアーミヤだけでなく何故かアーミヤの後ろの離れた場所にドクターまで居た。

何故か人の気配が一気に増えたのは分かっていたけど、サードアイ使ってなかったから誰かまでは分かっていたいなかった俺氏純粋にビツクリ…ってか俺が驚愕した事でアーミヤもようやく気が付いたのか振り返ってビツクリ、ドクターもドクターでアーミヤに気付かれてなかった事にビツクリ、コントかな?!

そんなもってサードアイを使ってみればドクターが居るならば必ずと言って良い程居るドクター見守り勢も発見、といっても恐らく記憶喪失になる前のドクターなのか見守り勢というか護衛の数は控え

め：何とか確かには原作でエンカクが言っていた機械染みた所が感じられるこのドクターは慕われる奴には盲信的に慕われそうな雰囲気があるんだよな。

特に自分の事を駒の様に考えてる様な奴や自分の命は度外視で兎に角結果求めてる様な『何が何でも勝つ事』を第一に考えてる様なタイプには好かれそう：逆に生きる事が主目的の奴からはいつ死兵扱いされるか分かったもんじゃないから滅茶苦茶苦手に思われてるんだろうなという感じかね？

：そう考えるとロドスに来るのって基本的に鉍石病が原因だから、死病故の覚悟ガンギマリな奴か、少しでも長く生きたいから治療目的で来る奴かの二種類かだから原作での『常勝の有能指揮官』や『殺戮兵器みたいなヤベー奴』っていう極端な評価も納得なのか？

実際どうなのかねえ？ 閑話休題だ。

なんで医療部門のトップであるドクターが来たのか分からず質問してみると、いきなり「失礼を承知で聞くが、貴方はあの『血煙』の関係者なのだろうか？」と聞かれてドクター以外の全員がビツクリ。まあ、俺と他のオペレーター達とは驚きの質が違ったのだが：オペレーターの反応は「ち、『血煙』ってあの『血煙』ですか!？」みたいなのに対して俺の方は「何その二つ名怖っ!？」だったからな。

俺の反応にドクターは「おや、違ったか？ 大剣の構え方を見て関係者かと思ったのだが：？」と首を傾げていたが、俺の傭兵時代は師匠と一緒に世界をぶらつく様に転々とし、時折師匠が何かしらの依頼を受けてきて戦い方を教えてもらいながらこなしているだけだったから二つ名とか全く知らなかっただけである。

話を聞いてみると共に大剣等目じゃない程巨大な剣を持っており、片や鋭過ぎる得物で風のように戦場を駆け抜けすれ違い様に相手をぶつ切りにする『鎌鼬』と、片や全身鎧を着込んだ上で一本でも身の丈を超え使い手自身を覆える程の鉄板の様な剣を二本枝切れの様に振り回し、切った相手がその刃の鈍さによって切れず弾けさせる『血煙』：戦場で遭えば殆ど死も同然の死神傭兵コンビだが敵対した相手が

殆ど死んでいる上に何故か情報が異様に少なく、依頼主でさえもよく覚えていない二人組との事。

：うん、どうにも話聞くに師匠と俺で確定っぽいな、いい歳してふざけた足の速さで戦場を斬馬刀持って駆け抜けてた師匠と、まともに刃を立てて切る事が苦手だったのと鎧着込んでくせに双剣は防御に向いてるからって事で敢えて鈍の特大剣振るってた俺：話を聞くに師匠の二つ名が『鎌鼬』で俺の二つ名が『血煙』か：使ってた特大剣がダクソIIから出てくる『煙の特大剣』みたいだなあとか思ってたから二つ名がそれっぽくなるのかなんだかなあ：。

それでもって多分その『血煙』とやら俺だなんて軽く話してみたら今度はドクター以外がドン引きしてたけど、少ししてからドクターも何かに気付いたみたいだにドン引きでした：何かあったのかと聞いてみると七ヶ年程前から『血煙』の二つ名が流れていたのに俺の履歴で現在二十三歳だと知っているので、まさか十六の頃から人間の限界超えてる様な重量武器振り回してたのかと思いつた事で引いたらしい：言われて俺自身呆然としたね。

あの時はもう『海』関係でメンタル面ボロボロだったから兎に角生き残る為に強くなる事考えてて、師匠もアビサルでちよつと目を話した際に三日姿を消したかと思えば廃人一歩手前だったらしい俺を見て憐み、強くなりたいと言った俺の為に手解きを積極的にしてくれてたから、高々装備の総重量が数百キロ単位あっても関係無いってなつててそれが当たり前だったんだもんなあ：いや、文面に書き起こしてもやっぱ頭おかしいわこれ：。

思わず遠い目しそうな閑話休題。

余りにも追い詰められてて気付いていなかった自分の奇行に思わず頭を抱えて蹲っていたらドクターに謝られた：自分に不安定な所がある事は分かってはいたものの、常識レベルで訳分からん事ほざく様になってたのはちよつと泣きたくなってくるが、またどっかで常識覚え直す事って出来ないかなあ：記憶喪失にでもならないと無理かなあ：あれ？ つまり原作でドクターが救出された状況に俺がなつ

ていたら常識覚え直すチャンスになる…？

：いや無理だな、『海』関連の出来事はそんな事じゃ忘れ切れないだろうし、かえって強迫観念に脅されて今度こそ取り返しのつかない事になりそうだから辞めておこう。

また話がズレた、閑話休題。

気を取り直してドクターに何故ここに来たのか質問すると、いつだってロドスは戦力が足りないのでもしもまた傭兵『血煙』として雇えるのなら雇いたいと思いたいのだと言う…別に万屋名乗っているから荒事だつてやれなくはないけれど、もしも傭兵時代の面倒事とかが来たら嫌だから傭兵時代ではサブウェポンだった鉤分銅をメインに仕立て上げたのになあ…つて感じだったな。

ただでさえロドスには傭兵や殺し屋上がりのバトルジャンキーな連中（代表例：エンカク・ラップランド）が居るっていうのに、そんな中に入ったら厄介事待ったなしな訳だし、万が一俺が怪我する事で仲間が巻き添え喰らったら洒落にならないので色々ボカしつつ断る事にした…つていうかドクターが勧誘し始めてからアーミヤから視線の圧が来て辛かった…。

そんなこんなで勧誘を断って自宅へ帰り以前決めたシエスタへの視察準備に取り掛かったのだが、今回は以前行った時みたいにカラオケ枠はあるのだろうか？ もしもあるならまた何か前世での曲を布教する為に音楽データを持っていくとしようかね？

四十三日目 天気：晴れ

長距離移動とは孤独との戦いである…明確な目的地が決まっているシエスタ行きという事で試しに自動運転機能に任せて移動していたが、ただでさえ暇な長距離移動なのに更に運転さえもしなくなって暇具合がヤバい一日だった…運転だけは基本的にちゃんとしておこう。

怒りの猛進（普通に遅い）

四十四日目 天気：晴れ

一日中車に乗ったままパソコンでプログラム組んだり武器の手入れしてるだけの暇な日だった、途中少し前に天災のせいで変化してた地形もあったが自動運転の危険察知も無事働きちゃんと回避したのを確認出来たのは収穫だな、今度ロドスに技術提供して開発の手伝いでもしてもらおうかね？

四十五日目 天気：晴れ

自動運転に任せていたが大きな事故も無く無事シエスタに到着、流石に駐車までは自動運転には任せきれないので何時でも止められるよう気を付けながら自動運転に任せていたが、ちゃんと周辺カメラの映像を元にシステムが判断を下して駐車する事に成功したのでまあ一安心だろう：後は帰りに移動都市である龍門へとちゃんと辿り着いてくれるかどうかだよなあ…。

まあ、後の事はいつも通り未来の俺に任せといて早速火山の調査に乗り出したのだが、取り敢えず『そもそも本当に問題は起きてなかったかもしれない』という可能性がないかどうか調べる為に天災トランスポーターの資格を活かして天災トランスポーター用の資料館へと入ると、同業者が自身の嘘を暴く事を危惧したのか今回の黒幕にして真面目系クズのクローニンが、本人は隠せていると思ってるらしい人を見下した白々しい笑顔で寄ってきたので、適当におべっか言いつつここ数年の火山についての記録を見せてもらうことにしたのだが：予想通りの嘘っぱちで手抜きな資料だった。

何年か前の資料幾つかを適当に数値入れ替えて当て嵌めるだけで気象情報や他の情報はそのまま記載、火山の活動が活性化しつつある事で連動して発生する異常事態が起きつつあると簡単に判る情報を丸々載せてあるという、見る奴からすれば馬鹿にしてんのかと言いたくなる様な内容に思わず呆れそうになったがその場はポーカーフェイスで誤魔化し退出、出てから暫くは黒服連中に追跡されていた

が俺がオブシディアンフェスティバルの準備をする為にイヤホン着けてパソコン弄ってる様に見せながら裏で奴等の持つている無線を傍受していると、奴等馬鹿正直に俺がオブシディアンフェスティバルの準備をしていると報告してクローニンも口汚く俺を馬鹿にしながら黒服共を撤収させていた：分かっていたけどアイツ本当に見ただけの真面目系クズだな。

後程準備の片手間に他にも何かしらアクション取ってこないかクローニンの行動を把握する為、クローニンが居る屋敷の監視カメラをハッキングしていたのだが、特にこれといった動きも無く護衛（実際はスパイ）をしているシュバルツと合流し、真面目そうに仕事をしているだけで奴の一日は終わった：まあ流石にクズといえどそんな堂々と不正したりはしないわな。

四十六日目 天気：晴れ

この時期のシエスタらしい快晴、十数年前に比べれば徐々に徐々に上がっている気温もあるがオブシディアンフェスティバルの参加者や観光客によつて更に暑く感じる中、俺はシエスタ火山の麓へと足を運んだ。

目的地は火山観測ステーション、資料館には偽情報しかなかったが、流石に観測ステーションの情報までも偽装していればいざという時に自分達まで噴火に巻き込まれて死にかねない為、そこら辺は偽装していないだろうという予測からどう考えても火山が活発化した事による気温の上昇や異臭のする中火山観測ステーションへと潜入、及び現段階での火山情報を抜き出す事が今回の目的だった。

そして忍び込んだ火山観測ステーション、目的のデータを見れば噴火に関する観測結果は『最も長引いても約四週間後に噴火の可能性大』との事：知 っ て た ……ってかそれ以上にアレだったのが黒曜石の違法な採掘による収入による帳簿があった事と、その違法な採掘の最中にオリジムシによって負傷する奴が増えているっていう報告書が一緒に置いてあった事だったな：普通特定の事してて野生動物が襲ってくるなんて餌場荒らしてるからって分かるだろうに。

その後は火山観測ステーションに寄った足で黒曜石の違法採掘場へ、火山観測ステーションが最早黒曜石の違法な採掘に於ける集積所でもあり、採掘に関する現場周辺の地図やシフト表なんかも置いてあるのを見つけたので一丁縛り上げてやろう思ったのだ。呆れ眼で向かった先には意気揚々と黒曜石を採掘する男達、見張りの意識を片っ端から締め落として物陰にまとめて隠しておく。

さてこれからどうしようかと眺めていれば、本来の餌場から黒曜石が不足したのかシエスタ火山の麓まで餌の黒曜石を探しにきたらしいオリジムの群れを発見、丁度良いやと奴等が集めていた黒曜石の塊を一つ失敬して力任せに握り碎き、オリジムの注意を引くようにポツポツと採掘場まで砕いた黒曜石を撒いていく。餌に釣られたオリジム達は採掘場で自分達の餌を大量に強奪しようとしている密猟者を見つけ怒りの猛進（普通に遅い）

まあ、幾らオリジムシが牛歩の如く遅いといっても、十数どころじゃない数のオリジムシが放つキイキイという甲高い鳴き声には不快感しかなく、異変を察した密猟者達は大量のオリジムシにクモの子を散らすように逃げ惑い、応戦しようという奴は一人たりとも見当たらない、腑抜けかな？　とも思ったがそもそもアイツらは密猟者なんという楽して稼ごうという軟弱者であり戦闘職ではないのだろう、更について先日にも当のオリジムシによつて負傷者が出ている始末なのだ、負傷の原因が数十単位で襲ってきたらそりゃまあトラウマもんだわな。

特に労力を使わず採掘していた密猟者共を追い払った俺は茂みに隠しておいた見張りの密猟者共の元へと行き、連中の持ってた無線や携帯を拝借して盗聴器を取り付け、隠れ直してからワザと一人起こしてやった。

起きた男は他の寝てる奴等を見つけて何があつたのかと起こそうとするのだが、その声を聞かれて黒曜石を貪っていたオリジムシがまた密猟者共が来たのかと威嚇しながら接近、見張りをしていた密猟者達は目が覚めればトラウマ必須なオリジムシの群れに追われ、手付かずの自然溢れる坂道で木の根に引っ掛かってズッコケたりと見るも

滑稽なくらい慌てて逃げ帰っていった。

そんな訳で無様に逃げ帰った奴等から盗聴タ〜イム、出るわ出るわクローニンとの会話でボロボロと犯罪の証拠が：てつきりイベントで俺の天敵になり得るシュバルツ（一点突破型狙撃オペレーター）とストーリー上でバトつてたから久し振りに煙特持ってきたけど、これ集めた証拠を市長に流してやればシュバルツ味方にした上でクローニンの奴ぶっ飛ばせるのでは？

なんて考えていたら記憶の彼方に薄っすらと覚えのある悲鳴が聞こえ、急遽駆け付けてみればシエスタ市の市長の娘である星五医療オペレーターであるセイロンがオリジムシの大群に襲われている真っ最中：確かこの展開って時間軸的には原作とかなり近いんじゃないか？

流星に面倒なのでセイロンと機材を掻っ攫うようにしてその場を離脱して事情を聞いてみれば、やっぱり現状がおかしい筈なのに問題無いの一点張りをしているクローニンに業を煮やして医療オペレーターなのにも関わらず機材片手に飛び出してきたらしい：流星は猪突猛進系アクティブお嬢様、座右の銘は『案ずるより産むが易し』なのかな？

：なんて心のどつかで現実逃避してたのが駄目だったのか、それとも性質を理解していたなら真っ先にクローニンが悪事を働いている証拠を示せば良かったのか：天災トランスポーター資格を見せながら俺もおかしいと思ったから調べに来たという事や、現状のシエスタ火山に関する見解なんかを伝えて信用してもらおうと話していると上手い具合に成功したのだが、信用を勝ち取り過ぎたのかクローニンが真っ黒である事を話す前にセイロンが急に俺の腕を取ってクローニンに伝えようと引つ張った事で打ち切られ、落ち着いて話そうにも既に街中で悪目立ちしている為いっその事直接対面した状態で悪事をバラしてやろうと方針転換する事に：多分この時俺の目は死んだ魚の様だったに違いない。

幸運Eなのかと思ったね

やらかした (某アニキソング風)

セイロンに引き摺られながらクローニンのところに行ったら早速セイロンとクローニンによる口論が始まってしまった、しかし突っ掛かるセイロンをクローニンのがのりくらりとはぐらかすという事を繰り返して一向に話が進まず、面倒になってきた俺が二人が口論してる横から火山観測ステーションで抜き出してきた予測情報を暴露してやると、二人だけでなく周りに居た黒服連中までもが凄い顔をしていた。

そんな皆して愉快的顔していたのでつい出来心で公開している情報の詐称も雑だし観測ステーションの警備も正直言つてザルだったんだよなあ：とかそんな感じで煽つてやれば青筋立てたクローニンが黒服共にヒステリックな口調で俺とセイロンを捕らえる様に指示を出し、黒服共が一斉に襲い掛かってきた。

廊下からも入ってくる黒服相手に俺一人だけならどうにでも出来たが、セイロンを護りながらは流石に厳しいと判断して脇に抱えて黒服共を飛び越えながら窓を蹴破り脱出、シエスタ市長が視察に行っているであろう場所まで逃走する旨を伝えてシエスタを龍門市街みたくに跳び回る事で黒服連中を攪乱しようとしてたら、半ば程でまさかの鉤分銅のロープを射抜かれ地面に近かったのもありそのまま墜落：幸い抱えていたセイロンに怪我は無かったが新手として怒れるシユバルツが黒服に合流して追われる羽目になった。

側から見れば大事なお嬢様抱えて逃げ回ってる俺は人攫いの不審者でしかなく、そのお嬢様も激しく動くのは駄目(「生理的耐性」普通)だったのか顔色を悪くしており弁明してもらえず、仕方なしに人混みの中を縫うようにして逃げ続けていたのだが、奴等あろう事か一般人が居ようともお構いなしに撃ってきた為思わずプツン、シユバルツが叱責していたが話を聞かず尚撃つてこようとしていたのでシユバルツに撃たれる覚悟でビルの上へと登り、そのままビルを伝って目的地の駐車場へ。

シュバルツも流石にかなり高い場所に居る俺を下手に撃てばお嬢様が危ないかもしれないという事で撃つてこずにいたのだが、黒服共はお構いなしに撃ってくる始末……これらに関しては何でクローニンの真面目系層に対価を払わせる事にして、駐車場に着いて即座にセイロンを俺が乗ってきたトラックの荷台に起き、念の為に持つてきていた煙特を装備して黒服共を待ち構える事に。

俺のイメージ元となっている『煙の特大剣』が一人隠せそうな幅に主人公の身長1.5倍程の長さで腕位に分厚い刀身を持つのに対し、俺が使っているのは柄頭含めてギリギリ中型トラックに乗る程度にサイズアップしちゃってる魔改造品、あのアビサルでの悪夢の際に拾いなんとか悪夢から抜け出す為に振り回していたある種心の抛り所であるそれと、悪夢の後に偶然見つけた瓜二つの特大剣を取り出して追って来ていた黒服共へと切っ先を向け宣戦布告してやった。

流石に傭兵稼業から退いて三年経っていたからなのかどうなのかは知らないが、黒服共は少しだけ怯みはしたものの虚仮威しと判断したのか、驚愕に眼を見開くシュバルツが慌てて静止するが、それを聞かずに盾を持った奴が三名程チャージを仕掛けて来たので容赦なく反撃する事に。

軽く横に一振りしてやれば奴等の盾を構えていた両腕諸共盾を血煙へと変えてそのまま呆けている黒服共へと突撃、流石に俺を注意していたシュバルツは飛び退いたものの全く反応出来てなかった黒服共は全員手足のいずれかを装備に合わせて吹き飛ばしてやり、全員最早傭兵としては再起不能な状態へと追い込んでやった……流石に街中だったので命までは取らないでやったのだが、そこから中で悲鳴やら呻き声が満ちていてある種の地獄みたいになってたな。

そんな感じで堅気には手を出さないといい傭兵や裏稼業のマナーを守らない輩を一通り粛清した後、戦闘中何故かセイロンの元に向かったまま何も此方に手を出してこなかったシュバルツを不思議に思い顔を向けると、お嬢様育ちだったセイロンには刺激が強過ぎたのか盛大にぶち撒けており、シュバルツもそんなセイロンを護ろうと此方にボウガンに向けてはいるが狙いはブレブレで腰も抜けており表

情も恐怖に染まって真っ青になっていた：思わず俺シユバルツになんかしたつけ？　つてなつたな。

取り敢えずこれ以上怖がらせないようその場で話を聞くに、どうもシユバルツが傭兵時代に俺と師匠にかち合っていたらしく、その時は依頼主が他にも雇っていた傭兵団が文字通り全滅し、シユバルツ自身も傭兵団が全滅していく中で原作の草むらの様なバレない場所に隠れていたのにも関わらず、サードアイ持ちの俺には意味無く見つかり追いかけて回されるもなんとか逃げきり、その後も二回俺と師匠が受けた依頼に敵サイドとしてマッチングしてしまい、一度目は以前と同じ様な状況に陥るが場所が廃鉱であった為一か八かで通路を崩してなんとか生還し、二度目も見つかり絶体絶命の中足元を滑らせ雨によって増水していた川に落ちてシユバルツに流れ着く事で現在のシユバルツ市長に救われる形で逃げ切った模様。

：もうね、幸運Eなのかと思ったね、確かにそんな経験してたら俺見て恐怖に染まるのも仕方ないわな、ってか話聞き終わった後にセイロンが顔真つ青のままだったけど治療アーツ使って黒服共の治療始めてたのが意外だったな、確実に俺諸共害そうとしていた事は分かっていたのに病院への連絡も入れていたわけだし：俺自身はアイツ等の自業自得って事で出血死しようが気にしないつもりだったんだが、やっぱり医療オペレーターって事だったのかね？

その後はいつの間にか和解してたセイロンとシユバルツに落ち着いてもらったり、二人にクローニンの悪事の証拠全部ぶちまけたり、セイロンが呼んだ救急車に釣られて来た野次馬観光客の中に龍門の法律関係に少しばかり詳しい為他所の法律にも少しだけ精通している観光客C（）さんに冷たい目で見られたりした。

その後俺がクローニンがしていた悪事の証拠を持っている事をシユバルツがシユバルツ市長に伝えた事で市長率いる警察機関と共にクローニンを電撃逮捕、警察が部屋に踏み入れようとした時に往生際悪く俺が蹴破った窓から逃げようとしていたのだが、もしもクローニンが逃げようとした時の為に屋根の上に待機していた俺が鉤分銅で勢いよくぶら下がる事で飛び出し、空中で身動きの取れないクローニ

ンへと横つ面に膝くれてやった事で無事ダウン、なんか砕いた感じ
あったし右頬がグロい感じに腫れてたから右頬粉々になってるん
じやないかな？ イケメンザマア…。

そんな感じでクローニン関係の事件は解決して原作通りシエスタ
は火山噴火の天災を回避する為移動都市へと機能を移す事に、市長一
家の関係性はシュバルツの時と同じくいつの間にか話が終わってい
たのか家族円満になつてて正直謎、取り敢えず市内に関する問題はこ
れで解決したので大団円とは言えないがめでたしめでたしではある
のだろう。

まあ、今から一人でポンペイ駆除しに行くんですけどねえ!! マ
ナーのなつてないクローニン関係の奴等にキレててスツカリ忘れて
たわドチクシヨウ!!

四十七日目 天気：晴れ

くじよかなりよう、そとがやかましいけどつかれた、ねる。

幕間 『裏の人間としての粛清』

sideセイロン

あの方との出会いは一言で言えば『疾風』でしょうか？ 明らかに
おかしい火山観測ステーションの観測結果とそれについて問い詰め
てもものりくらりと追求を退けてくるクローニンさんに業を煮やし
て私自身がシエスタ火山に機材を持って調査に向かった結果、何故か
群れを成していたオリジムシに襲われ危うく怪我するという所を
あつという間に救い出してくれたのです。

いきなり拐われる様な形だったので驚いていたのですが、シエスタ
市の近くで解放してもらった後に自己紹介をしてもらえば、取得試験
が軒並み難しい事で有名な天災トランスポーターの資格を保有して
おり、クローニンさんに見せてもらった資料がどうしても腑に落ちな
かったので自力で調査しにきた所、例年に比べ上昇している気温や先
程私を襲ったオリジムシの大群発生が頻繁している事や挙げ句の果
てにはシエスタ火山に設置されている計器の傾きから測られるシエ
スタ火山の膨張率等、定型的な物から口伝に語られるもの等あらゆる
シエスタ火山噴火による天災のサインを見つけ出したとの事でした。

：今にして思い返せば、どうして火山の膨張率等という数日程度で
は集められない様な特殊な情報まで有ったのでしょうか？ 確か
フィツシャーさんは数日前にシエスタに訪れたばかりだった筈では
？ …まあ、もう既に過ぎてしまった事は良いとしましょう、正直あ
の方に関してはあの戦闘の時に視えた何かこう『関わるべきではない
ナニカ』がある様な気がしますし。

兎に角フィツシャーさんの示す数々の証拠に自分の推測は正し
かったのだと確信した私は、恥ずかしくも舞い上がってしまい強引に
フィツシャーさんを引つ張るようにクローニンさんの元へと向かい、
そのまま討論へと発展させてしまいました。暫く討論が続いている
と私の後ろで控えていたフィツシャーさんが痺れを切らした様な口
調で現在の火山観測ステーションから抜き出したという情報を開示
したのですが、その内容がシエスタ火山の状況や噴火まで後四週間も

無いという、麓ではまだ話していなかったといつてもない情報を次々と出してきたのです。

行動力には自信のあった私でも思わず驚く様な内容にクローニンさんも驚愕していたのか何も話さずにいると、フィツシャーさんは嘲笑うかの様に鼻を鳴らしてやれ情報を詐称する手際が雑だったやら火山観測ステーションの警備がやる気の無いだらけた連中ばかりで管理者の質を疑った等、次々とクローニンさんが関わる不満を並べていたのですが、あまりの内容にクローニンさんが激怒し私達を捕らえる様周りのSP達へと指示を出し、それに対してフィツシャーさんが小声で「やべっ…」と言っておりましたから…ええ、恐らくあそこ迄やらかす意図は無かったのでしょうかね。

時間が一段落した後には本来なら私を通してお父様へと連絡を取ってもらい、そうする事で正式に法の下クローニンさんを逮捕する様頼むつもりだったと聞いたので、本当に私の暴走でご迷惑掛けてしまいました…フィツシャーさん本人はもう済んだ事だしプライベートビーチも使用させてもらつてのんびり出来たから気にしてないと仰っていました、その時の雰囲気も何処となく煤けていましたし…ちゃんと話を聞いていればあんな不祥事を晒す事にもならなかったのだろうと考えれば、我が事ながらもつと落ち着く様にする努力をしないといけませんわね…。

思い出すたびに少し憂鬱ですわね…閑話休題ですわ。

襲い掛かってくるSP達に捕まらない様フィツシャーさんは私を抱えて窓から飛び出し、そのままお父様の元へまで移動する為にフィツシャーさんが乗ってきた車へと向かう為、市街を腕に巻き付けた鉤縄でまるで飛ぶ様な縦横無尽の移動で攪乱させていたのですが、それによつて急激に変わる景色に私が酔ってしまいました。

更に悪い事は重なるものなのか、『酔って気分が悪い私とそんな私を抱えて移動しているフィツシャーさんにそんなフィツシャーさんを追い掛けるSP達』という構図のせいでSP達に合流したシユバルツがどうにも勘違いしてしまい、フィツシャーさんの鉤縄を一本撃ち

抜き私達は墜落、私が酔っていてシュバルツを説得出来ない為、上を移動すれば撃たれると判断したフィツシャーさんは私を抱えてそのまま街中を逃走し始めたのですが此処でまさかの事態が…。

なんとSP達の中に居た一人が他の観光客達も居るというのに発砲してきたのです、幸いこれはその動きに気が付いたらしいフィツシャーさんがもう一本残っていた鉤縄に付いている金属塊を用いて撃墜させたのですが、思い返せば此処からフィツシャーさんは激怒していたのでしょね。

立ち止まりサングラスをしても分かる程険しい表情をしたフィツシャーさんは、シュバルツがSP達に静止を効かせているのを見ると即座に先程銃弾を撃墜した鉤縄を用いて建物の上へと上り、今度は攪乱せずに一直線に駐車場まで向かって行つたのです。

駐車場に着きフィツシャーさんが乗ってきたというトラックの荷台に私を降ろすと、フィツシャーさんは荷台の床下からまるで鉄塊の如き大剣を二本も取り出し、それらを両手に一本ずつ、まるで重さなど微塵も感じてないかの様な堂々とした佇まいで待ち構え始めたのです。

私達に追い付いたSP達はそんなフィツシャーさんの様子を訝しんでいましたが、ただ一人シュバルツだけは武器を構えるフィツシャーさんを見て顔を真っ青にしていました：フィツシャーさんの事を知っていれば敵対すれば恐らく誰であってもそうなるでしょうね。

フィツシャーさんの構えを見て何人かが『血煙』の単語を出していましたが、知らなかったりそもそも逸話が酷過ぎて信じていない人が殆どだった為愚かにもシュバルツが静止するのも聞かず三人の重装SPが突撃、迫り来る壁の様な三枚の盾を目の前にしてしかしフィツシャーさんはいつの間にか右手に持った大剣を左肩の上へと振り抜いており、迫っていた筈の盾三枚はまるで空間毎削り取られたかの様に消えており、その盾を構えていた三人はそれぞれ盾を構えていたであろう腕が肘毎無くなって赤銀が散る中、赤と白の断面図だけが生々しくも現実味の無い光景として映し出されておりました。

そのままフィッシュャーさんは振り上げた右手の大剣の腹で無造作に三人を真横に吹き飛ばすと、膝を曲げてーそして『アレ』が現れました。

黒くて暗くて昏く深い、闇のような霧のような煙の様な、沸き立つ様に昇っているのに纏わり付く様に彼の身体から滲み出ている『アレ』に覆われた彼はもはや輪郭さえも朧げなのに煌々と瞳をアカく灯し、次の瞬間舗装されたアスファルトを砕き一瞬でSP達の目の前に立ち：悪夢が始まりました。

今にして思えば彼は一応その場では死なない程度の手加減はしていたのですが、その影の様な黒い姿と舞い散る赤い煙、そして響き渡る悲鳴と痛みに呻く声が混じり私は思わず戻してしまい、何時からか側に居てくれたシュバルツに抱き締められながら震えて目と耳を塞いでいました。

長い時間そうしていた気がしましたが実際には五分も掛からなかったこの一方的なフィッシュャーさんの言う『裏の人間としての粛清』は、当然の様にSP達全員が戦闘不能になるという形で幕を閉じました、私はその後は無我夢中で倒れた彼等を治療して回り、気が付けばアーツの使い過ぎと極度の精神的な疲労によりその後の事は碌に覚えておりませんでした…。

if√キメラ その一 (・ω・) シヤキーン
!!

『カレ』ー名前はヌルというらしいですーが何時からロドスに居たのか誰も知りません、話を聞くにライン生命のオペレーターであるサイレンスさんとイフリータさんを保護した後にヌルさんが複数扱う特有のアーツの一つを用いて着いてきたのだろうとだけ予測されていますが、ヌルさん自身が何時の間にか友人であるイフリータさんがライン生命から居なくなっていたのを感じ取り、アーツを用いて『憑いてきた』と説明しているので恐らくそれ位の時から居るのでしよう。

ヌルさんは我々ロドスに対して非常に友好的な存在です、普段の見た目はまるで黒いスライム状の不定形な液状生物の様ではありませんが知能は高く、此方の会話内容も全て理解してモーションによって簡単な意思疎通が出来る程にはあります。

ヌルさんは最初基本的には床を這う様に移動していましたが、暫くしてからその見た目に嫌悪感を抱くオペレーターや職員、それに子供達から怖がられている事を知ると、球状になって浮かんだり転がったりと様々な移動方法を試して怖がられない方法を模索する様になり、この間は全体に柔軟な毛を生やした姿になりその姿に堪えきれなかったレツドさんが一日中抱き締めていました。

ヌルさんにはコアと呼べる物がある事が分かっていますがそれを曝け出した事は一度たりともありません。どういった物なのか質問してみると『とてつもなく危険な物』であり『自身はコレを保管する為のモノ』であるとの事です。

他のライン生命からの出向者や亡命者達にヌルさんの事を聞くと、一番仲が良いイフリータさんは『昔も今と変わらないくらい優しい兄ちゃんだったんだけど、最後の実験に連れて行かれてあの姿になって戻って来てからは優しいのはそのままなのに、姿以外にもなんかどっかがおかしくなっちゃった』と悲しげな表情で述べ、サイレンスさん

特に何かしてくるといふ訳でもないのだが顔の代わりなのか絵文字が書かれており、まるで穴が開きそうな程見てくるのは少しばかり居心地が悪かった。

(＊、ω、＊) ヨシ覚エタ

「その顔は流行らないし流行らせない」

「何の事ですか？」

「ああ、いやなんというか思わず否定しなければならぬ気がしてな……」

(´・ω´、) ショボン……

「ああ、悪い悪い……それにしてもかなり感情豊かなんだな」

クルクル変わる表情(´?)によつてなんとなく言いたい事が分かる効果音が聞こえる様な気がして不思議そうに見つめるドクター、見つめられている本人(´?)もドクターと同じくらい傾いて不思議そうにしているのは側からみればコントか何かの様だった。

そんな二人を微笑ましそうに見ていたアーミヤだったが、何かを思い出したかの様に小さく「あ」と洩らした。

「そういえばドクター、そろそろ龍門に到着する予定時刻ですので準備な程をよろしくお願いします」

「もうそんな時間か、分かったすぐ準備しよう」

(´・ω´) ドツカ行クノ?

「これから移動都市の龍門にな、一緒に行くか？」

「えっと……連れて行つても大丈夫なんでしょうか？」

(´・ω´……) サラサラサラ……

「よし、一緒に行こう」

(´・ω´……) シャキーン!!

どうやら行く気満々だったらしいヌル、露骨に形状が崩れはじめたがっかり感増し増しである。そんな期待されてたのならば仕方ないと連れて行く気MAXなドクターと後でケルシーに怒られないか心配なアーミヤ。

因みに過去に暴走して移動都市一つ消し去ったヤツ連れて行くとか間違いないお叱り案件確定なのだが、記憶喪失でケルシーの事を忘

れているドクターは後の事など全く知らず呑気なものである。

〔龍門検問所〕

龍門の上級警司であり、龍門近衛局の特別督察隊隊長でもあるチェンは混乱していた、本日会う予定だったロドスのトップ二人が予定時刻よりも十四分遅れて到着した事に苛立っていたが、その苛立ちを遥か彼方に吹き飛ばす程意味不明な物体を見たからである。

ノアのすぐ横を浮遊する謎の黒い物体、先程からノアの周りを右に左に行ったり来たりで忙しく、あまりに落ち着きが無い為ノアが慌てて抱え込む形で捕まえているがニユルンと音がしそうな動きで簡単に抜け出してソワソワと周りを気にするかの様になっているのである、これにはチェンだけでなく他の龍門の警察や避難民も困惑必須である。

「お待たせしました」

「あ、ああ…先に報告は聞いていたから知っている…のだが…」

「えっと…やっぱり気になりますか？」

「…なんなのだアレは？」

「…ω…」 異常無シ!!

「ヌル、分かったから少し落ち着いてくれ」

チェンが訝しげに見つめる先には矢鱈と張り切っているヌルとそんなヌルを嗜めるノアの姿があった。

「こちらはヌルさんといいます、少し特殊な事情からアーツによってこの様な姿をしているのだそうです」

「自分自身の姿を変えるアーツなど聞いた事もないが…それにやけに落ち着きがないのはどうしてだ？」

「いえ、そこらはただ単にここに来るまでにレユニオンによる想定外の襲撃があった際、ヌルさんが戦闘に飛び出そうとしていたのでDr. ノアがストップを掛けて周囲の警戒をしてもらった様言ったからだと思います」

とんでもなく単純な理由に思わず肩の力が抜けそうになるチェン

だったが、意識を切り替えて話を進めようとする。

「…そうか、取り敢えず問題が無いのならばそれで良い。さて、ロドスの者はアーミヤとDr. ノアのみついてきてくれ。それ以外のものは龍門周囲の警戒に当たってくれ」

(´・ω・´) 僕ドウスレバ良い？

「あく…みんなと一緒に待機していてくれないか？」

△(´・ω・´) 了解!!

「……………」

やっぱり無理かもしれない…。

if√キメラ その二 (・ω・;) ナンカツカマエル
ノナレテナイ?

龍門のトップであるウェイ長官との話を終えてロドスの皆が待っているゲートの所まで戻ったドクターとアーミヤだったが、戻って即座に困惑する事になった。

「あく…つと、あれは一体何が起きているんだ？」

「は、離しやがれ!! なんなんだよコイツ!」

「あ、ドクターにアーミヤ、それにケルシー先生もおかえりなさい」

ゲートを出た三人がまず目にしたのは普通に立っているのと何故か空中に逆さ吊りされた何人かの避難民、そしてそんな彼等を見張る様に囲っているロドスのオペレーター達の姿だった。

囲まれている避難民はどうかや感染者らしく、他の避難民は遠巻きに嫌悪感を目に馴染ませて見ているのだが、だからといって何故、誰がこの様な状態にしたのかが一切不明なのであった。

「なあ、アレは一体誰がぶら下げているんだい？」

「えっ? 最初からこうして感染者の不法侵入を阻む為にドクター達が連れてきたんじゃないんですか？」

「えつとお…何のことでしょうか？」

「…つまり完全にあの子の自己判断だったのかな? あつ、丁度龍門の警司さんが捕縛具持って来ましたし降りて来てもらいましょつか。おーい、もう降りて来ても大丈夫ですよ」

そう言うロドスオペレーターの声に反応したのかスーツと降りてくる感染者達。その姿をよくよく見てみると見覚えのある質感の黒いナニカがそれぞれの足首に巻き付いており、それは捕らえていた感染者達を地面に降ろすと見覚えのある楕円形状の形態へと瞬く間に姿を変化させた。

(・ω・) アツ、才帰り

「まさかのヌルだった…なんか明らかに元の大きさ以上に伸びてたけど質量保存の法則どこ行つた?」

「凄いですよねえ、取り敢えず龍門の警司さん達手伝おうと思ってたら『何か手伝える事はないか?』って感じに寄って来たんで、だったらもし感染者が居たら教えて欲しいって最初はそうお願いしたんですよ」

(・ω・) シツカリ見テタヨ!!

「それがどうして空中逆さ吊りなんかになったんだい…」

まるで一仕事終えて満足している子供の様にドヤっているヌルだったが、その柔らかさに溢れているフォルムからはとても先程まで数人吊り下げていた様な力がある様には見えなかった。

「あはは…声掛けた途端に並んでた一人の元に飛んで行っただんですが、私が近付いた途端にその感染者だった人が逃げ出しちゃいましたね。制止しようにも逃げられそうだなと思った次の瞬間には身体を伸ばして首に巻きつける形で捕まえたんですよ、それでも捕まっても尚往生際悪く引き剥がそうとするものだから今度は足首に巻き付いて逆さ吊りにする形で浮かせちゃったんですよ」

「ええ…」

(・皿・) 痛イノハ御免ダヨ

状況説明に思わず呆れ返るドクターとまるでグレてるかのように苛立っている雰囲気醸し出すヌル、どうやら逆さ吊りにされていた感染者達は相当暴れていたらしいが、今となっては頭に上った血のせいで全員グツタリと項垂れている間に龍門の近衛局局員達がやって来て、彼等を検査する為に連行していった。

「所で逆さ吊りされてなかった人達はどうかなんだい? 見た目は特に何ともないけれど、こうやって隔離しているという事は彼等も感染者なのかい?」

「えっと…体表に源石が表れてはいないんですが、どうにも血液中源石密度まで理解しているっぽくて今のところ分かれた全員0・15u/L以上の感染者ばかりという脅威的中率です。まあ、念には念をとって残りの避難民の方達にも検査は受けてもらっているのですが」

(●ω●) コノ目ニ見抜ケヌモノハ無シ!!

「ほおう、そんな特技があつたのk「オイドクターノア」ーナ、ナン
デシヨウカケルシーllサン？」

「どうしてヌルがここに居るんだ？」

ヌルの意外な特技に感心していると矢鱈と威圧感を発している笑
顔のケルシーからインターセプト、予想外の威圧に思わず片言になる
ドクターだったがこの場にいるヌル以外が威圧感増し増しなケル
シーに完全にビビっていた：尚、唯一アーミヤだけはビビっても即座
に諦めた様な表情に変わっていた、やっぱりヌルを連れ出した事がダ
メだったのだと気付けたのだろう。

そして始まるドクターと途中でアーミヤも加えたケルシーからの
臨時説教会、因みに渦中のヌルは全く堪えていないのか説教されても
終始（・3・）プエーといった状態で餅の様に膨らむものだから更に
ケルシーの火に油を注ぎ、最後の方では思いつき引っぱり張ったり押し
潰されたりとむによんむによんされていた、いたのだが：先程してい
た通り伸縮自在のヌルには通用せず逆に普段クールビューティなケ
ルシーが子供みたくにしていた事でロドスのオペレーター達がとき
めいていたのは公然の秘密である。

：尚後程話を聞いたクロージャからケルシーへと伝わった時には
既にロドスの七割にとつて周知の事実となっていた為、その事を知つ
たケルシーは自身の黒歴史に思わず自棄酒して酔い潰れ、そんなケル
シーを見つけたヌルによって自身の自室に運び込まれて更に朝起き
るまで介抱された事で見事に追い討ちをかけられたのは完全な余談
である。

幾ら弄つても一切反省を見せないヌルに対してついに諦めたのか
何回かムニムニした後ヌルを抱え込むケルシー、不貞腐れている様
に見えるが何処となく満足気なのは気のせいだろうか？

「：気に入ったのかい？」

「勝手に逃げ出さない様捕まえておくだけだ：こら逃げるな」

（・ω・；）何カ捕マエルノ慣レテナイ？

「お前みたいな突拍子も無い事をしてヒョイヒョイ逃げる奴はロドス

にも居るからな、自然とそういった手合いの考えが読める様になるものさ」

(・ω・) ア〜：ワルフアリンノ事？

「普段医療施設に行つてないらしいお前でも誰なのが即座に分かる位なのかアイツは…」

「まあ、記憶失つた私でもロドスに着いてたつた数日しか経つてないのに強烈な印象与えてるしね…」

医療オペレーターワルフアリン確かに医療に関する腕はあるのだが、普段の実験等であまりにもやる事がマッドに寄つてゐる為『ロドスに於ける禁止リスト』で度々名前が挙がる程ロドスで問題を起こす問題児の一人である…因みに矢鱈と濃いメンツがロドスのオペレーターとして集まるのでそここの数問題児が居たりするのだが、ワルフアリンはその中でも一等酷い為に何度も名指しで掲載されており、最早禁止リストに於ける殿堂入りを果たしていたりする…ホントなんでそんな奴に籍置かせてるんだロドス…。

「マイナス面が余りにも酷いのにそれを帳消し出来る程利益を出しているのがまた何ともなあ…」

全てを物語るケルシーの一言。ロドスは常に人材不足、實力あるなら余りにも酷くない限り利益があるなら拒む事など出来ないのである…つまり多少の被害はコラテラルダメージとして流すのだ…出来る限り事件が起きる前に止めようとはするけどね？

「そんな事言つたらライン生命から来たメイヤーだつて私が来てからもう何度爆発騒ぎを起こした事やら…メカカワウソの保管室がメカカワウソ同士の誘爆で消し飛んだ時なんかロドスが揺れたんだぞ…」
「待て、何だその話私は聞いてないぞ」

「事件があつたのが一昨日でしたからね…防爆対策してある為か保管室と保管室の正面廊下以外に被害はありませんでしたが、丁度近くを通つてたヌルさんが巻き込まれて…」

((; 。 ㇿ)) 壁ノ染ミニナル所ダツタヨ…。

「カーデイ…ワンクリック…機械系オジャン…うつ頭が!？」

「サリアさんとばったり会つたサイレンスさんつて暫く圧が凄いのよ

ねえ…イフリータちゃんも居たら倍プツシユ…」

「皆悪人って訳じゃないのが更に酷さに拍車を掛けるんだよなあ…」

((ロドス怖っ!?!))

ロドスのトツプ3 (十一) が揃いも揃って遠い目をする中、そんな彼等を見る他オペレーターも各々トラウマによつて遠い目をしていき、部外者の目には恐怖しか無かった…。

if√キメラ その三 (・ω・?) ソモソモボクモソ
レニシヨゾクシテルヨ?

龍門から依頼されたのは一言で説明すれば人探し、しかしその探し出す対象は何故かスラム街に居るといふ少女との事：依頼主が龍門当局という政府組織でなければまず間違いなく事案である。まあ正直な事を言えば例え国であつても少女一人を追い掛けているなんて普通に事案にしか見えない訳だが…。

そしてそんななんとも言えない探索に駆り出されているロドスだが、その探索には様々なアーツが使えるという事で多数の多いヌルも連れて来ており、現在はドクターの周囲を浮遊している。

因みに今回は先にケルシーにヌルを連れ出す事を伝えているのでお咎めは無しである、まあ小言は貰う事になったのだが…。

(・ω・) ソレドドンナコサガセバイイノ?

「情報によれば身長145cmで白髪のウルサス人の少女ですね」

(・ω・) オオゼイデオンナノコサガシテルトカエヅラヒドクナイ?
?

「言わないでくれ、分かってるんだよそれ位…それでどうだい? 見
つかりそうかい?」

(・ω・) ハンイヒロクテチヨツトジカンカカリソウカナア：
「ふむ、ならば私達も歩いて少しでも探してみるとしようか」

アンテナ代わりなのかアホ毛を生やしてみよいんみよいんさせているヌルにアーミヤが対象の特徴を伝える事で探索を開始するのだが、流石にだだっ広い龍門だけあつてスラム街も広く相応に時間が掛かると言われて自分達も足を使って探す事にしたロドス一同、主なメンバーは全体指揮の為のドクターとロドス筆頭術師であるアーミヤ及びロドス所属のオペレーター数人、BSWから出向という形で合流しているフランカとリスカム、そして龍門に対する土地勘が無い為に提携の形で出向してくれているペンギン急便のエクシアとテキサスである。

尚初めてヌルの事を見た出向組は全員不思議そうな顔でヌルの事を見ているが、当の本人は真面目な雰囲気であホ毛みたいなセンサーで探索を頑張っているのかそんな周りの様子には一切気付いていないようだったが…。

「ねえリーダー、その黒い子今何してるの？」

「うん？ 本人曰く『目を広げている』らしいぞ？」

「目を広げる？」

「影や暗闇といった暗所を操作するアーツと感覚増強のアーツを組み合わせているらしい」

「それって完全に別物なアーツを併用して全く別物のアーツを生み出してるとして事!？」

「まあ、銃使う為のアーツの操作と身体能力を強化する為のアーツ、そして感覚強化のアーツにそれらとはまた別の攻撃、防御アーツを同時に使いながら戦えるのなら後はそれらのアーツ操作を一纏めに行う様に反発に注意しつつ混ぜ合わせれば皆出来んじゃないのかって軽い無茶振りしてたし、端的に言って天才肌が何かなんだろうな…」

因みにこのドクターが言った事を簡単に説明しまえば『前見ながら視線を動かさずに360°。瞬きせずに確認しつつ、常にセットされている物以外の邪魔が入る100メートル障害物走をノンストップで走りきれ』といった様なものであり、端的に言って無理ゲーである。

「流石にそれは無茶があるだろう…」

「でもヌルは出来てるんだよなあ…」

（……） ミオンミオンミオンミオン…

呆れ返るテキサスや他のアーツに精通しているオペレーター達だったが、ドクターが現在進行形で探索中であるヌルの方を指さす事で何も言えなくなる。

「ふくん、ねえねえヌル君!! ちよつとこのマップのここ見て欲しいんだけど良いかな?…」

（……） ウン? マダココハシラベレテナイヨ?

「私達の予想だと多分ここら辺に隠れてるんじゃないかって思ってる

「ただ、探してみてくれないかな?」

(・ω・) タンサクナラマカセロー!!?

エクシアに頼まれるまま更に作業工程を増やして探索するヌル、まだまだ余裕そうなのその雰囲気にも多少なりともアーツについて知識を持っている者は全員、ドン引きであった。

(・ω・) アツミツケタ

「さつき教えてもらったばかりなのに早くない?」

(・ω・) ハンケイキキロモハナレテナカタカラスグダツタヨ

「いや一キロも離れてないって言ってもそれ少なくとも半径数百メートルで離れてたって事だよ? よく情報処理出来るね」

(・∩・) ソンナコトイワレテモデキルカラデキタンダヨ

「まあ、それもそうか…よし、それじゃあ大体何処ら辺に居るのか教えてくれないか?」

対象を見つけたという報告を聞いてヌルに居場所を聞くドクターだったが、そんなヌルから更なる爆弾発言が…。

(・ω・?) ウン? テンソウシテツレテコナクテイイノ?

『……………え?!?』

「ふむ…我々はまずヌルがどれだけの事を出来るのか正確に知っておく必要があったんだなあ…」

探知だけでは飽き足らずまさかの転送させる事まで出来ると言うヌル、ただでさえ探知に置いて世界でも類稀な能力を発揮しているのにここにきて全然未踏の新技术である…正直あまりにもやれる事が凄過ぎて情報過多でさえある。

「取り敢えずそれは人に使っても別段問題があったりする訳ではないのかい?」

(・ω・) ボクハシヨツチュウツカツテルケド?

「うん? しよつちゆう使ってる? …もしかしてロドスの艦内それで移動してたの?」

(・ω・?) ムシロソウジャンキヤロドスノミマワリツラスギルデシヨ
「ええ…」

まさかのロドス艦内たった一人の存在によって情報丸裸状態だっ

た件：幾らセンサーや監視付けてても探索チートに加えて転移チートまであるとか、最早セキュリティガバガバとかそんなレベルの問題じゃない、プライベートなんて欠片たりとも無かったという衝撃の事実である。

「よくS. W. E. E. Pに気付かれなかったな…」

(・ω・?) ソモソモボクモソレニシヨゾクシテルヨ?

「…なんでこう頭の痛い話がポンポン出てくるのかなあ…」

「聞いてないですよケルシー先生エ…」

頭痛が痛いと言っても言うように頭を抱えるロドスのトップ(×2)オペレーター達も遠い目していてこれには外部協力者達は思わず苦笑い。

後々ヌルから話を聞けば、イフリータを追いかけてロドスに転移したヌルをレッドが見つけて戦闘になったのだが、転移で逃走した先にケルシーが居たためそのまま交渉に入りその多彩な特殊アーツの数々に目を付けたケルシーがスカウト、別段イフリータ達を追いかけてきていただけだったヌルはこれを了承し、それ以降はロドスの見回りや患者のメンタルケア等様々な分野で活動しているとの事。

つまり以前ケルシーがドクター達にヌルを連れ出した事で説教していたのは単純に『自分の手駒を勝手に動かすな』という事だったのである。

「…………よし、本格的な話は後に回して目の前の事に集中しよう!!」

それでヌルにはさつき提案してもらった転送をしてもらって良いかな?」

<(、ω、)リョーカイ!!?」

「キヤッ!」

『!?!?!』

ヌルが返事を返したら後は一瞬だった、いきなり円盤状に広がったヌルから女の子が落ちてきたのである。

此方に背を向けているが探している人物ソツクリな特徴に本人かどうか確認する為声を掛けることにしたドクター。

「えっ、ええっ?!? ここは一体? 私廃工場に居た筈なのに…」

「あゝ…少し良いかな？」

「ひっ!? あ、貴方達は誰!？」

「私はノア、そして我々はロドスという鉱石病の治療法を主に研究している製薬会社なのだが、龍門に訪れた際に君のような見た目の少女を探すと言われていてね、失礼だが君の名前を教えてもらってもいいかな？」

「み、ミーシャ…です。それで…私は一体どうやってここに来たんでしょうか？ 廃工場で隠れてたらいきなり落ちるような感覚がして気付けばここに居たんですが…」

自己紹介のどきくきに紛れて名前を聞こうとするドクターにアツサリ引つ掛かるミーシャ、本人は極々自然な感じで聴いている為素でやっているのだと分かるのだが、逆に言えば素で相手の情報を引き出せる人たらしの素養が垣間見える一件だった。

「確認取りますね…はい、はい…ええ、この方で合っているそうです」「ありがとうアーミヤ、それでミーシャがここにいきなり来た事についてだが、それは君の隣に居る彼のアーツによるものだよ」

「彼? …何、コレ…?」

（…ω…）ワタシガヤリマシタ!!?

「……………きゆう」

（…ω…）アレ、タオレチャツタヨ?

混乱するミーシャにヌルを見せるが、ドクター達は知らずともただでさえ追い詰められていた彼女にヌルの様な理解不能な存在はキツかったらしく、遂にキャパオーバーを迎えた彼女は目出度くその場で気絶した。

if√キメラ その四 「空が…消えていく」

「はっ…はっ…はあっ…!!」

《何処ニ行クツモリダイ?》

ヌルによつてあつけなく終わったロドスの龍門スラム街におけるミーシャ探索であつたが、その裏では龍門七百七十七不思議が新たに更新される様な騒ぎが密かに起きていた。

「なんだよアレ…なんなんだよアレエツ!」

無駄ナノニ足搔クネエ…

夜のスラム街には殆ど明かりは無く、そこに暮らすのは無力な者や後ろめたい隠し事がある者、はたまた社会に適応出来ずにあぶれたはみ出し者ばかりが集う掃き溜めの様な場所ではあるが、それでも人界に存在するある種ありきたりな場所だつた筈だつたのだ。

「なんでこんな訳分かんない事が起きるんだよっ!」

ソナナノ自業自得ジャナイカナア?

仮面を付けた白い服の男はすれ違う浮浪者達の怪訝な表情もまるで気にせず、唯ひたすらに見えない『ナニカ』から必死の形相で逃げ続けていた…徐々に自身を包み込む闇が深く昏くなっており、最早幾ら足搔こうが無駄でしかないという事に気付くこともないままに…。

「アツ…アアアツ…!」

ツカ マエ タ

男の悲鳴が辺りに響き渡り何処までも異常な事が起きている事が誰でも分かる筈だつたこの日、龍門のスラム街の夜は不気味な程に静かだつた…。

その男にとって今回の事はただ単に善意からの行いが始まりだつた、自分が所属している部隊の隊長であるスカルシュレットダーが長年探し続けていた生き別れの姉が見つかったのだが、その子は既に感染者となつており、更に以前のチエルノボーグを襲撃した折になのかどうなのかは不明だが龍門に居るといふ情報が入り、何時龍門当局によつて刈り取られるか分からない状況から救出しようとして一人で立ち

上がろうとしていたのだった。

幾ら部隊長を任せられており戦闘力も知られているスカルシュレッダーといえどたった一人で龍門当局に見つからず侵入出来るとは思えず、更に言えばまだまだ子供でしかない彼を危険な目に合わせる訳にはいかないという事で一部隊が作戦という形で出て来たのである。

龍門への侵入は予想通り幾人かの同胞が捕らえられることとなったがなんとか成功し、目標が隠れ潜んでいると聞くスラム街への侵入を成功させたのだが、彼等の幸運はそこまでだった：ある意味では龍門当局に捕まってしまった者達の方が幸運でさえあっただろう。

異変について最初に気が付いたのは探索範囲を広げる為に本隊に二十五人残し、残りを五人一組で数十チームに分かれた後の本隊で通信を担っていた同胞だった、何故か他のチームから連絡が来なくなり始めたという報告が始まりだった。

不審に思ったスカルシュレッダーが連絡の途絶したチームの周りで探索していたチームを三つ、連絡が途絶えた辺りを探索する様に指示を出しながら探索を続けていたのだが、暫くした後その三チームからの連絡も途絶、これはおかしいと判断したスカルシュレッダーが全チームに招集を掛けたのだが、これによって集まったのがたったの十三チーム、正しく異常事態である。

しかし本当の恐怖は此処から始まった、各々が情報を整理しているとふと気が付いた様にスカルシュレッダーが先程チームのリーダーをしていた一人の名前を出したのだが応答が無かったのである：つい先程までは確かに集合していたのを確認した筈だった人物が、である…。

そうそうに騒がしくなる同胞達をスカルシュレッダーは落ち着かせようとするのだがここに来て異変が拡大した、何時の間にか辺りを覆う闇が濃くなっていき、更にはスカルシュレッダーの同胞に掛ける声だけでなく同胞達の騒いでいる声までもが響かないのである。まるで防音室にでも入ったかの様に音の反響が急にしなくなりだしたのだ。

そして決定的な異変が発生した、幾人かが見ている目の前で、最も闇に近かった同胞が、まるで闇に溶ける様に消えてしまったのだ。

狂乱が起きる。慌てて物陰に隠れようとする者が居たがそういった者程即座に消えてしまった、ソレを見てスカルシユレッツダーは即座に理解した『闇を媒介して発動しているアーツだ』と…。

確かに彼の考えている事は正しかったがその危険度までは測り切れていなかった、兎に角現状の危機的状况から脱出しようとして姿の見えない敵のアーツが及ばない場所―即ち明るい場所へと向かって全力で移動し始めたのだが、此処で現状を把握しようとして空でも見上げればまた違った展開にでもなったのだろうか？ …まあ、それも結末が早く訪れるかどうかの違いでしかないのだが…。

走る、走る、走る…時折振り返る度に消えていく同胞の姿に恐怖を覚えつつも必死に彼等の先導として先を行くスカルシユレッツダーだったが、ついその足を止めてしまう様な絶望が目映った。

それは一言で言えば壁であった…半透明な闇を固めて作り上げた様な近付けば分かる黒い壁、先程から見えない闇に追われて逃げていた彼らにとってその色が何を意味するのか連想させるのはあまりに容易かった。

追い詰められたからなのか反射的に己の持つ武器で闇の壁を破壊しようとして至近距離にも関わらず榴弾を放ったスカルシユレッツダーだったが、放たれた弾は壁に当たると爆ぜる事なくましてや通り過ぎもせず、まるでこれまで消えていった同胞達がそう消えていったのだと教える様に、壁に触れた先から解ける様に消えていったのである。

余りにも絶望的な現状からの逃げ道を探す為彼等は漸く周囲を見渡した、逃げ続けていたせいで前しか見ていなかった彼等が他の逃げ場を探そうとするのはあまりにも当然の事であり、それ故に彼等は気付く事になるのである…最早自分達に逃げ場など残されていないのだという残酷な事実…。

まず感じるのは薄暗闇、今日は朝から雲一つない快晴であり遮るものが何も無かった月明かりによってこの古ぼけた蛍光灯の灯りが主な光源であった龍門のスラム街ですらいつも以上の明るさがあった筈

なのに、奇妙な事にその月明かりが弱まっている様に感じるのだ。

疑問に思った一人が思わずといった具合に顔を上げる、闇に襲われている現状に少しでも希望を見出せる明かりの不足に不安を覚えている行動だったが、それによって知った事はより残酷な真実だけだった。

「空が…消えていく？」不意に聞こえた声に一同は声の聞こえた方を見ると、そこには空を見上げて呆けている同胞の姿があり、その同胞につられる様に各々が空を見上げると、今しがた自分達に絶望を与えた闇の壁が空一杯に形成されてゆき、その色を濃くしていく事で星の光どころか月の明かりさえも呑み込んでゆくというまるで世界の終わりの様な光景であった。

全員絶句することしか出来ず助けを求めろ様にリーダーであるスカルシユレッダーへと振り返るのだが、先述した通り彼は一部隊のリーダーといえと未だに子供、恐怖のあまり思わず足を一步、そうたった一步足を引いてしまった事でその運命は決定してしまった：何時の間にか迫ってきていた闇の壁に触れてしまったのである。

目の前で消えるスカルシユレッダー、精神的支柱の消失によりついに彼等の正気は限界を迎える事となった、半狂乱となり散り散りに逃げ出す者や立ち尽くす者はまだマシであろう、発狂して自傷し出す者や獣の様に同胞へと襲いかかる者、消えたスカルシユレッダーを探そうと覚束ない足取りで闇の壁に自ら解けてゆく者、多種多様な彼等であったがその誰一人として理性を残した者は居なかった。

そして龍門に潜入したレユニオンのスカルシユレッダー率いる部隊は龍門当局に捕縛された者を除き、この日を境に誰一人、死体一つ、血液一滴たりとも見掛けられなくなった…。

オペレーター？：ヌル

基礎情報

- 【コードネーム】 ヌル
- 【性別】 不明（元は男性だったとの事）
- 【戦闘経験】 不明
- 【出身地】 不明
- 【誕生日】 八月三日
- 【種族】 不明
- 【全長】 可変
- 【鉱石病感染状況】
接触しても感染しないがオリジニウムそのもの

能力測定

- 【物理強度】 卓越
 - 【戦場機動】 卓越
 - 【生理的耐性】 皆無
 - 【戦術立案】 皆無
 - 【戦闘技術】 皆無
 - 【アーツ適正】 卓越
得意な事と苦手な事の差が酷過ぎる…。
- ードーベルマン

個人履歴

ヌルはサイレンス女史と女史に連れられたイフリータを追ってライン生命からロドスへとやってきて、ケルシー先生に見つかり保護された事でロドスに所属する事になりました。

彼の用いるアーツは常軌を逸していると言える程非常に応用が効くものであり、何処へでも姿を現したり物や人を移動させられたり戦闘でも他の術師オペレーター達を圧倒する程の威力と広範囲への影響を与えることが出来る等、最早戦略級の術師と判断しても良いで

しよう。

その見た目の通り意思の疎通は個人差がありますが共通して顔文字と伝えたい事がボンヤリと浮かんでくるとの事ですが、これも彼のアーツだったりするのででしょうか？

健康診断

何をもって健康状態を判断すれば良いのでしょうか？

【源石融合率】 100%

寧ろ臓器と呼べる物が見当たらないのですが…。

【血液中源石密度】

彼の中に血は流れておりません。

第一資料

オペレーターヌルはライン生命で人体実験された事で今現在の姿に変えられた元人間の現源石生命体です。

オリジムの様なオリジニウムに適応した感染生物ではなく弾力を持ったオリジニウムにヌルと呼ばれる人物の意思が宿った状態になっているとの事です。

但しオリジニウムそのものとはいえ彼自身の持つ異能による操作能力で触れても感染しない様抑え込んでいるらしく、気絶したりしない限りは周囲の源石による汚染は起こらないとの事です。

第二資料

ロドスにやってきてからケルシー先生に雇われた彼は主にロドス・アイランドの全体警備をしており、彼の持つ特異なアーツとその小さな身体で様々な閉所へと潜り込んで点検していたり、事前に通知の無かった人物が訪れた時は警備部門に連絡を取る等多岐に及び活躍しています。

他にも初期の…少々形容し難い粘菌生物の様な見た目の時にロドスに入院している子供達に大泣きされてからはシヨックを受けたように、それ以降度々女性職員やオペレーター、他にも流行に目敏い人

を見つけてはどのような姿を取れば子供達を怯えさせずに済むのか相談している姿が散見されているとの事です。

第三資料

彼のアーツは曰く闇を作り出してその中に虚無を作り出す事で概念を操作するアーツらしく、闇の中では何も見えず聞こえず感じれない為何もなく、しかし何も無いが故に色々『差し込む』事が出来、これによって『AとBに生じさせた闇の間に虚無を作る事でAとBの間を繋がっているという概念のトンネルを生成する』という事が出来るそうです（これが普段の移動に使われる絡繰なんだとか）

果てしなくスケールの大きなアーツですが、こんな事が可能なのも彼自身がオリジニウムであるからこそであり、計測してみた結果彼が普段から気軽に行なっている空間移動も一度しただけで並みのオペレーターなら確実に鉱石病が悪化する事間違い無しな為、彼のアーツを真似する事だけは誰であつても行わない様嚴重注意が必要です。

第四資料

彼は人として接しており、またオペレーターとしても扱われておりますが、それと同時に『特急危険物』の指定も受けています。

彼は本来源石による汚染度を操作する事が出来る異能とでも言うべき特異な能力を保有しているのですが、その異能に目を付けて彼を保護（実際の所怪しい部分はありませんが）したライン生命が創り出した狂気の産物である高純度・超圧縮されたオリジニウムである『賢者の石』と呼ばれるオリジニウムを彼に移植した結果彼は発狂し、肉体は人のそれから異形の物へと変異し異能は暴走し『賢者の石』の感染を強化し、オリジニウムを用いた移動都市丸々一つが消えたテラにおける歴史史上最大の人身事故である『消失事件』へと繋がったのです。

その後意識を取り戻した彼によって『賢者の石』によるそれ以上の被害は抑えられましたが、以降彼は異能の全てを用いて自身の内に『賢者の石』を封印しており、これを処分する手段を探し続けているそうです。

第五資料

「そーいやアンタ知ってるか？ この前龍門支部で休息してた時にちよつとばかしネットサーフィンしてたんだけどさ、龍門七百七十七不思議に新しく『スラムを逃げ惑うレユニオン』ってやつがあったんだけどさ、それがどうもこの前俺達がスラムでウルサス人の女の子探そうとした時の事らしいんだよ。」

「なんでも龍門のスラム中を脇目も振らず半狂乱になって逃げ惑うレユニオンの格好した奴等が居たらしいんだけど、おかしな事にそんなにドタバタ走ってる筈が殆ど音がしないし、場合によっちゃあ不思議に思ったスラムの奴が角曲がったソイツを追って覗き込んでも直線なのにまるで消えた様に居なくなっていたんだよ。」

「でさ、こつからが更にヤバいんだよ…ソイツらっていうかソイツらが着てた服、後になって見つかったらしいんだけどどうなってたか分かるか？ …廃棄場で見つかったんだよ…ボロボロになったそれらを着ている大量の木乃伊と一緒にさ…。」

「まあ、アレにはデマも大量に載ってるし実際の所はよく分かんないんだけどな、もしかしたらあの時探知でちゃっちゃとウルサス人の女の子見つけたオペレーターナルなら何か知ってるかもしれないな、それじゃ俺は飯食ったから先に行くわ。」

《ゲーム的な資料》

星六 特殊オペレーター

募集タグ

支援／弱化／強制移動

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：1000

攻撃：350（+20）

防御：560

融合剤×4

RMA70―24×8

素質1 虚空回廊（昇進Ⅰ）

編成時、自陣に到達した敵を一体につき一度だけ侵入上限を減少させずに侵入口へと戻す。

資質2 キミナンデイキテルノ？（昇進Ⅱ）

編成時、十秒毎に敵にダメージを与え三秒のスタンを付与する。

基地スキル1 S・W・E・E・P（昇進Ⅰ）

対象施設／制御中枢

制御中枢配置時、制御中枢内のオペレーターの体力消費が1時間ごと―0.05

基地スキル2 ナニモナイ（昇進Ⅱ）

対象施設／無し

自身の体力消費無効（このスキルは他オペレーターの干渉を受けない）

スキル（全特化Ⅲ状態）

スキル1：ユツクリシテイツテネ（自動回復、手動発動、初期SP30、必要SP50、持続30）

攻撃力半減、攻撃範囲内の全員攻撃する様になる。

スキル2：マターリ（パッシブ）

攻撃した相手の動きを他の攻撃を受けるまで止める。

スキル3：ニガサナイ（パッシブ）

素質1によって侵入口まで戻された敵が自陣にたどり着いた時、確率で即死させる。

俺またなんかやつちやいましたかあ!?(ヤケクソ)

ーあまりにも頁が勿体無いから続きから。

なんか白痴気味な不定形生物になった夢を見た気がする昼前の起床：前にライダーもどきになった時に見た夢と同じ感じがしたんだが、何か関連性とかあったりするのかな？

：いや、ただ単に大量のオリジムシとあの馬鹿デカイポンペイを見たせいで夢がスライムに釣られたのかね？

血煙の一振りで消せただろうけど離れてて面倒だったから反源石弾撃って速攻黒曜石の塊に変えて処分したんだよなあ：何処から出て来るのか知らないから探し回ってて、戦闘に掛かる時間よりも探す為に走り回ってた時間の方が多いという事実：別に暗闇の中でもサードアイがあるからこけたりする心配は無いけども、天災時に見られる蟲の異常行動とかなら兎も角蟲の活動区域とか生態までは知るよしもないからシエスタ火山を風潰しに探し回る羽目になったわ。

そんな状況で見つけられたのは運以外のなものでもない：強いて例えを上げるなら執念位のものじゃないだろうか？ 一年振りとはいえまともにバカンス楽しんでないのにシエスタが火の海に沈んでポシヤるとか許さんよ？

つまりポンペイ抹殺＝自分の為という閑話休題

今日やる予定のカラオケ枠は前世風に言えばのど自慢が近いのだろうか？ 歌うのは好きなのだけれど作曲なんかの才能が無い奴や、そもそも色々縁が無かった為に泣く泣くグループを作れなかったがなんとか一旗あげてやろうと考えてシエスタが用意している電子機器の規格にあった音楽データを持ち寄る事によって歌う事が出来るという代物だ。

勿論先にオブシディアンフェスタの運営委員が行なっている審査を通して合格した奴だけが大衆の面前で歌う事が出来るのだが、それ以外にもライブハウスみたいいな形で少人数相手にしたり、それこそ身内で集まり今迄に登録された歌でカラオケする事だって出来る、この

カラオケというやり方自体テラでは十年も経っていないやり方らしいが、近年だと普通に人気があったりするのでオブシディアンフェスタの時以外にも利用出来るよう解放されているらしい。

そんなカラオケ枠に四年前……つまり傭兵時代から参戦している俺だが、最初の目的というか理由はただ単に正気がある程度元に戻った反動であり、偶々護衛依頼でオブシディアンフェスタをしている最中のシエスタに訪れ、前世の趣味だったカラオケを見つけて無性に歌いたくなったのが始まりだが、あの時の師匠の驚いた顔はかなり印象的だったな……まあ、今になって思い返してみればあの時まで人間味なんて欠片たりとも無かったから驚いても無理はないのかもしれないけど。

そんな訳で一般向けのカラオケに参加しようとした訳だけど、残念というか残念というか俺の知っている曲は全然と言った訳だけど、残念仕方なく現世に来たばかりの頃にシラクーザで聞いた事がある曲を何曲か歌ってその時は終わりにしたのである。

しかし前世の名曲を幾つも覚えていた俺は歌えるのに歌えないのが悔しく、それ以降は隙を見ては慣れない作曲やら機械関係等色々な事に出し始め、翌年のオブシディアンフェスタで前世でミリオンいった曲を幾つか披露したりしていたのだが……そういやこの頃から色々と技術関係に手を出すようになったんだっけか？　なんかいつの間にか変に凝りだして今じゃあ関係無い事にも手を出すようになったなあ……。

音楽は世界的な娯楽だと実感しつつ閑話休題。

昔の事を思い出しながら音楽データの最終チェックを済ませていざ他の出演者達のライブへ出陣……しようとしたらシエスタ市長の部下がやって来て昨夜何をしていたのかを説明してほしいと同行を求められた、どうにも昨日の肅清現場を知っている人だったらしく案内してもらっている最中ずっとガチガチだったのがなんだかなあ……。

まあ、例え相手が犯罪者であってもそいつら素材に辺り一面赤を基にしたグロに染色した奴が居たら誰だって動向を注視するわな、少なくとも俺ならする（確信）

そんな訳で連れてこられた市庁舎とそこでの問答だったが、取り敢えず事の始まりがセイロンも知っていたオリジムシの大群が人を襲っていたというあからさまに怪しい事件だったのに、その事を忘れて黒幕のクローニンに辿り着いてしまったのですっぽりとその事が頭から抜け落ちてしまい、ただでさえ人を襲う程に気性が荒くなっていたアイツらがどうなっているのか調べていなかったのを寝る直前に思い出して慌てており、更に自分は普段から単独行動をしていた為協力要請するのを忘れていたのだと説明した。

以上の事実を述べると市長や一緒に居たセイロンとシュバルツ（後者二人は微妙に顔色が青かった）からは実際何も間違った事言つてないのに何処となく胡散臭いものを見るような目で見られたのだが、その後のポンペイ見つけて処理したけど馬鹿デカい奴だったけど処理した際に死体が残らなかったと言えば三人とも「あく……」とでも言いそうなジト目で納得されてしまった。

なんで協力要請忘れた事を訝しまれたのに処理ミスって死体が残らない事に何も言わないのか聞いてみれば「実際貴方一振り対象を装備毎霧散させるじゃないですか……」と何度か俺の戦闘力を見た事のあるシュバルツからこの一言、普通じゃ疑われる事間違いなしなのだが実例があれば即理解されるのだから、全く『百聞は一見にしかず』とは言ったもんである。

まあ、実際の所は反源石弾を打ち込んだ事で体組織の殆どが源石になつていたからポンペイは屑みたいな残骸だけ残して消滅してしまつたのだが、都合の良い勘違いをしてくれたのだから利用する事にした。

報告も済んだしそろそろ俺自身のエントリーした時間だからと席を立とうとすると、セイロンが未だに顔が青いというのに俺が何を歌おうとしているのか気になつたのか着いてこようとしていたので丁重に断る事になつた。

…俺の歌う歌って俺の好きな曲ばかりなんだけど、何故かハイテンションで歌った時に変な作用が起きるみたいで観客のテンションが拙い方に行ったりするんだよな…そして俺がハイテンションという

事は勢い任せになっているという事であり、そこから制限時間まで歌い続けるから俺のホールは熱気が凄い事になって熱中症になる奴出るわ、テンション上がりきって怪我する又はさせる奴居るわ、歌い終わって周りを見渡せば青タン出来てたり鼻血ダバダバ出してる奴も居たりと大惨事になっていたりするのである、そんなある種ヤベー空間にセイロンみたいな細いのが居たらと考えれば…ね？

以上の事を説明したらシエスタ市長が頭を抱えて唸り出し、セイロンはドン引きしてシュバルツは呆然としていた…俺またなんかやっちゃいましたかあ!?(ヤケクソ)

どうやらシュバルツが俺の歌う歌のファンだったようです…毎年何かしら怪我して帰ってくる身内に心配していたシエスタ市長やセイロンからすれば元凶だし、シュバルツからすれば因縁の相手とかトラウマの相手のファンになっていた事に脳内が真っ白になってしまったのも仕方ないのかね? いや本当に運無さ過ぎじゃね? なんなの? やっぱり幸運Eなの?

そのまま何とも言えない空気のままその場は御開きとなり、俺はホールで今日の為に準備しておいた衣装に着替えてホールに入り観客席を見渡すと…うん、何とか既にヤケクソ気味に待機しているシュバルツさんが居ましたねえ、ええ…ってか他にも見知った顔居ないか探してみれば観光客Cさんやら何処となく太々しいペンギンとその従業員らしき姿が…。

結論：今年の歌も好評だったよ(白目)

ファンが引いたりしない？

五十日目

流石に移動中に書くようなネタが殆どないのに頁を無駄に使うのは勿体無いから移動中の内容はもうカットする事に：強いて言えば自動運転機能のシステム面をほぼ確立させられた位か？

天災で急に進路変更とかされなければもう大丈夫にはなったしな：後は天災で電波障害とかが起きた時の対処をどうするかだ。

これシステムの防御面どうにかする程度しか思い浮かばないけれど、これ俺は何もしなくて良いけれど他だとコストが嵩む事になるんだよなあ…。

電波局に売りつけようにもそんな事やってるのなんて国営の局ばっかだから下手に扱えばスパイ工作に利用されそうなのも怖いし…。

やっぱ個人用って事で握り潰すのが一番安全ー

頁が勿体無いから飛ばしたのに逆に食い潰しそうだから閑話休題。

頭痛くなるようなネタ抱えつつも自宅に戻り、明日以降の仕事を見繕う為に依頼を探していると『カシヤ』と名乗る前世でいうユーザーバーみたいな事をしている奴から一日密着取材の依頼が来ていた。

ある程度調べても特段問題がある様な奴ではなかったし、そろそろ普通の依頼以外に入ってくる迷惑メールなんか鬱陶しかったのも含めて纏めて処理する為に依頼を受ける事にした。

依頼を受理した事をメールで連絡すると即座に電話が掛かってきて打ち合わせを開始。

普段は景色関係を撮影しそれらの映像を編集している彼女なのだが、動画編集している者に限らず何かしら創作活動をしている人物ならば大体ぶち当たる壁である『スランプ』に陥ってしまったとの事。

今までやっていた事が何やっても上手くいかない閉塞感に悩んでいた所、テレビで俺の事を知って新境地としてインタビュー系を開拓

してみようというまあ良くある迷走中らしい。

後ついでに彼女との雑談で聞いた愚痴から察した事を言えば、今現在使っている市販の機材が寿命的な意味合いで危ない状態となっており、ネタが無く収入が拙い事になっていいるのも今回の迷走の一因と見ていいだろう。

：見た目的に極東系じゃないから名前の由来はシャツター音何だろうけど、現状の赤貧状態に喘いでる姿を見たら『家計が火の車』って意味で『火車』にしか思えなくなってくる不具合：アホな事考えてないで今日は飯炊いておいてもう寝るか…。

五十一日目

朝食食ってカシヤを待っていたら約束の三十分前に来た、どうやら初めての試みなので余裕を持って準備したかったとの事、良い心がけである。

しかしそのまま撮影の段取りをしていると、突然カシヤの腹の虫が鳴き出し二人して思わずフリーズ：どうやら赤貧生活がかなり厳しい状態な模様。

本番中にハプニングが起こるのも嫌なので朝食の余りではあるがカシヤに奢ると昼飯用にとっておいた分まで食われた件：でもあんな欠食児童みたいにかっ喰らってるの見たら何度もおかわり出したくなるのが人情なんだよなあ…。

しかしなあ：そういう文化が無いから仕方ないといえば仕方ないんだが、白米食う為に箸を使わずスプーンで掬って食べてるのを見るとやっぱり違和感凄いな…。

一通り食い終えたカシヤは俺に礼を言ってきたので気にするなと流して本題へ移った。

今回の撮影は最初に簡単な自己紹介をした後外でやるタイプの依頼へと出て、昼を挟んで午後から事務所内で普段は何をしているのかを説明する事になった。

そんな訳で始まった撮影だったが、受けた依頼は失せ物探し、サードアイで探っていくとまさかの中規模なスリグループを発見、龍門当

局に連絡入れて検挙に協力する羽目に…。

途中逃げようと建物伝つて散開する連中相手に鉤分銅を引つ掛け、そのまま局員の前へと引き摺り下ろす、カシヤは取れ高すぎい事になりそうとは言っていたがこんな暴力シーン撮ってたら今までの風景映像見てたファンが引いたりしない？

局員に事後処理して貰い退場しつつ閑話休題。

昼飯はもう朝の時点で予測出来ていたので、昼飯の無いカシヤに奢ってやる為に『午後の打ち合わせ』という理由で呼び止め、愛車の後部席に乗せ、以前買った魚団子の店へと向かって走らせた…まあ外食になるのは自分用しか用意してなかった飯をカシヤに全部食われてたからだけど仕方ないね。

魚団子の屋台をしているジエイに対し、初対面だからかその雰囲気にはビビっているカシヤを笑いながら（ジエイはそれを見て煤けていた）問題無く大振りな魚団子を買ってそのまま帰宅。

事務所に着いてからちやつちやと魚団子食って午後の打ち合わせ、室内で出来る内容という事で依頼の取捨選択…に見せかけた悪質な迷惑メールに対するカウンターと簡単な研究室の案内をする事にした。

魚団子で英気を養ってから午後の撮影に挑むと、撮影開始直後という丁度良いタイミングでウイルス付き迷惑メールが送られてきた事を教える『ドウウウン…』といった感じの電子音が流れた。

まるでゲームでデバフでも掛けられたかのような音にカシヤが何なのか聞いてきたので、自作セキュリティによって迷惑メールが送られてきたのを検知したのだと伝える。

製造方法は秘密だと前置きしておいて幾つか来たメールに対応して着信音には幾つか種類がある事を言いつつ、実際にカシヤに聴かせてやると呆れた顔をしてこちらを見ていた。

少しばかり居た堪れなくなったので今日の撮影に関する本来の目的である『迷惑メールに対する対策』を敢行する事にした。

やる事は至って簡単、ウイルス付き迷惑メールを送ってきた馬鹿を

逆探知して龍門当局に此奴の所業をリークしつつ、送られてきた迷惑メールのウィルスの内容がダブっているのは除きつつ、相手のパソコンにファイアウォール無視して全て感染させてやったのである…ハナムラビ法典って偉大だよね。

というか此奴今迄送ってきたウィルス付き迷惑メールやハツキング・クラッキングを合わせた諸々の数が四桁越えなのもあって本当に鬱陶しかったから漸くスツキリしたぜ。

この光景を見てカシヤが個人情報流出とか本人の所に戻るんじゃないの？ と聞いてきたが、そこら辺の重要情報は龍門当局の情報管理課に全部流れるよう細工してある事を伝えたと完全に呆れ返っていた。

暫くそんな感じで今迄送られてくるだけでスルーしていた迷惑メールを送り主共に爆撃仕返した後、スツキリしたメールボックスから依頼の選別と同業者への斡旋する作業へと移った。

あの阿呆みたいなダイマから阿呆みたいに依頼が来る様になったのだが、どう足掻いても俺は一人しかいないし、俺の事務所は個人なので手が足りず依頼を溜めてしまうだけなので、幾つか知り合いがやってる事務所へ流すようにしているのである。

ある程度送る側の力量とか把握しておく必要があるが、俺は忙殺されずに済むし恩も売れる、相手側は仕事が無くて金が無いみたいな事態は避けられるし新しい顧客を作るチャンスなので、お互いにWIN WINな関係を築けてると思う。

最近休み少なくなってるか？ 閑話休題。

一頻り作業を終えてサッパリしたメールボックスを見せながらカシヤへと説明すると、カシヤからはうわあ…といったドン引きの声を贈られる羽目に…。

そりゃあ三桁後半行ってる依頼が一桁まで減ってたらビックリするだろうな…まあ、その内八割近くが溜め込んでた迷惑メールやウイルスメールなんかだったりした訳だが…。

なんかカシヤの事労ってたらそうじゃないみたいな事言われたけ

ど、取り敢えず研究室に撮影場所を移動しようとした時に問題発生、長年愛用していたらしいカシヤのカメラが急にうんともすんとも言わなくなったとの事、要するに故障である。

幸いにも直前まで撮っていた分は事務所の機材で簡単にサルベージ出来たのだが、カメラの方は調べてみると単純に寿命だった事が判明。

カシヤが「龍門七百七十七不思議の一つが撮れると思ったのに…」と泣きながら倒れ伏したのを見て何とも言えない気持ちになる俺…。

新しい機材を買えば良いと言うのは易いが、お釈迦になつてる機材がそれなりにあるのだ、確実に家計が火の車なカシヤに対してトドメにしなければならないと判断してどうしようかと暫し悩み、ロドスに頼めなしか相談してみる事にした。

以前のエフィーターのマネージャーがロドスについて全く知らなかったのは、世間に活動を広めるインフルエンサーが居ないからだと考え、こうして現状金に困っている有名配信者に手伝わせば、少しはマシになるだろうという考えからである。

機材が潰れて真っ白になっているカシヤを迎えにきた scout に任せつつ、クロージャとアーミヤにカシヤについて相談すれば二つ返事で快諾し、クロージャに至つてはカシヤの持ってきた機材も改造しちやおうとノリに乗っている始末である。

…結局カシヤの奴連れて行かれる瞬間さえも真っ白なままだったけど、アレ大丈夫なんだろうか？

揭示板回

【万屋】 話題の人について 【権兵衛】

1：名無しの市民

つてな訳で最近話題のあの人について何か知ってる人とか居る？

2：名無しの市民

調べようとしたら既に人来過ぎてて鯖が落ちてた件。

3：名無しの市民

何処かで見えた事ないか思い出そうとしてるんだけど、なんか顔の印象残らないんだよね。

4：名無しの市民

別段前髪で目元が隠されてるわけでもないのにエ??ゲーの没個性主人公並みに顔が認識し辛い気がする。

5：名無しの市民

目元つてのは相手を憶える上で最も印象に残り易いらしい、つまりそんな目元が見辛い相手は憶えにくいらしいぞ？

6：名無しの市民

>>>5

はえ、そうだったんすねえ…。

…いやいや、それにしてもあの憶えにくさは尋常じゃないでしょ。

7：名無しの市民

映画でやってたアクロバットな動きといい、撮影裏話で監督が語ってたアーツの補助一切無しの話といい、あの歴戦っぽい雰囲気から以前は暗殺者でもしてたのかと思えてくるよな。

8：名無しの市民

あれ？ 確かに矢鱈と老けて見えるけど別段皺は見当たらなかったからまだ若い筈だよな。

9：名無しの市民

>>>8

確かまだ二十歳かそこいらだった筈：まあ、それでも確かにあの雰囲気は四十や五十超えててもおかしくないよなあ（笑）

10：名無しの市民

ロクに分からなかった筈の目が死んだ魚のソレを連想させたからとか？

11：名無しの市民

或いは纏ってる雰囲気を変装解いてから、何処となく会社帰りで精神的に疲れてるオツサンのようにも感じたとか？

12：名無しの市民

好き放題言われてて草。

13：名無しの市民

何やってたら二十歳そこいらでこんな事言われるような経験積めるんですかねえ：？

14：名無しの市民

そういや美味いって噂の魚団子屋やってる兄ちゃんも矢鱈と老け顔なせいか厳つい印象あるよな。

15：名無しの市民

>>>14

あの人は話してみると普通に気の良い兄ちゃんだから同列に語る

のは失礼なのでは？

：まあ多少顔が厳ついのは同意するけど、話聞くにあの目つきとかは生まれつきらしいから万屋とはまた別の案件なのでは？

16：名無しの市民

やっぱり若かった時に何かあったのかと見るのが妥当かねえ？

17：名無しの市民

だからまだ万屋三十路にすら行ってないって…いやでも本当に三十路行ってないのか？

18：名無しの市民

>>>17

疑心暗鬼になってて草。

ところで多分なだけけど、この前の安魂夜であったシチリアンとペンギン急便との抗争に万屋混じってなかったか？

19：名無しの市民

：あり、そういえば何時ものペンギン急便メンバーの四人以外にも何人が居たから妙に印象的だったな。

：いや、でもアレホントに万屋か？

20：名無しの市民

それ俺も見たけど、確かにいつものメンバーに三人位一緒に戦ってる奴居たな。

確か茶髪でデカイリユック背負ってるフォルテ少年と青髪の…多分サングタ？ いやもしかしたらサルカズ女に黒い…そういうガチで種族が分からんが取り敢えず『黒い』とだけ言える万屋が居たな。

21：名無しの市民

ただでさえ常人には意味不明で目立つペン急の面子に紛れてるの

に逆に『黒い』だけで存在感出てるの草。

22：名無しの市民

そりゃあ個性の殴り合いしている中で一人だけ矢鱈と印象無い奴居たら逆に浮くだろ。

23：名無しの市民

いや、見た目からしてグラサンみたいな黒いゴーグルに顔下半分覆い隠す様なガスマスク着けてて、矢鱈とゴツイ黒のロングコートで全身覆ってる上にコートから覗く服も真っ黒と黒しかなかったぞ。

しかも持ってた物や武器といえ、移動用に両腕から伸ばしてるワイヤーフックと、撃つては無いけど騒動の中心に居たらしいザラツクの爺さんに向けてた拳銃、後何故か仲間の筈の青髪サンクタ女に向けた赤黒いナイフだったから滅茶苦茶目立ってたぞ。

24：名無しの市民

>>>23

最後何があったwww

25：名無しの市民

いや全く分かんない…。

正直そんな時は見た目なんかよりも推定万屋の発してた雰囲気のヤバさの方が印象的だったし。

26：名無しの市民

顔全く見えない筈なのにヤバいと分かる雰囲気？

アーツ暴走してなんか漏れてたとか？

27：名無しの市民

>>>26

お漏らしかな？

28：名無しの市民

おwもwらwしww

29：名無しの市民

確かにそれはヤバイ雰囲気ですわ…。

30：名無しの市民

いや、漏れてるといふか寧ろ消えてた。

俺そんな時ちよつと離れたビルの上で親戚のパーティーに参加してたんだわ。

そしたらちよつと下が騒がしいなって思えばあん時の喧騒が起きてて、パーティー暇だったのもあったから喧騒眺めてたんだわ。

31：名無しの市民

此奴サラツと金持ち発言しやがったぞ…。

32：眺めてた市民

金持ってんのは親戚のオッサンだから此処ではスルーしとけ、後コテハン付けといた。

そんで「ああ、ペン急がまた騒動に巻き込まれてんのか…」って呆れてたんだよ。

33：名無しの市民

ペン急Ⅱ騒動の中心という公式。

後、コテハンサンクス。

34：名無しの市民

アイツら常に何かしら揉め事に巻き込まれてるからな。

35：名無しの市民

顔が良くてもペン急メンバーとはお付き合いしたいとは思えないんだよなあ。(尚、ソラちゃんは除く)

36：名無しの市民

そのソラちゃんはペン急メンバーの一人に首つたけっぽいんだよなあ…。

37：名無しの市民

話ズレてんぞ戻せ戻せ。

38：眺めてた市民

ああ…まあ、そんな訳で何時もの事かと興味無くなって視線離そうとした直前、いきなり一人…まあ、推定万屋なんだが…が空中に飛び上がって思いつきり目玉飛び出るかと思うレベルで視線取られたんだよ。

39：名無しの市民

漫画みたいな表現してて草。

40：眺めてた市民

しかもソイツが黒幕っぽいザラックの爺さんに恐らく拳銃を向けてたなんか話してたと思ったら、ソイツがなんかヤベー事言ってみたんで青髪サンクタ女が止めに入ろうとしたんだよ。

41：名無しの市民

おっと、何やら不穏な空気になったぞ？

42：眺めてた市民

そしたらソイツ、何処から取り出したのか赤黒いナイフらしき物を一瞬で青髪サンクタ女の首に突き付けててさ。

俺目に関しては大分自信あったのに、ありやもうコマ送りでもされ

たのかと思うレベルの早技だったね。

43：名無しの市民

なんかさつきから万屋って呼んでないのなんでだ？　って思ってたけど、確かにこんな過激な事やってたらあの不幸体質っぽい万屋かどうか疑いたくなるわな…。

44：眺めてた市民

それで此処からが本題だ。

そんな明らかにヤバい雰囲気をもっとちゃんと見ようと思って遠見のアーツを使ってズームしてみたんだけどさ…見えなかったんだよ、ソイツ。

45：名無しの市民

は？　どゆこと？

46：眺めてた市民

そのまんまの意味、ナイフ突きつけられてる筈の青髪サンクタ女も、黒幕っぽいザラツク爺さんもちゃんと見えてるのに、何故かソイツだけ何も見えなかったんだよ。

47：名無しの市民

ええ…なにそれ怖い…。

48：名無しの市民

あ、ありのまま今起きた事を説明するぜ!?

俺は噂の万屋の話を読んでいた筈が何時の間にか龍門七百七十七不思議を読まされていた…。

な、何を言ってるか分からねえと思うが俺も何を言ってるのか分からねえ…。

49：名無しの市民

ポルポルすんなど言いたいが俺も全く同じ感想だったわ…。

50：眺めてた市民

一応言っておくが遠見のアーツを解除したらまた見える様にはなっただんだけ？

…何故か頭抱えて落ち込んでて周りから生暖かい目を向けられてたけど…。

51：名無しの市民

何がどうしてそうなった!?

つまりいまからしゅーしーん

五十二日目

朝間からネットでウルサスのニュース見てたら、某市警やってるア
ンドロイドみたいな勢いで事務所がノックされ、なんだなんだと思っ
て出てみればやって来たのはスワイヤー嬢だった。

話を聞くに昨日捕まえた迷惑メールの送り主共、アイツらが結構有
名なクラッカー集団だったらしく（俺は妨害やらしてただけであり、
相手の事は一切調べてなかった）ソイツらを捕縛する切っ掛けとなっ
た技量を宛に情報課への応援要請という形で依頼が来たのである。

…まあ、最初は依頼という形じゃなくて警察隊へのスカウトだっ
ただけだな？ 今は何処かに所属する気はさらさら無いし、仮に何処
かに所属するとなれば正直な所ロドスしか所属する気は無い。

…ああいや、もしも原作みたいにチエルノボーグが壊滅しないのな
らば、ヘラグが所属してるアザゼルとか良いかもしれない…。

取り敢えず鉱石病の治療に真面目に取り組んでるなら何処でもい
いってという気持ちはあるが、第一志望としてはやっぱりロドスだな、
世界各地に手を広げているのはとんでもなくデカイアドバンテージ
な訳だし。

夢語る前に現実視ないとなあ…閑話休題。

そんな訳で警察隊へのスカウトを蹴ったら情報課にスカウトされ、
それも蹴ったら何処までなら問題無いのかという交渉に入り、結果と
して応援要請という名のアルバイトである。

正直たかが一市民に国防手伝わせんなよと思わなくもなかったが、
スワイヤー嬢曰く「情報課に今回の問題で俺がした事を調べさせてみ
ると、龍門のソレとはあまりにも技術力が隔絶しているから、最低で
も敵に回さない様にしたかった」との事。

…いや、それにしたって俺氏アマチュアゾ？ 一時自棄になって機
械弄りに没頭してた時期あったけど、それにしたって唯の一般人ゾ？
国防を一般市民に任せるとか正気じゃないだろとボヤいていたら

スワイヤー嬢に聞かれていたらしく、下手に有名な奴に依頼しようにも何処から他所の国のちよっかいを受けるか分かったもんじやないし、なんなら鼠王と友好関係がある貴方なら龍門にとつて不利な事なんてしないでしょ？　と言われて何も言えなくなってしまった。

まあ、確かに防諜しつかりしようとするなら自国の奴を使うのが良いんだろうし、そいつが暗部とはいえ国の重鎮と懇意なんだったら安全性も高いんだろうけどさあ…。

まあ、そんなこんなで俺の方から折れて何処までの範囲をすれば良いのかをスワイヤー嬢と話し合っていた訳だが…この下町お嬢様相手の交渉めっちゃやりづれえ…。

原作の方でも儉約家であり、詰めれる所は詰める性格なのは知ってたけど、そのせいで契約の内容も細かい事細かい事…仕事でミスって越権行為して契約違反とかする事が無くなると思うが、これだと融通も効かなさそうな気もするな。

まあ、一応仕事の範囲では臨機応変に対応出来るよう動ける程度には自由があるけど、それ以外が細かいの何の…。

情報機密の為にちゃんとは書けないけれど、例えるならば昼飯についていい加減に書いたやつを『昼飯（＋デザート）有り』とかなるのを、ある程度ちゃんと書いたやつなら『昼食A〜Cランチまで有り、別途デザート』の購入も可』になる。

所がこれがスワイヤー嬢の契約内容だと『昼飯は我が社に併設された食堂で提供され、肉がメインのAコース、魚がメインのBコース、野菜がメインのCがあり、値段は一律500円（月間社員パスを保有している場合は一日一食無料）であり、食堂入り口入って右に設置してある食券販売機から購入出来ます。他にも別途一律100円でコーラやオレンジジュースを筆頭としたジュースも売っており、200円でシークリームやショートケーキ等のデザートも販売しております』…そしてこれを更にガチガチに固くした様な内容なのである、細か過ぎるわ!?

そんな内容だったので契約内容を決め終えればとつくの昔に夕方になつてるし、普段こんな内容で使わない脳は茹だったかの様に重く

感じれた。

そしてそんな俺を尻目に良い仕事をしたわ!! と言わんばかりに意気揚々と帰って行くスワイヤー嬢…スタミナの塊かな? いや、ただ単に普段から熟してる仕事の違いか…。

それ以降はもう頭働かないし何もやる気が起きないしで、風呂入って歯磨いて今に至る、つまりいまからしゅーしーん(最後の方は文字が歪んでいる)

五十三日目

龍門情報課へのアルバイトに出頭…うん、まあちゃんとやっていただけど、やっぱアーツ使えるのって羨ましいと思う限りである。

契約あるから詳しくは書けないけれど、やっぱり龍門の情報扱ってるだけあり、情報課に揃ってる人材やスパコンは良い物が揃っているのだが、それでもかなりの数ハッキングされている形跡があり、数の暴力でやられている情報課の手助けが俺のメインとなっていた。

ただ、何故か途中から質の低い相手からも侵入される様になり、これはおかしいぞと情報課の課長に許可とって逆探知してみれば、なんとコード不明の謎プログラムがゴチャゴチャと悪さしている事が発覚したのだ。

幾ら対策しても関係無しに入り込んでくるソイツ相手に、情報課総出で暫くイタチごっここの様相を繰り広げる事になったのだが、ふと元凶を探ってみる事に。

するとおかしな事にそのプログラムは消去したその場で即復活しており、これは怪しいぞというサーバールームをサードアイで透視してみると、何故かメインサーバーの中に人影が…。

もしやと思いい色々言い訳して検査の名目の元、裏からメインサーバーを調べてみればやっぱりあったアーツの残滓…まだサーバーの中に居ると見て直に触ってみると、サーバーの正面側に弾き出される様に出てきたキャプリーニー人の男が一人。

不法侵入という事で即座に捕らえて話を聞けば、ソイツは自身のアーツで自分自身をデータへと変換して様々なサーバーへと侵入し、

目的のサーバーでお手製のプログラムを使い、あらゆる情報を盗みだすかなり名の知れたクラッカーとの事、アーツの性質が何処ぞの岩男シリーズを彷彿させたのは俺だけか？

如何やら何時もの如く龍門当局のサーバーに侵入していたのだが、今日はやけに防備が厳重で意固地になっていた所で俺によつてサーバーの中から叩き出され、敢えなく御用となったのが今回の経緯らしい。

それにしても電波変換するキャプリーニ人：つまり電気羊な訳か：前世では結局読んでないから話は知らないけれど、アンドロイドが電気羊の夢を見るとかそんな感じの話があったっけかな？

：アンドロイドではないけれど、スリープモードになつてるLan cet-2とかの電腦にあいつがアーツで忍び込んだらそれに近い状況を再現出来たり？

それにしても本当にアーツ使える奴つてのは羨ましい限りである、俺自身アーツ（というかオリジニウム）を拒絶する異能はあるが、正直言つて日常生活でも使えない機器が大量に出てくるし、利便性皆無でマジ辛いんだよなあ…。

今回の電気羊だつて、双方に物理的に電子機器と繋がっているコードが必須とはいえ、それこそこの情報社会ではそんな制約あつて無い様なものだし、その条件さえ満たせば光の速さで移動する事が出来るなんていうぶっ飛んだアーツをしているらしいし、クツソ羨ましい事この上ないな。

：ああいや、でもアーツのアーツつてデータに変換出来るのは自分だけだから、そこら辺が最大の弱点でもあるのか：幾ら強力なアーツとはいえ、使う度に全裸は流石になあ。

：いかん、アーツがサーバーから叩き出された時にモロで見えた粗末なモノ思い出しちまった：あの残念さだと流石に服欲しさに情報全部ゲロるのも無理ねえな：馬鹿な事書いてないでもう寝よう。

ウソダンドドコードン（owo）

五十四日目

今日、一言で言えば『馬鹿が来た』

：いや、驚きの展開が訪れたと言えば良いのか、今迄考えていても出会えなかった奴等に逢えたと言うべきか…。

取り敢えず端的に書くことにしよう。

『俺以外の転生者に出逢った』

しかもそいつはつい先日会った奴というね…そう、自分のアーツで強制的に全裸になってしまふあの電気羊が転生者だったのである…。

奴の名前は『ライナー』、一瞬頼りないけれど頼もしい巨人が脳裏をよぎったが、眼前に居るのは髪色を除けば、寧ろ某悪夢の中でブロック登りする羽目になったマダオソツクリだった為、すぐに何とも言えない顔になってしまい、ライナーからジト目で見られる羽目になった。

因みにお互い転生者だとバレた理由は大分しようもなかった。

切っ掛けはつい先日捕まったのにも関わらず、もう当局を出所してきた事を不審に思い話を聞いた所から始まり、今までライナーがハッキングして溜め込んできた他国や企業の機密データなんかを大量に放出する事で釈放してもらうという形で司法取引したらしい。

そんな真つ黒過ぎる話を聞いて以下、実際に起きた出来事がこれである。

俺「龍門当局ヤベーレベルで真つ黒な取引とか…ウソダンドドコードン（owo）」

ライナー「ケンジャキネタなっつ…」

俺「え？」

ライナー「え？」

俺「…仮面ライダー知ってるのか？」

ライナー「龍門じゃそこまでだけシエスタ辺りからシリーズの歌入ってくるし、それなりに人気なんだろう？」

俺「歌しか広まってないぞ？」

ライナー「え？」

俺「だから、登場人物一切知られないままで歌しか広まってないぞ？」

ライナー「…いや、だとしたらなんでケンジヤキネタ知ってるの？」

俺「ってか、こんな会話通じてるって事はだ…」

ライナー「って事は…」

二人「お前転生者かよオツ?!?!」

身バレの理由が間抜け過ぎる件について：役者が初期の頃に滑舌が悪かったから騒がれた空耳ネタでボロが出るとか前代未聞だよ。しかも話を聞くにライナーは自分以外にも転生者を二人知っており、現在テラ中を回って他の転生者を探していたらしく、ライナーの情報漁りも路銀稼ぎという面もあったのだが、本質的には他の転生者を探す為だったらしい。

話を聞くに、龍門当局をハッキングしていたのも住民登録を主に調べていって奇特な事をしている奴を探る為であり、他の色々な金になる情報は全部ついでに集まったモノだったのだという。

それにしてもヤバイネタゴロゴロあったら怖いじゃねえかと聞けば、純粹に金に困っていた時、つい魔が差して裏社会の汚い金をくすねてやろうとした事があったのだとか。

なんか奇妙な奴が居たので調べてみれば転生者だったと発覚し、それ以降見逃しが無いか調べるのも兼ねて裏社会の事も調べるようになり、必然的に黒いネタも溜まっていったのだとか。

裏社会の奴等に手を出してよく無事だったなと思いましたが、そういやコイツのーツって普通対策しようがないんだよなと気付く…。

いつの間にかデータバンクに忍び込まれて好き放題やられる上に、術師本体がそのデータバンクの中に居るとか普通思い付かないし、幾ら対処してもやってるのはーツで作られたハッキング用プログラ

ムへの対処でしかなく、本体は一切ノーダメージ。

じゃあ本体を倒そうにも普通ならばデータバンク壊さなきや倒せない本末転倒っぷりに、例えばデータバンクに攻撃しても反応速度も跳ね上がってるから即座に逃げられて壊し損：タチ悪過ぎないかコイツのアーツ？

そんな感想話してたら、案の定ライナーが調子に乗り始めたので「だけどアーツ使えば確定で真っ裸になるんだよな？」とジャブ入れてやったら、まるでこの世の終わりと言わんばかりに両手両膝付いて絶望し始めた、情緒不安定か。

他の転生者について教えて欲しいが、凹んでうじうじしているライナーを見て、正直調子に乗りそうなのであまり手を貸したくはないのだが、毎度毎度凹む姿を見るのも鬱陶しいので手を貸してやる事した。

アーツを使用する事によって真っ裸になる問題、実はある程度問題解決する為の検討ついてるけれど知りたいか？ と聞くと即座に「教えてくれて!!」反応したライナー。

それじゃあ実験手伝ってくれという事で機材を準備する事にしたのだが、俺が実験室から取り出してきた採血セットを見るや否やビビりだすライナー：体組織採る為に必要なんだと言い聞かせても「痛いのは嫌だあ：」とビビり続ける始末、ガキかよ…。

最終的にはいっそ気絶している間にやってくれよとかハタレた事言い出したので、面倒になった俺は即座に「オツケイ」と返事して締め落としてやった：俺の返事に思わずといった感じで呆けてたから、結果脱力してて直ぐ落とせたのは幸いと言うべきか。

気絶したライナーをベットに寝かせつつ、採血中唐突に起き出して動かれると困るので固定し、即座に採血開始、採血量は献血で採る量を基準に採るのだが、量がこれで足りるのかは正直な所不明である。

結局採血が済んでも目が覚めなかったライナーの拘束を外して楽に寝かしておき、採血した血液を以前の研究で使用した薬品（今回用に多少配合を変えた物）と混合させる為機材にセットし、混ざりきるのを待つついでにライナーの服のサイズを調べてフェンツ運輸に無

地の一式と型落ちも良い所な安い洗濯機を注文。

モノの数十分で届いたそれら（業務提携しているからなのかペン急メンバーが持つてきた）を使い、先程の薬品を洗濯機に入れて服装一式を放り込み、どれだけやれば良いのか分からなかったが、取り敢えず芯まで染み込む様に最長コースで回しておく事に。

あまりにも古いやつだった為ガタガタ騒音が響き、それによって漸く目覚めたライナーの文句をスルーして俺が何を作っているのかという説明へ。

作っているの一言で言えば『血を染み込ませた衣類一式』である。

世間一般ではアーツを使う際に着衣が燃えたり凍ったりして大変な人がそれなりにいるのだが、じゃあ何故そんな力の発生源である筈の自分自身は大丈夫なのかずつと謎ではあったのだ。

扱っているアーツによって耐性があるのかと火葬について調べてみても、特に火を扱うアーツ使用者については記されておらず一律同じ手法で同じ様に燃え尽きるのだと葬儀屋は言い、冷気を操るアーツ使いも別に凍死しない訳ではないと聞いた。

ならばと考えたのが『先民は自身のアーツに限り耐性を得るのではないか?』という想定であり、ならば使用者の血液を染み込ませた装備を作れば使用者の特性を付与出来るのでは? と考えたのが俺のナイフであり、今回ライナー用に作っている服である。

一応俺の血を用いたナイフはちゃんと効果を発揮して術師（というか源石）殺しの能力を發揮しているが、それは俺の異能だけかもしれないとずつと悩んでいた為、今回のライナーの悩みはある種渡に船だったとも言える。

因みに俺のナイフは血液混ぜ込む為に色々ぶち込んでいる為、実は武器としてはそこまで頑丈とは言えない出来ではあるのだが、手放してもちゃんと効力があるから反源石弾が出来上がるまでは俺の切り札だったりした：投げナイフは生産性とか飛距離がネックなんだよなあ…。

そんな感じで一通り説明している間に防腐処理や消臭処理を施してライナーに着させ、アーツを発動させてみると見事に服毎電波変

換、凄まじく嬉しかったのかパソコンのスピーカーが五月蠅いのなんの…やっぱりやらない方が良かったかね？

取り敢えず今日はもう良い時間だからとここまですて、ライナーはこのまま家に帰ってみると言うが早い帰宅した…アイツ靴どうするんだろうか？

p s . 晩飯準備している間にやっぱり靴忘れてたと言いながら戻って来た（笑）

アーツで身体補強してから撃ってるし大丈夫？　そう…。

五十五日目

一晩寝て起きたらとんでもない事実が付いた。

ーライナーの奴：普通にアーツ使ってたか？

てつきり俺がアーツ（というか源石関係）を拒絶する体質なのは、俺自身が転生者である事が原因なのかと考察していたのだが、ライナーがアーツを使える以上その前提は崩れた訳だし、ライナーが俺に対してアーツ関係の質問をしなかったという事は、ライナーの見つけたという他の転生者達もアーツが使えると見て良いのだろう。

落ち込んでいたらライナーがデカイ鞆担いだ見知らないけれどどことなく見たことある様な奴を連れてやってきたのだが、落ち込んでいる俺を見て何故落ち込んでいるのかと聞かれたからライナーが昨日話した他の奴もちゃんとアーツを使用出来るのかと質問すると、やはり他の見つけた転生者達もすっかり各々アーツを使う事が出来るとの事…。

ついでに俺の質問に驚きながらも連れてきた奴に聞いていたのを見るに、この連れが昨日言っていた他の転生者の一人であるらしい。返答を聞いて更に落ち込む俺を見て、慌てて何があったのか聞いてくるライナーに俺だけ何故か持っている異能について説明すると、何やら難しい顔をしながらも連れと一緒に色々俺に質問や話をしてきた。

やれアーツを無効化するアーツなのではないのかとか、そもそも俺等転生者にとってはアーツも異能みたいなもんだとか…次から次へと矢継ぎ早に言ってくるものだから一度落ち着かせてどうしたんだと聞くと、何処と無く気まずげな顔をして理由を語り出した。

まあなんて事ない、折角の数少ない同類なんだから少しでも力になってやりたいというお人好しのお節介だったのだ。

こんなチャライ見た目（尚、連れの方はタレ目のイケメン）をして

いるせいで、会って日も経ってない様な奴まで心配する奴だったとは思いもしなかったが、そんなギャップに驚いていると思わず先程まで消沈していた気分も何処かへ行ってしまった、此奴意外と人たらしの才能とかあるのではないだろうか？（失礼）

取り敢えず俺が立ち直ったのを確認すると、ライナーは一緒に連れて来た奴の説明をしてきたのだが、名前を聞いた事でリアルになった事や多少知っている顔より若くはあったのだが、即座に見覚えがあった事に得心がいった。

男の名前は『ニール』といい、俺が思わず「ロックオンかな？」と呟けば、ニヤリと口元を歪ませ『その名の通り、狙い撃つぜ!!』：ってか？」と返してきた、この転生者ノリノリである。

因みにこのやり取りはニール曰く二度目との事だが、ガンダム作品一切知らなかったライナーはこのネタを聞く事が出来ず、一度目の方もその時ライナーが連れてきた他の転生者にネタかまされるまで自分がロックオンに似ていると気付いていなかった為、説明される迄ネタに気付かず返すのに失敗しており、今回の俺とのやり取りでベンジが叶ったと喜んでいた。

どうやら幼馴染に濃い奴が居たせいか碌に自分の容姿について考える暇がなかったらしい：あのロックオンみたいな良い奴ではないとニールは言うが、さつき初対面の俺を自然と気遣う程苦勞人根性が染み付いてるのだと考えると、思わず向ける視線も生暖かくなるというものである。

如何やら昨夜龍門に到着したらしく、流石に夜も遅かったので俺に紹介するのを今日に伸ばしたとの事だが、如何やら龍門に来る前はカズデルに足を運んでいたとの事。

一応紛争は収まってはいるものの今も尚物騒な場所であるにも関わらず、よく無事でいられたなと感心していたら、とんでもない爆弾発言が飛び出してきた。

なんと自分は感染者であるというのだ。

いやちよつと待て流石に龍門は感染者に対して厳しい場所なのに
お前さん忍び込んだのか!? と質問してみれば、そんな面倒な事せず

真正面から堂々と入ってきたのだと返してこられ俺が不審がついてると、ニールは「それじゃあヒントだ、俺の種族は何か分かるかい？」と聞いてきた。

問題を出され改めてニールの事を見てみるのだが、ケモミミが無ければ尻尾も無く、鱗も無ければ角も無い、歯を見せてもらっても牙と呼べる様なものではなく、消去法としてエーギルか普通に動いているけどピロサ辺りかと聞いてみるとどちらもハズレだという。

「普通に分からないよなあ…」とライナーが激しく頷きながら愚痴る隣で明かされた答えはまさかのサンクタ：頭の輪つかと背中の中の羽はどこ行つたと聞けば、鉱石病で何故か源石になっていき、完全に源石塊になった後に落ちて砕けてしまったとの事。

そのせいで鉱石病ではあれど血液中原石密度は低い方だったのもありバレなかったとの事：確かに普段は体表に露出している源石があるか無いかの検査だけで血液検査は任意だけだし、体表のチエツクもセクハラにならない程度のガバガバ検査だけどそれで良いのか龍門よ。

普通身体に出来る源石がサンクタの特徴とも言える羽と輪つかに出来るという奇病に当然迫害が起き、国を叩き出された後羽と輪つかを失い、流れ者の傭兵へと身を投じていたそうだ（因みにこの時からラテラーノ国民としての権利を破棄したとの事）

因みに至極当然の様にサンクタらしく守護銃を所有しており、自分の顔の事とか分かってなかったのに何の因果か幼馴染に勧められたのもあり、選んでいたのはスナイパーライフルとの事。

持ってきた鞆の中に入れてあるという事で見せてもらったのだが：これガキの頃から使ってたってマジ？ どう見てもアンチマテリアルライフルなんだが？ 反動で肩とかイカれない？ え？ アーツで身体補強してから撃つてるし大丈夫？ そう…。

ところでSAOのGGOで出てきたヘカトIIみたいだな、と話題を振ってみたなら何それ知らんと返された、如何やらハーレム物だと言っていたので読む気無かった模様。

それとやっぱり狙撃銃だけではいぎ近寄られた時が危険という事

で、護身用として拳銃も二丁持っているとの事だが、俺は前世で画像でしか知らないのだが、デザートイーグルみたいなゴツい奴がそれぞれ白と黒一丁ずつだった…エボニー&アイボリーの真似事かと思いきや、単純に仕入れられたのが其々色違いだっただけとの事。

なんといかどことなく装備がイメージさせる作品がバラバラ過ぎてカメラめいている為、どうせならこれも使えよと言って予備のトンプソン・コンテNDERを装備させてやる事で、見た目『ロッキオン・ストラトス』なのに『シノンのヘカート(擬き)』と『ダントのエボニー&アイボリー(擬き)』と『切嗣のトンプソン・コンテNDER(擬き)』を装備しているという矛盾塊に…大分細かいのに絵面が愉快過ぎる(笑)

尚、新しい武器良いなあ…とボヤクライナーに対し、ニールが苦笑しながら俺が渡したコンテNDERを「何ならお前さんも見てみれば良いじゃねえか」と渡したのだが、ガキみたいにはしやぎながら俺に向けて悪ふざけで構えを取ってきたので、即座に後ろに回り込み、怪我しない程度に思いつきりしばいてやった。

唯の悪ふざけじゃねえかと文句を言ってくるライナーに対して、そもそも安全装置を掛けていても人に銃を向けるのはアウトなんだよとマナーを語り、ついでにアーツとか関係無く撃てるんだから他の銃より危ないに決まってんだろと注意したのだが、それを聞いた二人ともがコンテNDERを凝視し始めた。

二人の反応に何やってるんだと不思議に思いはしたが、直ぐにこのテラにおける銃の不便さを思い出して納得した。

でも正直言って前世の銃を再現する事については、銃と弾の原理さえ理解していれば工業技術がかなり進んでいるこの世界だと、設備費用を用意する必要はあれども源石加工品に比べて遥かに簡単に造れちまえるんだよね、銃と弾…特に弾なんて三階の実験室でも作ってるし。

それらを説明したら二人からドン引かれた、うん知ってた。

お前なんで欲しがったし？

今日は書きたい事多過ぎて頁が足らん…。

二人がドン引きしつつも本当の事なのか疑うような視線を向けていたが、実際の銃弾製作は機材と材料さえあれば一人で製作可能だし、弾丸なんかはライセンスさえ持っていればラテラーノから輸出されてるヤツを購入すれば良いだけだし。

：そーいや銃関係売ってるおやつさんが、買いに来ても銃自体そこまで使う訳ではないのに、鉛弾しか補充せずガンパウダーを買わないおかしな奴って注目しだしたみたいだし、そろそろ弾丸も自作しださうかなあ…。

俺にだけ世知辛い世の中を憂いつつも話を戻し、銃弾製作で面倒なのはガンパウダーと銃用雷管位だったりするのだが、それらも既に個人で生産出来る様に設備は整えてあるからと、二人を三階の実験室へ連れて行った。

扉の取手に着けてある罫を外し、興味深そうに周りを見渡す二人に對して壁と『賢者の石』を仕舞ってある部屋には死にたくなければ触れない方が良くぞと通告しつつ、薬品棚からガンパウダーを取り出し、その他薬莖等の弾丸一式を持って部屋の隅に置いてある銃弾製造機へと持つて行った。

一通りの流れを説明して実際にカチャコガチャコと銃弾を作つて見せると、半信半疑だった二人もおお…と感心した様子で銃弾が出来上がる光景に釘付けになっていた。

片や弾丸は買う物で片やまともに銃には触れないとなれば、そりやあ製造過程に興味そそられるわなあ…なんて考えていたらライナーが俺も作つてみたいと言いだしたのだが、お前銃持つてないんだから作つたところで俺が無駄に弾の在庫抱える羽目になるんだが？ と
いうツツコミに敢えなく撃沈した。

まあ、そんな事言えば実際に使っているニールがなら俺やらせてくれよと言うのだが、流石にタダは俺が損にしかならないから金取るぞ

？ と前置きしておいた（コンテNDER渡そうとしてたのはどうなんだって？ 知らんなあ）

何だかんだ言っても実際の所、様々な用途に使われる源石をガンパウダー代わりや雷管なんかに使ってるせいで高騰している現世の弾丸に比べれば、俺が作っている前世の弾丸を参考にしたヤツの価格って、寧ろ安上がりになるんだよなあ…。

誰でも使える汎用性と現行の物より安く済むという経済性、これだけ見ればとんでもないメリットの塊ではあるのだが、勿論デメリットも有る：つていうかメリットがそのまま『兵器』という視点から見た物でしかない為、日常の平穩を求めるのならこんな物不要の極致ではないのである。

誰でも使える安い武器なんてそれだけで武力を持つ奴が増やせるという事であり、ウルサスみたいな軍事国家からすれば垂涎モノだろう事は必須、誰が好き好んでそんな面倒事を求めるんだという話である。

：まあ、それ以外にも俺の作った前世式の銃弾にはデメリットとは呼び辛いかもしれないが面倒とは言える部分もあり、銃弾毎に出せる火力はそれぞれ種類によって違いはあるが、基本的に一律だったりするのである。

分量同じなら火力が同じになるのは普通だろうと思うものだが、テラの銃弾にはガンパウダー等に『源石』が使われているのである…：そう、アーツを使用する際に用いられる源石が…である。

つまりこの世界の銃弾は、射手がどれだけアーツを扱えるかによって炸薬の破裂する勢いが変わる為、例え同じ銃と銃弾を使っても射手毎に威力が変わってくるのだ。

原作や様々な娯楽媒体での銃使いが、なんでレベル上がる毎に規格品である筈の銃の威力が上がるのか不思議ではあったのだが、少なくともこのテラではこんな理由があったのだった。

そりゃあなんか使用に関して練習が要るとか言われる訳だよ、アーツ使えなきゃそもそも撃てないんだもん。

そんな訳でこのテラに於いては射手の力量次第で銃撃の威力は上

がっていくものなのだが、俺の造る銃弾にはそんな事は一切無く、アーツを一切使えない俺から源石の硝煙に首ったけなサンクタに至るまで、一切平等な火力しか出せないのである…この書き方だと寧ろアーツが苦手な軍人は欲しがりそうだな。

まあ、こうして羅列してみれば汎用性と言えば聞こえは良いが、物理的に脆い術師や医療なんかには通じてても、残念な事に重装や鍛え抜かれた前衛には効果が薄かったりするのである。

そういう奴には（俺は使った事は無いが）それこそニールが使つてするような対物ライフルや、どうしても鍛える事が出来ない為脆いままになっている目なんかをねらったり、身体強化していない戦闘時以外をスナイプして暗殺してやれば済む話ではあるのだが…。

そんな感じで懇切丁寧に前世式の銃弾についてのメリットとデメリットを語つたのだが、両方使えば良いだけじゃんと言って買う事即決したニール…しっかり説明した上で諦めないのならもう俺からは何も言わない、ライセンス保有しているのだしそれで事故れば本人の過失である。

因みにライナーはそもそも銃のライセンス自体保有していなかった為、そもそも銃弾造つても保有してるだけで罪になるのだった…お前なんで欲しがったし？

兎に角、弾丸の出所について他所に漏らさないよう念を押しした上でニールの分の弾丸を造る事にしたのだが、俺自身依頼でしか余り銃を使わない為、一般的な拳銃用と猟銃用の物としか仕入れておらず、ライフル、しかも対物用の物なんて一切なかったのである。

取り敢えず必要な分だけ拳銃用の物を造つてやり、良い機会なので予備の対物ライフルの銃弾を一発参考資料に受け取り、フェンツ運輸に銃弾製造用の機材を取り寄せてもらい自分で作ってみる事にした。

依頼をしてみると流石に物が物な為持つてくるまで時間が掛かるとの事だったが、それ位は待つしニールにも待つてもらおう事にして、やる事なくて賢者の石が置いてある部屋を覗き見しようとしているライナーを一発シバいて止めさせ、残りの判明している転生者について質問する事にした。

二人に聴いてみると、どうやらもう一人の転生者はライナーが初めて見つけた転生者であり、その後見つけたニールを転生者だと見抜いた（というかロックオンネタぶち込んだ）のはその転生者らしく、現在はウルサスに少し寄る形で転生者を探しているだろうとの事。

現在見つかっている転生者は俺含め四人だけであり、俺含め全員シラクーザに居たという：確かにあそこも大分技術が発展しているとはいえ、そんな安全とは言い難いんじゃないのか？　と思っただが、如何やら違う理由があったらしい。

ライナーは転生者を探す為テラを巡っていて、偶々二人を見つけたのがシラクーザだったというだけであり、ニールはシチリアンのちよつとした抗争の時に雇われた傭兵であり、最後の一人はそもそも生まれも育ちもシラクーザであり、そこで生計立てていただけなのだという。

他所で生計立ててる奴が仕事捨てて転生者探ししていると聞かされた時は、まだ見ぬもう一人に対して不安を覚えたものだが、拠点はあれど腕の良さを買われてシチリアンの間を転々としている生活をしており、生計を立てているといっても正直根無草に近い生活だった為、ライナーとニールとの出会いから思い切ってシラクーザを出る事にしたのだという。

つてかシチリアンの間を転々とする力量ってなんだよっていうね：二人に聞いてもなんか苦虫噛み潰した様な顔してアレは直に喰らってみないと判り難いモノだから、会った時に本人から聞いてくれと言われてしまった。

如何やら三人が出会ったシラクーザから手分けして探す事にしていたらしく、それぞれ転生者探索とは別に機械系に強いライナーは龍門で合流した際に使う為の拠点を確保する事を目標とし、ニールはカズデルで傭兵としての伝手を使い装備の補充を、最後の一人は力量を重視される為ヒョロい二人では入り難いウルサスへと向かい、それぞれ合流する日を決めて行動していたとの事。

そしてその決めていた日は明日であり、転生者が見つからず予定より早く着いてしまったニールがライナーによって俺へ紹介されたと

の事。

また新しい同郷に逢えると聞いたのならこんな事している場合じゃねえ、なんか矢鱈と強さが強調されてるからヤバイ奴なのかもしれないが、同郷であるなら関係ねえ、パーティーしようぜ!! 明日に向けて今から準備じゃい!!

アイアンクローで吊り下げ×2

五十六日目

昨日あれからドタバタしながらパーティーの準備してたけど、朝になつて入ったライナーからの連絡でドタキャンする羽目になつた…。何か問題があつた訳…ではあるのだが、ある意味仕方のない問題でもあつた。

今日合流する予定だつたもう一人の転生者はウルサスで他にも転生者を見つけたのだが、その転生者は体表に源石が見えているレベルの感染をしているらしい。

折角会えたのにこの程度で別れるのは人として最低だから、せめてまともに暮らせる様になるまでサポートするつもりとの事であり、ライナー達もそれぞれ何かしらの手立てがないか探す為に出るとの事。

まあ、そんな話を聞いてハイそうですかと流す事なんか勿論出来ず、折角昨日用意したパーティー用の食い物も勿体ないので、相談に乗る為にギリギリ感染者が近付いても問題無い場所まで来ているそうなので、飯やらなんやかんやを持って見送りに行く事にした。

準備を終えたライナー達と龍門を出てすぐの待ち合わせ場所に向かうと、そこに居たのは転生者だと思われる、クツソ厳つくてケモ度が高く俺より頭一つ分高身長なループスの男と、男とは正反対に俺の鳩尾程度の身長に腰まで伸ばした黒髪も相まって死人かと思える程青白い肌に、いつそ眠たいのかと思えてくるジト目をしたブラッドブルードらしきサルカズの女という、なんとも珍妙な組み合わせの二人組が、乗ってきたのであろうキャンピングカーの前に立っている姿が見えた。

…のだが、右手の甲に源石が出ているのが見えたので女の方が新しく見つけた転生者なのだとは即座に分かったが、男の方の格好が何故か着ている羽織りの右側に『背中』の文字、読めますか？』と書かれており、左側には『Can you read letter?』と微妙に読み難い書体で書かれていたのだ。

気になつて男の後ろに回ってみると、そこにあつたのは『俺の後ろ

に立つんじゃあない!!』と銃を構えているゴルゴ13の刺繍(台詞付き)が描かれていた…こんなん笑うに決まってるだろいい加減にしろ!!

唐突な不意打ちに吹き出してしまった俺に対して、俺が後ろに回り込もうとしているのを見てそのまま仁王立ちしていた男の方は何とも言えない表情をしており、女の方は何処となく先程までのジト目に同情的な色を混ぜた様な顔付きになり、ライナーとニールは悪戯が成功した悪戯鬼みたいに『ツエーイ??』とどこぞの一方通行さんみたいなよく分からない掛け声しながらハイタッチしていた。

話を聞けば、俺も見送りに出る事を聞いて即座にインパクトのあるサブライズをしようと言い出し、それによって押し切られた事で転生者探しに使っていた服を着ていたのだという。

人の事思いつきり笑ってくれた悪ふざけ犯の二人を少しばかりオシオキ(アイアンクローで吊り下げ×2)してから改めて二人の方へ向き直ると、大の大人二人を軽々と掴み上げた俺に対して少しばかり引いていたが、少しばかり話してみれば二人とも普通に話に乗ってくれた。

ループスの男はケイジといい、あまりにも日本らしきのある名前にどういふ事なのかと尋ねると、ケイジは元々シラクーザで名前も付けられず捨てられた捨て子であり、その為前世の名前をそのまま使っているからとの事。

サルカズの女はシグレといい、名前の響きからケイジと同じ前世の名前を使っているのかとも思ったが、シグレに関しては元から極東生まれであった為、名前が似ているのはその為だと説明された。

感染についてシグレは極東生まれの極東育ちだったのだが、つい先日初めての旅行だったらしいウルサスで感染者の銀行強盗に襲われ、自力で撃退する事は出来たもののその際怪我をしてしまい、それによつて不運にも鉱石病に感染してしまったのだという。

不運な出来事ではあるが、俺はその事以上に『ウルサスで暴徒に襲われた』という事態にレユニオンが動き出し、原作の展開が始まってしまったのかと思わず身構えたのだが、どうやら単なる銀行強盗だっ

たらしく一安心：かと思いきや、今度はそんな俺の反応を不思議に思ったらしい四人（ライナーとニールは復活した）がどうかしたのかと聞いてきた事で問題が浮上した。

なんと四人とも前世でこの世界の指標とも言える原作『アークナイツ』について殆ど知識が無いとの事：あつてもライナーの「そういえばそんな感じのゲームが話題になってたっけ？」という程度の知識：メタい事言う様だけれどこういうゲームで知られる世界への転生つて、基本知ってる奴ばかりがするもんなんじゃないのだろうか…？

そんな訳で俺の知っている範囲で原作の流れを教えたのだが、俺自身そこまで知識がある訳でもなく、知っているのはゲームで言えばメINSTストーリーはスカルシュレツダーとの決着程度までしか進めれておらず、サイドストーリーも『騎兵と狩人』と『青く燃ゆる心』と『喧騒の掟』の三つ位しか覚えてないスカスカっぷり…。

例外的にフロストノヴァについてはモロにネタバレを喰らってしまった事である程度は知っているのだが、そんな事よりも問題なのは恐らく時系列的にはまだ未来の出来事である筈だった『青く燃ゆる心』と『喧騒の掟』に相当する出来事が既に終わっているという事である…。

最初は俺がある程度の展開を知っていると聞いて四人とも沸き立っていたのだが、説明をしていく度に転生者特有の『ある程度精度のある未来視モドキ』が当てにならないという現実に皆して頭を抱えてしまう有様：現実つてのは甘くは無いんだと言われた気分である。

重い空気を変える為にシグレは何処の治療施設を頼るつもりだったんだと聞いてみれば、重い口調でカシャの動画で知ったロドスへ行こうと思っていたと答えられ、見事に話が帰ってくるというザマに…。

カシャにロドス紹介したのが俺なのもあつて帰って来たブーメラに爆弾を括り付けられていたような気分である。

みんなしてオウフ…とでも聞こえそうな落ち込み方をしてっていると、ライナーがそんな空気にキレて無理矢理落ち込みムードを解消させ、そのまま今後の予定についてそれぞれがどうするのかを話し合う事

になった。

ライナー達はそのままシグレの付き添いという形でロドスへと向かい、それぞれの特技を活かしてオペレーター等への就職を決め、原作の舞台であるから鉱石病も完治出来るのではないのかという打算の下、世界の希望とも言えるロドスに尽力しつつ、ロドスのテラを巡っているという性質や原作の拠点である利点を活かして他の転生者を探してみるとの事。

俺の方は以前からも着々とやっていた、龍門の拠点でもしも原作の様な事が起こるかもしれないという考えの下で、チエルノボーグに不穏な出来事がないかどうかを観測していくつもりであり、もしも何か問題が起きるようならば、以前の恩を返す為にちよつくら戦時下のチエルノボーグを走ってこようと考えている事を伝えた。

正直ドクターが原作の最序盤に納められていた『石棺』とやらに居らず、普通にロドスアイランドに居た事を考えると、チエルノボーグへ関与してこないのではないのだろうかという不安はあるが、だからといってそんな理由で手を引くというのは…うん、二度目の人生なんだしカツコよく生きていたいし？ 後悔だけはしたくないもんな。

その事を告げると四人とも何処となく共感出来るところがあつたのか頷いていたが、そろそろ時間だという事で別れる事になった、また今度会う時にはしっかりと話し合いたいものである。

ー寝る前の情報収集にて『チエルノボーグにて不穏な気配アリ』との事…。

オペレーター：ブレードランナー

【コードネーム】 ブレードランナー

【性別】 男

【戦闘経験】 2年

【出身地】 リターニア

【誕生日】 4月12日

【種族】 キャプリニー

【身長】 182cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、非感染者に認定

能力測定

【物理強度】 普通

【戦場機動】 優秀

【生理的耐性】 優秀

【戦術立案】 普通

【戦闘技術】 普通

【アーツ適正】 優秀

個人経歴

友人であるアマツキの付き添いでロドスへと訪れた元旅人。

なんと様々な地へと自らの足を運んでいた為かかなりの持久力を持っており、一見軽そうに見える目や雰囲気からは想像も出来ない程の忍耐力も持ち合わせている為、ロドスのオペレーター加入試験に於いて行われる重装備下での踏破試験では決して速いとは言えないものの、息一つ切らさずに駆け抜けており、同条件での登攀試験ではロドスに於ける歴代オペレーター上位十名に食い込む程の結果を叩き出しました。

中でも特に異質とも言える結果を出したシャトルランでは、他のオペレーター候補達が次々と脱落していく中、ブレードランナーのみ一

向に疲れを見せずに四桁を越え、これ以上は後の試験の時間が押されると判断された事で中断されるという事態が起きたのですが、そんな中でもブレードランナーは多少疲労感を漂わせるだけで済んでおり、本人も今迄正確な地力を調べた事が無かったとの事で驚いている有様でした。

健康診断

【源石融合率】 0%

鉍石病の兆候は見られない。

【血液中源石密度】 0.14 u/L

源石との接触は極めて少ない。

第一資料

ブレードランナーは友人であるアマツキの鉍石病治療の為に共にロドスへと訪れ、そのままロドスのオペレーターへと志願した内の一人である。

オペレーター加入試験の際に見せた尋常ではないスタミナに目が行きがちになってしまいうだろうが、彼の扱う特殊なアーツは精密機械にこそ最大の効力を発揮するものであり、本人も初めはそちらの方向性でオペレーターを目指すつもりだったらしい。

明るく何処か軽めな性格の為か他のオペレーター達とすぐに馴染んでおり、本人も別段問題を起こさず、寧ろある程度は問題解決に手を尽くそうとするので良識あるオペレーター達からは大分助かっているとの事。

あそこまで丁寧な履歴書、しかも全員分作り上げるとか昨今見た事無いぞ。

——人事部部長

第二資料

特筆すべき点といえば矢張りブレードランナーの用いるアーツであろうか？

アーツによって炎熱や電撃を身に纏うという類のモノはそこそこ

見られるが、ブレードランナーのアーツは自分自身を電波体とやらに
変換し、自身が触れている精密機械へと侵入するという他に類を見な
いものである。

但しこれはある種アーツを身に纏うタイプと同じ宿命と言うべき
か、ブレードランナーのアーツは自身の装備には基本適応されない
為、アーツを使用する際は特別に用意してた服で行うのが前提とされ
る。

加工した服増やし過ぎたせいなのか、偶に加工してない服だと気付
かずにアーツ使つて真っ裸になる時があるんだよなあ…。

ーブレードランナー

第三資料

とんでもないスタミナや健脚があるとはいえ、ブレードランナー自
身の戦闘力は決して高い方だとは言えず、持久力はあれども機動力自
体もそれ程高い訳ではないのでそれ程強力とは言い辛いものがある
が、それらの問題を彼は装備によつて解消する事に成功した。

「足が遅いのなら速い物に乗れば良いじゃない」…そう言つて彼は
有線式の端末を装備した大型のドローンを用意して、自身のアーツで
擬似的に乗り込む戦闘スタイルを確立させたのである。

大型のドローンである為拡張性は高くされており、銃火器や爆薬等
を積み込みラジコン操作よりも正確に敵陣へと突っ込み強襲を仕掛
けたり、レーザーガンを多少改造した物を装備させて相手のドローン
へ接続し、そこからアーツで乗り移つて制御権をハッキングし、これ
らの支援をもつて部隊への貢献を果たしています。

第四資料

ブレードランナーの異能はアーツと近い能力である為一見分か
り辛いものではあるが、実際彼の戦闘能力はこの異能が大半を占めて
いると言つても過言ではない。

彼の異能は他の異能持ち達と比べると彼らの様な奇跡にさえ思え
てくる様なソレではないのだが、プログラマー達からすれば正しくこ

れ以上無い程の優良物件と言えるだろう。

ブレードランナーの異能は『プログラムの自動生成』という、他のアーツ染みた異能とは異なり機械、ソレもソフト面に関係する異能であり、その内容も『自身が触れている機械のプログラムの生成、及び改編を自由且つ瞬時にする事が出来る』というモノである。

敵の操作するドローンに用いれば『他所からの操作を受け付けず』『敵を自動で攻撃し』『攻撃出来なくなれば特攻する』というものへと書き換えたり、側だけ作ってこれからソフト面を作るモノであれば、要望さえ先に伝えれば対象に触れるだけで瞬く間に希望の品が完成である。

数少ない弱点としては容量が絶対的な問題として残る為、敵の機体をハッキングして逆利用する場合は、自身のドローンを繋げたまま容量の嵩増しを図っている。

最初はアーツの副次効果だとずっと思ってたんだよなあ…。

ーブレードランナー

《ゲーム的な資料》

星五 補助オペレーター

募集タグ

遠距離／支援

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：1350

攻撃：450（+15）

防御：160

術耐性：15

再配置：遅い（90s）

コスト：16／18／18

ブロック：1

攻撃速度：通常、やや速い（1.25s）

：スキル2使用時のドローン、やや速い（1.25s）〈遅

い (2.00s)

特性

ドローンを操作して敵に物理ダメージを与える。
スキル使用中はドローンのみの攻撃となる。
遠距離マスにも配置可能。

攻撃範囲 (初期↓昇進I↓昇進II)

????????????
 ↓
 ????????
????????????
?? ??

潜在能力

コスト—1

防御+7

術耐性+5

防御+8

コスト—1

昇進I

20000

初級補助SOC×4

初級エステル×5

初級装置×2

昇進II

120000

上級補助SOC×3

上級異鉄×6

RMA70—17×11

素質1 オーバードロード

ハッキングした敵のドローンは時間経過と共にスリップダメージを受ける。

素質2 フィールドクラッキング

機械系設置物の消費コスト-15。

編成時、機械系のフィールドギミックが設置されている際に出撃されていない場合に限り、コストを5消費する事でギミックを自陣の物として使用可能となる。

基地スキル 電脳の魔人

制御中枢内に配置した場合、製造所に配置されたオペレーターの製造効率+15% (+5%)、発電所のドローン回復速度+15% (+5%)、加工所の副産物入手確率+20% (+10%)

スキル (全特化3状態)

スキル1:ドローンフルバースト (時間回復、手動発動、必要SP 25、初期SP 20、持続15s)

攻撃力+400%、前方5マス×幅3マス(奥2マスは幅5マス)の敵全てに物理ダメージを与え、普通の力で吹き飛ばす。

効果時間終了後10秒間離脱 (離脱中もSPチャージは行われる)

スキル2:ドローン奪取 (時間回復、手動発動、必要SP 35、初期SP 20)

攻撃範囲内に存在するドローン一体を自軍の物として扱い自身のステータスを上乗せして攻撃に参加させる (撃破扱い)

自身のドローンが破壊された場合は効果を受けたドローンも破壊される。

オペレーター：デユナメス

【コードネーム】 デユナメス

【性別】 男

【戦闘経験】 4年

【出身地】 ラテラーノ

【誕生日】 12月11日

【種族】 サンクタ

【身長】 184cm

【鉱石病感染状況】

状況証拠の結果、感染者に認定

能力測定

【物理強度】 標準

【戦場機動】 優秀

【生理的耐性】 標準

【戦術立案】 優秀

【戦闘技術】 優秀

【アーツ適正】 優秀

個人経歴

友人であるアマツキの付き添いでロドスへと訪れたサンクタ族の傭兵、既にラテラーノ国民としての立場を放棄している為、国民特権は失われている。

鉱石病の中でも類を見ない特異な感染をしており、血中源石密度自体は殆ど非感染者と変わらないのだが、何故かサンクタの特徴である光輪と羽に源石が発生し、それにより迫害を受けた事で家族や友人達を巻き込まないとラテラーノを離れる事となった。

その際に国に対して不信感を募らせた事で、ラテラーノ国民としての全ての権利を破棄したとの事。

その後は鉱石病の進行により光輪と羽は完全に源石塊となり浮力

を失い、フリーランスの傭兵へと身を窶し各国を転々と渡り歩き、超遠距離から放たれる超精度の一撃により、有効射程驚異の五キロメートルを誇る『魔弾の射手』とまで呼ばれる凄腕の狙撃手として名を馳せる様になった。

その後も傭兵として宛ても無い旅を続けていたのだが、ある日出会ったブレードランナー及びアスラと意気投合して共に旅同行する事になり、更にその旅の途中でアマツキと意気投合したのだが、その時既にアマツキは感染者となっており、自身とは違い確実に感染者と分かるアマツキの為に治療を受ける事にしようとして決めてロドスへとやって来た。

健康診断

【源石融合率】 10%

本当の所を書けば彼には鉱石病の痕跡等微塵も無いのだが、それにしては幼馴染であるというエクシアやモステイマがデユナメスの姿に驚いていた事や、過去のラテラーノに居た時の写真ではしっかりと光輪と羽が確認された事からこの値とする。

何をどうしたらこんな特異な発症をするんだ？

――医療オペレーターA.C.

【血液中源石密度】 0.11u/L

非感染者と何ら変わらない血液中源石密度…本当に此奴の感染状況はどうなっておるのだ？

――ワルフアリン

第一資料

ブレードランナー達と共に来たサンクタの傭兵。

以前から傭兵界隈で話題に上がりつつあった人物であり、武器としている大型狙撃銃の有効射程をも超えた位置にいる対象を狙い撃つ、超々長距離射撃を得意とするスナイパー。

超々長距離狙撃の秘密については今回行われたオペレーター加入試験に於いて、他にも参加オペレーター達と同様に異能による結果だ

という事が判明はしたのだが、例え異能を持ち要らずとも有効射程であれば確実に対象を狙い撃てる程の精密性を持ち合わせている。

第二資料

長距離狙撃に於いて無類の強さを発揮するデユナメスではあるが、早撃ちに於いてもかなりの記録を叩き出すのはサンクタの面目躍如といった所だろうか？

実はデユナメスは狙撃が得意というだけであり別段他の銃も使えないという訳ではないのだが、彼のアーツが凡そ自身の手の届く範囲の空間操作という限定されたものだった為、それを活かした戦術を構築していった結果狙撃手に落ち着いたとのこと。

即興の高台を作り上げる事で視界を確保し異能を十全に発揮させたり、空間を歪ませて周囲から身を隠しつつ一方的に狙い撃つ等、考察してきた用途が悉く狙撃と相性が良かったから狙撃がメインになっていくだけなのである。

空間操作系のアーツは集中を要する為移動しながらの発動が難しく、それさえクリア出来ればアーツでシールドを展開しながら突撃する手等も考えていたとの事。

第三資料

デユナメスの戦い方はとてもシンプルだ、即ち『狙いを定めて撃つ』の一言で足りる。

狙いやすい場所へ着いたら唯只管に狙って撃ち、狙って撃ち、狙って撃ち、狙って撃ち…時々戦況に合わせて狙撃位置を変えながら同じ事を延々と繰り返し返す、正に狙撃手のお手本とでも言うべき立ち回りである…その場所が普通では考えられない位距離がある、という事さえ除けばだ。

彼の狙撃距離は只管遠い…1キロ2キロは当然の様に離れており、彼の狙撃は基本持っている銃の有効射程ギリギリで行われているのだが、それでいて彼の弾丸は切り払われたりしない限りは必中なのである。

異能の影響もあつたのではあるが、今となってはそれさえも射程を延長する為のアクセント程度になつてゐる。

第四資料

デユナメスの異能はシンプルに言えば物語等で良く見られるものであり、他の異能持ち達と同じく世界の法則ガン無視の超常現象である。

デユナメスが対象を肉眼で視認していればどんな形でも良いのでデユナメスから『放たれる』事をトリガーとしており、放たれた物体（以後名称を『弾丸』とする）は最高速度に達すると、そのまま勢いを衰えずに標的へと直進する様になる。

『弾丸』は標的へ命中するまでは例えどれ程の距離があろうとも飛び続けるが、直撃するまでデユナメスが標的を目視し続ける必要があり、目視が外れた場合『弾丸』は再び同じ対象を目視出来なければ物理法則に囚われてしまう事になる。

他にも『弾丸』は飛翔中に本来の形状を保てなくなった時点で効力が失われてしまう等の欠点も持つてはいるが、これらの欠点も超高速で飛翔する弾丸には余り関係の無い話であろう。

初めて異能の事が分かつてから気になつて散弾ぶつ放してみたら、散弾なのにも関わらず全部標的に直撃したのはタチの悪い夢みたいだつたな…。

ーデユナメス

《ゲーム的な資料》

星五 狙撃オペレーター

募集タグ

遠距離火力

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：1700

攻撃：1650（+100）

防御：180

術耐性：5

再配置：遅い(90s)

コスト：20 / 22 / 22

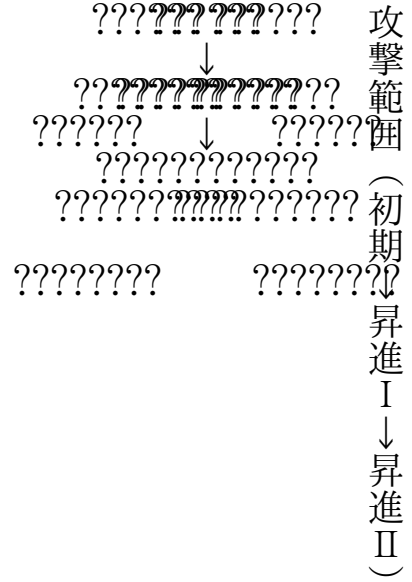
ブロック：1

攻撃速度：通常、やや遅い(1.55s)

特性

通常攻撃範囲外の敵を優先して攻撃。

攻撃範囲内の防御力が一番高い敵を優先して攻撃。
稀に敵が即死する。



潜在能力

コストー1

攻撃+10

術耐性+5

素質強化

コストー1

昇進I

20000

初級狙撃SOC×4

初級エステル×5

初級装置×2

昇進Ⅱ

120000

上級狙撃SOC×3

上級異鉄×6

RNA70—17×11

素質1 成層圏さえも狙い撃つ男

初期攻撃範囲外の敵の防御を50%無視して攻撃出来る。

(昇進2)通常の攻撃範囲外の敵を攻撃時、現状の攻撃力に元の攻撃力+100%(+25%)

素質2 湾曲迷彩

敵の攻撃範囲に入っても10秒間攻撃されない。

敵の遠距離攻撃を50%の確率で回避。

基地スキル 狙撃傭兵

訓練所で協力者として配置時、狙撃の訓練速度+50%

スキル(全特化3状態)

スキル1:精密狙撃(時間回復、手動発動、必要SP25、初期SP10、持続40s)

通常の攻撃間隔が僅かに延長(0.75s)し、攻撃力+50%、素質の防御無視が100%になり、攻撃範囲全てが対象となる。

スキル2:高高度狙撃(時間回復、自動発動、必要SP50、初期SP0、持続—)

屋外フィールド限定。

上空へ移動して無敵状態(配置位置はそのまま)へと移行し、攻撃力+150%、攻撃範囲が戦場全体まで拡大。

オペレーター：アスラ

【コードネーム】 アスラ

【性別】 男

【戦闘経験】 6年

【出身地】 シラクーザ

【誕生日】 5月31日

【種族】 ループス

【身長】 202cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、非感染者に認定

能力測定

【物理強度】 優秀

【戦場機動】 優秀

【生理的耐性】 優秀

【戦術立案】 普通

【戦闘技術】 卓越

【アーツ適性】 卓越

個人経歴

ブレードランナー達と共にやって来たシラクーザの裏世界で有名なマッサージ師。

彼の手に掛かれれば凡ゆる不調も瞬く間に解消される『神の手』とも呼ばれるマッサージの技量を持ち、嘘か本当か時には彼を独占しようとしラクーザのマフィア達が小競り合いを起こしたとされる程の腕前。

異能も関係しているのだが人体構造に深く精通しているおり、ただ一眼見ただけで相手の体調を完璧に見抜き、現在の状況から最も効率の良いマッサージを施す事で、マッサージを受けた相手は即座に穏やかな眠りへと導かれるのだという。

四日間仮眠だけの状態に三徹追加でゴリゴリに凝った全身が、一時間ちよつとのマッサージであつという間に楽になつたんだが…。

——人事部部長

健康診断

【源石融合率】0%

鉱石病の兆候は見られない。

【血液中源石密度】0.16u/L

シラクーザの裏世界に長く居はしたが源石との接触は少なかったようだ。

第一資料

ブレードランナー達と共にやって来たマッサージ師。

元々孤児ではあつたのだが生来備わつていた異能である流れの知覚を利用して何かを出来ないか模索していた生活を送つていて、ある日マフィア同士の小競り合いに巻き込まれた際、同じく巻き込まれていた炎国から旅行に来たという人物に結果的に助けられ、その時に見た武術に直感的な何かを感じ取り弟子入りを志願した。

アスラの直感は大当たりし、弟子入りさせてもらった人物も普段は龍門で按摩師をしており、習つた武術は整体に関しても深い歴史がある武術だつた為、一通りの技術を習得した後、同業者であり自分よりも腕が良い師匠が居る龍門では稼げないと判断してシラクーザへと戻つた。

しかし異能と武術を組み合わせたマッサージで生計を立てようとしていたのだが、孤児であつたアスラはまともな生活の土台となる様な基盤が無く、金も無ければ親も居ない為に営業許可も取れないという無い無い尽くしだつた為、路地裏等でひっそりと口コミ経営をして暮らしていたとの事。

思えばあの頃が一番幸せだつたとさえ思えるな…。

——アスラ

第二資料

その後衝撃を操作するアーツをマッサージに組み合わせる等、技術の発展を重ねていく内に口コミも広まっていき、正式な営業ではなくともそこそこ有名なマッサージ師として知れ渡っていった。

そんな時にとあるマフィアの耳にアスラの話が入り、マフィアからマッサージの依頼を出されたアスラは仕事だからと渋々これを受諾、手を抜くなんて出来ない性格であるアスラはいつも通り完璧に仕事を熟した。

マッサージを受けた事でその腕前に感激した当の依頼を出したマフィアが、アスラに対して自身の傘下に入る事を強要するも、理不尽が多い裏世界に囚われずにやりたいアスラはしつこい強要を蹴って逃亡、ここからアスラの思惑とは真逆なシラクーザの裏世界に於ける微妙な立ち位置での生活が始まった。

話を聞いた上のマフィアが一般人であるアスラによって面子に泥を塗られた、とアスラを肅清しようとするもアスラ自身がこれを撃退してしまい、それによって弱ったマフィアを対立していた別のマフィアが襲撃して壊滅させ、図らずとも弱小とはいえマフィアの一角が無くなる切っ掛けとなったアスラは裏世界から注目を集める羽目になったのだった。

第三資料

アスラにとってマッサージの技術習得と自衛の為の手段として身に付けた武術ではあるが、その完成度は達人のそれにさえ劣つてはいないと言えるものであろう。

その大柄な身体からは信じられない程流麗な動きで敵からの痛手を躲し続け、まるで水の流れを思わせる滑り込む様な歩法によって対象の内側へと潜り込み、練り上げられた身体の動きから放たれる内側から破壊する様な一撃によって敵対者を地へと沈める一連の流れは、試験を行っていた教導員さえも思わず見惚れてしまう程のものであった。

更にアスラにとってこれら一連の流れは武術のみに縛ったデモン

ストレーションでしかなく、アーツを用いれば例え撃たれようとも衝撃を地面へと流して無効化するだけでなく、近接戦に至っては受ける筈の衝撃をそのまま相手へと返し、デュナメスの撃った対物ライフルが直撃した衝撃を足下に流して周囲を陥没させるという滅茶苦茶な事態を引き起こしました。

第四資料

アスラの異能は他に一緒だった異能持ち達と比べれば特段地味とも言える様な内容ではあるが、アスラ自身の戦闘力やマツサージ等には確実に多大な影響を与えていると言えるだろう。

アスラの異能は五感とアーツの知覚による『流れ』の感知と、経験則によって補足される情報から組み立てられる超高精度な『未来予知』及び『サイコメトリー』であり、その精度はどれだけ情報を感じ取れたかによって明確に変動します。

例えばアスラが行うマツサージに関しては、相手を視て、声を聴き、匂いを嗅ぎ、直接相手に触れる事により、相手のアーツの流れを知り、相手の容態を瞬時に把握する事につながったり、戦闘ならば相手の身体の動きを視て、呼吸を聴き、肌で感じる事で相手の動きを手を取る様に読める様になるという。

割合としては五感とアーツに関する『流れ』の情報一つにつき約20%程の精度を得られ、それらに経験則から知識として持ち得ていれば5%〜25%までの補正が掛かり、先の例二つで見ればマツサージはアスラの経験則が存分に活かされる為、精度の合計値はアーツ以外はそれぞれ20%〜25%まで加算され、最低でも精度は200%という数値となります。

これは相手よりも相手の身体について知り尽くしている状態となり、ここまで来ればマツサージによって血液中源石密度さえも数割低下させられるという、正に神の手と呼べる程の技術を発揮した。

更に『サイコメトリー』について調査を行う為、龍門での時効間近で完全犯罪と言われている事件の概要を教え現地へ赴くと、現地に残されたままの血痕をひと舐めした後、過去の事例は精度が下がる為確

証は薄いと前置きしてから、フラフラと何かを追う様に移動していき
ました。

あるアパートの住人を呼び出した後いきなりアパートの花壇の一
角を掘り返し、そこに埋められていた証拠を掘り出し鑑定に掛けた結
果、呼び出した住人が事件の犯人だと判明するという、いきなり過ぎ
る解決を迎えました。

どうやらアスラ本人が知らないものさえも他の感覚から得た情報
が補い、まるで当時その場に居た様に犯人の足取りを追っていたとの
事です。

いや俺のマッサージそこまでやってたのかよ…。

ーアスラ

え、ツツコミを入れる所そこ!?

ーブレードランナー

《ゲーム的な資料》

星五 特殊オペレーター

募集タグ

近距離 牽制 弱化

ステータス (昇進ⅡレベルMAX時)

HP : 1600

攻撃 : 500 (+50)

防御 : 155

術耐性 : 0

再配置 : 速い (20s)

コスト : 7 / 9 / 9

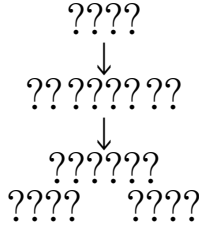
ブロック : 1

攻撃速度 : 速い (0.75s)

特性

再配置までの時間が極めて短い。

攻撃範囲（初期↓昇進Ⅰ↓昇進Ⅱ）



潜在能力

コスト—1

再配置時間—4

素質2強化

再配置時間—6

コスト—1

昇進Ⅰ

20000

初級特殊SOC×4

初級エステル×5

初級異鉄×2

昇進Ⅱ

120000

上級特殊SOC×3

上級エステル×6

中級源石×11

素質1 浸透勁

攻撃した相手を0.5秒スタンさせる。

素質2 未来予知

相手からの攻撃を50%（+25%）の確率で回避する。

ブロックしている相手の場合75%（+25%）の確率で回避する。

ブロックしていた相手からの回避率が100%を超えた場合、超えた割合分の物理ダメージで相手に反撃する。

基地スキル 神の手

配置宿舎内、自身以外の配置オペレーター一人の体力回復速度が1時間毎に+1.50

スキル（全特化3状態）

スキル1：崩拳（攻撃回復、自動発動、必要SP3）

次の通常攻撃時、攻撃力+200%で対象に攻撃し、周囲ハマス以内にいる地上の敵に半分の物理ダメージで防御力無視攻撃をし、攻撃した敵それぞれの防御力30%ダウン。

スキル2：天衣無縫（パッシブ）

攻撃速度+0.25s、素質2の回避率を倍にし、飛行している敵以外の遠距離攻撃ダメージも反撃する。

オペレーター：アマツキ

【コードネーム】 アマツキ

【性別】 女

【戦闘経験】 なし

【出身地】 極東

【誕生日】 11月17日

【種族】 サルカズ

【身長】 152cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、感染者に認定

能力測定

【物理強度】 標準

【戦場機動】 普通

【生理的耐性】 普通

【戦術立案】 標準

【戦闘技術】 標準

【アーツ適正】 優秀

個人経歴

極東の片田舎で趣味で酒蔵を経営し生計を立てていた女性。

近年になって売り出され一部のサルカズ境界ーー具体的に言えばブラッドブルドーに熱狂的な人気を出している、迷酒『匂いたつ血の酒』を極稀に製造、販売している事で有名な酒蔵の主であり、本人曰く「自分のアーツと相性が良かった結果造れているだけ」と語っている。

そんなアマツキだがそもそも『匂いたつ血の酒』の製造方法については、彼女が趣味の新作酒造りのヒント探しを行っていた旅行の最中、雨天により外出出来なかった際に暇潰しで行っていたネットサーフィンで見つけたものなのだという。

帰国してから実際に作ってみて成功し、暫く酒造りで細々と生計を立てながら資金を貯め、再び旅行へ出た際に寄ったウルサスでブレードランナー達と分かれて旅をしていたアスラと友人となったのだが、その後個別行動をしている際に感染者の銀行強盗に襲われて『領域』の外である対外に感染をしてしまった。

幸い鉱石病に対して理解のあるアスラやアスラを通じて友人となったブレードランナー達のお陰で問題無くウルサスを離脱する事が出来、治療する為にロドスへと向かう事となった。

健康診断

【源石融合率】 6%

銀行強盗に襲われた際に怪我をした右肩に源石が出来てしまっている。

【血液中源石密度】 0.10u/L

アマツキ自身の異能によってアーツが使える範囲で抑えられている。

第一資料

ブレードランナー達と共にやって来た一人であり、ロドスへとやってくる事になった発端。

元々趣味で酒蔵をやるレベルで酒好きではあるのだが、その量は底無しのウワバミであり、例え宴会で他に來ていた人物が悉くダウンしていようとも、ほろ酔い程度で呑み続ける程。

鉱石病に罹りロドスへ移る事を決めてからの行動は早く、自宅の酒蔵にある酒造設備全てをロドスへと移設しそのまま営業しており、ロドスにとつて貴重な収入源と一部嗜好品の生産も行っている。

趣味による実益がそのまま自身の娯楽にも繋がる為アマツキの酒造に対する熱意は高く、新しい酒を見つけたら自分でも作れないか試してみても、いけると感じたのなら売り出すスタイルな為種類も豊富であるのだが、外部で買った酒も売り出している為、物によってはとんでもない値段がする物さえある。

ブレイズとか結構高い種類のも買いに来るけど、お給料大丈夫なのかしら？

ーアマツキ

第二資料

戦闘面に関しては素人同然の彼女ではあるが、友人達が前線に出るのに自分だけ仲間外れは嫌だと案を募りつつも意地を張ってみせ、ある種異様な戦闘スタイルを確立させた：自身のアーツで周囲一帯を血の海へと変え、そこから異能を用いて戦うのである。

造血のアーツによって普段から貯め込んでいる血液を現場に到着と同時に周囲一帯へ撒き散らし、出来上がった血の池を異能によって操作し、人形や血で出来た杭で攻撃し、流させた血を操り更なる流血をもつて対象を仕留める事が出来る。

：のだが、アマツキ自身はつい先日まで戦闘とは一切関わりの無い一般人だった為、自分だけでなく敵であつても流血する事に対する忌避感が高く、そこまで酷い事を出来る程の精神力が無い。

出来るのは精々が強固に造った人形による足止めや、血液を用いた味方の防衛に怪我に対する応急処置が精々である。

第三資料

アマツキのアーツは対象の血を増やすというとてもシンプルなものであり、彼女の代名詞と言える『匂いたつ血の酒』もこのアーツで増加させた自身の血を原材料に製造しているという。

触れてさえいれば他者に使用する事も可能ではあるのだが、自身への使用は現在の量が体感出来る以前に『領域』である為加減する必要が無いのだが、他者へと使用する場合は相手の顔色で判断するしかない。

加減を間違えると鼻血や充血、最悪血液過多で折角塞いだ傷口を再び開きかねない危うさがある為、現在は出撃する度に血だらけになるブレイズやスペクターで経験を積ませている。

そのアーツの特性上ロドスに滞在しているブラッドブルード達に

よく集られてはいるが、アマツキ自身はブラッドブルードとは思えない程の協調性を持っている為、毎度毎度押し切られたり周りのオペレーター達に助けられたりしている。

因みに造られる血はアーツで増やしているのだが、何故か当人の直近の食生活が影響を与える様であり、もしもニンニクを多量に摂取していた場合等は暫く近寄れない程の悪臭が漂う羽目になるので要注意。

第四資料

アマツキの異能は自分の身体を『領域』として触れている血液を操作するものであり、この『領域』である体内には際限無く血液を貯める事が出来る上、領域内の血液はアマツキの自由に成分を弄る事が可能な為、対外に源石が出来ない限りアマツキは鉱石病になる事は無かった。

血液の操作に関しては限度はあれど、通常の凝固作用による硬度よりも遥かに強固な物へと変える事が出来たり、粘度を増加させて他の物同士をくっつけたり弾力を持たせる事で衝撃の吸収をさせたり、これらの別々の特性を併せ持たせる事で一時的な防具を展開する事も可能。

また、この異能はアマツキが触れている血液であれば追加で増えた分も累計される為、敵味方問わずアマツキの領域で流血する事は彼女の異能を強化する事になる。

流血に傷口を通して他人の体内の血液を操る事迄は出来ないが、そんな事をしなくてもアマツキ自身が大量の血液を作り出して質量責めに出来る為、相手は正に『血の海に溺れる』羽目になるだろう。

…まあ、これらの案もアマツキ自身の善良な価値観や殆ど際は無いといえ流血による体調の悪化等によって実際に行われる事は無いのだろうか…。

皆発想怖過ぎじゃない？ えっ…寧ろ生温い方？ なにそれ怖い…。

ーアマツキ

《ゲーム的な資料》

星五 補助オペレーター

募集タグ

遠距離 減速 支援

ステータス (昇進ⅡレベルMAX時)

HP : 1400

攻撃 : 350

防御 : 190

術耐性 : 25

再配置 : 遅い (115s)

コスト : 8 / 10 / 10

ブロック : 1

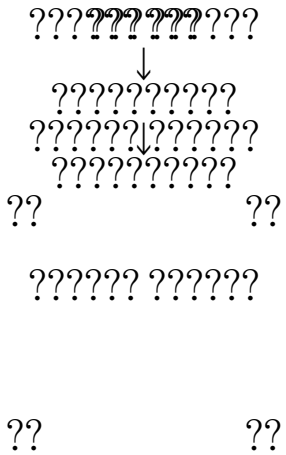
攻撃速度 : 普通 (1.00s)

特性

攻撃範囲内の敵全員を攻撃。

攻撃時、敵を一瞬足止め。

攻撃範囲 (初期↓昇進Ⅰ↓昇進Ⅱ)



潜在能力

コスト | 1

再配置時間 | 7

素質2強化

スキル（全特化3状態）

スキル1 ブラッディドレス（時間回復、手動発動、必要SP50、初期SP40、持続60s）

攻撃範囲内に居る自分以外の味方全員の攻撃速度―1.5し、その後自身の防御力の100%を加算。

攻撃範囲内の敵全員の攻撃速度をワンランクダウンさせる（

スキル2 ブラッディタワー（時間回復、自動発動、必要SP30、初期SP15）

「血の塔」を設置可能になり、ステータスは自身を参照するがブロック数は3となる（上限3）

「血の塔」は攻撃を行わないが破壊された時、周囲の敵をかなりの力で吹き飛ばし、3秒スタンさせる。

ありがたいけどなんか複雑…。

五十七日目

チエルノボーグで不穏な気配があるとはいっても現状穏やかではあるらしいので、ちゃんと装備を整えてから向かう事にする。

原作の描写からしてテロというより、最早戦争染みたクソツタレな戦況だった筈なので念を押してガチ装備で行くつもりだが、多く戦って消耗するよりは温存する為に隠れ潜んでいる方が幾分かマシだろう。

そんな訳でちょっと考えただけで軍事転用されそう…そんな理由でお蔵入りしてた『ステルス迷彩』を取り出し、フル装備を覆える様に調整する。

倉庫内で実際にフル装備しつつ起動してみたが、どうしても馬鹿デカイ煙特が上手く隠れてくれないので、急遽被せるタイプの靴として作り上げたステルス迷彩を有り合わせの素材で作り上げ再度調整、上手くいったのでこれも持っていく事にする。

乾パンや干し肉、甘味系の菓子類なんかの非常食をトラックへ積んでいき、トラック自体も危機契約用のサバイバル仕様へと換装、ついでにステルス迷彩機能も追加しようと思ったのだが、思い付きでステルス機能付きの靴を造った為、流石に資材が足りなくなつたので断念する事になった…計画はご利用的にだな…。

…今更だけど、ウルサス学生自治団って何人所属しているグループだったんだろうか？

両手で数えられる程度しか居ないんだったら、一箇所に纏まってさえくれれば完全装備でも余裕持って護れるけれど、あの時相談に乗ってくれた子ってそこそこな人数居たよな？

チエルノボーグが襲撃されてからロドスに保護されるまで、互いに力合わせて生き延びた子供達が学生自治団のメンバーだった筈だし、十人なんかじゃあ足りない人数になる可能性が結構あるのではないのだろうか？

もしもそうならたつたこれだけの物資じゃあ到底チエルノボーグ

脱出迄保たないだろうし、もつと大量の物資を運ぶ必要が出てくるか：多少目立つのは承知の上で、デスストの紹介動画みたいに物資タワー背負って行きつつ、逃走経路に分散させておくとするか。

物資を詰め込むケースを他の物資の重量に負けない様補強し、物資を詰め込んでいき出来次第トラックへと乗せていく。

詰め込み作業が終わった時には既に夕方になっており、真夜中に疲労を溜めた状態でドライブする危険なんて起きないので、チエルノボーグの情報収集をしてから寝る事にしたのだが…。

矢張りというか何というか、チエルノボーグに住んでいる上位貴族はその殆どが、最近チエルノボーグから他の移動都市へと移転しているとの統計が出てきたのである：それもまるで夜逃げでもするかの様に移転した上位貴族の大半が家財を纏めて出ているとの追加情報まで出てくる始末、つまるところ奴等きな臭いナニカを感じ取って夜逃げしたのである。

まるで疑って下さいと言わんばかりだが、これらの情報は殆ど下位貴族以下民衆達には開示されていない内容なのである、ほんと貴族つて上位に行く程腐ってる割合増えるよな、ノブリス・オブリージュ何処行ったよ？

五十八日目

早朝直ぐに龍門からチエルノボーグへと出発する。

物々しい俺の様子に衛士がどうしたのかと聴いてきたのだが、特に嘘を言う必要も無かったが正直に『チエルノボーグでテロ起こりそうだから様子見てくる』なんて言ってもまともに信じられないだろうから『付近の天災情報と移動都市について調べていたら、なんかチエルノボーグの様子がおかしいから様子見てくる』と別段間違っていない説明をしたら衛士も納得してアツサリと許可が下りた。

こうやって幅広い行動の理由に出来る天災トランスポーターの立場を考えると、加入条件がほぼ信念が大半を占めているという門戸ユルユルな危機契約への加入はホントしといて良かったと毎度思う。

危機契約は立場自体はそこまで高くはないとは言え、加入している

人間は目的を達成する為に常に技量を磨く様な上昇志向が高い傾向があり、横の広がりから推薦なんかも貰い易く、天災トランスポーター等の本来ならばかなり学歴が必要な資格に対してある種の身分証明にもなる為、幼少の経歴があやふやな俺にとっては色々な事への取っ掛かりとして利用させて貰ったものである。

：危機契約って信用があるから世間的にも重要な資格を取り易いのに、創作物で見るギルドみたいに滅茶苦茶入り易い組織なんだよなあ：こう考えると危機契約って詐欺とかに利用されそうな組織だな。

ああいやでも加入したら大体数ヶ月毎に原作みたいな危機契約があるし、そもそも等級Ⅱ信頼みたいな所があるから、何もしないで利益だけ求める様な奴はそもそもが身の丈に合わない契約取った結果、死なないとはいえ危険な現場で精神すり潰され自然淘汰されるもんな、そう考えるとよく出来た機構ではあるな。

そんな事を考えつつも自動操縦をチェルノボーグへと向けて設定する事でトラックを発進させ、これで暫くは暇になる為屋根の上に大型トラックの様增设した仮眠場へと入り込んだ。

：一連の事件が一段落したら、大型トラックの免許を取って一台危機契約用にフルカスタムしたやつ建造しようかな？ 流石に普段使いの中型を臨時で危機契約仕様にするのは、今回みたいな都市レベルで問題が起きた際に持っていける資材の制限掛かってキツイし、何よりも一々換装しなくちゃならんのがネックになるんだよなあ…。

六十一日目

大体前回と同じくらいでチェルノボーグが見える位置まで近付けたのだが、予想とは違い未だ平穏な雰囲気ではあった為、チェルノボーグ市内へと入りサードアイで様子見を試みたのだが：一言で言って噴火寸前だな。

表通りは平穏無事な雰囲気そのものではあるのだが、ちよつとばかり路地裏へと目を向ければ不気味なほど静まり返っており、如何にもこれから何かが起きるのだと言わんばかりの状況だった。

これは何時レユニオンがテロに走ってもおかしくはないと考え、トラックへと戻り何時でも動ける様に装備を整えて暫く待っていると唐突に爆発音が聞こえた後俄かに市中が騒がしくなり、それからあつという間に悲鳴や怒号がそこから聞こえてくる様になった。

遂にチエルノボーグ事変が起きたのだと把握した事で行動に移る為、まず初めに取った行動はこの世界での基本的な伝令方法である無線の傍受なのだが、正直テロリストってのは装備の規格なんて敵味方を識別する為の目印位であり、結構個々人によって装備の差が激しいものだ。

その上レユニオンを構成する人員は社会的な地位が低い感染者ばかりであり、そういった連中は大概種族からして傭兵ばかりなサルカズを除いて元々唯の一般市民だった連中であり、そんな奴等は無線なんてまともに触れた事なんて無かった訳であり、傍受出来ればラツキー程度の認識だったりする。

しかしそんな心境だったからなのかどうなのか、物欲センサーの法則染みたものが発動したらしい…ありがたいけれどなんか複雑…。

気を取り直して、どうやら学生は見つけ次第ペテル Heim 高校へと纏めて閉じ込められているらしく、それを指揮しているのはあの悪名高きメフィストであるという…。

通信を傍受してその情報を聞き出した時は原作でのメフィストの性格を思い出し、学生自治団よく生き延びれたものだと思ったが、よくよく思い返せば序章でロドスへと襲撃を仕掛けていたし、そこまでクリア出来ていなかったからよくは知らないのだが、後々龍門にもメフィストは襲撃を仕掛けているらしいので、案外集めるだけ集めといて放置するスタンスだったのかもしれないな。

だとすれば原作みたいにロドスがチエルノボーグへ来れば、それを察知して偵察かなんかにメフィストはペテル Heim 高校を離れるだろうし、そこがグム達を救出する為の機会になるだろう…という所まで考えが行ってからふと、一番大事な大前提が崩壊している事に気付いてしまった…。

そうだよドクターもう既にロドスにおるやん!? ロドスがチエル

ノボーグに向かう理由無くなるからメフィストこれじゃあ動かない
じゃん!?! アカン、これじゃあ計画が死ぬう!?!

『重要人物って誰やねん?』

怒号に雄叫び、悲鳴に叫声、テーマパークに来たみたいだぜ……トンシヨンはまつつつたく、上がらないけどな（遠い目）

兎に角そこら中でドンパチやってるせいで、逃げてくる市民や飛んでくる物の数が多い事多い事……持ってきた物資に被害が行かない様にするのが微妙に気を使って面倒だ。

とは言っても相手からすれば俺は見えていないのでいらないも同然、ステルス兵気分で奴等の横を通り過ぎつつも順調にペテル Heim 高校へと向かい、道中荒らされていたりして誰も近寄らないであろう建物等に、持ってきた物資をそれとなく悟られないように忍ばせながら進んでいく。

装備品の重量が重量だからビルの上を移動出来ない為、徒歩で地道に進んでいくしかないのがとんでもなく面倒ではあるのだが、どうせ帰りの際には護衛対象を連れて行く事になるのは確定事項なのだし、それならば物資を隠せて尚且つ小休止出来そうな場所を探す為にも徒歩の方が都合が良いのだと考えておく事にする。

……まあ重量がどうにかなったところで、阿呆みたいに縦に積んである物資じゃあ飛び跳ねながら移動している途中に崩れるのが分かりきってるから、結局徒歩で進むのは確定事項だったんだけれどな。

そんなこんなでえっちらおっちらとペテル Heim 高校へと向かっている、まさかの途中でつい先日別れたばかりのライナー達と遭遇した。

どうやらスニーキングしていたらしい彼等は、ステルス迷彩をしている俺から声を掛けられた事で一瞬声を上げそうになっていたが（特にシグレは声を上げかけてケイジに口塞がれた）すぐに俺がステルス迷彩を解除しながら兜を外すと、四人共俺の事に気が付いた様でホツと肩の力を抜いていた……なんかすまん。

話を聞くにあの後ロドスに向かったのだが何やらドタバタしており、取り敢えず加入する為に何があつたのか話を聞くと、とある重要ミッションの為にエリートオペレーターほぼ総出で準備をしている

らしく、とてもじゃないが加入試験等やっている余裕が無い状態だったとの事。

それならばとニールが傭兵らしく契約しないかとアピールして雇われようとしたのだが、それなら工兵位なら出来るだろうとライナーも挙手し、チーム単位程度の防衛なら任せるとケイジも挙手。

そうならば一般人でしかないシグレには残ってもらおうとしたらしいのだが、当の本人が置いて行かれるのは嫌だと無駄に行動力を発揮して付いてきてしまい、渋々連れてくるようになったのだという。

因みに現在なんで四人で行動しているのかというと、如何やらロドスにとっての重要人物の救助をドクターとアーミアが率いる少数部隊が行なっている為、その援護として周囲のレユニオンの数がある程度削っており、そのミツシヨンが一頻り完了した為ドクター達に合流する為に移動していたのだという。

その話を聞いてまず真っ先に思ったのは『重要人物って誰やねん？』ではあったのだがそれは一先ず置いておき、問題としてはロドスが原作みたいにチエルノボーグへと来ている事である。

特に問題無くチエルノボーグから抜け出されれば良いのだが、本来なら救出対象であるドクターが居る時点で来る筈無かったロドスが、誰かは知らないが『ロドスにとっての重要人物の救出』という、原作と同じ理由で来ているのである、原作と同じ悲劇が起きないとも限らない。

そこまで考えた俺は持つてきていたコンテナーと反源石弾を『対源石兵器』であると伝え、もしも撤退中にレユニオンの頭であるタラに遭遇し、尚且つ奴のブーツを受けそうになったらそれにぶち込んでやれと説明しながらニールへと手渡した。

俺の説明を聞いて不思議そうにしながらもそれらを受け取ったニールだったが、反源石弾を受け取った事でなんだか嫌な脱力感があると云われたので、反源石弾に装填されているのが俺の血である事と異能の概要を伝えると、その場に居た四人共がドン引きするような同情する様な目を向けられた：虚しい。

取り敢えずなんとも言えない表情ながらも同意してくれたニール

は、接触を間接的なものにする為に反源石弾をウエストポーチへと仕舞い、コンテナーを右太腿に装備する形で受け取ってくれた。

その後はお互い目的の為に別れ、話し込んでいた分を取り戻す為にも多少急ぎながら移動し、そのおかげでなんとか夕方に目的地であるペテル Heim 高校へと辿り着く事が出来た。

途中で二回程遠方で、恐らくタルラが作り出したのであろうビルの屋上を超えて見えるほどの巨大な火炎球が出てきたが、どれも直ぐに解けるようにして消えたのを見て、ニールが上手い事やってくれたのだと確信した。

ペテル Heim 高校の周囲には見張りとしてなのか、数人のレユニオンが高校の周りを見回りにしているのだが、どうにも市街の事が気になっていのかちよくちよくあちら側へと視線をやって気も疎かだった為、近くの残骸に屋内では持つてるだけで床が抜けかねない為まともに使う事の出来ない煙特を隠蔽し、残りの物資を担いだまま見張りが薄い壁を跳び越えて無事侵入。

侵入者防止用に高い壁が造られており、それを今回の事変では逆に利用して学生達の脱走を妨げる魂胆だったのだろうが、流石に外から余所者が入って来るとは考えが及ばなかったのだろう…：つてか職業戦闘職以外こんな壁アツサリ登れる訳ないんだから、普通思いつかないわな。

まあそんなどうでもいい事を考えながらもサードアイで今回の目標であるグム達を探してみると、どうやらとある教室に初期学生自治団の三人が集まっていた。

急に現れて彼女達を驚かささない様に学校へと侵入し、予めステルスモードを切った上で兜を外した後、廊下から彼女達が集まっている教室の扉をノックしながら着ている鎧の威圧感を少しでも少なくする為に一歩後ろへとさがる。

サードアイで教室内を探してみると、突然の訪問に少し教室内はざわついていたが少しするとズイマーが扉の割れた窓から此方の様子を伺う様に顔を出し、直ぐにその険しい顔を変人見つけてしまったような何とも言えないものへと変えた…：まあ、学校の廊下に鎧着込んで

兜を脇に持つてる奴が居たらそうもなるわな。

取り敢えずジェスチャーで落ち着く様に指示を出すと、今度は少し何か言いたそうなモニヨモニヨした表情の後、頭痛がするとでも言いたそうに頭を抱えてしまった……ってかもしかしてあの時會つて少し話をしただけの俺の事、ズイマーは覚えてる感じなのか？

その後ズイマーは少しばかり考え込む様に悩んでいたが、素早く廊下に他に誰かが居ないのかを確認した後、俺に教室へ入るよう短く伝えて引っ込んだので、遠慮せず教室へと入らせてもらった。

殆ど俺を初めて見た人物ばかりだった為、当然のようにざわめきは起こったが、グムとイースチナが俺の事に気が付いて他の子供達を落ち着かせてくれたので、特に問題も無くざわめきは収まる事になった。

……だけどさお二人さん、もうちよつと言い方どうにかならんかったの？ まあ、グムの『おじさん』発言は良いとして、イースチナの不審者扱いは鎧着込んでいる関係上そうとしか言いようがないのは分かっているけど、もうちよつとオブラートに包んで話そうぜ？

取り敢えず俺は危機契約に参加している天災トランスポーターであり、ここチエルノボーグに天災が近付いているのを確認した為赴いたのだが、丁度そんなタイミングでテロが勃発したのを見てあの日、深く悩んでいた俺の相談に乗ってくれた子供達が危ないとなんとか救助出来ないかやって来たのだという事を伝えると、教室に集まっていた子供達はたった一人で此処まで来た俺の実力を測れないからか、不安げな表情で何人かの子達はそれぞれ近くの子達と相談を始めていった。

ふむ……さてはてどうやって説得したものかな？

(意識を落としてはないよ)

取り敢えず安全を確保させてくれと断りを入れた後、外から教室見て怪しまれない様持ってきた布型ステルス迷彩をカーテンの様に窓側と廊下側に掛け、双方をパソコンに繋いで中の人影が見えない様に設定する事で簡易的な拠点を製作した。

何故か電力自体は学校にまだ通っていたのでそれを拝借しつつ、持ってきた毛布なんかも一緒に廊下側に掛けておく事で簡易的な防音措置も施しておき、漸く話し合えると腰を下ろすと何故か先程よりも警戒されてはいたのだが、一応話は聞こうかと言った感じの姿勢になっていた。

取り敢えず『自分は龍門に拠点を構えている危機契約の構成員であり天災トランスポーターでもあるのだが、ここチエルノボークの付近で天災の兆候が見られたのだが、同時に何やら不穏な動きが見られたので調査をしに来たのだ』と別段間違っちゃいない前提を説明。

その後が続いて『着いてみれば悪い予想が当たり、チエルノボークがテロに襲われているのを見てどうしようかと探索していたら、以前悩みを抱えていた際に相談に乗ってくれた子供達を思い出し、その子供達を救出する位なら尽力しようかと考えてここまでやって来た』と、これまた別段間違っちゃいない理由を説明した。

それを聞いた当時の悩みを聞いてくれた子達である Gum と イースチナ と ズイマー の三人はポカンとし、その三人以外の子供達はキチガイでも見る様な目で見られてしまった：天災オペレーターは信用が大事なのに、毎回能力疑われてしまうのが辛い…。

でも実際マジで何にも準備していないのなら話は別だが、今回みたいな完全武装に危機契約仕様と更に多人数用隠密装備まででんこ盛りにしてあるフルアーマー状態なら、場合によっては自分一人で数十人位チエルノボークから逃がす事なんて訳無いと試算してるんだけどね。

そんな冷たい視線をスルーする様な思考を回しつつこの場でトツプらしいズイマーと No. 2らしいイースチナにあの時居なかった

子達の事を質問すると、どうにもあの日はチェルノボーグに点在する
全学校での合同授業という思わず何じゃそりや？　と言ってしまう
ような事をしていたらしく、彼女達はその時偶然同じメンバーとなっ
てチェルノボーグを散策していた為共に居たのだという。

　　ってかそれにしても組み合わせが凄まじい：ラーダ（グム）とアン
ナ（イースチナ）という別段問題の無い一般生徒にソニア（ズイマー）
とロザリンは多少不良っぽい所はあるけれどまあ、分からんかもな
い。

　　：が、残りの一人フルネームが『ナターリア・アンドレーエヴィナ・
ロストワ』：ミドルネームが入っておりつまりは貴族な訳だが、ロス
トワって確かチェルノボーグを実質支配してる『ロストワ家』の女性
が名乗る苗字じゃなかったっけ？

　　一般市民に取り巻き同行させずにトップの子供同行させるとかな
んでこんな組み合わせになっちゃったのさ？　（困惑）

　　：因みに三人の名前は話の最中に思わずコードネームで呼びそう
になり、慌てて名前聞いてなかった事を思い出した事で聞くことが出
来た：そうだよな、普通だったら本名をコードネームに使ったりしな
いわな（尚アンジェリーナ等の例外は除く模様）

　　：あれ？　　：そういや俺ロドスとの物資協定で本名書いてなかつ
たっけ？　　：どつかのタイミングで外部協力者としてのコードネーム
を決めるのかと思ってたけど、もしかして普通に本名呼びされ続けて
る原因ってあれなのか？

　　もしかしてあまりにも名前らしくないからコードネームだと思わ
れたとか？　（汗）

馬鹿みただけどマジっぽい理由からは目を逸らしつつ閑話休題

　　どうやらナターリア嬢（良さげな通称が思いつかなかったのでこれ
でいく）が付き人の件で手違いがあり付き人が居ない状態になったの
にも関わらず、一度決まった人事を自分の為だけに色々弄くり回すの
を良しとせずはどう見ても異色の組み合わせであるそのメンバーで

行く事を決めたのだという。

：なんだろうな、当の本人達である彼女や他の子供達は当時の事を振り返ってるのか「彼女だけは他の貴族とは良い意味で違ったよな」みたいな事を言っているけど、側から聞いている側に立ってみると『想定外の事態に直面した優等生が見栄張ってドツボに嵌ってしまった』様にしか思えない…。

そんな風に話していると極限状況下で緊張していた他の子供達も気が紛れてきたのか、不意に誰かの腹の虫が主張をしだし、他の子供達も避難するのに急いでいて何も食べてない事を呟いたので、持ってきた物資の中から即座に食べられるカロリーメイトとスポーツドリンクを取り出し、全員に行き渡る様配っていった。

全員夢中になって食べるのを眺めていると廊下から人の気配を感じ、全員に一声掛けて静かにするように諭して廊下に居る人物を見ると、そこには先程チラツと話題に出ていたロザリンが一人で居り、彼女はズイマーが此処に居る事を知っていたのか俺達が居る教室を覗き込んだが、ステルス迷彩のお陰で中に誰も居ないと思ひ込み、首を傾げてそのまま他の教室を見に行ってしまった。

此処で漸くステルス迷彩の効果を体感した子供達が興奮しながらざわついていたのだが、そのざわつきを聞いてロザリンが再び戻ってきて不気味そうに教室を覗き込んできたので、一時的にステルス迷彩を解除する事で目の前で元の黒い布へと戻してやると、ロザリンはいきなり現れた黒い壁に驚いて後ろへ飛び跳ねる様に倒れ込んでしまひ、ゴッ!!?と鈍い音を出しながら反対側の壁へと激突してしまつた。

その痛みにぶつけた所を押さええながら呻くロザリンを俺が何とも言えない顔で俺が見ていると、急に透明ではなくなった事に驚いていた子供達の中で、廊下から聞こえるロザリンの声音から何が起こったのか察したイースチナがお得意の半目を此方に向けて目線で滅茶苦茶訴えかけてきた。

気まずさを感じつつもロザリンの様子を見る為に扉を開けると、鎧を着込んでいる俺の姿に驚いたロザリンが思わず叫ぼうとしていた

為、咄嗟に口を塞いで静かにするよう説得する為に教室に連れ込んだのだが、側から見れば完全に人攫いのそれっていうね：ちよつと解かれていた子供達の警戒心が再びMAXに近くなったのが辛い。

取り敢えず静かになった（意識を落としてはないよ）ロザリンを解放し、ナターリア嬢の所に行つて脱出に乗らないか相談して来ようと考えて何処に居るのか相談してみると、どうやら彼女は他の暴走しがちな貴族生徒達をまとめる為に奔走しているのではないかと教えてもらった。

ただ現状ではこの学校に纏められて置かれているだけでそれ以外特に問題が無いからなのか、貴族生徒の連中は何人かの有力貴族の子供を筆頭にそれぞれ派閥を作つて好き放題しているらしく、幾らチェルノボーグの筆頭貴族であるロストフ家の子女ナターリア嬢であっても説得の効果が薄く、逆に他の貴族生徒グループに脅かされているのではないかという憶測も出てきた。

ちよつと考えてこの世界の貴族のクソさ加減で現状に置かれたらどんな事しかすか思考トレースしてみた、する必要無いレベルで碌なことにならないという結論が出たので即座に助けに行く事を決定。

ちよつくらナターリア嬢説得してくるわと声を掛けて貴族生徒が溜まり場になっている場所へと赴くと、何故かそこで行われていたのは学校の資材を使つて行われているカラオケ大会だった…。

こんな非常事態に呑気な事やってんなと思つたが、お目当てナターリア嬢が部屋の隅で頭痛そうにしているのを見つけて様子を伺う事にした。

なになに：『ヤケクソでカラオケ大会を開くのはまだ分からなくもないですが、だからといって今回のオブシディアンフェスタで感染者に擦り寄つたような曲があったからって、そんな歌を歌つた所で安全に解放される訳ないじゃない』：ですと？ 何歌うつもりなんだ？

結論：マイク寄せ本人様が熱唱してやらあ!!

コイツ俺等の同類かよ!?

あまりにも音痴な貴族生徒による音程の崩壊したアマゾンズ主題歌（無理矢理知らないであろう日本語で歌おうとしてるから尚酷い）によつて頭がおかしくなりそうになった上、原曲を知らない他の貴族生徒達に散々クソみたいなレビューをされ思わずキレてしまった。

元の歌を正しい形で広める為に姿を隠す事を辞め登壇し、突然登場した俺に驚いている隙に三曲ともフルで歌い出す事で流れを作り出し、その後アンコールに応えてまだ未発表だった曲も先行公開していたのだが、さてはて…途中で視聴者として参加してた他の学生達は別に良いとして、メフィスト筆頭にした学生達を隔離してた筈のレユニオン達はどうしようか…？

取り敢えずゲリラライブの余韻で学生もレユニオンも関係無くわいのわいのしている中、なんとかレユニオン相手に交渉出来ないものかと気配を抑えてメフィストの所に赴くと、何やらメフィストはファウストと共に原作での見覚えが無い男と楽しげに話し合っているという何処か奇妙な状況に出くわす事となった。

ちよつと待ってやメフィスト君、君そんな邪気の無い爽やかスマイル浮かべる様な好青年だったっけ？ もつとこう捻くれててヤベータイプのはっちゃけた笑顔というか発言に一々闇感じさせる様な逝ちちやつてる目してなかつたっけ？

そんなもつてファウスト君はそんな喋つてたっけ？ 君確か全く喋らず仕事人の如く黙々と目標狙い撃つタイプだったでしょ…：なんか楽しげなメフィスト君を穏やかに微笑みながらもはっちゃけ過ぎない様に宥めてるの見てるとそんな面影全く無いんだけど…？

前世でやつてた原作のイメージぶち壊しな二人だけど、これ多分一緒に居るよく分かんが鍛え方からして傭兵の様な男の影響なのかねえ？

件の傭兵を連想させる男の格好は時代錯誤というかなんと言うか、作務衣に足袋とかとこそこの寺の住職かなんかかとツツコミたくなるが、何処と無く体格以外にも何か違和感を感じた為サードアイで服を

透視してみた所、なんと作務衣で隠れている部分全てが源石とも違う黒い結晶の様な物になっているのだった。

しかし鉱石病の感染によって引き起こされる体表から生える源石とは全く在り方が違うその結晶を見て、俺は以前にも感じた事がある一つの確信を得た…。

ーコイツ俺^転等の同類^者かよ!?!ー

恐らく異能の内容は身体操作系であり、最低でも自身の皮膚を服に隠してある胴体や脚の様に結晶へと変化させられるのだろうか…：なんでしょう？ 何処となくあの結晶の形状に見覚えがある気がするのだが、それが何処で見たのか思い出せない…：近いイメージに煙特が浮かんでくるからダクソ関係かなんかだろうか？

兎に角気持ち切り替えて三人にコツソリと声を掛け、こんな所で話すのもなんだと影の方へと入って交渉する事にした…：のだが、ここでついさつき壇上で歌っていた俺を見てテンション上がって大声で話しかけたメフィスト君に対して折角ヒツソリと話をしたかった俺が慌てて口を塞ぐ羽目になり、なんとも締まらないぐだぐだ展開が続きそうだなと直感させられるのだった…。

そして交渉を始めた結果、どうやら此処に集められた学生達はレユニオンの幹部の何人かの意見からガチで隔離されていただけに過ぎず、メフィスト君達はそんな彼等が勝手に出たりしない様に見張っている（本人曰くくじ引きでハズレ引いた）のだという。

もしも学生達を引き取ってくれるなら見張りだけしかする事が無いここから解放されるからと、何故か俺の持った音楽再生機器一式と交換でなんか随分とアツサリ学生達を引き取る事に成功してしまった…：色々考えてたつもりだったのに特に問題も無く終わって何処となく消化不良感…。

取り敢えず幹部から言質は取れたので子供達を引き取る為、トラツクを市外を遠回りする形で自動操縦で呼び寄せさせてもらいつつ、空き時間で他にも連れて行く事になるだろう学生達を運ぶ為、ペテルへ

イム高校が所有している大型バスを移動都市外でも問題無く走行出来る様に改造する事にした。

環境の整っている市内しか走らない様な大型バスは、主にタイヤが移動都市外の荒野を走り続けられるだけの耐久力を持っておらず、暫く走れば直ぐダメになりかねない為専用のタイヤか改造を施す必要があるのだ。

そんな訳で移動都市内しか走らないバスの車庫に荒野用のタイヤなんか置いていない為倉庫に置かれてたチェーンやらを改造していると、先程別れたばかりの作務衣を着た男が、何故かベロンベロンに酔っ払って寝ている着物姿の女を背負ってやって来た。

作業の手を止めずに背後にいる男に向かって何しに来たのかと問いかけると、男は単刀直入に『同類に会いに来た』と言い放ってきた為思わず作業の手を止めて振り返ってしまった。

男は自身の名前を『アダマス』と名乗り、背負っている酔っ払い女は同僚であり名前を『マーキュリー』というらしい。

話の流れから凡そ分かつてはいたが彼女も俺等の『同類』であるらしいのだが：いやその同類さんをさっきから起こそうとしてるみたいだけど全然起きる気配無くないですかね？ 何々？ 大体いつも酔っ払っているから取り敢えず起きないかどうかダメ元でやってるだけ？ なんか苦勞してそうだね。

どう足掻いても起きないマーキュリーをそこら辺に寝かしておき、互いの身の上話を（俺はバスの準備とトラックの自動操縦を監視しながら）していたのだが、アダマスはドラコであり極東で育てっており、昔からの幼馴染である龍のマーキュリーと共に以前まで傭兵をしていたのだとか。

暫くしてふらりと立ち寄ったとある街でそこに暮らしていたメフィスト君とファウスト君に出逢い、詳細迄は聞けなかったが二人の劣悪な環境に憤り保護する事で同行する事になったのだという。

しかし二人が居た街から出る寸前に悪意ある人物によってまだ健常者だったメフィスト君は感染させられてしまい、それによって『自分達が口を挟んだせいでメフィストを鉍石病に感染させてしまった』

と罪悪感を感じた二人は、メフィスト君とファウスト君を少しでも人として対等に接してくれる集団を求め、当時付近で活動していたレユニオンへと預けようとしたのだそうだ。

だが自分達が引き取ったのに直ぐ他所に預けるのは流石に人として間違っているだろうと考えた二人は、メフィスト君とファウスト君が育つまで面倒を見ようとレユニオンに同行する事を決意した。

当然感染者の集団に健常者である二人は白い眼を向けられる事になったのだが、そんな事は百も承知だったアダマスは白い眼を向ける彼等の目の前で、事前に用意しておいた源石の粉末を混ぜ込んだ酒を呑み、自ら鉱石病へ感染する事で黙らせたのだという。

話が続いている最中だったが思わず「馬鹿じゃねえの!？」と突っ込んでしまったのだが、アダマスには当時の精神的な四面楚歌状態ではそれが最善だと一人で突き進んでしまった結果であり、その報いは直ぐに受ける事となったらしい。

最初にアダマスが何をしたのか即座に変化を理解したメフィスト君がアダマスへと詰め寄り、ファウスト君はメフィスト君の話している事から状況を理解して呆然自失、アダマスへと不満を募らせていたレユニオンの構成員はドン引きして彼等を取り巻いていた人の輪が少しばかり広くなった。

言い募るメフィスト君に対しては自業自得だと何も言わずに受け入れていたアダマスだったが、突然ファウスト君が何かに気付いて慌てた様にマーキュリーの居る自身の後方へ駆け寄ったのを見て、思わず感じた嫌な予感に振り向くと、そこには左手に何時もの様に普段から愛用している一升瓶の酒を容易に注げる朱塗の盃で酒らしき何かを煽っているマーキュリーと、必死の形相でそれを止めようとしているファウスト君の姿があつたのだという。

：但しいつもと違うのは酒瓶を持った右手についての様を持つていた『アダマス自身がつい昨夜使用した源石の粉末を封入した容器』を持つているという点であつた。

そしてそんな最早異様な雰囲気がある場を支配する中、渦中のマーキュリーは盃の中を飲み干してある種妖艶とさえ思える笑みを浮か

べながらアダマスの方を見遣ったのだという…。

…いや、お前ら二人ともクツソ重いわバカタレ共が!?

Endless Battle… (白目)

ドン引きする俺に対して思わずと言った感じで目を背けるアダムス：その背中にしがみついて眠っているマーキュリーは幸せそうな顔をしているが、先程の話を聞いた後だとよくよく見ればアダムスが背負っているのではなく、マーキュリーの方がしがみ付いているまま寝ているのだと分かる。

つてかさつきから話している間もずっとしがみ付かれたままでいた訳だが、アダムスはそんな状態で辛くないのかと気になって聞いてみたのだが、なんとマーキュリーのアーツによって引っ付いているのだと教えてもらった：のだが。

どう見ても泥酔して眠っている様子なのに：アーツを使う為には集中力が必要とされるのに：こんな芸当が出来ているマーキュリーの練度の高さに対する用途に呆れば良いのか、それともこんな事が出来てしまう程の執念にドン引くべきなのか：どんな表情すれば良いんだよ？

泣けるぜ：閑話休題。

変に気不味くなってしまい嫌な沈黙が続いてしまったが、とりあえずバスの改造が完了したのとトラックが到着した事でその場はお開きという形となった。

出発する前に校外に隠しておいた煙特を回収してから校内放送で呼びかける事で生徒達を呼び寄せたのだが、どうやら俺の事を信用出来ないと言って付いて来ずに学校でウルサス本国からの救助を待つという事にした派閥も居るらしく、地味に心配していた搭乗人数の限界を超える事は無さそうで安心した。

：安心はしたけれど、正直な所此処に残る奴等はウルサス軍に助けるどころか皆殺しにされる可能性の方が高い気がするのだが：確かチエルノボーグって他国との交流が多めだからとかいう理由で本国から忌まわしく思われてるんじゃないかなかったっけ？こんな状況に託け

て肅清されるパターンになるのでは？

こんな状況で残留するとか肅清対象案件なのではとも思うが：救出目標でもないし面倒だし、どうせレユニオンの本拠地が此処なんだからロドスが介入してきそうだし黙っておくか（外道）

そして漸く脱出する子供達を集める事が出来たのだが、ここでまたしても問題発生：貴族生徒が一般生徒と一緒に乗りたくないと言え出したのである…。

現状を理解していないクソガキ共に敢えて暴力では訴えずに淡々とO??H A??N A??S H I（貴族であろうとコロコロしまくってる過激派レユニオンの現状）をしてやれば、素晴らしい理解力と想像力で自身の将来像に顔を真っ青にしていた…まあ、自業自得なだけなんだがかなり居た堪れない感じになってるし、これで反省するなら少しくらいは援助するのもアリ…かな？

結局ズイマーが貴族生徒と平民生徒の確執から一緒に居るのは双方宜しくないと発言した事で、一緒になっても気にならない、又は一緒に居たいという生徒だけ貴族平民問わず一緒に乗ると言う事になった。

それぞれ貴族がバスで平民が俺のトラックに乗る事になったのだが、正直な話荒野を走る事すら想定して改造してある俺のトラックと、恐らく問題無いとはいえ急拵えで荒地対応型にしたが、本来市街地を走る事をメインに想定して作ってあるバス…これバスの方りバス祭りにならないだろうか？

まあ、ウルサス人は精強っていうし、乗り物酔い位平気で耐えられるでしょ（少しばかり先程の駄々こねを根に持つてる奴）

そんなこんなでチエルノボーグから脱出する為に出発し、暫くチエルノボーグから離れる為に動いていると重苦しい雲が後ろに見えたかと思えば、予想通りにチエルノボーグへと天災が降り掛かり、遠目からでも分かる程の被害が出ているのが見えた。

…尚、こんなシリアスな雰囲気の内心語っている俺の後ろでは、予想通りある程度マシになったとはいえ揺れに揺れまくるバスによって乗っている貴族生徒達の大半が車酔いを起こし、どの窓からも顔を

出してゲロを吐き散らかしているある意味地獄絵図が繰り広げられていた…。

正直つられゲロしている奴も居る為俺も地味にキツイのだが、改造しまくっている為俺が乗らずとも脳波コントロールで移動出来るトラックとは違い、一般のバスでしかない為脳波コントロールに必要な装置等積めないバスは俺自ら操縦する必要があり、明鏡止水の境地で運転し続けるしかないというある種拷問の様な数時間だった…。

閑話休題中に吐き気とのEndlessBattle…(白目)

数時間程天災を迂回するような形で龍門を目指し走っていると漸く貴族生徒達の胃の中が空っぽになっただけでなく、聞くに堪えない汚い音が収まり代わりに唸り声ばかりが聞こえるようになった…これ結局ストレス的なダメージが続いてるままじゃな？

あまり好転しない状況の中、視界に此方と同じく龍門を目指しているのであろう装甲車が何台か見えたのだが、その車体に見慣れた企業マークが見えた為無線を用いて連絡を取った所、矢張りというかロドスの物だと判明した。

幾つか話している間に此方がウルサスの子供達を保護していると伝えると、龍門に着くまでの護衛を買って出してくれたので有り難く受け取る事にした。

そんな訳でスピードを落としてロドスの装甲車に同行し出したのだが、暫くして貴族生徒の一人が「何故スピードが落ちたのか？」と質問してきたので「安全確保がある程度出来たのなら急ぐ必要ないじゃないか」と素直に答えると、何故か怨嗟混じりのクレームを掛けられる羽目になった…何故え？

話を聞けば今ぐらいのスピードだったらこれ程車酔いする事なんて有り得なかったのに!!という文句が出てきたのだが、はっきり言わせてもらおうとバカかお前ら？という感想だったし、なんなら思いつきり言ってやりました。

それによつてブーイングが飛んで来たりもしたが、そもそも救出に

来た理由が天災が近付いている為急いで離れなければ巻き込まれかねなかった事や、天災から逃げると言っても過激派レユニオンにかち合わないようにする為に急ぐ必要があった事、それによって俺の拠点がある炎国の龍門から遠回りする必要があるのだが、もたもたしてたら他の難民が龍門に来て受け入れに滅茶苦茶時間がかかる事になる等を懇切丁寧に話してやれば、貴族生徒達は何も言えなくなったように全員黙り込んでくれた。

やっぱ人間ちゃんと話し合えば分かり合えるもんなんやなって：(尚、ちよつと前にO??H A??N A??S H Iで分からせをやった奴の戯言である)

そんなこんなで静かになったバスを運転していると前方にそこそこ見慣れたロドスアイルランドを見つけ、そのまま龍門まで便乗させてもらう事となった：地味にバスの燃料危なかったかもしれないから正直な所有難かったな。

到着してから誘導に来ていたオペレーターに子供達を任せて俺は一人アーミヤ達とのお話へ：行ったらまさかの事態発生。

まさかのドクター記憶喪失!?

アーミヤ達の場所へ向かうと何やら悩み込んでいるドクターを見つけて声を掛けたのだが、なにやら言動が初対面の様な話し方をしていたのでドクターの影に隠れて見えていなかったアーミヤに話を聞くと、件の重要人物を救出に向かう際、戦闘の余波で天井の一部が落下し偶然真下にいたドクターに直撃、何時も装着している不審者マスクのお陰で大事には至らなかつたものの、記憶の混濁によって記憶障害になってしまったとの事…。

世界君こんな所でまさかの辻褃合わせですかそうですか：幸い目標人物も救出出来たのは良いのだが、その人物も此方はある程度理由は判明してはいるものとのある事情で記憶障害が発生しており、大変な事になっているとの事…。

まあ、件の人物にとっては寧ろ記憶障害の方が安全なのではないのかと思われて居るらしいので、その人物は謂わば精神的支柱だったのだろうか？

…にしてもドクター…原作でもそんな感じがしてたけど、記憶障害
になったらこんな言動まともになるのか…やっぱりロドスってブ
ラック企業だったのでは？（違）

長いものに巻かれない日本人の性か…。

どう見てもストレスから解放された事ではちやけた様に見える仕方がないドクターと、そんなストレスの原因と思われる企業のトップであるアーミヤに内心そんな事考えているなんて思わせないようチエルノボーグでの作戦はどうだったのかを質問すると、驚いた事に多少の負傷者は出てしまったものの犠牲者ゼロ、作戦は完遂したと言つても良い程だったとの事。

原作であつたあの惨劇を考えると正に快挙とも言える出来に思わず手放しに喜んでいると、そこまで喜んでくれるのは嬉しいけれど何かあつたのかとドクターから不審がられてしまい、咄嗟にチエルノボーグに潜入している最中に超巨大な業火球が見えてあんなに見たらあそこで犠牲者ゼロだったのは素直に喜ぶべきだろうとホラ吹いてしまった。

尚その言い訳は実際現場でその危機に直面していた二人にとっては深く納得出来たらしく、揃って成る程なあ…と頷いていた…君達魑魅魍魎が跋扈する企業がのトップ陣営の人間なのに、ちよつと純粹過ぎじゃないかな？

ロドスの将来を心配しつつ閑話休題

取り敢えず本題として俺が避難させてきたウルサスの子供達についてこれからどうするか話をする事にしたのだが、避難させてきた貴族生徒の中には何名かチエルノボーグ以外でのウルサスの移動都市に縁者が居るらしいので、龍門に一度預ける事となった。

貴族生徒についてはそういう手筈になったのだが、それでは一般の生徒達はどうなるのかといえ…話を聞くにあまり宜しくない感じになるかもしれないとの事…。

一般の生徒もまずは龍門に預けられるのだが、ウルサスの他の移動都市に親戚が居れば良いのが居ない場合は良ければ就業、最悪孤児院行きとの事…ロドスもある程度受け入れたり斡旋したりするつもり

ではある様だが、その受け入れ可能な人数はあまり多くはないだろうとの事。

流石に折角避難させたのに他所に預けてはい、さよならは人としてどうかと思うので何か支援するべきかと考えてみるが、流石に就活を手伝う様な依頼は受けた事が無い為力になれる気がしない：いつその事広範囲の技術講習でも開いて各々の適性を自覚してもらう様にすべきかともなあ：とボヤいていると、何故か目の前の二人が反応した。

ドクターは記憶障害の影響で俺がロドスで時折教師みたいな事をしているのを忘れていている影響で、明らかに戦闘向きの服装をしている俺が講習を開こうとしているのに対して驚いている様でありまだ分かるのだが、アーミヤの方は何故か俺がどんな風に講習をするのが気になる模様。

何かあったのか聞いてみると、以前から俺がロドスに譲っている発明品の権利について、あまりにも源石と密接な関わりを持つ内容が多い為に技術内容を検証する事が出来ておらず、その為以前から技術の開発者である俺に対する講習の開催依頼がちよくちよく来ているのだとか：どうにも新しい装備開発があと一步の所まで来ているらしいのだが、前述した危険性から足踏みしているらしい。

その為、もしも講習を開いてくれるのならば費用と講習に用いる場所を提供するので如何だろうかと提案され、幾らか相談した結果今回のレユニオン事変が終わった後にロドスで講習を行う事が決定した：何故か興味を示したドクターまで講習に参加する事になったけどな？

そんな訳で用件が解消された俺はもう一つの用件であるロドスに居るであろうライナー達が何処に居るのか質問すると、如何やら無事信頼は得られた様で現在は人事部で試験についての説明を受けているとの事。

言われて人事部に向かってみれば、一つの丸テーブルを囲む様に座って何かを書いている四人の姿があつたのだが、四人の内何故かライナー以外の三人は難しそうな顔をしてあまり進んでいない様に見

えた。

近付いて行くにつれて何やらライナーが他三人から相談されながら書類を書いているらしく、如何やら履歴書を書いている所だった。

：履歴書かあ：最後に履歴書書いたのって何時だったっけ？ 確か万屋開業する為に要るのかと思つて書いておいたのが最後だから、大体三年位前：か？ 結局龍門当局から別の書類渡されて必要無かったから書類棚に仕舞い込んであるけど、それ以前だとすれば：あれ？ 確か危機契約に加入する為に書いたヤツが最後：か？

まあ、普通一度仕事に就いたら変わらずに続ける事の方が当たり前なんだし、何度も履歴書書く方があり得ないか：但しブラック企業に入った場合は別とする…。

取り敢えず四人に声を掛けようとする、一人だけ書類書きに余裕を見せていたライナーが俺に気が付いて手を振って呼んできた為、他の三人と近くのカウンターで作業しながら四人を見ていた人事部のオペレーター達も俺に気がついたように此方を見て挨拶してきた。

：いやいや人事部長さん、いつも言ってるけど俺好きで万屋やってるんだからロドスに加入する気は無いですって…。

何度かロドスに資材売ってたらアーミヤやクロージヤから勧誘されるようになったけれど、他にも熱心に勧誘してくるのはこの人事部門とか備品管理部の裏方担当の人達なんだよなあ：能力を評価されるのは嬉しいけれど、好きで龍門に居るんだし…。

なんて考えながら人事部長に対応していると、話が一区切り着いたタイミングを見計らったらしいニールが声を掛けてきて俺が貸していたコンテンドーと残った反源石弾を返してきた。

反源石弾については後で確認するとして、コンテンドーに問題ないか簡易検査を行いながらこれから四人はどうするのか聞けば、当初の予定通りロドス入ってオペレーターになるとの事、就活成功おめでとうございます。

現在はレユニオンによる大規模なテロが行われている為戦闘オペレーターとして動く事になるらしいのだが、ニール以外は普段はそれぞれ得意な事を活かす作業をしていく予定との事。

ライナーは電子機器チートな異能を活かす為にエンジニア部門、ケイジはマツサージの腕を活かして医療部門のリハビリへ、シグレはロドスに酒蔵の施設全部持って来て酒蔵の再開、ニールはずっと傭兵だった為それ以外の事は分からんと取り敢えず専属で戦闘オペレーターになるとの事。

：ついさつきロドスに加入する気はないって言ったけど、皆が居るとなると俺も入りたくなってくるなあ…まあ、事務所兼自宅があるからそんな簡単に腰上げられないんだけどね…業務提携で時々オペレーターやるくらいなら良いかもな…これが長いものに巻かれたい日本人の性か…。

ボンヤリとロドスとの業務提携について考えながら履歴書らしき書類に今は何を書いていいのかと質問してみると、ロドスのオペレーターになるに当たつてのコードネームを決めている最中との事。

：いやうん、それでコードネーム決めるのを悩んでるのは別に良いよ？ それで俺に何か案がないか尋ねるのも別に他人と決めちゃいけないなんて言われてないんだろうから問題無いんだろうけどさ…でもなんで俺にコードネーム案聞いた理由が『既に決めてるから』なの？ 『フィッシャー』ってコードネームじゃなくて俺の本名なんだけど？

：オイコラこつち見てたロドスオペレーターズよなんじやいそのびっくりした様な顔は？ 名前がコードネームみたいなのがそんなに悪いかゴラア？ 元居た村が村人少な過ぎた超限界集落で働ける奴も少なかつたから『村での仕事』名譽ある役割』で名前にする風習だったんだよ。

それでコードネーム決めについてか？ 他人から呼ばれ易いのも大事だけど自分で呼ばれてすぐ気付けるようなのも大事だと思うぞ？ ライナーは…『ブレードランナー』？ …ああ、電気羊繋がりが…いやそれ微妙に判り辛くね？ え？ 昔からコードネーム付けるならコレにするつもりだった？ …厨二病かな？ (ボソツ)

「そういう話は公の場でやるんじゃない!!」

ライナー改めブレードランナーの厨二病疑惑は横に置いて、取り敢えず他三人のコードネームを決める事にしようと思うのだが、取り敢えずニールは寧ろなんで『ロックオン』に決まってるのか聞いてみると、ただでさえ名前と見た目が一致していて死亡フラグが建っているのに、コードネームまで同じだったら補強されかねないからと苦虫を噛み潰したような顔で答えられた…うん、なんかスマン。

傭兵の中にはジンクスを大事にする奴も結構居るんだよと言われてたが、それ言われると俺の知り合いに居るエクシアは女でトリガーハッピーなパーリーピーポーなんだけど…と小声で零したらニールが苦虫数匹纏めて噛み潰した様な顔になった…もしかしてモステイマッて名前も知ってます？

…俺の質問によってテーブルに突っ伏してしまったニールを何とか起き上がらせて再び話し合うのだが、今現在ロドスの向かっている先が龍門である事や俺の拠点が龍門である…エクシアが居る場所も龍門である事を察してしまったニールは半ば思考放棄してしまったので、俺らである程度決める事に…マジでエクシアの奴学生時代に何やらかしてたんだよ…。

とは言っても折角だからロックオン関連のネタは外さずに着けたいなという事で、機体の方は大破はしたけど見方によっては死なずに強化されたように見えるからという事でニールのコードネームは『デュナメス』へと決定した。

…もしもビット作れたら贈呈しなくちゃ(使命感)

未来の浪漫に思い馳せつつ閑話休題。

ニールのコードネームが決まったのでお次はケイジだが…振動を利用して敵の攻撃を受け流したり滅茶苦茶な攻撃手段を持つてるのを見ると、ちよつとばかり案があるというか何というか…という事でド直球にケイジへと質問する。

heyケイジ、お前さんエロゲとか結構やって「そういう話は公

の場でやるんじゃねえ!!」ごぼあっ?!

：気付いたら上記の流れで地面から衝撃喰らって天井近くまで打ち上げられていました：まあ、自業自得だからモロに受けたけど滅茶苦茶イテエ…。

呆れたような目を向けてくる男三人(ケイジはまた机ドン出来る体勢になってる)と冷え切った目を向けてくる女一人、他にもその場に居合わせた奴等は突然吹っ飛んだ俺に目を白黒させていた。

取り敢えず釈明の為にとあるゲームのキャラに似た様な攻撃手段を持った奴が居たのを連想し、ケイジも知っているかどうかを確認する為に話を振ったのだと説明すると、如何やらケイジ自身某燃ゲー(誤字にあらず)をやった事があるらしく、俺が言いたかったキャラに思い当たりそのまま『アスラ』へと命名。

最後にシグレのコードネームをどうするかとなったのだが、正直名前の影響でガンキャノンみたいなランドセル風兵装してる某艦娘が脳裏をよぎって決まらない中、当の本人が自身の自分達に備わっている『力』はこの世界では『あり得ないモノ』なのかと聞いてきたので、大まかにこの世界の『力』についての解説する事になった。

：まあ、解説と言ってもこの世界における大抵の超常現象は源石が原因であり、話も途中からは俺が知ってる限りで源石の絡まない超常現象の話になり、そんな特殊な奴等なんて国に一部族程度居れば珍しい方なのにイベリアやアビサルの連中は何故か矢鱈と面妖な『力』を持つてる奴が多いという内容がある程度例を出して説明してただけなんだけどな：いやでもホント『海』関係の連中は良くも悪くも訳が分からん種族構造し過ぎでは？

そんな感じの説明(という名の愚痴)を俺自身が何時の間にか途中から遠い目しながらしていたのだが、今はシグレのコードネームを決めている最中だった事を思い出して意識を戻すと、何時の間にかテーブルの席には質問してきていたシグレ達に代わってワルフアリンを筆頭に何名かのロドスの医療又は科学部門のオペレーター達と入れ替わっていた：因みに当のシグレ達は何時の間にか書き終えていたのか履歴書持って人事部のカウンターに集まっていた(ドウシテコウ

ナツタ?)

：どうやら知りたい事聞けた後も俺の愚痴が長過ぎたので一応声掛けしてから履歴書の提出に動いていたとの事、入れ替わりテーブルに座っていたオペレーター達については途中から来ていたらしく、その時から専門知識が無い自分達にはよく分からないが琴線に触れる内容だったみたいであり、メモ片手に食い入るように聞いていたから席を譲って聴き易い様にしたから座っていただけであり、断じて圧を受けていたから移動したかったのではないとの弁解を：してる時点で語るに落ちてるんだよなあ!! 話長くてゴメンなさい!!

取り敢えず何時の間にか集まっていたオペレーター達に「早よ仕事に戻らんかい」と正論ぶつけて散らした後、再び四人と合流してシグレがどんなコードネームに決めたのかを聞く事にする。

如何やら『この世界にはあり得ない存在』という事を聞いて閃いたのがコードネーム『アマツキ』であり、書き換えれば『雨夜の月』となり本人曰く『雨雲によって月が見えない状況で見える月、即ちそんなあり得ないモノという事よ』との事。

：まあ、そこまで聞いて思いつきり突っ込んだけどな? それほばまんま漫画の『アマツキ』で出てきた説明じゃねえかと…。

とは言え名は体を表すという意味ではこのコードネームはかなり俺等の異能について当たっていると言えるだろう、そしてそれと同じ位『海』関連の連中が意味不明だと遠巻きに言っている様なもんだが、流星にそこまでの意図は無いんだろうな。

そんな訳でそれぞれのコードネームが決まった四人は履歴書を人事部に提出し、次は如何するのかと聞けばまだ飯食ってなかったので腹が減っており、昼飯食いに食堂へ行くとの事…食堂かあ…。

：いやね? 自分が悪いのは分かっているんだよ? 側から見たら後ろに迫っていたとはいえ、シェフの一人を天井からぶら下がる程の力でぶっ飛ばしたにも関わらず未だに謝罪に行っていないのだから…。

重い足取りのまま四人と共に食堂へと向かうと、探していた人物は(サードアイ視点で)直ぐに見つかった…のだが…これは…手ぶらで

の訪問クツソ失礼な感じだったかね？

探していたあのシェフは直ぐに見つかったのだが、首から上を包帯でぐるぐる巻きにしているだけハロウィンかと言いたくなる様な状態になっており、よくよく『視て』みると下顎の骨が粉碎骨折していたのである、痛そう（小並感）

：あれ？ でもそっぴいあの時俺発狂しててちゃんとした体勢じゃなかったとはいえ一切手加減してなかった筈なのに、なんで頭消えてない上に下顎だけの骨折で済んでるんだあのシェフ!? 少なくとも俺の素手で出せる全力って市販の防弾チョッキ位なら拳で貫通させれる位の威力あるのにおかしくね!? ；もしかしてあのシェフ、原作でのゴムやマッターホルンみたいな『戦うコックオペレーター』だったんだろうか？

兎に角気を取り直して謝罪する為に声を掛けると、何故か二人同時に頭を下げあう事になってしまい互いにクエスチョンマークでも浮かびそうな顔になって見つめ合う事に。

如何やらあのマジキチスマイルはこのシェフが滅多に頼まれない特別メニュー（主に感染生物を用いた料理）を注文した相手に礼をしようとする時に無意識に出してしまうらしく、今迄も何人もの相手を恐怖から逃走させ、酷い時には気絶や失禁させてしまう事もあったらしい…。

因みにこのシェフ、厨房から出て来て真っ先に俺に謝罪して来たのだが、気を取り直した際に視界に入ったのであろうアスラ（の私服になつてる例のあの服）に一瞬固まってしまっていたのを俺は見逃さなかった…。

よりにもよってアンタも同類だったのかよ…。

理解出来たか？ …オツケー。

恐らく転生者であろうコックの事は気になるものの、流石に彼はまだ仕事の時間である為に先に飯食って時間を潰す事に。

その際コックが恐らく俺達と同類だという事を告げるとブレードランナーとアマツキは驚いていたが、デュナメスとアスラは俺に賛同する様に頷いた。

デュナメスは傭兵としての経験で相手の視線が何処を向いているのか気にしてしまう癖で気が付いたらしいのだが、アスラは異能によって自身へと視線が向けられている事を感じたのだという。

アスラ曰く『流れ』を五感で認識する事が出来る異能であり、コックの視線が自身の服へと向けられたのを感じとったから分かったのだとか：なんかその異能の内容って聞いた限りでは第六感が五感をサポートしている様にも思えるな。

そんな事を話し合いながら飯を食い始めたのだが、何というかそれぞれ食うものに個性を感じるといふか何というか…。

まずブレードランナーはレバニラなんかのスタミナ料理が好きらしく、アーツによる電脳体への変化をしているとかなり疲れる事になるから自然と好んで食べるようになったとの事で、あのアーツは隠密能力は高いのだがどの機械もロックマンEXEの電脳世界みたいになだっ広い空間が出来ていて只管走り回る事になるのだとか。

次にデュナメスはそこそこバランスは良いが微妙に肉が多目の品揃えであり、やっぱり傭兵稼業は身体が資本だから結構ガツツリ食うとの事なのだが、仕事がまちまちになったりすると食費が結構嵩みかねない量だったり、そんなに食うものだから動いていないと直ぐ脂肪に直結しかねないのだとボヤいていた。

意外なのが四人の中で一番大柄なアスラが量はあれど豆料理を中心とした減茶苦茶質素なモノを食べており、スラム生まれで余りも肉を食ってなかったせいで余り肉が得意ではなく、弟子入りしてからそこそこ食べれる様には成ったが苦手なモノをそこまで食べたいとはやはり思えないので、栄養バランスで考えて必要な量だけしか食べな

い様にしているのだとか：修行中なのかな？

：最後にアマツキだが、食べている内容は極々普通である：酒を飲みたがっている点を除けばな!! 真っ昼間から酒を飲もうとするんじゃない!! 常識的に考えろ常識的に!!

何？ 就職祝いで酒飲んだりするのは当たり前？ いや確かに祝いで酒飲むイメージは俺にもあるけど、そうじゃなくて公衆の面前で真っ昼間から飲もうとするのを止めろと言ってるんだよ、祭りとかの祝い事なら皆がそういう気分で飲んだりするだろうけど、今回の就職みたいな個人的な事で酒飲むのはプライベートでやれっつて事だ、理解出来たか？ : オツケー。

そんなこんなでワイワイ(尚騒いでいる話の内容は主にちよくちよく酒を飲もうとするアマツキへの注意)と飯を食っていると、仕事が一段落したらしいコックが此方の席へとやって来た。

そういえばまだ互いに自己使用をしていなかった事を思い出し、こちらから名乗るとコックは俺の名前は知ってはいたが本名だったとは思いもしなかったとまたもや同じ様な驚き方をされてしまった：マジでコードネーム考えるべきかなあ…？

そんな感じで少し凹んでいたのだがすぐに気を取り直してコックのコードネームを聞くと、彼は少しばかり姿勢を正して「私のコードネームは『ヤガ』と申します、よろしければ今後ともよろしくお願いいたします」と矢鱈と改まった様な感じで頭を下げてきた。

そんなヤガの反応に俺達は慌てて頭を上げる様に促したのだが、ふむ：『ヤガ』：ねえ？

何となく覚えのある名前にチラリと他のメンバーに目を配ると、如何やら俺と同じ考えに至ったのであろうブレードランナーが少しだけ難しそうな顔をした後、こちらの視線に気付いて小さく頷き「次は俺達の紹介だな」と『コードネームの元ネタを明かさずに』自己紹介をしていく流れを作っていた。

：恐らくだがヤガのコードネームは他の四人の様に前世知識からの応用である事が察せられ、自身のコードネームを述べる際に殆ど表には出てはいなかったが若干の緊張と後悔の色が見てとれた事から

察するに、コードネームにはなにやら自戒の意味を込めているものと思われる。

俺自身今現在に至るまで嫌な事や面倒に思える事もそれなりにあったが、原作の匂わせ方を察するにウルサス学生自治団の面々は何やら精神的に問題を抱える程の惨劇に遭っていた様だし、俺の過去で言えば最初の村であった惨劇もまだマシに思える様な事だつてそれこそありふれて…いたとしてもやっぱりあのクソシチリアン共は許すべきじゃないな、うん。

そんな考え事を窓の外を見ながらふと考えていると、いつの間にか食堂が静かになっており、不思議に思つて視線を戻すとめっちゃやびびつて腰が引けるブレードランナーとアマツキと、そんな二人を俺から庇う為に何時でも動ける様他三人が構えていた…え、なにこれ？ 何これ如何いう状況なのさと困惑する頭で更に周りを確認してみると、他の食堂に居たオペレーター達は此方の状況に直ぐ対応出来る様戦闘可能なオペレーター達が構えており、非戦闘員である内勤オペレーター達の中には泡吹いて気絶している者まで居る(つてか何人が戦闘オペレーターらしき者も居た) 始末…いやマジでナニコレ？

周りの確認をした事でマジで困惑し出した俺に対してブレードランナーが大丈夫なのか？ と、寧ろお前の方が大丈夫なのかと言いたくなる程青い顔しながら聞いてきたので、逆に俺の方が何の事なのか聞いてみると如何やら先程の想起していた事で苛立っていたのが漏れ出ていたらしいのだが、俺にとってはクソ邪神関連の出来事に並ぶレベルで屈辱的な記憶な為、漏れ出た苛立ちは殺気と言い換えても良いレベルのものが食堂に溢れ、それによつて平和な食堂の雰囲気戦場の殺伐としたソレへと一変したのだという。

そうですね、土下座ですね…また黒歴史確定ダア…。

その後、自分の過去の事はある程度ボカしつつ誠心誠意真心込めて謝罪した結果、なんとかその場に居たオペレーター達には許してもらうことが出来たのだが、気絶していた戦闘オペレーター達は鍛え直す羽目になるとばつちりを受け、事態の收拾の為にやって来たアーミヤとドクターからどうせならその威圧を使って訓練の手伝い

をやつてくれと頼まれてしまった。

一先ず迷惑を掛けた食堂に居たオペレーター達に謝り終えた後にまた皆の所に戻ると、デユナメスからは「話を聞くに何か嫌な事があつたのかもしれないが、ちよつとは抑える様にしろ」と言われてしまった…。

ちやうねん、ずっと独り暮らしだったから愚痴とかも言いたい放題で発散してたからウツカリ気が抜けとつたんやねん…。

そんな感じで説明したらまたしても呆れられてしまった…ちやんと仕事してる最中ならこういつた事は無いんだけどなあ…とボヤいていたら、それならちやんと切り替えれる様にしておけよとツツコまれてしまったので、ならばまず第一歩としていい加減コードネームを決める事にした。

…のは良いのだが、長らくフィツシャーを名乗っていたせいで自分では思い付かず、先程の様に今度は俺が意見を貰う事にした。

まず出て来たのはブレードランナーの「二つ名で行くのはどうよ？」という意見から『チケムリ』、次はデユナメスの「安直だけど二つ名の英語訳とかはどうだ？」という事で『ブラツデイスモーク』、アスラからは特に理由は無かった『ダイロクテン』、アマツキは「使っている武器の由来から取るのはどうだろう」という事で煙の特大剣の所有者であつた『レイム』、ヤガからは「あの高機動力にとつともない力を兼ね備えているのならばまるで嵐を従えているみたいですね」という事で『ストームルーラー』との意見が出てきた。

…さて、どれも中々捨て難い気もするが…どうしよう？

オペレーター：ヤガ

【コードネーム】 ヤガ

【性別】 男

【戦闘経験】 6年

【出身地】 ウルサス

【誕生日】 5月4日

【種族】 フォルテ

【身長】 227cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、感染者に認定

能力測定

【物理強度】 優秀

【戦場機動】 標準

【生理的耐性】 卓越

【戦術立案】 標準

【戦闘技術】 標準

【アーツ適正】 標準

個人履歴

オペレーターヤガは普段ロドスのキッチンで調理師として働いているオペレーターです。

十歳の時に住んでいた村が天災の被害に遭い村が壊滅し、そこからただ一人脱出出来た当時のヤガがロドスに救助されてから彼はロドスに在籍しており、初めの頃は強迫観念からくる過食症を患っていたにも関わらずマトモな食事も摂れない程の拒食症によって拘束措置さえ取られていましたが、長期に渡るメンタルケアによってある程度は治療されました。

また、治療するに当たって拘束措置する必要を作り出した特異な能力を保持しており、前述した天災による心的障害も合わせり食事に関

してはある種異常とも言える執着を持っている為、その狂的なまでの熱意によつてロドスの台所事情を格段に引き上げた功績を有しています。

特異な能力を保持しており前述した天災による心的障害も合わさり食事に関してはある種異常とも言える執着を持っており、その狂的なまでの熱意によつてロドスの台所事情を格段に引き上げた功績を有しています。

また、彼の作り上げたサバイバル調理術の記録は遭難してしまつた時等、いざという時の奥の手として非常に優秀な為、エリートオペレーターへと昇格する際の試験に必須科目として登録されています。

元になる素材と見た目にさえ目を瞑れば私が作つてもある程度美味しくなるし色々優秀なんだけどねえ…。ブレイズ

健康診断

【源石融合率】 10%

天災から避難していた際に脚に細かい怪我をしてしまい、そこから細かい源石が所々出来てしまっている。

【血液中源石密度】 0.11u/L

異能の影響なのか体表の状態に対して体内の源石密度は平均と然程変わらない。

第一資料

基本的に調理場での仕事をメインとしているオペレーターやガドはあるが、故郷を天災で失いその避難する際の経緯から保存食やサバイバル技能に関しても強い関心を有しており、暇を見繕つては調理場等で携帯食糧を、開発部で新型のテントやキャンプ用品の開発に勤しんでいる姿が散見され、それ等開発した製品を各地へ赴く外勤オペレーターへテスト依頼として見繕つては絶えず改良を加えており、ロドス外勤の環境向上にも一躍買っています。

——いや、本当に色んなところに探検するのが楽になって助かつ

てるよく。マゼラン

第二資料

彼は主に調理場で働いていますが、その経緯から大食いと言える程の食事を摂る事があり、異能の影響か健康面ではそこまで影響は無いのですが食費が嵩むのもあり、出費を抑える為に時折荒野に出ては感染生物を捕獲して持ち前のサバイバル調理術で調理している事が知られています。

ちゃんとした調理によって感染するリスクは極限にまで下げられているのですが、矢張り素材が感染生物である事や見た目で遠慮してしまう者が多くあまり他のオペレーターが食べる事は無いのですが、時々嗜好に合うのかちよくちよくりピーターが出ています。

そんな感染生物料理を長年食べているからかそれとも異能の影響か、ヤガの身長や体格は平均的なフォルテ男性のソレを大幅に超えており、その長身よりも更に長い六角棒から繰り出される棒術の威力は、装備の優秀さによる突撃も相まって恐ろしい程の突破力を誇ります。

第三資料

ヤガはアーツの才能自体それ程高い訳ではないので単純な使い方しか出来ないとの事ですが、彼の使う『斥力』のアーツは足場の有利不利を無効化し、数センチ程度ならば浮く事も可能なので高速で移動する事も出来、自身を中心に高威力で放つ事で致命傷への対策も出来る為、重厚な装備を纏ったヤガはその巨躯も相まってさながら移動都市の如く皆を守る盾となるのです。

但しそのアーツによる斥力の効果は範囲に入れば当然仲間であっても適用されるので、ヤガの後ろから遠距離攻撃を行う際はヤガのアーツ範囲から離れなければならぬので注意が必要です。

第四資料

ヤガの持つ異能はありとあらゆる物質を喰らい問題無く己が力へ

と変換させる『暴食』の能力です。

これはヤガの『口』に入る物全てに作用する能力であり、普段は口蓋垂から先に常時作用されており、胃カメラ等を用いて検索する際にその異常性が発見されました。

初めはヤガの口内検査の際、喉奥が何故か見えないという所から胃カメラを入れて調べようとした所口蓋垂を超える所で機器に異常が発生し、抜き出して調べようとした所先端のカメラ部分がまるで初めからそうだったかの様に消失しており、その後もレントゲン等も用いて検査しようにも内臓部分だけ切り取られたかの様に真っ黒になっていた事からその異常性が認知されました。

その後肉以外の食物から始まり果ては当時の研究者の暴走で有害物質まで飲まされそうになりましたが（尚その場に居たケルシー先生によつて止められ当事者達はかなり厳しい処罰を受けました）ヤガはその出された物全てを喰らい尽くし平然とした様子でした。

その反応に違和感を感じたケルシー先生からの質問で、彼は天災から逃れる際に既に自身の異能についてある程度把握していたらしく、意識すれば異能は口内から発動する事が出来、普通の食料だけでなくそこらに生えている雑草や樹皮、果てには限界まできた空腹による乱心によつて朽ち果てたトラックと思わしき錆びの塊までもを食したとの事です。

――：彼を保護して今回の検査が終了した後、天災が過ぎ去り滅んだであろう跡地を調べた際、そこは一つの朽ちた家屋と粗末な墓石以外挟られた様に何も無い荒野としか言えない場所でした……あそこは一体、天災によつて何があつたんでしょうか？外勤オペレーター

昇進記録

ヤガにはなるべく深刻なダメージを与えたり空腹状態にさせてはなりません、彼自身はある程度空腹は理性で我慢する事はできますがそれでも行き過ぎた空腹やダメージによつて限界を迎えた際、彼の『口』は大きく……途轍もなく大きく開かれます。

例えばそれが樹木であつても岩土であつても鉄塊であつても……普段

トラウマによって口に出来ない何かしらの『肉』であつても関係無く
呑み込まれてしまうからです。

《ゲーム的な資料》

星六 重装オペレーター

募集タグ

近距離 生存 防御 爆発力

ステータス（昇進ⅡレベルMAX時）

HP：5000

攻撃：915

防御：1050

術耐性：5

再配置：とても遅い（150s）

コスト：30／32／34

ブロック：1

攻撃速度：やや遅い（1.50s）

特性

敵をブロックしていない時、SPが回復しない。

攻撃範囲

????

潜在能力

コストー1

攻撃力+25

術耐性+10

素質3強化

昇進Ⅰ

30000

初級重装SOC×5

初級アケトン×7

初級異鉄×3

昇進II

18000

上級重装SOC×4

D32鋼×4

精錬溶剤×7

素質1 斥力浮遊

無昇進 設置物や穴の無い低い地形全てに配置可能であり、遠距離
攻撃回避+20%

素質2 対感染生物スペシャリスト

無昇進【感染生物】との戦闘時、対象の特殊能力を無効化。

昇進I【感染生物】との戦闘時、二体までブロック出来、対象の特
殊能力を無効化。

昇進II【感染生物】との戦闘時、三体までブロック出来、対象から
のダメージ15%、対象の特殊能力を無効化。

素質3 生存本能と心的障害

昇進IIで解放 致命的なダメージを受けた時、前方の特定範囲に
【捕食】攻撃を発動し、再配置不可となる。

※【捕食】 攻撃された範囲の通常敵を消去し（撃破扱い）、ボスが
相手の場合は確定ダメージ（25000+潜在強化で+5000）を
与え、範囲内に味方が居た場合全員撤退した後、其々再配置時間を??
内に居た場合に1.5倍、??内に居た場合に2倍にする。

?????????
????????

基地スキル 調理師（ゲテモノ有り）

配置宿舎内のオペレーターの回復速度+1.00、【感染生物】食が

可能なオペレーターの場合更に+1. 25

戦闘スキル（全特化3状態）

スキル1 斥力強化（パッシブ）

全攻撃回避率+30%、攻撃時敵を『相当の力で』弾き飛ばす。

スキル2 天秤の構え（時間回復、手動発動、必要SP40、初期20）

攻撃しなくなり、攻撃力+25%、防御力+200%、敵の通常攻撃を受ける際素質1の物理回避率に+50%し、30秒間攻撃範囲内の敵を『かなりの力で』弾き飛ばす（0.8秒内最大発動回数1回）

スキル3 生存本能全開狂化（手動発動、自動発動、持続30s）

体力が30%を切る際自動発動し、攻撃力+150%、防御力+90%、攻撃速度+50、攻撃した相手の防御力-50%、効果終了後に自動撤退し、スキル使用後に撤退した場合再配置時間が倍になる。

狙撃かな？

話し合った結果ヤガ発案の『ストームルーラー』をコードネームにする事にし、後々タイムリングを見て伝える事にしてこれからの予定を聞いてみると、ロドスに加入する四人は其々の割り振られた部屋に運び込まれている荷物を荷解きしなければならず、ヤガも夕飯の支度をしなければならぬとの事で解散する流れとなった。

ただぼけつと龍門に着くまで待つてるのも時間が勿体無いのでトラックの整備をして時間を潰す事にした：脳波コントロルってまだ作ってそこまで回数重ねた訳じゃないから、ちゃんと使用前後に確認しとかないとラジコンで作った試作品の時みたいに暴走しかねないんだよなあ…。

ギアの回転数数倍化…：ハンドルの左右信号逆受信…：突然路上に飛び出し…：工業区へと向かう大型トラックが偶然通過…：装置も基盤も何もかも再利用不可能なまでにぺっちゃんこ…：下手な黒歴史よりも尚辛い…。

そんな訳で脳波コントロルだけでなく自動運転機能まで付けてあるトラックがお釈迦になった日なんて、例え毎度キチンとバックアップを取っていたとしても目も当てられなくなる程の被害額が生じる為、こういった点検は毎回欠かさずに行なっているのである。

：正直もしも全損事故とか起こされたなら、あのトラックの弁償だけで軽く中小企業程度なら幾つか畳めてしまう程の金額を請求出来る程の技術が詰め込まれているからな…いや、今となつては戦地運用可能な改造もされてるから、大企業と呼べる規模の会社一つ位なら潰せるか？

尚事務所なら二つの意味で国が潰れると試算しながら閑話休題

至極ろくでもない事を考えながら駐輪場へと向いトラックの点検ついでに改造した大型バスの整備をしていると、ズイマーがやって来て何やら探し物がある為トラックの荷台を探させてくれないかと尋

ねてきた。

忘れ物があつたのかと思いい荷台を覗き込んでみると、如何やらズイマーの物と思わしき見慣れない片手斧：の持ち手部分に鉄棒引っ付けてリーチを増やした程度の素人による手作り感満々な物が転がっていた：いやいや、こんな今にも外れて事故りそうな武器使うとか正気か？

取り敢えずズイマーに確認してもらいしつかりと彼女の物だと判明させた後、ちよつとばかり話し合わせてもらった。

俺自身戦闘中の馬鹿力によって煙特を手に入れるまでは幾度となく自前の武器を破壊しまくっていた為、それだけに装備については少しばかり煩いのである：取り敢えずただ単に二箇所テープで固定させただけの物を俺は武器とは呼ばんし呼ばせん。

確かにあの状況だったらマトモな武器の調達も難しかったのだろうが、例えそうであってももう少し安全に配慮して欲しいものである。

そんな感じの事を出来る限り懇切丁寧に説明したのだが、反抗期なお年頃のズイマーからすれば口煩いだけの大人にしか思えないだろう、分かり易く説明する為に訓練場へと赴き、ズイマーの斧がどれ程危ういのかを知ってもらおう事にした。

そんな訳で百聞は一見にしかず、誰も居ない場所を確認して持って来た斧をひゅぱつと一振り：簡潔過ぎる固定しかされていない斧はすぽーんと簡単にすつぽ抜け、振った勢いのまま飛んでいき的へと鈍い音を立てながら深々と突き刺さった。

唯のコンクリートの塊だからこそ問題無く済んだが、もしも乱戦時にこんな事になれば敵に当たれば御の字だが味方に当たるかもしれないし、その後も自身はこの微妙な長さの今までとは全くリーチも違う棒で戦闘を続けなければならなくなる危険性を伝えた。

：のだが、何故かズイマーは啞然として斧が突き刺さった的を見ているだけであり、どうしたのかと思っていると周りで訓練場を利用していたオペレーター達も啞然としていたり俺を見て呆れていたりと様々な表情を見せていた。

何故だと思いきえ直してみれば即座に理由に思い至った、どう説明するか考えていた為そこら辺が頭から抜け落ちていたのだが、俺が訓練場でやった事を詳しく説明すれば『訓練場に入ってズイマーに少し説明した後即座に一振りし、訓練場端に設置してある銃の訓練用的（大きさ30cm程）のど真ん中へと命中させた、尚的との距離約500m也』である、狙撃かな？

…まあ、きつとエリートオペレーター辺りなら似た様な事出来る奴はきつと居るから大丈夫大丈夫…え？ 在野の人間が当然の様に出て来ている事がヤバいんだって？ ご尤もな意見です。

空気がいたたまれないのできつと的にめり込んだ斧を回収して撤収する事にして、ついでにズイマーにこれからどうするのか聞いて相談にのる事にした。

どうやらズイマーはこれからどう過ごすのかはまだ決めかねているらしく、家のあつたチエルノボグがレユニオンによって滅茶苦茶にされている以上他所に行かなければならないが、他の移動都市に親戚が居ない為どこに行くのかも悩んでいるのだとか。

ええ：原作で学生自治団がロドスに居た理由をあのプロフィールから災害後の仲間意識でいたんだと思っていたけれど、まさかそれだけじゃなくて親類縁者が居なかったからなのかよ…。

まあ、確かにこの世界なら住む場所が移動都市の人間なら何時天災がくるかもしれないそこの村に住みたいとは思わないだろうし、他所から来る人間なんて国家運営の輸送屋かトランスポーター辺りだから前世みたいに親戚が色々な所に居るみたいな事が少ないんだろうな。

取り敢えず一緒に考える事にして将来への展望みたいなのを聞いてみたのだが、やっぱり年頃の子供らしく何もかも曖昧でやりたい事等も決まっていない様だった。

一見態度は不良みたいだが根が真面目らしいズイマーは俺の質問に対して唸りながら考え込んでしまい、これではいつまで経っても終わりそうになかったので、一度違う話に切り替えて頭をスッキリさせようという提案をして軌道修正を図り、ついでに近くにあつた自販

機から自分とズイマーの分の飲み物を買う事にした。

：したのだが、置いてあるのが味などの違いはあれど全部エナドリの類だった：チラリとズイマーの方を見てみるとあまりにもあんまりなラインナップに思わず先程から続けていた顰めっ面も盛大に引き攣っていた、さもありません。

まあ、飲み過ぎなければ良いだけだと選ぶ事にしたのだが、生憎口ドス製のエナドリはロドスと支部にしか置かれておらず、どれが旨いのかはよく分からんし何本か飲んだ事があるとはいえ時々飲んでるだけでそんなに記憶に残っていないのと、リメイクしてカフェイン増量とかされてて味の予測がつかないのも買うのを戸惑わせる一因となった。

：ペ▽シにカフェイン増量されて想像以上に苦くてビックリした前世の思い出：苦味にビックリしてアレ以降カフェイン入りのヤツは買った事無いな。


取り敢えず唯一味を覚えているロドスで初めて作られたエナドリを買う事にして味を確かめた後、ズイマーに勧める事にした：まあ、初めて作る事になったエナドリって事でメツチャ無難な味だしな、前世の例を挙げるならアレだよアレ、オ??ナミンC、又はエナドリじゃないけどCCC▷モン。

渡されたエナドリを恐る恐るといった感じで飲み始めたズイマーも唯の炭酸飲料みたいな物だと理解してからは普通に飲んでいくようになり、二人してチビチビ飲みながら他の奇天烈なフレーバーについて語っていった：レモンやピーチは分かるけど新商品欄にある『禁酒用ビール味』とか『潤いサボテン味』とか誰が買うんだよ…。

エゴサしなくちや（使命感）

ズイマーとの話し合いは取り敢えず将来についてはまだ決めかねるだろうから後回しにして、元々話していた武器についての話へと切り替えたのだが、あの日曜大工で作りました感丸出しの斧は単純にリーチを求めた結果あんな雑な造りになっていたらしく、引っ付けていた斧だつてペテルヘイムの事務員宿舎に置かれていた薪割り用の斧だつたとの事。

まあ確かにあんな物が無い場所だつたら確かにそうなるのも仕方ないのかもしれないな：なんか自分がやってた原作での初期に来たキャラで、素質もスキルも優秀なテキサスが来ても暫くスタメンだったから、あの継ぎ接ぎをずっと使い続けてる印象が強過ぎたんだろうな、反省しなければ。

しかしそれなら対処は簡単だな、新しく武器を用意してやれば良いだけだという訳でスマホもどきを取り出し、マスターキー（）をベースにズイマーの身長や腕の長さに掌の大きさを大雑把に視て記入していき、凡そ扱い易そうなバランスを求めて設計していく。

隣で俺が携帯を操作し始めたのを見て気になったのか、ズイマーが何をしてるのか聞いてきたので素直に「ズイマーに良さげな武器の設計」と答えると、当のズイマー本人からは何やってんだコイツといった感じのジト目を向けられる事になった：まあ、特に親しいとは言えない奴がいきなり「お前の武器の設計図を作ってるんだよ」とか言ってきたら確かに頭疑うわな。

まあ、そこら辺は物作ってる身としてあんな錆鍔とどっこいどっこいな武器（ズイマーがマトモな武器にしようとしているけど日曜大工以下の対して錆鍔の元は良かったんだろうけど錆びて台無しとの対比）は正直我慢出来なかつたんだよと答えたら、ズイマーは頭の痛そうな顔で顫顫を抑えながらアンタの職業なんだつつけと聞いてきた、いや万屋ですけど？

まあ、万屋という言葉が無いこのテラの世界では伝わらないので「単純に何でも屋だと思っておけ」と伝えると、ズイマーは「その万

屋つてのになればアンタみたいは何でも出来る様になるのか？」と聞いてきたので「出来る事は個人の資質に寄る所が多いだろうけど、俺は俺のやりたい事をやりたかったから万屋を開いたんだ」と答えてやった。

するとズイマーは何やら考え出してしまったのだが…もしかしてこれって、俺やつちまった感じなのかねえ？

そう考える俺を他所に暫く悩んでいたズイマーだったが、ふとこちらを向いて「もしもアタシがアンタのやってる万屋に入りたいつて言ったら…アンタは受け入れてくれるのか？」と不安げに聞いてきた…出来らアツ!!(勢い任せ)

つついノリで言ってしまったが吐いた唾は飲み込めない、男らしく責任取る為改めて面談しようと思っただが、その段階で何故かズイマーがちよつと待ってくれと保留を入れてきた。

聞けば友人達(原作にも出てきた彼女達)に一言入れておかなければ申し訳ない気がするのでちよつと待っていてくれとの事、義の人ですなあ。

そんな訳でズイマーとの話はまた後程という感じで別れてまたトラックの整備をしようと駐車場へ足を向けた時、丁度艦内放送によつてもうすぐ龍門に到着するとの連絡が入りこれで漸く一段落かと思っただが、ふとこれから何が起きたのか思い返してしまい思わず固まってしまった…。

そういえば龍門着いて即スカルシュレッダーによるミーシャ争奪戦が起きるんだつた…。

俺の前世でやっていた原作ではロドスは龍門に着き次第直ぐウエイの元へと向かい、交渉の結果龍門のスラム街に逃げ込んだミーシャを連れて来いって言われてペンギン急便のエクシア&テキサス、BSWのフランカ&リスカムに協力を仰いで向かったが、そこからスカルシュレッダーが来てロドスとレユニオンによるミーシャ争奪戦が起きて陰鬱な結末に辿り着くんだよな…。

鬱展開なんて見逃してたら胸糞悪い思いが残るし、何よりもそんな事出来るならチェルノボーグの子供達を助けたりなんて出来ないか

らな、兎に角介入するのは決定事項としてきてはてどうやって介入したのか…？

ってかそもそもミーシャちゃん龍門に来てるんだろうか？ もしも来てないのに介入準備とかするだけ無駄だし…と思っていたら何やら電話が…どれどれお相手さんは…ウエイ・イエンウー？ はいはいもしもし？

…人探しを頼みたい？ 今丁度そのチエルノボーグからロドスに居合わせて帰って来ている最中なんですけどそれからでも宜しいでしょうか？ 構わない？ え？ ついでだからロドスについて教えてください？ 結構付き合い長いんで鼻真目になっても良いっすか？ 問題無し？

取り敢えず運営部に関しちや分からん所も多いっすけど、一応トップのCEOは覚悟ガンマリだけどその分マトモな人格者っすね、責任感も強いから十分信用出来るかと…ケルシーさんはどうか？ 申し訳ないっすけどあの人はあんまり会った事は無いんで分かんねえっすね、多分悪い人では無いと思うけどそれ位しか言えないっすわ…。

ドクターはどうかって？ いやドクターについてもついこの間初めて会って幾つか言葉を交わした程度ですから…ってかさつき会ったらチエルノボーグで事故に遭って記憶喪失になつちまったみたいですよ…いやいやマジですマジマジ…なんか前会った時はお堅かったのに矢鱈とフランクな感じになってクソビびった位ですもん、フィツシャー、ウソ、吐カナイ。

…取り敢えず龍門に着いたら一度ロドスの会談メンバーと一緒に近衛局に来てくれ？ はいはい了解…っすけど、ロドスの方へはそっちから説明してくれませんか？ …あ、社会人としては当然の事？

まあ、そうですね…寧ろ俺の軽過ぎる言葉遣いの方が不味いのはど？ いや、そこは『あなたの街の万屋権兵衛』ですからね、フレンドリーなのが売りなんですわ、すいませんな。

ああ、後ロドス本艦の到着が大体30分程目的の時間より遅れそうなんで悪しからず、それではまた後程。

…ふう、コレでミーシャ争奪戦介入成功だな、めっちゃアツサリ出来て寧ろこっちの方が驚いた位なんだけど…俺もしかして探索能力面でかなり有名になってる感じ？ エゴサしなくちゃ（使命感）

とかなんとか考えていたら艦内放送で呼び出されたので先程の件に思いつきり関係している内容なのだろう、ウェイさん行動迅速つすね。

呼ばれた場所に到着したら予想通りにアーミヤとドクターが居たのだが、その二人以外にもなんかおっとりした感じのサルカズの女性が居て三人で話し合っていた様だ…というかドクターとサルカズの女性がホンワカしてるのをアーミヤが苦笑いしている様子からしてなんかトンチキな会話でもしていたのだろうか？

状況がよく分からないまま三人に近寄ると俺が来た事に気付いたのか、背中を向けていたドクターとアーミヤがこちらへと振り向き、サルカズの女性が微笑みながら手を振ってきた…なんかこの人物凄くロイヤルオーラ漂わせてません？ 具体的にはフミツキさんレベルかそれ以上のやつ。

話を聞くに彼女の名前はテレジアというらしい…なんか昔居たサルカズの姫さまがそんな名前してなかったっけ？ え？ 本人？ それマ？

なんと彼女は昔死んだとか言われてたテレジア本人らしいのだけど、特殊な手段によって延命する事に成功したのだとか…代わりに記憶喪失になってしまったのだけれども、前に聞いた話では彼女にとつては寧ろそちらの方が幸せなのではないのかと言われていたな…どんな業を背負っているんだか？

ともあれ今関係無い事は置いてこれからの予定を話す事になったのだが、俺の予想通り俺、ドクター、アーミヤの三人で龍門近衛局へと赴いてウェイとの交渉を行い、その後に俺との依頼の話をする予定なのだとか。

…それじゃあなんでテレジアがここに居るんだ？ と聞いてみれば、テレジアは実権は無いがそれにしてもロドスの前身であるバベルでの活躍が凄まじいので、所謂相談役として居てもらうのだとアーミ

ヤがそれとなくテレジアとドクターを引き離した後にコツソリと教えてくれた…そして中々難しい立場の人なんだと思つてコソコソアーミヤと話していたらなんか当のテレジアもドクターと二人でニヤニヤしながらあっちもあっちでコソコソ話してた…なんかあの人もあの人で愉快的な性格してるんじゃないのだろうか？

マジで俺なんかした!?

午後十時過ぎて漸く龍門にロドスが到着し、ウェイとの交渉に向かう為にアーミヤとドクターに同伴したのだが、案内として合流したチエンからはお小言を貰う羽目になってしまった…のだが、チエンさん？ なして俺見て微妙に頬引き攣らせたんすか？ 俺なんかした？

何故か引かれてる事に納得いかないものを感じつつも、チエンの案内で近衛局へと向かいウェイの執務室に到着したら、先に到着してウェイへと説明していたケルシーがこちらを向いて…いやだからなんでアンタも俺に対して何とも言えない感じの微妙な顔するんだよ…前からだつたけど凄いい気になるんだけど？

とはいえそんな事を問えるような場ではないので疑問はそつと胸に秘めておき、ロドスとの交渉を見守る事に。

チエルノボグ及びレユニオンの事に関する交渉については凡そ原作通りにウェイが龍門だけで対応出来るとぬらりくらりと躲していたが、途中でどうせなら俺に見解を求めてきたので答える場面もあった。

とはいっても普段感染者が身近に過ごしているだけで専門家でも何でもない俺には研究開発する際に調べた程度の事しか分からないから、適当に研究中に感染者との関係で起きた専門家が居て欲しくない面倒事を「私見で悪いが」と前置きを入れてからつらつらと述べていった。

一通り述べた後「少なくとも平常時でコレ等の事があつたんだから、問題の起きている今は更に面倒なんだろうし、専門家の知見はあつて損はないと思うぞ？」と言つて締めたらアーミヤは実感が籠りつつも遠い目で深く頷き、ウェイとチエンはなんか生温かい目でこちらを見ていた。

何かあつたのかと訊けばアーミヤからは「お疲れ様です、フィツシャーさん」と唐突な労いの言葉を貰い、ウェイからは「確かにそれは専門家の知見も欲しくはなるな」と同感を示されて話は良い感じに

進む事になった：：なんか解せぬ。

そんな訳で微妙に渋々といった感じだがウエイは龍門とロドスとの提携を認めて協力を仰ぐ事にしてアーミヤ達もこれを承諾、こうして特に問題無く龍門とロドスの提携は結ばれるのだった：：なんか原作に比べてアツサリ過ぎるんだが？ 原作の時ってなんかもつとこう：ウエイの態度が面倒臭い奴じゃなかったっけ？

どうにも俺が原因という事以外はなんかよく分からん事にはなつたが、上手い事ロドスとの交渉が終わったという事で次は俺の番になつたのだが、ついでという事でロドスにも協力してもらいながら難民と共に龍門に来たらしい白髪でウルサス人である少女のミーシャを探してほしいとの事。

：え？ 手掛かりそれだけ？ 顔写真とかは無いか感じなの？ 無い？ マ？

ええ：嘘でしょ？ チラツとサイドアイでスラム街の方を見てみるが、少なくとも軽く見ただけでも見た目の条件に該当しそうな対象が十人程見つかったんだが：いやまあ、今の段階でこれだけしか居ないと考えればまだ楽な部類だわな：。

気持ちを切り替えてウエイに依頼を受ける事を伝えた後、対象へと説明する為にも開示しても良い情報を求めたのだが、何やら機密に該当する部分がある為そこ等辺は俺自身の手腕に任せるといって投げっぱなしジャーマンを喰らってしまった：いやなんかもう始まりからグダグダが過ぎないか？

まあ、クライアントが滅茶苦茶なのは（ペンギン急便筆頭に）よくある事なので大人しく引き下がる事にした：ウエイさんや、気不味いと思うんだつたらもつとしっかりして下さいいな、微妙に目が泳いでますぜ？

そんな訳で近衛局から出てロドスのトップ3と今後について話を詰めようとしたら逆に此方が声を掛けられた上、しかもその声を掛けてきた相手はケルシーときた：：相手が相手だから緊張するぞオイ：。

一体何を話すのかと思つて身構えていると、ケルシーはいきなり頭を下げて「あの時彼女を助けてくれて本当にありがとう」と礼を告げ

た。

：ファツ!? マジでまるで意味がわからんぞ!? 唐突なケルシーの行動に記憶喪失なドクターが微妙に困惑しているけれど、それ以上にアーミヤが兎なのに宇宙猫状態になっちまってるじゃねえか!? マジで俺なんかした!?

頭を上げて理由を尋ねてみると二年前のカズデル内乱に於いて血煙（つまり俺）がテレジア側に雇われており、大暴れした結果敵の戦線はボロボロになるが味方も迂闊に近寄れない程ヤバかった為守りを固める事になり、その結果潜んでいた敵方が斬首作戦の為に送り込んでいた部隊を発見、結果としてテレジアは襲撃を受け負傷するも死ぬまではいかず、石棺による治療で命を救う事が出来たのだとか。

尚この話を聞いた俺の返答は「すんません、当時発狂してて記憶が曖昧なんでちよつとその礼は受け取りにくいっす…」である。

空気が一気に凍った様に感じたけど、マジで当時の事は夢現な方が多かった時なんでよく覚えてないんだよなあ…マジで師匠が自分の信念曲げてまで傭兵業から足洗ってなかったら多分俺は今でも戦場を彷徨っていただろうし、もしかしたら戦場そのものが俺をあつ狂気に引き摺り込むトリガーだったのかもしれないな…。

どう足掻いても忘れないから閑話休題

取り敢えず凍った空気を変える為、前からレッド達に俺の事を監視させていたみたいだけれどアレは一体何だったんだ？ と前々から気になっていた事を尋ねてみると、ケルシーは何処となく気不味そうな雰囲気させながらも答えてくれたのだが、理由は単純に何考えて近付いたのが分からない俺を警戒していた為の監視が目的だったのだという、至極当然な理由だった。

成る程確かに俺のやってる事って経営者サイドから見たら怪しいもんなとしみじみしていたら、ケルシーが「ただその時は貴方と血煙が全く結びつかなかったので大変失礼した」と謝られた…成る程気まぐすような雰囲気はそれが原因か。

別段気にしていない事を告げてから改めて本題に入ろうと話を出す、取り敢えず夜も遅いので明日から対応していく事にして、今日の内に其々準備をしていこうという流れになった。

正直な所結構眠くなってきたので有り難いのだが、ロドスに置いたままのトラックをどうするかの問題がまだあるんだよな…まあ、どちらにせよ引き取らなくちゃならないんだけど、今からあの検問をまた通る事になるのは怠いなんてレベルじゃないんだよなあ…。

とまあそんな事を考えていたのだが、ロドスに向かいながらその事を話しているとドクターが別に駐車料金を取ったりする訳ではないのだから、また明日取りに来れば良いと言ってきた。

他の二人からも許可が出たので厚意に甘えてトラックはロドスに置いておく事にした…バスについてはマジでどうしようかな？ 適当な業者に任せて引き払っておくべきか？

それではまた明日とロドス組と別れた後は遠隔操作でバイクを呼び出し事務所兼自宅に戻ったのだが、何やら何時もは事務所の裏路地から出て来ない子供達の世話役が周囲を気にしつつも事務所前に来ており、何か問題でもあったのかと聞いてみれば今回のチェルノボーグから来た難民の中に感染者の子も何人か居たので声を掛けたのだが、少しばかり数が多くて毛布が足りなくなってしまったのだとか。

思わずほっこりする様な理由に全く仕方がないなあ…と予備の毛布を出してやると、リーダー格の子はホクホクしながら路地裏へと戻っていった。

あんな他人を想える様な優しい子供にさえも差別を強いるのだから全くもってこの世界は度し難いものである…マジで何かしらの対策を施したいものだけれど、はてさてどうしたものやら…。

…：そーういや、増えた子って何人位居るんだろうか？ 一枚の毛布を数人で使ってる子達の予備の毛布が無くなったって言う位だし、ざつと数えて十人とかそんなくらい増えたのかね？

そんな事を考えながらふと、路地裏の子供達の姿をサイドアイで見てもみたのだが…。

【朗報？】俺氏明日の仕事即終わる可能性が浮上した件【それとも勘

違い？
】

お代わりもいいぞ!!

六十二日目

なんかクツソ久しぶりに日記の日付更新した気がするけれど、それだけ色々な事が一夜にして過ぎていったのだろう、マジで原作の展開って忙し過ぎるな。

まあそんな事はさておいて、昨夜寝る前に見た事が本当かどうかの確認をする為に寸胴鍋を使って普段よりも大分多いコンソメスープを準備し、味見して恐らく問題無い事を確認した後、使い捨ての紙食器やプラスチックのフォークなんかと一緒に家の裏路上へと持って行く。

以前から龍門のスラムに棲んでいた見慣れた子供達が、寸胴鍋を持って来た俺の姿を認識するや否や歓声を上げて近寄って来たのだが、新しく入って来たのであるう見知らぬ孤児達は俺と俺に群がる子供達の姿を見て困惑し、そのまま立ち尽くしているのだった。

この世界じゃあ昨日まで笑顔で接してきた相手であっても、自分が鉱石病になったと知ればアツサリと掌を返して侮蔑の眼差しを向けてくる、この子等は今が多感な時期だというのにそんな悪意を向けられた子供達なのだから、唐突にこんな事をしてくる大人なんて信用出来る訳がない。

そんな子供達の様子に苦笑しながらも先ずは何時もの子供達にスープを配っていると、スラムの奥の方から見慣れない、恐らくチェルノボークから来た新入りだろう柄の悪い輩がやって来た。

そいつ等にも居酒屋みたいなノリで「どうだ? 唯のコンソメスープだが、駆けつけ一杯いっとくか?」と聞いてみたのだが『貧すれば鈍する』というか『罹れば盲となる』といった感じであり、俺の態度に苛ついただとか何とか言いつて殴りかかって来たので、龍門に前から居る子供達に鍋を守らせつつ軽くチンピラ感染者達を捌いてやる事にした。

殴りかかって来れば態と紙一重で避けてやったり、蹴りを入れてくるのならば飛んで脚の上に乗り体幹を崩してやり、掴み掛かろうとす

るのなら潜り込んで投げ飛ばす。

そんな乱痴気騒動をしていれば当然他の住人達も気付いて見に来る為、思いつ切り戯けて即興のふざけたダンスで茶化しながら周囲を見るように言つてやれば、頭に血が昇っていたチンピラ感染者達は漸く周りの状況に気が付き慌てて逃げようとしたので、後腐れがない様に全員捕まえてコンソメスープを奢つてやる事にした、お代わりもいぞ!!

チンピラ感染者達に奢るついでにサラツと子供達も巻き込んでコンソメスープを配っていると、チエルノボーグから来たであろう子供達の中にお目当ての子が居る事を確認した。

怪しまれない様一人ずつ新入りの名前を聞きながら軽い身の上話を聞いていくと、お目当ての子は矢張りという多分ミーシャであった。

…多分つていうのはある意味当然の話ではあるのだが、原作はゲームでありキャラはアニメ調に描かれている為、それがリアルになると補正が掛かって一見誰だか分からなくなる事が多々あるのである：ねえ、知ってる？ アニメ調の瞳をリアルで再現したら、めっちゃくちゃ脳の領域を圧迫するんだって…：もしかしたらアニメなんかで偶にとんでもない馬鹿なキャラが居るのつて、そういった生物学的な問題があったのかも知れないね。

知りとうなかつたこんな推察…閑話休題。

てな訳で人物の特定をしつかりやらないとまさかの人物と知り合っていたなんて事が時折発生するのである、それプラスちよつとばかり龍門がなんでこの子を狙ったのか疑問だったので身の上話を聞いてみたのだが、母親は特に問題無さそうだったので如何やら関係ありそうなのは父親であり、それも大分お偉いさんだったらしい。

自分も一応科学者として末席を汚しているので知っている人かも知れないな〜とか嘯きながら名前を聞いてみたのだが、出て来た名前が『セルゲイ』とかおおう、もう…。

セルゲイ、チエルノボーグの高名な科学者『だった』男であり、既に亡くなっているのだが過去を漁ってみれば何とも言い難い人物である。

公式な経歴を見ればしつかりとしたものがあるものでちゃんど有能だったのだろうが、チエルノボーグにて資料が徹底的に隠蔽されていて見つからなかったからよく分からんが、ナニカを研究する為に他にも高名な科学者達と共に集められていたらしい。

しかしその際に軍部に介入されており、結果としてセルゲイ以外の科学者が全員死んでいる為、軍に脅されて仲間を売ったのだろうと思われる：多分家族を人質に取られたんだろう、調べてみれば家族思いだが気が弱い性格だったらしいし家族を人質に取られたのかねえ？

まあ、そこら辺のウルサスの闇を感じさせる部分は横に置いて、ミーシャには当たり障りない評判を聴かせてヨイシヨしておく事にした。

そんな感じで飯を通して友好を深めた後、ぼちぼち仕事を始める時間だと言つて事務所に戻りロドスに連絡を取り、受付に変わつて電話に出たアーミヤへと昨日話を聞いたミーシャと思われる少女と出会つた事を告げ、ロドスと近衛局との待ち合わせ場所へと『ミーシャの父親であるセルゲイの事について聞きたい事があるので来てもらえると言われた』という説得をしてから連れて行く為、その様な感じで近衛局と口裏を合わせてほしい旨を伝えた。

アーミヤはそんな俺の唐突とも言える展開に驚いていたが、経緯を話すと気が抜けたのか「ええ：そんな事つてあるんですかあ：？」とボヤいていた、まあそう思うよな、俺も同じ様な事思つたし…。

そんな訳で再び路地裏に戻つてミーシャを説得する事にしたのだが、意外とすんなり応じてくれたのには少しばかり驚いた：如何やら龍門の子供達が俺の事を説明してくれていたらしく、ある程度は信用しても良いと思つてくれたらしい、情けは人の為ならずってね。

そんな訳で合流地点に連れて行くこうとしたのだが、何やら面倒そうな見た目の連中が路地裏の奥に見えてきたので、見つからない様注意しながら装備を整えつつバイクに乗り込んだ(尚ノーヘルはダメなの

でミーシャに予備のヘルメットを被せたのだが、当然のようにブカブカだった)

目的地に辿り着くと既にロドス側からはアーミヤとドクター、近衛局側からはチェンが既に待っていた。

近衛局としてミーシャへと鋭い視線を向けるチェンを宥めつつ、近くの建物で話し合いをする事になったのだが、少し話して分かった事は『ミーシャは何も知らず、セルゲイは質の悪い隠し事をしていた』という事だった。

先ず初めにミーシャの親は二人とも暴徒によつて殺されており、天涯孤独の身だという事を話された：これに関しては生き別れの弟であるアレックス(スカルシュレツダー)が居るので微妙に間違っているのだが、これに関しては今はどうでも良い：もしも此方に喧嘩を売ってくるのであればしばき回して捕獲するだけだ。

次にセルゲイがミーシャに何か遺していないのかと訊けば、形見でもあるもうボロボロになってしまった上着(原作でもミーシャが着ていたアレ)とお人形だけ：なのだが、このお人形が厄物だった：トロイの木馬にさえも思えるぞオイ：。

ミーシャ曰く「お父さんが人形が長持ちする様に芯を入れてくれた」と言つてはいたが、視てみれば何やら嚴重に保護されたカードキーらしき物が：という事でしつかり復元する事を条件に一度人形を解き、中にあつたカードキーを出してみれば周りが驚き、渋い顔をしつつチェンへとそれを手渡した。

父親から何も聞かされていないままプレゼントと偽つて何かとんでもない物を渡されていたのであろうミーシャは、ショックを受けて顔を真っ青にしてアーミヤに慰められていて可哀想な程であり、思わず希望的な憶測を聞かせようかと思つた際、何やら外が騒がしくなつた。

：如何やらスカルシュレツダーが部隊を引き連れて襲撃してきたらしい：タイミング悪過ぎないか？

なんで近衛局こんな阿呆晒しとるん？

レユニオンのスカルシュレットダーが自分の部隊引き連れて襲撃を仕掛けて来た、因みに襲撃といっても如何やらWの手を借りたのかそこから中に時限式の焼夷爆弾仕掛けてまるで何かを炙り出す様にわざと疎に燃やしているのが現状である。

しかし、襲われているのにその狙いは疎であり被害も建物も兎も角人に対しては殆ど無いどころか、いても爆発に驚いて転んだりして怪我した程度という穴だらけな状況に、龍門近衛局の隊員は「派手な事をしていても矢張り感染者の集まりでしかない羽獣の衆だ、恐れる必要はないな」と盛り上がっていたので、気を引き締めさせる為にも俺がわざとだと思つた理由を見せる事にした。

近くの死角になるような物陰に近付きそこに隠されていた物を取り出してドクターへと放る様にパスすると、それがなんなのか分からなかったドクターは何の疑問も持たずに懐へ抱える様に受け取った。

なんだこれと言わんばかりに覗き込むドクターに「周りに仕掛けられてたのと同じタイプの時限爆弾だ」と至極アツサリ答えるとはほんの数瞬の硬直の後に「ホアアアアツ!？」と奇声を上げながら此方へと投げ返してきた、実に良い反応である。

そんな投げ返された時限爆弾を受け取りつつも軽い口調で「まあ不発弾だけだな」と爆薬が汚れて変色している所を見せながら返してやると、ドクターを中心に緊張していた面々はドツと肩の力が抜けたかの様に脱力したが、すぐに立て直すと即座に警戒態勢を強めて周囲の警戒為に動き出した。

結果的に不発弾だったとはいえかなり危険な所に爆弾が仕掛けられていたという事で危機感が増したという事もあるのだが、それをレユニオンの幹部であるスカルシュレットダーが先導して行っていたという事に対して目的が分からない為に警戒感が増したからだろう。

実際こんな仕込みをしておいて当のスカルシュレットダーは最初に姿を見せて名乗りを上げた後は姿を隠したらしく、何処かに隠れているのかもしれないと警戒しているのである。

：まあサードアイがある俺には既に見つけられているのだが、隠れ潜んではいるが思いつきりこの場所から離れており、駐車場近くの物陰に他のレユニオンの隊員と共に潜んでいた。

恐らく検問所へとミーシャが連れて行かれた事で来たのは良いが何処へ連れて行かれたのかまでは分からず、かといって適当に暴れようものなら間違えてミーシャを巻き込んでしまいかねない為こんな迂遠な方法を用いたのだろう。

とは言えそんな事を話しても怪しまれはしても信じられはしないだろうから、取り敢えずドクターから頼まれた他の不発弾を探して回っていると、本当にいつの間にもやらミーシャを護送する話が出ていたらしく、案の定レユニオンによってミーシャが強奪されてしまったという報告を受ける事に：なんで近衛局こんな阿呆晒しとるん？

尚その報告を受けた青筋を浮かべるチエンは護送隊員が無事だった事を知ると、また今度みっちり訓練をつける必要があるなどドスの効いた呟きを溢して報告に来ていた隊員を震え上がらせていたのは余計な話であろう。

原作でもこんな事言ってたのかねえ？ 閑話休題

まあ、取り敢えず感染者であり必要だと思われるメモリースティックを手に入れたとしても、それを所持していたミーシャが重要参考人である事は変わらないので即座に奪還作戦が実行される事になったのだが、例え今迄殺人やら悪徳を重ねてきたレユニオンの輩とはいえ何故か今回は怪我人はおれど死者は無しという不思議な状況である。

：もしかしたらスカルシュレッダーが姉であるミーシャを奪還する際に巻き込んで怪我をさせない為でもあったんだろうが、例え感染者となっても流血沙汰を見せたくなくて手加減したからだったたりしそうだな：あれ？ もしもそうならこれからやる奪還作戦で逃げるレユニオンを一方的に追い詰めるのって原作コース一直線なのでは？

いや、流石に俺そんな後味の悪い展開味わいたくなんかないぞ：傭

兵連中よりかは圧倒的に練度が低そうだから加減したって捕縛は余裕そうかな？

やる事を決めたのならば即実行、装備を取つてくると一言入れた後倉庫へと装備を取りに行き、必要なモノを積んで合流地点へとトンぼ返りして作戦を練っているドクターとチエンへ先程の推察を（ミィシヤがスカルシュレットターの姉である事はボカしながら）伝え、一先ずは自分に任せてくれないかとダメ元で聞いてみた。

案の定断られるかと思っていると、何やら二人とも悩ましげな態度で首を捻っていたので何かあったのかと聞いてみると、ドクターは記憶を失う以前の自分がどんな判断をしていたのか事前にアーミヤから聴取しており、その際に俺の事をかなり評価していた事から信頼しても良いのではないのだろうかと思うのだが、記憶を失っている為判断材料が少ないので難しいのだとか。

一方チエンは以前俺が起こした大立ち回り（喧騒の掟のアレ）以来俺の経歴を調べていたので、俺が『血煙』という傭兵だったという事は調べがついたのだが、そこから『血煙』時代の事を調べれば調べる程真偽を疑う様な情報ばかり出て来るせいで、信頼し辛いのだとか。

：うん、一通りどんな噂話なのか聞く限り『全盛期のイチ?!』伝説』染みたまものばかりだけど、少なくとも『身の丈が平均的な成人ミノス男性の倍はあった』とか一目で分かる嘘も大量にあるな、なんだそのバケモノ？ こちとら前世の平均的な日本人の成人男性程度しか身長ないから、寧ろこっちの成人男性の平均身長より低めなんだけど？

てか俺傭兵時代に噂立てた覚えも無いのにそんな噂が出回ってるってのは、多分師匠が旅の終わりに情報屋に細工を頼んでくれたんだろうな：ホント師匠は人に物事教えるのが苦手な人だったのに随分色んな事を学ぶ機会を作ってくれて、本当に感謝の限りだよ。

いかんいかん、感傷に浸ってる場合じゃなかったな：取り敢えずあの程度ならば一人で鎮圧出来る自信があるから任せてもらおうように頼み込むと、どうせだからと俺の実力を把握する為に先鋒を任せてもらえる事になった、やったぜ。

尚、無力化するにあたって用いるつもりの装備を見せたらまるでコ

イツ正気か？ という表情をされたし、なんならドクターからは「後詰めしつかりやつておくよ」と言われてしまった…まあ、元々悪ふざけで造り上げた装備だし致し方なし。

という訳で撤退中のスカルシュレッダー率いるレユニオンの連中を捕捉出来る場所まで到達し、念の為に先に投降する意志がないか拡声器を使って聞いてみたのだが、答えは予想通り『そんな事言つて俺達を皆殺しにするつもりなんだろう』というバリバリに不信感を募らせたうえでの『NO』の返事だった、世知辛いね。

しかし如何やら俺の降伏勧告は変な方に効果を発揮したようであり、スカルシュレッダーに同行していたWが俺が仕掛ける姿勢を見せた瞬間に「やっぱ…」とでも言いたげな青褪めた表情で即座に撤退し始めてしまい、それによってスカルシュレッダーも思わず動揺してしまった。

つい少し前まで俺の持つて来た鎮圧用装備に対してふざけるなどキレていた分、歴戦の傭兵であるWが速攻で逃げた事に驚いてしまったようである。

恐らくだがWは元々ドクター達と知り合いだったらしいので、バトル時代に俺が味方に着いた戦場で俺のバトルスタイルを見て覚えていたのではないのだろうか？ もしもそうならば本当に目敏い上、見事な判断力だと言わざるをえないだろう。

そうしてリーダーが動揺すればその下に付いている部下も動揺してしまうものであり、少しでも動揺すれば後はそこを突いて全体を崩してしまえば良いだけである。

それでは喰らつてもらおうか、この対暴徒鎮圧用兵装『電撃ハリセン』をなあ!!

幕間：他所から見た『異物』の姿

side：アーミヤ

レユニオンの幹部であるスカルシュレットダーさんがミーシャさんの身柄を強奪した際、犠牲者が出なかつた事に対してフィツシャーさんが『レユニオンが此方に死傷者を出さなかつた以上、もしも奪還作戦で死傷者を出してしまえばミーシャの此方に対しての心象は悪くなり、最悪敵となるかもしれない』という予測から先ずは自分が一当てしてくると言ってきた。

そう言われたドクターとチェンさんは其々が聞いてきたフィツシャーさんの傭兵時代である『血煙』の荒唐無稽な噂話から任せるかどうか少しばかり悩んでいましたが、噂話や評価の大半が『単騎による殲滅戦に於いて無類の強さを誇る』というものだったので、後詰めを準備しておくことで何時でも援護出来る様にする条件で話が決まりました。

：まあ話が決まった後にどの様にして鎮圧するのか聞いた際、お世辞にも全く武器には見えない様な物を見せられた時は判断を間違えたかと思いましたがね…。

そうして多分に不安な所は有りましたが、以前訓練場でマトイマルさん相手に余裕を持って立ち回っていたのできつと大丈夫だと自分に言い聞かせている間に作戦予 positioning まで到達してしまいました…。

フィツシャーさんは「一先ずは降伏勧告をしておこうか」と何時の間にか持っていた拡声器を取り出してレユニオンの集団へと降伏勧告を行いました。残念ながらというか当然の結果というか：拡声器を右手に持ち、左手にはどう見てもふざけているとしか思えない『金属質な光沢を放つハリセン』を持っているフィツシャーさんの姿にスカルシュレットダーは激怒し、そんなリーダーの様子に感化されるかの様に他のレユニオン達も怒りの感情を剥き出しにして拒否しました。

『よおし、お前さん達が大人しく捕まってくれないって言うんだつたらそれならそれで良い、こつちはお前さん達しばき回して連行するだけだからな：まあ死にはしないだろうから安心しとけ』

そんな否定的な姿勢をとったレユニオンに対して、フィッシュヤーさんはそう言つて拡声器を横に置くと、腰に下げていたもう一つのハリセンを手に取り、持ち手のスイッチを入れるとパチチツツ!! と電気が爆ぜる音が響き、右脚を前に出して両腕を横に広げ、上体をほぼ地面と水平になる程の前傾姿勢を取り、次の瞬間……瞬きをした訳でもないのにその姿を見失っていました。

「……えっ?」

「は……?」

数瞬の後、まるで土煙が思い出したかの様に巻き上がるのと同時にレユニオンの集団が居る方からパシインツ!! とバチイツ!! という二つの音が混ざり合った様な音が聞こえて振り向こうとした時には更に同じ音が三回聞こえ、向き直る時には優に十回近く鳴り響いて尚止まらず響き続け、私の瞳には不自然に空を仰ぐレユニオンの戦闘員達が映りました。

「何が起きて……?」

唾然としている間にも黒い影がレユニオンの集団の間を駆け抜けて、その度に爆ける音とその音に弾かれた様にレユニオンの戦闘員達は空を見上げていき、時には勢いが強過ぎたのか少し地面から浮き上がっている者も有り、漸く最初に空を見上げていたレユニオンの戦闘員が崩れ落ちていきました。

「……はっ?! み、皆戦闘態勢を取れ!! このままだと何も出来ずにやられるぞ!!」

そんな状況に思わず惚けてしまったスカルシュレッダーは、少ししてから正気に戻つて指揮を執ろうとしました。

「た、ダメだスカルシュレッダー……アイツの動きが速過ぎて何処を向いて注意すれば良いのか分からな……ギヤツ!?!」

しかし最早非現実的な光景に対してなんとか持ち直そうとするスカルシュレッダーの部隊を率いる者としての姿勢は素晴らしいものでしたが、あまりにも速過ぎる黒い影の動きは一切捉えられておらず、既に見えているレユニオンの半数以上が昏倒させられていました。

それも現在進行形で無力化されている戦闘員の数は増えており、最早壊滅と言っても過言ではない状況です。

「あれ…なんででしょう?」

「…うん? どうかしたのか、アーミヤ?」

そんな時、ふと何か白いモノが空へと舞い上がった様に見える、思わずそれを視線で追ってみると先程見たばかりの白く折り畳まれて出ていたハリセンが、先程までの新品同然の綺麗な形からはかけ離れたボロボロの状態で千切れて空を舞っていました。

「ふう…それなりに材料は厳選してから作った筈なんだが…やっぱり壊れるの早いなあ…」

「うおっ!? お、お帰りフィツシャー?」

「うっす、たでーまですわ…取り敢えずざつと五百近くしばいてきたけれど、見ての通り電撃ハリセンがご臨終してな…もう唯のスタンガンと大差無い状態になっちゃったんだわ」

そう言っただけでフィツシャーさんは手に持っているハリセンだった物を見せてきたのですが、右手に持っている物は根元から千切れて電気を流していたであろう導線から火花が飛んでおり、左手に持っている物も辛うじて残っているとはいえそこら中が虫食い状態に千切れており、もうまともに使う事は出来ないと一目で分かった。

「フィツシャーさん、やはりロドスで働きませんか?」

「この状況でそれ言う? もしかしてアーミヤちゃん混乱し過ぎてキヤパオーバーしちやってない?」

真面目に勧誘している私に対してフィツシャーさんは呆れた雰囲気気で苦言を述べてきた…失礼ですね、ワタシは至って正気ですとも!! (尚ギヤグ視点で見れば確実に目はぐるぐる回る模様が見えたであろう)

「な、あ…ああ!?!」

「ば、バケモノだあ…」

「なんだよアレ…サルカズの傭兵達が可愛く見えるぞ…アイツの方が悪魔じゃねえか」

あんなに常軌を逸した速度で戦場を駆け巡っていたにも関わらず、息切れの気配は微塵も無い上に汗の一つも流しておらず、寧ろ余裕す

ら感じさせる佇まいには絶望的な力の差を感じさせるには十分であり、先程の鎮圧時に襲われなかったレユニオンの戦闘員達は完全に心が折れていた様だった。

そんな絶望からフィツシャーさんに恐怖の眼差しを向ける者は多数居て、しかもそれは味方である筈のロドスや近衛局の局員からさえも向けられている…アーツによって感情に敏感な私でなくても感じ取れるであろうその場の雰囲気に対して、当の本人であるフィツシャーさんは丸で何も感じていないかの様に平然としている。

「ひつでえ言われようで草超えて芝だな、ウケる」

いや、寧ろそんな自分の状況等他人事であるかの様に笑っている始末だった。

「さて、これで彼方さんも自分達の置かれた状況を理解出来ただろうし、もう一回降伏勧告でもしてみようかね？」

「なあ、フィツシャー…一つ質問しても良いかな？」

完全に戦意を喪失しているレユニオンに対し、再度の降伏勧告を行うおうとしているフィツシャーさんに不意にドクターが質問を投げ掛けました。

「おん？…どうしたよドクター、唐突に…まあ、別に良いけどなんだ？」

「君は…自分の事をどう見ているんだい？」

先程鎮圧に駆け出す前に地面に置いていた拡声器を拾い上げて埃を払う等調子を見ているフィツシャーさんに対し、ドクターは少し不思議な質問を投げ掛けました。

今のこのフィツシャーさんが中心となっている異常な重圧さえも感じさせる雰囲気の中、ドクターは『言われた事に何かを感じていないのか』や『どうしてそんな平然としていられるのか』などではなく、何故か『自分の事はどう思っているか？』と尋ねたのです。

そんなドクターの質問に対してフィツシャーさんは一瞬手を止めて考える様に空を見上げた後、直ぐに戻して一言、こう言いました。

「このテラの世界に対する『異物』…なんじゃないのかねえ？」

私には彼の感情は読めません…。

後そいつらは俺の抹殺対象だぞ？

無事にスカルシュレッダー部隊を死傷者無しで制圧した上ミーシャちゃんも怪我無く奪還出来たのに、敵だったレユニオンどころか味方である筈のロドスや近衛局からも畏怖の眼差しで見られているでござるの巻…これが『ぴえん』ってヤツなのかな？ ギャル語はよく分からん。

気を取り直して残りのレユニオンに降伏勧告を告げると、先程の制圧で完全に反抗心がへし折れて降伏してくる者が多かったが、スカルシュレッダーとその腹心らしきレユニオン数名だけは、既に心が折れていそうなのに何とか足掻こうと押し黙っていた。

これでは埒が明かないどころか、下手すれば降伏する気満々の他のレユニオン達によってスカルシュレッダー達が吊し上げられかねない、折角珍しい事に誰一人死なずに終われそうなのにこんな所でケチを付けたくないからドクターとアーミヤ、それと一応龍門にも話を通しておく為にチェンにもスカルシュレッダーと交渉出来ないかと相談した。

結果ロドス側の二人は『今回被害は無く移動する程度だったので口を出せる様な立場ではない』と遠慮して、チェンも『龍門としてはほぼ被害は無かったとはいえ見逃し難いが、結果的に何もしていない立場だから此方に損がないか見ておくが、それ以外は口出しはしない』と言って此方に任せてくれる事になった。

此方の相談が済んだのでスカルシュレッダーへ此方には交渉する用意があると伝えると、向かうは一言二言内輪で会話してから交渉に応じてくれた。

今回の交渉は直ぐに話が済ませれる様に先程まで俺が蹂躪していた戦場のど真ん中で行う事になり、此方からは俺とロドス代表としてアーミヤとドクター、龍門代表であり見届け人としてのチェンを加えた四人である。

対してレユニオン側からは部隊のリーダーであるスカルシュレッダーとその腹心であるピアッサーの二人だけとの事。

他の者達はそれぞれ交渉内容は聞く事は出来るが、口出しし辛い程度に離れた位置で待機させて交渉を始める事にした…のだが、正直仕事で金銭関係の交渉程度しかした事がない俺からすれば何をどう交渉すれば良いのか分からないので、レユニオン側からの意見を聞いて対応する事にした。

取り敢えず先程の二度目の降伏勧告について、どうして素直に応じなかったのかとスカルシュレッダーに聞いてみると、ある意味答えは簡単だった。

今迄自分達が感染者としてどんな扱いをされて来たのかを理解している彼等は、例えこの場で降伏したとして碌な末路を辿らない事が分かりきっており、例え降伏したとしてもレユニオンが無くなってしまえば、行く宛の無い自分達は運良く他の感染者集団と合流出来なければ餓死する以外道が無い事も分かりきっているから安易に頷けなかったのだという。

…それと例え今ここで降伏したとしてもこの先レユニオンとして戦い続けるのならば、何処かで必ず俺と戦う事が必然であり、先程の蹂躪をされた側からすれば例えタルラが居たとしてもマトモに勝てるビジョンが見えなかったのも理由の一つなんだとか…。

オイコラその口ドス代表の二人は頷いてるんじゃないよ、チエンもなに真顔で深々と頷いてるのさ、泣くぞぞ？

兎に角、スカルシュレッダー達は如何にかして生き延びる為に考えていたからこそ押し黙っていたのであり、今回の交渉ではそこに焦点を当てれば良いという事が分かった…となればそこら辺で交渉材料になりそうなモノを俺が提示すれば良いのかな？

そこまで聞けば俺は交渉に使えるような材料を吟味する為に横でタブレットを叩く事にして、決まるまでは適当に雑談しておいてくれとアーミヤ達に交渉の場は投げる事にした。

唐突に話を振られたロドスの二人は少しばかり困惑していたが、取り敢えず今回のレユニオンが襲撃ではなくミーシャだけを攫った理由の答え合わせをする為に質問したのだが、少し意外な事にレユニオンの目的はミーシャの持っていたカードキーではなく、唯単に『ミー

シヤの父親がチエルノボーグにおいて高名な科学者であった』というだけの理由で狙っていたらしい：理由シヨボくない？

思わずタブレットから顔を逸らして「えっ？ カードキー狙ってたんじゃないの？」と溢してしまうと、スカルシュレット達も「カードキー？ 何の事だ？」と素で知らなかった模様：いやこれ絶対スカルシュレット達が知らされてないだけで何か裏があるだろ。

取り敢えずそんな確実に裏があるだろう作戦だった訳だが、スカルシュレット達は「まあ、俺だけはそれだけではないけれどな：」と少しばかり言葉を濁しながら話を続けたのだが、その内容は『ミーシヤがスカルシュレット（アレックス）の実際の姉だから』というものであり、そのカミングアウトにこちら側の殆どが驚いていた。

まあ、俺は事前に知っていたから驚かなかったのだが、俺の態度にピアッサーが意外そうな感じに「アンタは驚かないんだな」と聞いてきたので、適当に「男女差差っ引いたら骨格や声の質がかなり似通ってたから関係者だとは思ってた」と法螺吹いたらドン引きされながらも「そ、そうか：」と納得された：皆からな!!

そんな針の筵でちよつと自棄になりながらも軽く纏めた資料をアーミヤに渡して「これなら交渉の材料にならないか？」と聞いてみると、受け取ったアーミヤは先ず題名を見て固まり、次に慌てた様に資料の内容を読み進めて途中で顔色を真っ青に変化させた：これはどっちの反応だ？

そんなアーミヤの反応を横で見ているドクターとチェンは何を見せたとも言いたげな視線を向けてくるが、どちらの反応なのかが分からないので苦笑しながら首を傾げた。

少しして資料を読み終えたアーミヤだったが、顔を上げてタブレットを俺に返しながらこちらを見ると「フィツシヤーさん、こう言っってはアレかもしれませんが：貴方は神か悪魔にでもなろうというのですか？」と聞いてきた：成る程後者だったか、後そいつらは俺の抹殺対象だぞ？

何の事だと凄い顔で訝しんでいるドクター達に返されたタブレットを渡すついでに、記憶喪失でちゃんと理解出来ないだろうから簡単

な説明をついでに行う事にする。

俺が提示した技術は簡単に言えば『喪失した脳及び心臓や脊髄以外の複製移植による健常化手術』であり、現状そこら辺に捕まえた野犬や羽獣なんかを使った実験は成功しているので、この際丁度良いので投降したレユニオンに対人効果を検証する為の被験者になつてもらおうというプランである。

一通り説明したらまた周りからドン引きした目で：なんかさつき迄の目と微妙に感じ違うくない？ やる事なんて例えば無くした腕とは逆の腕、又は機能低下した部位から取った細胞を培養させて目的の部位を復元し、元になった部位に繋げるだけの事だぞ？

まあ、前者は培養する関係で細胞が劣化したり時間が掛かったり問題があるし、後者についても前者の問題以外にも機能低下の原因取り除かなくちや元の木阿弥になりかねないから注意が必要ではあるんだけどな。

にしてもホント俺が使えないのが悔しいくらい、アーツっていう技術は万能性が高い代物だという事を実感させてくれるものである：前世では一度神経が一度断絶してしまふと元には戻らなくなるのだが、現世では中途半端に千切れた筋肉なんかも一緒に繋げれてしまふ奴だつて居るのだからとんでもないものである。

：まあ、その医者についてはなんか実在すら怪しいレベルだったので、俺がやったのは今まで集めたアーツの傾向からパターンを割り出して複製・製造・接合のアーツを編み上げて機械で再現出来る様にしたんだけどな。

まあ少なくともこれで体表の源石は無くせるんだし、鉱石病治療に關しても大きく進歩するじゃないの？

やはり暴力!!? 暴力は全てを解決する!!?

交渉材料として出した技術は、流石に色々突き抜けている内容ばかりで肝心の普及が難しいのではないかと。という意見を貰ったので、ならば妥協点という事で複製移植手術の前身だった技術を提示する事にした。

内容としては怪我した部分に貼り付け怪我の部分に同化させる事で数日で裂傷等を治療出来る人工皮膚の製造法や、断絶した神経を繋ぎ直すアーツの公式、それと古傷になっていない事が前提条件な上に、アーツを用いても半年以上の時間は掛かるが失くした腕や脚を再生させる医療等である。

因みに最初に提示した複製移植手術は複製するのに時間は掛かるが安全性が高いのに対して、これらには手法の問題で回避出来ないデメリットが危険度順に提示してあったりする。

人工皮膚に関しては生物である為製造コストが掛かる上に、量産しようとしてもある程度使用者に合わせた設計が必要となるし、作り置きしようにも二月程度しか持たないのだ。

神経接続のアーツについては式に対象となる相手の情報を正確に把握して入力しなければ、下手すると短く繋いでしまつて常時その部位が引き攣った様になってしまう上、肉体の上からアーツを照射する関係上ほぼ確実にその部位から鉱石病になってしまうので、安全に使用したいなら一度切開しておく必要がある為大袈裟になる事。

手脚の再生医療については施術される相手の栄養が大量に必要なことから、兎に角毎日食いまくる事になる為、一日五食大盛りで食うような食料とそれを用意する為の資金が必要になるし(此処でケチると最悪栄養失調でぶつ倒れたり、身体が萎んで全体的に小さく成りかねない)ただでさえ生やすのにアーツを使うのにそれを促成させる為にアーツを使おうものなら鉱石病待った無しである。

…ついでに言えば生やしている最中の部位はちゃんと完成する迄は貧弱そのものなので、ちよつとでもそこをぶつけようものなら即座に怪我する上に、経過途中に想定外の怪我をしようものなら修正の必

要が生じる為、そこからの治療が途端に面倒になるのである、正直効率悪過ぎてやってられないレベルだ。

それに対して移植手術については他の場所で部位を作っている間に他の事を出来る余裕があるし、接続する際に精密に合わせる必要はあれど恣意的に下手を打たない限り鉦石病なんかにも罹らない、ちゃんと手順通りにやったのなら最悪接続部に炎症が起こる程度だろうか？ それについてもちゃんと環境整えて手順守れば故意でもないとならないしな。

趣味語るオタクみたいになった、閑話休題。

そんな訳でこれらの技術をロドスへと提供する事で、スカルシュレッダー達の身柄をロドスで引き取ってもらえないか交渉する事に：例え現状オペレーターとして活躍出来ない様であろうとも、以前約束取り付けられた技術講習の教材作りの為に素人意見というか疑問が欲しいからな。

正直な所教本があつたとはいえ、俺の経験って大半が源石拒絶の異能でゴリ押しした事で蓄えたものだから、他の研究者が『これこれこうだからこうなる』っていう理屈が、俺の場合『こうすればこう!!』みたいな事になっていいるのかもしれない為、敢えて何も知らない連中を相手にする事で細かく再確認出来るかもしれないので、教える経験を積みたい俺と技術を得られるレユニオンの連中とで（恐らく）Win—Winの関係になるだろう。

最悪前に放棄されてた移動都市改装して、天災防げる要塞にでもして暮らしてもらおうか？ もしそうするならセーフハウスの点検整備とか頼んでも良いかもしれないな。

まあそうなる為には先ずはこのレユニオン事変を無事に解決する必要がある、その為には今こうして目の前で訝しげな表情で俺を見ているスカルシュレッダーとピアッサーを納得させなくちゃならないんだけどね？

そんな訳で俺がこれらの技術提示を材料にロドスから龍門へと交

渉してもらい、俺が今度ロドスで行う技術講習の際に使う教本の製作、これの為に引き取ったメンバーへ一から教える経験を積ませてもらうのを交渉の材料としたい、ついでに言えばこれで教える内容は基礎から凡そ最新の技術を教えるので、上手く使えば食うに困る事は無くなる筈だという旨を伝えると、目の前の二人は俺に向ける視線を更に胡乱なものへと変えていった。

正直破格の条件だと思っただけに何がそんなに不満気なんだと聞いてみると、帰って来た言葉は『破格過ぎるから胡散臭さが拭えない』との事だった。

このテラの世界で圧倒的に社会的弱者である自分達に何故そこまで譲歩出来るのかと、余りにも良過ぎる待遇のせいで寧ろ偽善者の態度の裏で何か破滅的な策謀を練っているのではないのかと疑ってしまふ程だと：要するに二人は俺に本心を曝け出せと言ってきているのだった。

あく成る程ね、完全に理解した：つまりただ単にスカルシュレットダー達は自分達レユニオンの人間以外を信用出来なくなっているのだ。

そうだと分かれば話は早い、俺は席を立って龍門に辿り着くまで師匠と一緒に傭兵として各地を放浪していた事を、近くに打ち捨てられていた錆の塊にしか見えない鉄棒を拾い上げながら説明した。

唐突な俺の行動に交渉の席に着いていた五人だけでなく、離れて見守っていた者達も不思議そうに俺を見ていたが、俺は気にせず近くの台地へ向かって歩いていく。

一般的な二、三階建てのアパート程の大きさの岩がメインとなっている台地の前へ、移動しながら行動を起こす前に一言『だから飽き飽きしてるんだよ』と言って立ち止まる。

そして一振り

：反動で粉々に粉碎された鉄棒の残骸を手を払いながら落としつつ、彼方へと元台地だった砂煙が吹き飛び消えていく様子を眺めつつ『無駄に血煙浴びるのは』と説明する。

結局の所今回のスカルシュレットダー達を誰一人殺していないのは

ミーシャからの心象が悪くなるのを避けたのもあるが、それと同じくらい必要の無い殺しで無駄に装備が汚れる事を避けたのも事実なのだ。

やろうと思えばそれこそ傭兵時代みたいにスカルシュレットダー達を塵殺出来たであろうが、それをする為には自分で作り出した血煙に突っ込む必要があり、事が終わった後で血糊を落とすのが面倒だったのだ、アレは簡単には落ちないしね。

結果としてスカルシュレットダー達どころか味方側からも滅茶苦茶ビビられたが、肝心の交渉理由は強者の戯れという事で納得してもらえた：やはり暴力!!？ 暴力は全てを解決する!!？

その後は無事スカルシュレットダー達も交渉を受け入れてくれ、ミーシャを此方に引き渡した後、事が済むまでロドスと龍門の収容所で大人しくしておいてくれる（ロドスだけでは受け入れきれなかった）事になったのだが、連行される前にピアツサーがふと思いついたかの様に立ち止まり、此方へ質問をしてきたのだが、なんとも不思議な質問だった。

その内容は「そーいやアンタはあの時ボロボロの鉄棒一振りで台地を砂煙に成る程の威力でぶっ壊したが、もしかしてアンタがあの傭兵達の間で伝説になってる『血煙』なのか？」というものだった。

質問の意図が良く分からなかったしスカルシュレットダーが『えっ、コイツがああの話の!?!』みたいな反応していたのが気になるが、取り敢えず昔の俺はそう呼ばれていたのは事実なので肯定すると、今まで口クな感情が込められてなかった二人の視線が一気に同情的なモノへと切り替わった。

何があつたんだと俺が尋ねても「まあうん…その内分かるだろう…」とか「取り敢えず気をしっかり持ってちゃんと責任取るんだぞ…」みたいな事を言うだけで気まずそうに連れられて行くのだった…マジで何があつたんだ？ てか責任取れとか俺童貞でまだ二十代なのにいつの間にか子持ちにでもなつてたのか？ まるで訳が分からんぞ…。

滅茶苦茶納得したわ

何も言わずともドン引きしていると分かるいたたまれない雰囲気のまま龍門に戻ったのだが、暫くした後にもまたロドス（というよりアーミヤ）から連絡が届き、チエルノボーグから離れて龍門近くまで来ていた怪しい移動都市へと派遣した部隊が、レユニオンの襲撃を受けて連絡が取れなくなっているので救援に行く為に同行して欲しいとの事。

：あの、一応俺健常者って事になってるんですけど？ 異能のお陰で源石問題全く関係無いとはいえ、源石だらけの現場に連れて行くこととするのって下手したらとんでもない顰蹙買うんじゃない？ もしかして前回の対スカルシュレツダー部隊との戦闘で認識もぶっ壊しちゃった？

取り敢えず現在ロドスとは提携しているという事でしつかり対源石装備を着込んで集合地点に向かうと、防爆装備みたいな一式を着込んでいる俺に対して少しの間ざわつかれた…。

防護スーツのヘルメットを外して俺だと伝えると「そういえばこの人感染者じゃないんだっただ…」みたいな目で見られてしまった、個人的には寧ろアーツユニット無しでアーツ使えるんだし、是非とも感染してサルゴン辺りにでも隠居したかったものである（怒）

コホン：言い訳を聞くに、どうやらあの示威行為の威力が凄まじかった為、アーツユニット無しでアーツを使える感染者だと思いついていたとの事：そもそも感染者だったら基本龍門に居を構える事は出来ないのですが？

兎に角誤解は解けたが別に同行しないとは言っていないし、寧ろしつかり準備してきたのにやっぱりやめたでは時間の無駄なので同行する事にしたのだが、移動の為に用意された車輻に乗るまで終始アーミヤが申し訳なさそうな表情をしていたのが印象的だったな…。

そんなこんなで移動用の車輻に乗り込んだのだが、同乗者は運転手に何故かデユナメスを添えたヤガ以外の転生者組だった：以前話した時に全員戦闘オペレーターだと聞いたのだが、普通戦闘オペレー

ターである筈のデュナメスが運転してるのおかしくね？

そうと思つて聞いてみると、ロドスのオペレーターは出来る事が多ければ確認テストを行い、基準を満たせば認定を出して今回の様に作戦だけでなくその他の雑用も頼まれるのだが、その分給料が増える仕組みになつて居るのだとか。

ロドスの給与形態は他にも幾らかあるらしいのだが、今回のデュナメスはその仕組みを利用してなるべく稼げる様に色々な認定を受けているのだとか…。

元傭兵だから金に煩いのだろうかとも一瞬思ったが、思い返せばそもそもサンクタの使う守護銃は弾丸の一発一発が使い捨てのアーツユニットの様なものだという事を思い出し、その中でもデュナメスがメインで使う守護銃はアンチマテリアルライフルである為規格の方もそこらの物とは掛け離れた規格外の物の為、収支は下手すればマイナスになりかねないのである。

一通りの予測を立ててからそりゃあ金にも煩くなるわなあ…とぼやいていると、当のデュナメス本人から何の事だ？ と疑問を出され、俺の予測した事を一通り語ると何故かデュナメスは苦虫を噛み潰した様な表情になり、他の車に乗っている組は笑い出してしまった。

こんな反応を取られれば俺の予測が外れていた事は分かるのだが、だとしたら真相はなんだつたのかと聞いてみると、どうやらデュナメスはロドスで一息吐いた事でこれからの自分のスタンスを考えていたのだが、そこでふと他の転生者組はこれからどうするのか気になつて聴き回つてみたらしい。

それによると戦闘訓練が無ければブレードランナーは開発部、アスラは医療部、アマツキは現在機材が無い為申請中だが購買部に所属する事になっているらしく、そうなると自分だけ戦闘しか取り柄がない実質無職みたいなものだど気付いてしまい、無性に居心地が悪くなつた為取り敢えずロドス内での資格を取得する事にし、その第一歩が今回の運転技術の取得だったのだとか。

…うんまあそりゃあ自分以外の友人が戦闘以外にも生産面でやる事があるのに、そんな奴等を尻目に消費しかしない（しかもただでさ

えやばい値段をしているほぼ特注の弾丸で）戦闘訓練してるとか居心地悪くなるわな、滅茶苦茶納得したわ。

因みに他の転生者組も運転技術の認定を受けているので、オリジナリテイを出す為に教官認定の取得を目指しているのだとかで勉強中との事：いや今から学んでいくのか？　と思っただのだが、一応傭兵時代に気紛れに銃（勿論テラ製の）の扱い方を教えた事が何度かあるの
で、限定的かもしれないが銃専門の教官を目指すのだとか。

このテラ世界の銃は主にサンクタが感覚で扱っている物であり、それ以外の種族は拳銃程度を扱うのが関の山らしいのだが、前世を持っているデユナメスからすれば前世の感覚も持ち合わせている為、サンクタとそれ以外の種族との感覚のズレをはっきり理解する事が出来ており、奇襲用のライフルやお守り程度としてのショットガン等といった拳銃以外の銃器も教える事が出来るのだとか：何気にチートだな？

まあ、一応差別化というか本家であるサンクタに比べて同じ銃を使っても威力も飛距離も凡そ三割程落ちるらしいので、下手すれば全力で身体強化した投槍の方が威力が出るなんて事もあるのだとか：一応使える様になるだけでも凄いとと思うけど世知辛いねえ。

そんな事を話している内に興味深い事を聞いた、なんでもサンクタはサンクタ同士で『感応』とでも呼ぶべき現象が起こるらしく、銃を扱う事に関して学ぶのには途轍もなく便利だったのだが、それ以外にも日常生活でさえも他のサンクタから影響を受ける事になる為、当時はかなり精神的な負担が多い生活だったのだとか。

鉱石病に罹った事でハイロウと羽を失った際同時に感応現象も失ったらしいのだが、感応現象だけでなくクソ眩しい蛍光灯みたいなハイロウも無くなって、個人的には鉱石病に罹って寧ろ得したかと思えなかったのだとか：それロドスの中では穏健な奴相手であつても絶対と言うなよ？　下手したら血を見るハメになるぞ？

因みに煩わしく思っていたとはいえ、一応現世での自分の一部だったハイロウと羽が変化した源石塊なのだが、不思議な事に一見唯の源石塊でしかないのに自分の一部なのだという感覚は残っているのだ

とかで大事に保管しているのだとか…なにその面白そうな代物、今度調べさせてもらえないだろうか？

と、そんな事を話している間に件の移動都市へと到着したのだが、何と見てもわかる通り明らかに雰囲気がおかしかった…というか廃墟の所々に氷の様な結晶が出来上がっていたり氷の結晶が浮かんでいたりと、明らかにヤベー奴の領域となっているのが丸分かりだった。

てか一番ヤバいのは『あの氷がサードアイを使っていない俺にも見えている』って所だろうな…うん、まさかの異能案件である、ここ数日で転生者現れ過ぎなのでは？

まるで意味が分からんぞ!? といった状況だが報連相は大事という事で転生者組にも廃墟に存在している氷が異能関係である事を教えると、皆してチベットスナギツネみたいな目をして氷を見ていた…。

「無駄に透明だなく…」と「きつと純度100%水で出来てるんだろうさ…」「そんな代物作っておいて周囲の湿度は大丈夫なのかなあ…」「傭兵稼業でリップクリーム常備してた俺に隙は無かったぜ…」といった現実逃避の発言が其々出て来る始末、というかなんであそこまでハッスルしてるのか全く分からないのが怖いまでである、一体どんな奴が居るってんだよ…。